天山山脈北麓における
定住 - 遊牧社会関係史の再構築

ーキルギス共和国北部、チューー渓谷西部における考古学踏査ー

山藤　正敏

独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所

天山山脈北麓における定住 - 遊牧社会関係史の再構築

―キルギス共和国北部、チュー渓谷西部における考古学踏査―

山 藤　正 敏

独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所
2024 年 3 月

Restructuring the History of Relationship between Sedentarism and Pastoral Nomadism along the Northern Foot of Tian Shan Range

Final Report of the Chuy Valley Archaeological Project, Northern Kyrgyz

Masatoshi Yamafuji

Nara National Research Institute for Cultural Properties

March 2024

前　言

本書は、2018 年から 2022 年まで実施したチュー渓谷考古学プロジェクト（Chuy Valley Archaeological Project: CVAP）による考古学踏査の成果報告書である。チュー渓谷は、中央アジア深奥部のキルギス共和国北部を占める広大な沖積平野を成し、北のステップ地帯と南に控える天山山脈の狭間において古来、遊牧民の活躍の場となってきた。6 世紀以降には西方からソグド人が入植したことで、同地は新たに中世都市社会に組み込まれた。同時に、商人として名高いソグド人により、東西を結ぶシルクロード交易の新ルートとして天山北路が開通したことは有名である。こうした歴史的事柄の背後では、在来の遊牧民と新参の都市定住民との間で新たな直接的関係が始まり、以後 19 世紀に至るまで、チュー渓谷は定住・遊牧両社会の境界線上にあり続けることとなった。

CVAP の当初の目的は、天山北路開通の経緯とその変遷・発展を遺跡分布の精緻な記録・分析によって明らかにすることにあった。しかし、現地での踏査を進めるに及び、都市遺跡周辺において無数の小型遺跡が散見され、これらが遊牧民に帰されうることが徐々にわかってきた。このため、天山北路に関連する定住集落と、その周囲を生活の場とした遊牧民の関係を通史的に理解することこそが、同地におけるシルクロード交易の文化史的・社会的意義の把握につながると考えるに至った。

本書では、考古学踏査で確認した全ての遺跡に関する記録を掲載すると同時に、これらの遺跡情報に基づいてチュー渓谷における定住 - 遊牧社会関係史の通史的復元に努め、一定の道筋を示すことはできた。しかしながら、発掘調査を未実施であることに主に起因して遺跡の造営・利用年代がしばしば不確定であり、当該地域の文化史を十分に復元できたとは言い難い。願わくは本書がささやかな嚆矢となり、ここに論じた諸点についてより精細な調査研究が将来的に展開され、チュー渓谷とその周辺における定住・遊牧両社会の相互関係がシルクロード交易を含む歴史的諸トピックに及ぼした影響について、より深く議論する土壌が整うことを切に期待する。

2024 年 3 月 31 日

独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所　主任研究員
山藤　正敏

例　言

1. 本書は、日本学術振興会科学研究費による研究成果を総合的にまとめたものである。科研費の詳細については下記のとおりである。

   課題番号：18K12560
   研究種目：若手研究
   研究課題名：シルクロード天山北路の形成過程に関する考古学的研究
   研究期間：2018 年度～ 2023 年度（新型コロナウィルス感染症拡大のため 2 度延長）
   研究代表者：山藤　正敏

2. キルギス共和国現地での調査は、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所とキルギス共和国国立科学アカデミー歴史民族学考古学研究所の間で取り交わされた協定書（「キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所（キルギス共和国）と奈良文化財研究所（日本）の学術交流に関する協定書」、2018 ～ 2022 年）に基づき、双方の合意の下で実施された。

3. 本書はその全てを山藤が執筆・作成・編集し、バキット・アマンバエワ（Bakit AMANBAEVA）（キルギス共和国国立科学アカデミー歴史考古学民族学研究所）は必要な情報を山藤に提供した。

4. キルギス現地調査での写真撮影や UAV 測量は、ダニヤル・バズィロフ（Daniyar BAZILOV）（キルギス共和国チュー州ジャイル地区文化事務所）のサポートを受けて、山藤が全て実施した。

5. 本書に掲載された土器の図面は、山藤が全て実測・トレースを行った。

6. 本書掲載の P. N. コジェミャコ（Kojemyako）により 1954 年に調査された中世居住址の平面図は、1959 年刊行の調査報告書に掲載された平面図を調整の上、本プロジェクトでの所見を加味して新たにトレースし、整えたものである。これら全ての平面図の再作成は山藤による。

7. 本書において言及する外国語人名・地名・遺跡名・専門用語には、初出時にアルファベット表記を併記した。

8. キルギス現地での調査や本書の作成にあたっては、下記の方々に大変お世話になった。この場を借りて深く御礼申し上げたい。

   バキット・アマンバエワ、岩井俊平（龍谷大学龍谷ミュージアム）、植月　学（帝京大学文化財研究所）、櫛原功一（帝京大学文化財研究所）、久米正吾（金沢大学）、齊藤茂雄（帝京大学文化財研究所）、オムルベク・ザナキエフ（現地通訳）、城倉正祥（早稲田大学）、アセーリ・スルタナリエワ（現地通訳）、伝田郁夫（千葉県芝山市立芝山古墳・はにわ博物館）、ナワビ矢麻（埼玉県教育委員会）、ダニヤル・バズィロフ、林　俊雄（創価大学）、エレナ・ポポワ（元キルギス共和国国立科学アカデミー）、クンドゥス・マミトワ、望月秀和（帝京大学文化財研究所）、山内和也（帝京大学文化財研究所）、吉田　豊（帝京大学文化財研究所）

   （以上 50 音順、敬称略）

目　次

前　言 i
例　言 iii
目　次 v
図版目次 vii
表目次 ix

I.　はじめに―調査の目的・方法― 1
1. 調査の目的 1
2. 調査の方法 1
3. 調査の経過 2

II.　調査地域の自然地理的・歴史的背景 7
1. 調査地域周辺の自然環境 7
1. 1. 地理 7
1. 2. 気候・植生 8
2. チュー渓谷の歴史・調査史 9
2. 1. チュー渓谷の歴史と文化編年 9
2. 2. 調査地域周辺の調査略史 12

III.　調査成果の概要 17
1. 登録遺跡の分類体系 17
2. 調査の成果 18
2. 1. 遺跡の分布傾向 18
2. 2. 遺跡種類の出現傾向 21
2. 3. 時期別遺跡数 22

IV.　登録遺跡一覧 25
1. 概要 25
2. 北半部の登録遺跡 25
3. 南半部の登録遺跡 62

V.　考　察 95
1. 時期別・種類別分布傾向 95
2. 囲い込み遺構の相対時期推定 101
2. 1. 囲い込み遺構の基礎的分析 101
2. 2. 相対時期の確認 102
2. 3. 相対編年の可能性 103
3. 追悼遺構について 105
4. 定住 - 遊牧相互関係史の再構築 106

VI.　おわりに……109

補遺　登録遺跡リスト……113
引用参照文献一覧……117
索　引……121

図版目次

図 1. 1　遺跡の登録年次別分布状況（1: 500,000）..... 3
図 1. 2　Zones II・III の景観（南から）..... 3
図 1. 3　サーヴェイ・シート（左：表面；右：裏面）..... 4
図 2. 1　チュー渓谷の地理..... 7
図 2. 2　チュー渓谷における主要遺跡分布..... 13
図 3. 1　登録遺跡分布図..... 19
図 3. 2　登録遺跡分布図（Zone IVb）..... 20
図 3. 3　小河川流域別分布遺跡数..... 21
図 3. 4　遺構種類別出現傾向..... 21
図 3. 5　時期別遺跡数..... 22
図 4. 1　ノヴァ・ニコラエフカ（N001）平面図..... 26
図 4. 2　ノヴァ・ニコラエフカ（N001）全景（南東から）..... 26
図 4. 3　ペトロパヴロフカ（N002）空撮全景（南から）. 27
図 4. 4　ペトロパヴロフカ（N002）採集土器..... 27
図 4. 5　ペトロパヴロフカ（N002）採集瓦写真..... 27
図 4. 6　パルタフカ（N003）平面図（Кожемяко 1959: Рис. 29 を改変し作成）..... 27
図 4. 7　パルタフカ（N003）遠景（南西から）..... 28
図 4. 8　ペトロフカ（N004）平面図..... 28
図 4. 9　ペトロフカ（N004）シャフリスタン空撮全景（北から）..... 29
図 4. 10　ペトロフカ（N004）採集土器..... 29
図 4. 11　シス・トベ／ヌジケト（N005）平面図（Кожемяко 1959: Рис. 5 を改変し作成）..... 30
図 4. 12　シス・トベ／ヌジケト（N005）シャフリスタン空撮全景（南から）..... 31
図 4. 13　シス・トベ／ヌジケト（N005）採集土器..... 32
図 4. 14　ベロヴォドスコエ・クレポスト（N006）平面図（Кожемяко 1959: Рис. 11 を改変し作成）..... 33
図 4. 15　ベロヴォドスコエ・クレポスト（N006）シャフリスタン全景（北から）..... 34
図 4. 16　ベロヴォドスコエ・クレポスト（N006）採集土器..... 34
図 4. 17　N007 全景（北西から）..... 35
図 4. 18　N008 全景（北西から）..... 35
図 4. 19　N009 全景（北東から）..... 36
図 4. 20　N010-1 全景（北西から）..... 36
図 4. 21　N010-2 全景（北西から）..... 36
図 4. 22　N011 遠景（北西から）..... 37
図 4. 23　N011 全景（北東から）..... 37
図 4. 24　N012 全景（北から）..... 37
図 4. 25　N013 遠景（東から）..... 38
図 4. 26　N013 円墳全景（南東から）..... 38
図 4. 27　N014-1 全景（南東から）..... 36
図 4. 28　N014-2 全景（北西から）..... 36
図 4. 29　N015 空撮全景（南東から）..... 39
図 4. 30　N016 空撮遠景（北西から）..... 39
図 4. 31　N016 全景（北西から）..... 39
図 4. 32　N016 採集土器..... 39
図 4. 33　N017 空撮全景（北から）..... 40
図 4. 34　N018 全景（北西から）..... 30
図 4. 35　N018 採集土器..... 30
図 4. 36　アイダルベック（N019）空撮全景（北から）41
図 4. 37　アイダルベック（N019）空撮俯瞰（上が北）41
図 4. 38　アイダルベック（N019）全景（南西から）.... 41
図 4. 39　N020 全景（北東から）..... 41
図 4. 40　N020 空撮俯瞰（上が南）..... 41
図 4. 41　コミンテルン（N021）コロナ衛星写真（1967 年撮影）（左）と現況衛星写真（Google Earth）（右）の比較..... 42
図 4. 42　N022-1 全景（南東から）..... 43
図 4. 43　N024 全景（南から）..... 43
図 4. 44　N025 平面図..... 44
図 4. 45　N025-1 全景（南西から）..... 44
図 4. 46　N025-2 全景（南西から）..... 44
図 4. 47　N025-3 全景（南西から）..... 44
図 4. 48　N026-1 全景（北東から）..... 45
図 4. 49　N026-2 全景（北東から）..... 45
図 4. 50　N026-3 全景（北から）..... 45
図 4. 51　N027 全景（南東から）..... 45
図 4. 52　N028 全景（南から）..... 46
図 4. 53　N029 全景（北東から）..... 46
図 4. 54　N030 空撮俯瞰（上が北）..... 47
図 4. 55　N030-1 全景（南東から）..... 48
図 4. 56　N030-2+3 空撮俯瞰（上が北）..... 48
図 4. 57　N030-2 全景（北西から）..... 48

図 4. 58　N030-3 全景（北西から）..... 48
図 4. 59　N030-4 空撮俯瞰（上が北）..... 48
図 4. 60　N030-5 全景（北東から）..... 48
図 4. 61　N031-1 全景（北東から）..... 49
図 4. 62　N031-2 全景（北東から）..... 49
図 4. 63　アク＝トベ・スレテンスコエ（N032）平面図..（Кожемяко 1959: Рис. 12 を改変し作成）..... 50
図 4. 64　アク＝トベ・スレテンスコエ（N032）シャフリスタン西壁（南から）..... 50
図 4. 65　アク＝トベ・スレテンスコエ（N032）採集土器..... 51
図 4. 66　N033 空撮俯瞰（上が北）..... 52
図 4. 67　N033-1 全景（北西から）..... 53
図 4. 68　N033-2 全景（南東から）..... 53
図 4. 69　N033-3 全景（北西から）..... 53
図 4. 70　N033-4 全景（南西から）..... 53
図 4. 71　N034 空撮全景（南から）..... 54
図 4. 72　N034-1 全景（北東から）..... 54
図 4. 73　N034-2 全景（南東から）..... 54
図 4. 74　N034-3 空撮俯瞰（上が北）..... 54
図 4. 75　N035-1 全景（北西から）..... 54
図 4. 76　N035-2 全景（北東から）..... 55
図 4. 77　N036-1 全景（南西から）..... 55
図 4. 78　N036-2 全景（南東から）..... 55
図 4. 79　N036-3 全景（北西から）..... 56
図 4. 80　N037 全景（南東から）..... 56
図 4. 81　N038 平面図..... 56
図 4. 82　N038-1 全景（北東から）..... 57
図 4. 83　N038-2 全景（北西から）..... 57
図 4. 84　N040+041 空撮遠景（北西から）..... 58
図 4. 85　N040 空撮俯瞰（上が北）..... 58
図 4. 86　N040 全景（北東から）..... 59
図 4. 87　N040 採集土器..... 59
図 4. 88　N040 UAV 測量図（1: 2,500）..... 60
図 4. 89　N041 全景（北から）..... 60
図 4. 90　アク＝トベ・チューレクスコエ（N042）平面図（Кожемяко 1959: Рис. 26 を改変し作成）.....61
図 4. 91　アク＝トベ･チューレクスコエ（N042）全景（南西から）.....61
図 4. 92　S001 全景（南東から）..... 62
図 4. 93　S002 全景（北東から）..... 63
図 4. 94　ペトロフカ 1–4（S003–006）位置図..... 64
図 4. 95　ペトロフカ 3（S004）遠景（東から）..... 64
図 4. 96　ペトロフカ 1（S005）空撮全景（北から）..... 64
図 4. 97　ペトロフカ 2（S006）遠景（北東から）..... 65
図 4. 98　カラ・バルタ（S007）位置図..... 66
図 4. 99　カラ・バルタ（S007）全景（北東から）..... 66
図 4. 100　カラ・バルタ（S007）全景（南東から）..... 66
図 4. 101　カラ・バルタ（S007）説明版..... 67
図 4. 102　エフィロノス（S008）位置図..... 67
図 4. 103　エフィロノス（S008）空撮全景（北から）... 67
図 4. 104　S009 遠景（北西から）..... 68
図 4. 105　S010 全景（東から）..... 68
図 4. 106　コシュ・コルゴン（S011）遠景（南西から）68
図 4. 107　コシュ・コルゴン（S011）出土遺物の展示状況（ペトロパヴロフカ考古資料室）..... 69
図 4. 108　コシュ・コルゴン（S011）採集土器..... 69
図 4. 109　S012-1 全景（南東から）..... 70
図 4. 110　S012-2 全景（東から）..... 70
図 4. 111　S012-3 全景（北東から）..... 70
図 4. 112　S013-1 全景（北から）..... 70
図 4. 113　S013-2 全景（北西から）..... 70
図 4. 114　S014 平面図..... 71
図 4. 115　S014-1 全景（南から）..... 71
図 4. 116　S014-2 全景（北西から）..... 71
図 4. 117　S014-4 全景（北から）..... 72
図 4. 118　S014-5 全景（東から）..... 72
図 4. 119　S014-6 遠景（北から）..... 72
図 4. 120　S014-3 全景（南から）..... 72
図 4. 121　S015 全景（北東から）..... 72
図 4. 122　S016-1 全景（南東から）..... 73
図 4. 123　S016-2 全景（南東から）..... 73
図 4. 124　S017 全景（北から）..... 73
図 4. 125　S018 空撮俯瞰（上が北）.....74
図 4. 126　S019 空撮遠景（北西から）.....74
図 4. 127　S019 空撮俯瞰（上が北）.....74
図 4. 128　S020 全景（北西から）..... 75
図 4. 129　S021 全景（西から）..... 75
図 4. 130　S022 全景（北東から）..... 75
図 4. 131　S023 全景（北から）.....76
図 4. 132　S024 空撮俯瞰（上が北）.....76
図 4. 133　S025 全景（南西から）.....76
図 4. 134　タシュ・マザール（S026）空撮全景（南西から）..... 77
図 4. 135　タシュ･マザール（S026）平面図･空撮俯瞰（上が北）..... 77
図 4. 136　タシュ・マザール（S026）北部に露出する石列遺構（南西から）..... 78

図 4. 137　タシュ・マザール（S026）採集土器 78
図 4. 138　タシュ・マザール（S026）採集土器写真 .. 78
図 4. 139　タシュ・マザール（S026）採集石製品写真 79
図 4. 140　S027 空撮全景（北から）..... 79
図 4. 141　S028 空撮俯瞰（上が北）..... 79
図 4. 142　S029 空撮全景（北から）..... 80
図 4. 143　S029-1 空撮俯瞰（上が北）..... 80
図 4. 144　S029-2 全景（南西から）..... 80
図 4. 145　S026+030 空撮全景（南西から）..... 81
図 4. 146　タシュ・マザール南（S030）空撮全景（北から）..... 81
図 4. 147　タシュ・マザール南（S030）採集土器写真 81
図 4. 148　S031 空撮俯瞰（上が北）..... 82
図 4. 149　S032 空撮全景（北東から）..... 82
図 4. 150　S033 全景（西から）..... 83
図 4. 151　S034 全景（北西から）..... 83
図 4. 152　S035 空撮俯瞰（上が北）..... 83
図 4. 153　S035-1 全景（東から）..... 84
図 4. 154　S035-2 石列（南から）..... 84
図 4. 155　S036 遠景（南西から）..... 84
図 4. 156　S036 空撮全景（北西から）..... 84
図 4. 157　S036 小型葺石墓（西から）..... 84
図 4. 158　S037 空撮俯瞰（上が北）..... 85
図 4. 159　S037-2 全景（北西から）..... 85
図 4. 160　S038 空撮俯瞰（上が北）..... 85
図 4. 161　S038-1 全景（南から）..... 86
図 4. 162　S038-2 全景（北西から）..... 86
図 4. 163　S038-3 全景（南東から）..... 86
図 4. 164　S039 空撮俯瞰（上が北）..... 86
図 4. 165　S039-2 全景（西から）..... 86
図 4. 166　S040 空撮全景（北から）..... 87
図 4. 167　S041 空撮遠景（北東から）..... 87
図 4. 168　S041 全景（南西から）..... 88
図 4. 169　S041 空撮俯瞰（上が北）..... 88
図 4. 170　S042 空撮全景（北西から）..... 88
図 4. 171　S043 全景（南東から）..... 88
図 4. 172　S044 空撮俯瞰（上が北）..... 89
図 4. 173　S044 全景（西から）..... 89
図 4. 174　S045 空撮俯瞰（上が北）..... 90
図 4. 175　S045 空撮全景（東から）..... 90
図 4. 176　S045-1 全景（南西から）..... 90
図 4. 177　S045-2 全景（北東から）..... 90
図 4. 178　S045-3 全景（北西から）..... 91
図 4. 179　S044+046 空撮全景（北から）..... 91
図 4. 180　S046 空撮俯瞰（上が北）..... 91
図 4. 181　オルト・カイルマ 1・2（S047+049）位置図.... 92
図 4. 182　オルト・カイルマ 2（S047）空撮全景（北から）..... 92
図 4. 183　S048 空撮全景（北から）..... 92
図 4. 184　S048 円墳（北から 5 基目）全景（北西から）..... 92
図 4. 185　オルト・カイルマ 1（S049）空撮全景（北から）..... 93
図 4. 186　S050 全景（北西から）..... 94
図 4. 187　S051 全景（南東から）..... 94
図 5. 1　鉄器時代の遺跡分布図 96
図 5. 2　クルガンの墳丘径と標高の相関 96
図 5. 3　中世前期の遺跡分布図 97
図 5. 4　中世後期の遺跡分布図 98
図 5. 5　近世・近代の遺跡分布図 99
図 5. 6　時期不明の遺跡分布図 100
図 5. 7　囲い込み遺構の平面形と構築型式 101
図 5. 8　囲い込み遺構のサイズ分布 102
図 5. 9　囲い込み遺構の平面形別空間分布 102
図 5. 10　囲い込み遺構及び単独墓の分布図 103
図 5. 11　囲い込み遺構の編年試案 104
図 5. 12　既調査追悼遺構のサイズ分布（内寸）..... 106

表 目 次

表 2. 1　チュー渓谷における文化編年 12
表 3. 1　既調査遺跡一覧 21
表 3. 2　時期別・種類別遺跡数一覧 22
表 5. 1　チュー渓谷における主要な中世都市遺跡（Горячева 2010: 49, Таблица 2 に基づき一部改変の上作成）..... 98
表 5. 2　囲い込み遺構の構築型式一覧 101
表 5. 3　チュー渓谷西部における追悼遺構の規模 ... 105

I.　はじめに―調査の目的・方法―

1. 調査の目的

チュー渓谷考古学プロジェクト（Chuy Valley Archaeological Project: CVAP）は、同地を通っていた主要な東西交易路（天山北路）及びこれに関連して営まれた植民都市の成立と発展を、遊牧社会との関係性の中で適切に理解することを目的とした。このために、キルギス共和国北部に位置するチュー渓谷（Chuy Valley）西部を調査研究対象として、地域文化史の精細な復元を目指して、2018 年から 2022 年にわたり計 3 シーズンの考古学踏査を実施した。

天山山脈が南に控えるチュー渓谷は古来、遊牧民が活躍した草原（ステップ）地帯の南限を縁取っていたが、中世にはいり定住農耕民であるソグド人が入植したことにより、定住・遊牧両社会が相互に直接的に関わる境界地帯となった。この境界地帯は、「シルクロード」の名で親しまれる東西交易路上の重要な経由地であり、東方はイリ渓谷（Ili Valley）及びトルファン盆地（Turpan Depression）を経由して河西回廊を通って中国（西安）に至り、西方はタラス（Talas）川を渡り南西方向のトランスオクシアナ（Transoxiana、あるいはソグディアナ Sogdiana）やペルシア、さらに西方へ通じていた。この交易路を辿って多くのヒト・モノ・情報がユーラシア大陸を東西に行き交ったことは、重ねて説明するまでもないであろう。上記のような東西方向の結節点であったと同時に、チュー渓谷は北のカザフ高原と南の天山山脈の中間に東西に広がっているため、遊牧民による垂直（南北）方向の季節移動経路上に位置することとなり、その逗留地に適していたと考えられる。したがって、同渓谷は東西に貫く交易路と南北に貫く遊牧民の季節移動路が交差する場所であったと、理解することができる。

チュー渓谷における従来の考古学調査は、一方では拠点的な都市やそれに付随する城塞等を、他方では遊牧民による大型墳墓（クルガン Kurgan）を主な研究対象としてきた。しかしながら、元来遊牧民の生活圏であった同渓谷とその周辺には、彼らが残した日常的な生業に関わる多様な生活痕跡が所在しているはずであり、実際に鉄器時代においてはこうした種類の遺構がごく限定的にではあるが確認されてきた（cf. Мошкова 1992: 84; Chang et al. 2003）。このように、遊牧社会の痕跡の通時的な認識を欠いてきたことにより、これまでの考古学調査研究はチュー渓谷における基層文化の本質を精確に把捉するには至っていない。また、現在の東西幹線道路から離れて位置する中世定住集落の探索も十分とは言えず、中世における都市定住社会によるチュー渓谷の開拓や東西交易路網の構築過程に関する詳細が通史的に明らかになっているとは言い難い。こうした事情のため、遊牧・定住社会に関する上記の研究視点が統合されて、農牧境界地帯であったチュー渓谷に特異な文化的生態が総合的に理解されることはほとんどなかった。特にチュー渓谷西部における調査研究状況は、東部に比べて遅れをとってきた。西部においては、遺跡の継続的な調査及び成果の公刊はおろか、考古学踏査による遺跡の把握も、1954 ～ 55 年の中世遺跡の包括的調査（Кожемяко 1959）以後は行われておらず、不十分なまま放置されてきたといっても過言ではない。このため、チュー渓谷西部における地域文化史については、1941 年の調査に基づいてまとめられたチュー渓谷全域における物質文化の通史的概説（Бернштам 1950: 104–141）以上には、理解が進んでいない状況であった。

上記のような地理的・文化的特性と調査状況に鑑みて、東西交易路網の東方への入口部分にあたり、かつ、遊牧民による南北方向の季節移動経路上にあるチュー渓谷西部の地域文化史を通史的に精緻に再構築することは、中央ユーラシアにおける文化的・社会的基層を成す遊牧社会とその後に発展・拡大した都市定住社会の関係性を統合的に理解し、併せて、同地に広く張り巡らされることとなった交易路網の歴史的意義を今後論じていく上で欠かせないと考えた。

調査開始に先立つ 2018 年 9 月には、独立行政法人

国立文化財機構奈良文化財研究所とキルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所（現　歴史考古学民族学研究所）は、5 年間の期限で考古学調査に関する研究協力協定を締結した。同年、この合意に基づいて、チュー渓谷西部において考古学踏査を開始した（山藤・アマンバエヴァ 2020, 2021a/b）。

2. 調査の方法

上記の目的に合わせて、本プロジェクトは、チュー渓谷西部の拠点都市カラ・バルタ（Kara-Balta）周辺の、東西約 35 km、南北約 50 km、約 1,270 km^2 の範囲を調査対象とした（図 1. 1）。調査対象面積が広大かつ南北に長大であることには 2 つの理由がある。まず、天山山脈北麓の遊牧民は古来、山岳部と平野部の高低差を利用した垂直（南北）方向に季節的な移動を行ってきたので、チュー渓谷ではキルギス山脈北麓からチュー川までのできるだけ広い範囲を調査研究の視野に入れない限り、遊牧民の生活痕跡を十分に把捉することはできないと考えたからである。また、6 世紀の都市化以降には、都市定住社会による東西交易路網の整備が進んだが、時期による路線の移動・切り替えが起こった可能性も考えられた。交易路網は概ね東西方向と南北方向の路線から構成されており、これらの路線立地の変遷を捉えるためには、広大な範囲を踏査対象とする必要があった。

以上の理由で調査対象地域が広大となったため、現地調査にあたっては調査対象地域を 4 つの区域（Zones I ～ IV）に分割し、調査効率を向上させることに努めた。Zone I は、今日の東西基幹道路の北側の広い範囲を占めており、その大部分が海抜標高 600 ～ 700 m の沖積平野から成る。Zones II・III は、東西基幹道路の南側、南方のキルギス山脈北麓までの範囲であり、Zone II はカラ・バルタ川の西岸、Zone III は同河川の東岸を占める。いずれの地域も農地開拓により、南から北に傾斜する平坦な緩斜面（海抜標高 700 ～ 1,100 m）が広がっている（図 1. 2）。さらに、踏査ではキルギス山脈北麓部分を Zone IV として区別し、東西に細長い北麓の傾斜面から成る Zone IVa と、調査地域南西隅の、大規模な開墾が及んでいないカイナル（Kainar）川流域地帯から成る Zone IVb とに細分した。基本的に、これらの Zone 単位で踏査を実施した。

調査地域全体を見るとかなり広大な地域ではあるが、その大部分では農地開拓が進んでおり、大小問わず古代遺跡の多くは既に消失している。農地においては度重なる耕作のため遺物散布地の確認すらも十分に望めないため、調査地域を面的に廻る悉皆的な方法は適しておらず、代わりに、Google Earth 等の衛星画像上であらかじめ地物を確認しておき、これらを現地で検証する手法が最も有効であった。現地では、事前に確認した地物情報を基に、小河川単位に車両及び徒歩による踏査を実施した。この方法により、農地化されていない小河川沿いの段丘面上において、数多くの遺跡を記録した。なお、Zone I 東部では農地開拓の影響が強く見られ、多くの小河川が途切れるか消失していた。このため、Zone I 西部で認められたような小河川沿い段丘面が残らず、衛星画像上で確認できた地物が僅少であった。加えて、広大な面積における調査に際して時間的制約が大きかったため、十分な踏査を実施していない。また、Zone II の大半、及び、Zone III の南半から Zone IVa のカラ・バルタ川東岸部分にかけても農地開拓が極めて進んでおり、一部のクルガンを除いて、衛星画像上及び現地において地物をほとんど確認できなかった。このため、第 1 次調査が終了した段階で、実質的に踏査の対象地域から除外した。こうした事情から、重点的に踏査できた範囲は 500 km^2 に満たず、設定した調査地域全体の 39% 未満にとどまった。

各遺跡では、残された遺構を地表で確認した後、ハンディタイプの GNSS[1] 受信機（Garmin® GPS map 62s）により現地の座標を取得した。座標取得の後には、本プロジェクトのために用意したサーヴェイ・シートを用いて、遺跡の記録を行った（図 1. 3）。記録項目は、「遺跡番号（Site No.）」、「登録番号（Reg. No.）」、「遺跡名（Site Name）」、「踏査日（Date）」、「記録者（Recorder）」、「座標（Coordinates）」、「標高（Elevation）」、「行政区名（Administrative division）」、「参照地図（Map used for the survey）」といった基本情報に続き、「地形的特徴（Topographic Feature）」、「踏査内容（Survey Contents）」、「遺跡種別（Site Category）」、「確認遺構（Feature Confirmed on Site）」、「現地表面の状態（Surface）」、「水資源の確保方法（Water Catchment）」、「現況（Present Condition）」、「採集遺物の年代（Period of Collected Artifacts）」という遺跡の具体的情報と、「周辺地図（Topographic Map）」のスケッチ用スペースから成る[2]。遺跡の具体的情報については、現地での作業効率に鑑みて、項目選択により簡便に記録できるように工夫した。サーヴェイ・シートへの記入と同時に、遺跡の写真記録も行った。写真記録は、地上撮影と UAV による空撮を実施した。前述のとおり、調査地域の大部分は北に緩やかに傾斜する平坦面から成るため、遺跡全体の形態や状況を地上

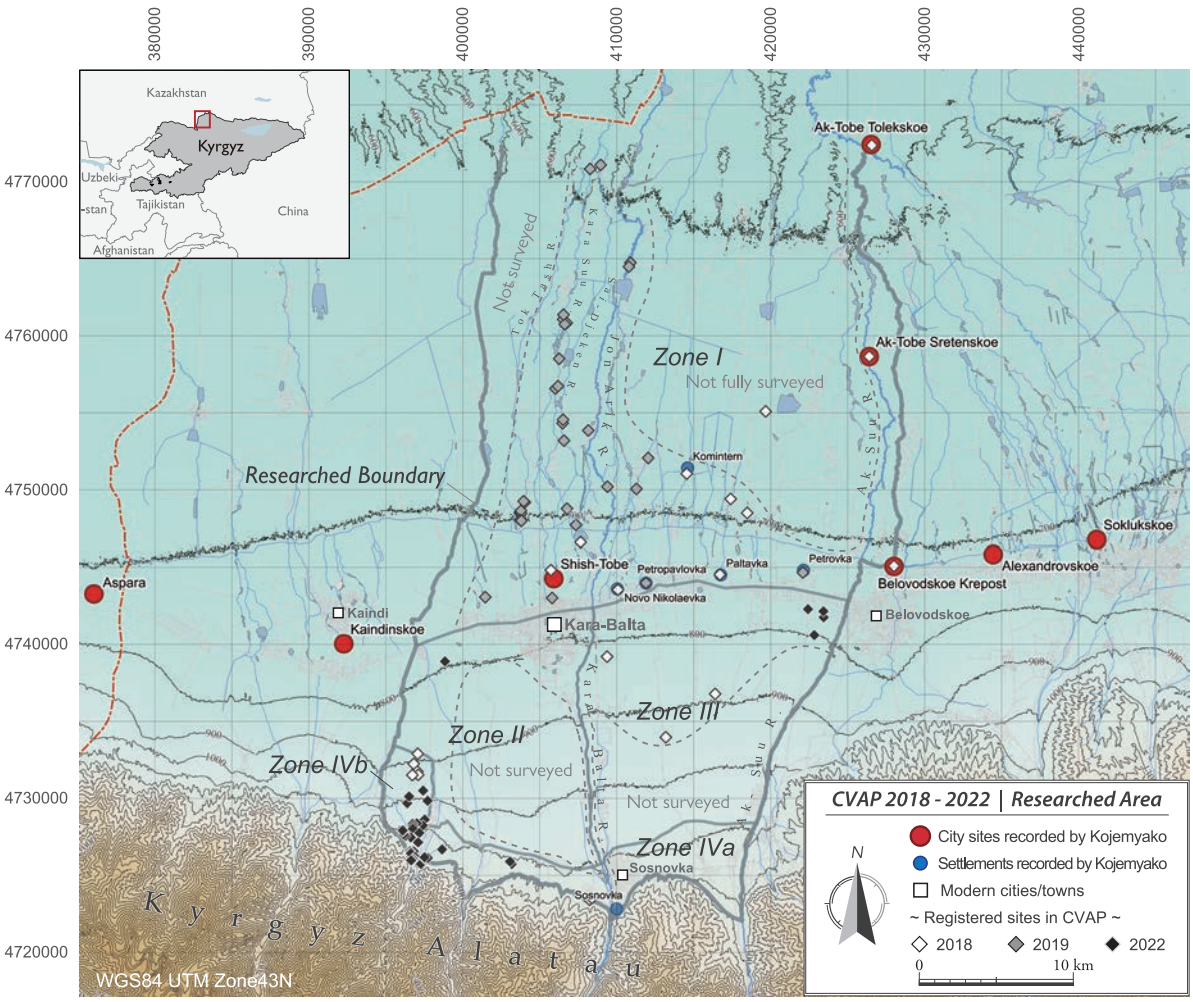

図 1. 1　遺跡の登録年次別分布状況（1: 500,000）

図 1. 2　Zones II・III の景観（南から）

SITE SURVEY SHEET

Site No. :_____　Coordinates: (E)_____

Reg. No. :_____　(N)_____

Site Name :_____　Elevation:_____m

Date (yy/mm/dd) :_____/_____/_____　Administrative division:_____

Recorder :_____

Map used for the survey:_____

[Topographic Feature]

☐ Plain　☐ Hill　☐ Terrace　☐ Spur
☐ Plateau　☐ Slope　☐ Ridge　☐ Alluvial fan

[Survey Contents]

☐ Surface collection　☐ Sounding　☐ Measurement
☐ Topographic survey　☐ Photographing　☐ Contour mapping
☐ Inquiring survey　☐ Aerial photographing　☐ Other

[Site Category]

Settlement :

☐ City　☐ Village　☐ Fort　☐ Others
☐ Town　☐ Hamlet　☐ Watchtower

Domestic Remain :

☐ Enclosure (isolated)　☐ Windbreak　☐ Cup-mark　☐ Pottery scatter
☐ Enclosure (complex)　☐ Rock-shelter/Cave　☐ Terrace wall　☐ Lithic scatter
☐ Encampment　☐ Stone alignment　☐ Stone wall　☐ Others

Funerary/Ritual Remain :

☐ Cemetery　☐ Grave　☐ Dolmen　☐ Stone setting
☐ Cairn/Tumulus　☐ Shaft tomb　☐ Pottery scatter　☐ Others

Miscellaneous :

☐ Petroglyph　☐ Others

[Feature Confirmed on Site]

☐ House　☐ Monument　☐ Midden　☐ Others
☐ Public building　☐ Hearth　☐ Boulder scatter
☐ Temple　☐ Kiln　☐ Flattened space

[Surface]

☐ Bare rock　☐ Cultivated　☐ Swamp　☐ Grassland
☐ Barren　☐ Sand　☐ Agricultural　☐ Others

[Water Catchment]

☐ Stream (perennial)　☐ Spring　☐ Cistern　☐ Barrage
☐ Stream (seasonal)　☐ Well　☐ Aqueduct　☐ Others

[Present Condition]

☐ Well　☐ Plundered　☐ Grazing
☐ Eroded　☐ Destroyed (Cultivated)　☐ Others
☐ Weathered　☐ Destroyed (Constructed)

[Period of Collected Artifacts]

☐ Lower Palaeo　☐ Chalcolithic　☐ Iron Age　☐ Sogdian　☐ Modern Period
☐ Middle Palaeo　☐ Early Bronze　☐ Saka　☐ Early Middle　☐ Undetermined
☐ Upper Palaeo　☐ Middle Bronze　☐ Wusun　☐ Kara khan　☐ Others
☐ Meso-Neo　☐ Late Bronze　☐ Turk　☐ Kara Khitai

[Topographic Map]

図 1.3　サーヴェイ・シート（左：表面；右：裏面）

撮影のみから把握するのは難しい。このため、第 2 次調査から UAV（DJI® Mavic Air）を導入し、空撮による記録を積極的に実施した。サーヴェイ・シートを用いた記録と写真記録の後には遺跡内を踏査し、遺物の採集に努めた。本プロジェクトで対象としたチュー渓谷西部では、比較的大きな居住地遺跡を除いて、現地表面において遺物をほとんど採集できなかった。これは、草本類の繁茂に加えて、遺跡の性質上、元来遺物の量が少ないことに起因すると考えられる。

遺跡において取得した属性データについては、Microsoft® Excel® 上に入力し、デジタル・データとして管理できるようにした。また、QGIS 上で調査地域のデータを蓄積し、視覚的に遺跡の分布状況を把握できるように整備した。また、採集した土器片については、口縁部や底部等の器種の復元が可能な部位を対象として、手書き実測による記録を行った。作業後は作成した実測図のデジタル・スキャンを行い、このスキャン・データを Adobe® Illustrator® によりトレースした。トレースした図版は、他のデジタル・データと共に、一元的に管理している。

3. 調査の経過

上記の研究目的を達成するために、3 次にわたる現地調査を実施した。研究期間途中に新型コロナウイルス感染症が世界的に感染拡大したため、現地調査が延期を余儀なくされたものの、当初の計画どおりに調査を完了した。各調査の概要について、以下に示す。

【第 1 次調査】

期間：2018 年 9 月 26 日～ 10 月 5 日（9 調査日）

参加者：

山藤　正敏（独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所）

バキット・アマンバエワ（Bakit AMANBAEVA）（キルギス共和国国立科学アカデミー歴史考古学民族学研究所）

ダニヤル・バズィロフ（Daniyar BAZILOV）（キルギス共和国チュー州ジャイル地区文化事務所）

主要な対象地域：

調査対象地域全体の様相を掴むため、既知の都市遺跡を含めて広く全域を踏査した。

調査成果：

調査地域全体において、21 件の遺跡を記録した。このうち 8 件は既知の遺跡であり、1 件（S011）を除いて、かつてコジェミャコにより調査された中世居住址である。この他の 13 件は、新規に確認した小型遺跡である。

【第 2 次調査】

期間：2019 年 10 月 2 日～ 10 月 11 日（8 調査日）

参加者：

山藤　正敏

バキット・アマンバエワ

ダニヤル・バズィロフ

主要な対象地域：

第 1 次調査により比較的遺構が残存していることが判明した、調査地域北西部の小河川沿いに重点を置いた踏査を実施した。

調査成果：

調査地域北西部において、30 件の遺跡を記録した。このうち 2 件（N002・004）のみが既知の遺跡であった。また、調査地域の北西端において、中型の町（N040）を新規に確認・記録した。

【第 3 次調査】

期間：2022 年 9 月 11 日～ 9 月 24 日（11 調査日）

参加者：

山藤　正敏

バキット・アマンバエワ

ダニヤル・バズィロフ

主要な対象地域：

第 1・2 次調査でほぼ未踏査であった南西部（Zone IVb）及びその周辺と、調査地域南半部に多く分布するクルガンの記録に重点を置いた踏査を実施した。

調査成果：

調査地域南西部山麓地帯とその近傍において、31 件の遺跡を記録した。また、調査地南半部のクルガン 3 件を踏査・記録し、4 件を目視・写真記録した。さらに、第 2 次調査時に発見した N040 を再訪し、UAV を用いた地形測量を実施した。

註

1）Global Navigation Satellite System の略であり、アメリカの GPS やロシアの GLONASS もこれに含まれる。

2）キルギス側研究者や他諸外国研究者との将来にわたる情報共有を念頭に、サーヴェイ・シートの記述言語は全て英語とした。

II.　調査地域の自然地理的・歴史的背景

1. 調査地域周辺の自然環境

1. 1. 地理

チュー渓谷は中央ユーラシア深奥部、いわゆるセミレチエ（Semirechie）地方南部に位置する盆地である[1)]。セミレチエが地名として現れたのは 1840 年代の帝政ロシア時代のこととされ、以来、この名称が指し示す範囲は刻々と変化してきた（ケンジェアフメト 2009: 219）。ただし今日の理解では、セミレチエ地方は、北はバルハシ（Balkhash）湖南岸のバルハシ盆地と南のチュー渓谷（盆地）から成り、本書でもその理解に従っておきたい。

チュー渓谷は、天山山脈の北方前山であるキルギス山脈（Kyrgyz Alatau）の北麓に沿って東西に広がり、その北東辺はカザフスタン南縁に横たわるカラタウ山脈（Karatau Mountains）により画され、北西縁及び北縁はカザフスタン南部に広がるモユンクム沙漠（Moiyun-kum Desert）に接続している（図 2. 1）。渓谷の範囲は最大で東西約 280 km にも及び、南北長は最大で約 80 km を測る一方（ビシュケク西方の地域）、拠点交易都市であったアク・ベシム（Ak-Beshim）に近い東端の都市トクマク（Tokmok）付近では、南北幅約 18 km と極めて狭隘になる。

チュー渓谷の北縁近くには、チュー（Chuy）川が南東から北西に向けて流れている。南東のキルギス山脈に端を発して北西方に流れるコチュコル（Kochkor）川と、東のイシク・クル（Issyk-Kul）湖北岸のザイリスキー・アラタウ山脈（Zailysky Alatau）内を西方に流れるチョン・ケミン（Chon-Kemin）川が、チュー渓谷東端付近

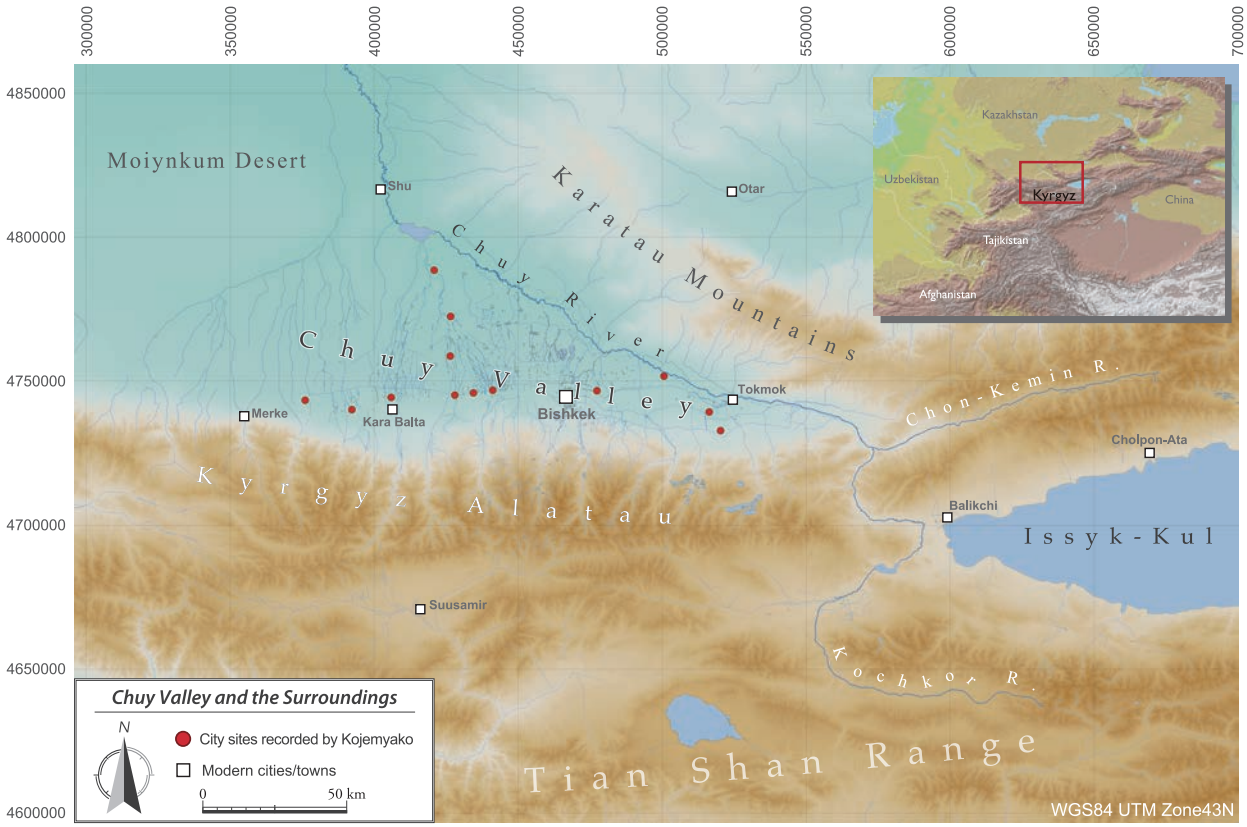

図 2. 1　チュー渓谷の地理

で合流してチュー川となる。チュー川は、西北方向のカザフスタンの草原地帯に向けて貫流し、約 700 km 西でシル河北方のベトパク・ダラ沙漠（Betpak-Dala Desert）に消失する。チュー川の南北には沖積平野が広がるが、その面積は南側（左岸）の方がはるかに広大であり、南のキルギス山脈から無数の小河川が注ぎ込む。チュー川南岸の沖積平野は、南のキルギス山脈北麓部分の標高約 1,100 m から、北のチュー川沿岸の標高約 550 ～ 750 m に至る緩斜面を成しており、その勾配率は、上流近くの狭隘な東部よりも下流側の広大な西部の方が低い。南岸沖積平野は、ソヴィエト連邦時代に行われた大規模な開拓事業により、現在では農地化されているが、これよりも以前には湿地帯を成していたという。

現在のキルギス共和国の首都ビシュケク（Bishkek）以東では、比較的大きな河川（西から、イシク・アタ Issyk-Ata 川、ケゲティ Kegeti 川、シャムシー Shamsi 川、クズル・スウ Kyzyr-Suu 川等）が南のキルギス山脈からチュー川に流れ込み、それぞれ広大な開析扇状地を形成している。これらの河川の間に 3 つの代表的な都市遺跡（クラスナヤ・レーチカ Krasnaya Rechka、アク・ベシム、ブラナ Burana）が所在している。特に著名なアク・ベシムは、ビシュケクの約 47 km 東、トクマクの約 7.5 km 東南東、現在のチュー川河道から約 7.0 km 南の河岸段丘上、ケゲティ川とシャムシー川の間に立地しており、両河川間を南に流れる小河川とケゲティ川の開析扇状扇端のほぼ合流地点を占めている。こうした立地は地下水を得やすく、また、河川氾濫を受けにくいというメリットがある（相馬ほか 2016: 6）。また、アク・ベシムの北のチュー川氾濫原には今日でも湿地帯が広がっており、見晴らしの良い河岸段丘北縁部の占地とあいまって、北からの防御にも最適な立地と言えるだろう。

ビシュケク以西には、より広大な沖積平野が広がっている。キルギス山脈から北方に注ぐいくつかの主要河川（東から、ソークルーク Sokuluk 川、アク・スウ Ak-Suu 川、カラ・バルタ Kara-Balta 川、チョング Chong 川、アスパラ Aspara 川、メルケ Merke 川等）がほぼ 10 ～ 20 km 間隔で見られ、それぞれが広大な開析扇状地を成すのは東部と同様である。ただし、西部は東部よりも南北に縦深が深いため、これらの河川の北端部は離合集散を繰り返し、緩やかな沖積平野内を複雑に流れている。その一部は合流して北方のチュー川に注ぐが、農地開拓が進んだ現在では、零細な流路の多くは沖積平野内で消失する。なお、ビシュケク以西における都市遺跡の多くは、扇状地扇端の平野部に東西に並ぶ。

1940 年代には、チュー渓谷中央を東西に横切る大チュー運河（The Great Chuy Canal）が建設され、現在でも利用されている。この農業用運河は総長約 200 km にも及び、トクマク西北方約 11 km 地点のチュー川から取水し、カザフスタンのカメンカ（Kamenka）集落の北方約 8.0 km 地点の平野内で途切れる。東部では標高約 750 m、西部では標高約 700 m 地点に地形に沿うように掘削されており、緩やかな流れを保っている。この東西に横切る運河のため、本来の南北方向の河道が阻害されており、農地開拓も相俟って、運河北方の自然環境は運河建設以前に比べてかなり改変されてしまったと考えられる。

1. 2. 気候・植生

セミレチエ周辺地域は、ケッペン気候区分によれば、寒冷地ステップ気候帯（BKs）に属する。年間を通じて乾燥しており、現在の年間平均降水量は約 270 ～ 400 mm 程度である（ケンジェアフメト 2009）。このうち大部分は 11 月頃から翌年 3 月頃までの雨季に、降雨・降雪によりもたらされる。季節毎の気候変化がみられることから、四季が明確である。春は短く、夏は乾燥して 40℃に迫るほど暑い一方、冬は寒冷で降雪が多く、しばしば氷点下 10℃を記録する。これに比べ、秋は温暖で穏やかな天気が続き、大変過ごしやすい。

チュー渓谷内は先述のとおり、農地開拓が進んだことから元来の植生を残してはいない。現在では、コムギやトウモロコシ等の穀物と、野菜・根菜等のその他作物が多種多様に栽培されている。他方で、チュー渓谷の南を縁取るキルギス山脈北麓には、草本類が繁茂する緩斜面から成るステップ地帯が広がるが、標高 1,200 m を越えたあたりから、天山山脈の固有種であるテンザントウヒ *Picea schrenkiana* が北斜面を中心に卓越し始める。ただし、密集した森林を形成することは稀である [2)]。南斜面や針葉樹生育域以外の山腹には、おそらくはイネ科 Poaceae、カヤツリグサ科 Cyperaceae、キク科ヨモギ属 *Artemisia* 等を主体とする牧草地が広がっている。

2000 年代後半以降、主にイシク・クル湖とその周辺の湖沼堆積物の分析に基づいて、チュー渓谷を含む天山山脈西部周辺の完新世後期における古気候が復元されてきた。結果として、従来比較的安定していると看做されてきた中央アジアの古気候が、実際には大きく変動してきたことが明らかにされた。イシク・クル湖北岸のクンゲイ・アラタウ山脈（Kungey Alatau）に位置するカラコル（Karakol）湖の湖底堆積物の花粉分析からは、前

1850 年、前 1350 ～前 550 年（特に前 850 ～前 650 年）の間にテンザントウヒが減少し、これに代わってヨモギ属が卓越したことが判明したが、これは当該期における寒冷化と乾燥化を示唆している（Beer and Tinner 2008）。また、イシク・クル湖北部の湖底堆積物の花粉分析は、前 3550 年、前 2250 年、前 1250 年と後続する数世紀、及び 1500 ～ 1900 年におけるテンザントウヒの増大を示しており、これは当該期における気候の湿潤化・寒冷化によるものとされた（Leroy and Giralt 2020）。なお、前 1250 年におけるカラコル湖とイシク・クル湖の分析結果の不一致は標高の差によるものと考えられ、より標高の低い後者でのテンザントウヒの増大は、その生育限界標高が寒冷化により低下したことによると解釈された（Leroy and Giralt 2020）。ところで、イシク・クル湖底堆積物における前 1250 年以後は、牧草地の卓越を示唆するカヤツリグサ科の増加も同時に示している（Leroy and Giralt 2020）。

上記とは別に、イシク・クル湖北部の湖底から採取されたコアの総合的な分析により、湖岸域における過去 1 千年間の環境変化が明らかにされている（Giralt et al. 2004）。分析結果によれば、11 世紀以降に湿度が低下し始め、樹木の減少が見られるようになり、14 世紀初頭には乾燥化が最も進行した。乾燥した気候はその後も続いたが、1560 年頃から再び湿潤化し始め、半砂漠植生からステップ植生に転換した。これに伴い、放牧活動も 18 世紀にかけて活発となったことがわかる。19 世紀初頭には湿潤化が進み、イシク・クル湖の湖面水位も最高値を記録している。これに呼応して森林が拡大し、放牧活動の減衰が見られた。20 世紀には地域の湿度が低下し、湖岸における灌漑農業の拡大と共に、湖面水位の低下を引き起こした。

2. チュー渓谷の歴史・調査史

2. 1. チュー渓谷の歴史と文化編年 [3)]

青銅器時代以前

チュー渓谷内における人類活動の痕跡は前 3 千年紀の新石器時代に遡るようであるが、その痕跡は明確ではない。中世都市として知られるベロヴォドスコエ・クレポストでは、1978 年の発掘調査の際に新石器時代の所産と考えられる石器 5 点が出土した（Мокрынин 2012: 99）。新石器文化の痕跡はビシュケク東方のアラメディン川及びシャムシー川上流の山岳部で 1953 年に確認されているが、平野部での確認は稀である（Мокрынин 2012: 99）。

青銅器時代（Bronze Age）の遺跡は散発的にではあるものの、同渓谷内で認められてきた。同時期には、銅冶金で知られるアンドロノヴォ文化複合（Andronovo Cultural Complex: 前 2100 ～ 1250 年頃）[4)] が西はウラル（Ural）山脈から東は南シベリアのイェニセイ（Yenisei）川まで広がり（Baumer 2012: 149–151; Grigoriev 2021）、チュー渓谷や天山山脈西部にも到来した（Бернштам 1950: 104–106; 香山 1956: 68）。後期青銅器時代（Late Bronze Age: 前 1300 ～ 800 年頃）には、アンドロノヴォ文化複合に後続する隆帯文土器文化（南シベリアのカラスク Karasuk 文化や中央カザフスタンのサルガリ Sargari 文化）もまた、天山山脈西部一帯に影響を及ぼしていたようである。

鉄器時代

後期青銅器時代以後、前 8 世紀から後 5 世紀にかけては鉄器時代（Iron Age）に区分される。鉄器時代は、前期（前 8 ～前 3 世紀）と後期（前 3 世紀～後 5 世紀）に細分される（cf. Мошкова 1992: 75）[5)]。鉄器時代前期（Early Iron Age）には、イラン系の騎馬遊牧民サカ（Saka）が広く中央アジア及び東トルキスタンのステップ地帯に居住し、主としてウシ放牧により生計を立てていた [6)]。サカについての言及は、複数の歴史資料に認められる（Yablonosky 1995a; Baumer 2012: 172–174, 198）。前 6 世紀のビストゥン（Bisotun）碑文や前 5 世紀のペルセポリス（Persepolis）のレリーフには、サカはアケメネス朝ペルシアに支配された民族として描かれている。また、古代ギリシア・ローマの歴史家たちは、その著作においてサカに言及している。なかでも著名なのはヘロドトスの『歴史』であり、ここではサカ（スキタイ）はアケメネス朝ペルシアに従属する民族として、多数の言及が見られる（cf. Melyukova 1990: 98）。草原が発達したセミレチエには、1,000 基以上にも及ぶサカのクルガンが残されている（Baumer 2012: 205）。例えばカザフスタン南東部には、ベスシャトゥル（Besschatyr）やイシク（Issyk）といった前 8 ～前 3 世紀の古墳群が所在し、被葬者を包む衣類や黄金製の装飾品等、豊富な副葬品を伴う大型クルガンを含んでいる（Мошкова 1992: 77 – 78; Yablonosky 1995b; 林 2000: 35; Baumer 2012: 205–206）。天山山脈中、ナルィン（Naryn）西方のアラムイシク（Alamyshk）古墳群では、サカに帰される比較的小型（直径 10 m、高さ 0.48 m）の墳墓 4 基において発掘調査が行われた（香山 1956: 69–70; Мошкова 1992: 79）。また、イシク・

クル湖北西岸のチョルポン・アタ（Cholpon Ata）では、人物像や動物を刻んだ岩絵（Petroglyph）が多数見つかっている（Мошкова 1992: 80）。

鉄器時代後期（Late Iron Age）には、匈奴に追われた月氏が一時イシク・クル湖周辺に逃れたが、その後、前 160 年頃には烏孫が月氏を破って同地に侵入し、南岸の赤谷城を本拠地として周辺一帯を勢力下においた（cf. Baumer 2014: 37）。その後、5 世紀半ばまで、烏孫はこの地で活動した。前 3 ～前 1 世紀のチュー渓谷では、トクマク南方のブラナにおいて豪奢な副葬品を伴う円墳が確認されている（Мошкова 1992: 83）。また、同時期には、ビシュケク近郊のアラメディン（Alamedin）とカラ・バルタにおいて集落の痕跡が認められた（Мошкова 1992: 84）。アラメディンの集落はその大部分が破壊されていたが、比較的残りが良かったカラ・バルタの集落は 60 m × 40 m の規模を有し、泥レンガ製の円形住居が 1 基のみ検出された。その周囲では、円形土坑が多数検出された。後 1 ～ 5 世紀には、それまでの墳墓に加えて、系統の異なる地下式横穴墓が見られるようになった。ケンコル（Kenkol）文化として認識されるこの墳墓群は、チュー渓谷の西南に位置するタラス渓谷上流のケンコルにおいて初めて確認された（Мошкова 1992: 85–86）。ケンコルでは約 100 基の墳墓が造られており、このうち半数で発掘調査が行われた（角田 1952 [1971: 257–277]）[7]。同様の墳墓群は、カラ・バルタの約 20 km 南西に位置するクム・アルィク（Kum-Aryk）においても認められた（Кожомбердиев 2012）。また、チュー渓谷東部のシャムシー（Shamsi）では、4 ～ 5 世紀に比定できる墓から、被葬者の女性を表した黄金製の仮面が出土した（Мошкова 1992: 86; Baumer 2014: 94, Fig. 72）[8]。

中世

6 世紀にはソグド人が入植して都市を築き、チュー渓谷はそれまでの遊牧社会から中世前期の都市定住社会に組み込まれた[9]。6 世紀中頃以降、突厥が東は渤海から西はアラル海に至るステップ地帯に覇を成し、582 年の東西分裂以降は西突厥がチュー渓谷一帯をその支配下に置いた。長安から天山北路を通って天竺（インド）を目指した玄奘は、『大唐西域記』に道中 630 年に通過したチュー渓谷の状況を以下のように書き留めている。

「清池（イシク・クル）の西北に 500 里あまり（約 220 km）で素葉水の都市に到着する。都市の周囲は 6 ～ 7 里（約 2.5 ～ 3.0 km）であり、各国の商人が雑居している。土地はキビ、ムギ、ブドウに適している。木々は少ない。（その）気候は風が冷たく寒いので、人々は毛織りの服を着ている。素葉以西にある数十の独立した都市は、皆（各々の）君長を立てている。命令を受けているわけではないが、（西）突厥に隷属している。」（『大唐西域記』巻一）（訳は齊藤 2016: 81, 2023: 26 に依拠）

上記で言及がある「素葉水の都市」とは古代名スイアブ（Suyab）、今日のチュー川南岸に位置するアク・ベシムを指している[10]。また、『大慈恩寺三蔵法師伝』には、以下の記述がある。

「海（イシク・クル）に沿って西北に 500 里あまり（約 220 km）で、素葉城に到着した。（そこで、西）突厥の肆葉護（ヤブグ）可汗に会った。ちょうど狩りに出かけようとしていたので、軍馬が大変強壮であった。・・・（中略）・・・（玄奘が）面会したので、可汗は喜んで「しばらくある所に行きますが、2、3 日で帰るでしょう。法師様はとりあえず牙帳に向かってください」と言った。（そして）達官（タルカン）の答摩支に命令して（玄奘を）引率して（牙帳に）送り、休ませた。・・・（中略）・・・ここ（牙帳）から西方に 400 里あまり（約 176 km）で屏聿に到着した。ここは千泉ともいう。その土地は数百里四方で、池や沼が多いのみならず、珍しい木が豊かに茂っている。森林が鬱蒼としていて清涼湿潤であるので、可汗の避暑地である。」（『大慈恩寺三蔵法師伝』巻二）（訳は齊藤 2016: 82 に依拠）

上記の両史料をはじめとする中国及びイスラームの歴史・地理書に示されるように[11]、当時のチュー渓谷にはアク・ベシム（古代名スイアブ）の他に、クラスナヤ・レーチカ（Krasnaya Rechka）（古代名ナヴィカト Navikat）、ノヴァポクロフカ（Novopokrovka）（古代名キールミーラウ Kirmirau）、ソークルーク（古代名ジュル Djul）、シス・トベ（Shish Tobe）（古代名ヌジケト Nuzket）といったソグド系諸都市が交易路沿いに東西に広く分布していたことが考古学調査から明らかにされている（cf. Горячева 2010: 49, Таблица 2）。

玄奘がチュー渓谷を通過した 630 年より、タリム盆地及びセミレチエ一帯への唐の進出が本格化し、648 年には亀茲（クチャ）に安西都護府が移置され、安西四鎮が設置されるに至った。657 年には、西突厥における唐への反乱が鎮圧されたのを機に、唐は旧西突厥王族を可

汗に任命してその東西を分割統治させたが、666 ～ 667 年に両可汗とも相次いで殺害され、唐の間接統治は失敗した（齊藤 2023: 28）。670 年代には、タリム盆地に進出してきた吐蕃がチュー渓谷にも現れるようになり、チュー渓谷は唐・旧西突厥勢力・吐蕃による勢力争いの前線と化した。スイアブは当時の唐の版図の最西端に位置しており、安西四鎮の 1 つ（砕葉城）が設置されていた。『旧唐書』には、679 年に当時の都護、王方翼による砕葉城整備の記事が見られる [12]。

「さらに（王方翼は）砕葉鎮の都市（の城壁）を建築した。（城壁の）4 面に（全部で）12 の門を立て、（それらの門は）すべて屈曲していて、（兵の）出撃や退却を隠す形となっていた。50 日で（工事は）終わった。西域の外国人たちが競いやって来てこの城壁を見て、土地の物を献上した。」（『旧唐書』巻一八五上「良吏伝上　王方翼」）（訳は齊藤 2016: 84, 2023: 29 に依拠）

7 世紀末にはトルコ系騎馬遊牧民の突騎施（テュルギシュ Türügeš）が勢力を伸ばし、703 年には砕葉城をその実質的な支配下に置いた。しばらくは唐による砕葉城の名目的な支配は続いたものの、719 年には唐は砕葉城を完全に放棄し、セミレチエの支配を断念した。突騎施は、8 世紀初頭に西から侵攻してきたイスラーム勢力と敵対し、勢力化にあったソグディアナの諸都市を支援したが、8 世紀半ばまでには衰退した。これに代わり、760 年代には同じくトルコ系騎馬遊牧民のカルルク（Qarluq）が東方からセミレチエに遷り、9 世紀にはチュー渓谷のバラサグン（Balasagun ／ブラナ）に拠点を置いた（Golden 1990: 355）。

840 年には、東方のモンゴル高原に勢力を広げたウイグル（Uygur）が滅亡し、トルコ系部族は新たなカルルク部族連合を組織した。この枠組みの中からカラハン朝（Kara-Khanid Khanate）が始まったと、今日では理解されている（Golden 1990: 354; Duturaeva 2022: 13）。10 世紀中頃には、サトゥク・ブグラ・ハン（Satuq Bughra Khan）の下でイスラーム教に改宗し、史上初のトルコ系イスラーム王朝となった。カラハン朝も 12 世紀まではバラサグンを首都とし、サーマーン朝（Sāmānid）やガズニ朝（Ghaznavid）とホラーサーン（Khorasan）及びマー・ワラー・アン＝ナフル（Mā warā'n-Nahr）を廻って争い、最盛期にはマー・ワラー・アン＝ナフルからセミレチエに至る広大な地域を支配した。しかし 11 世紀後半には、マー・ワラー・アン＝ナフル一帯を治める西カラハン朝と、東トルキスタン一帯を治める東カラハン朝に分裂した。カルルク及びカラハン朝が支配した 9 ～ 12 世紀頃のチュー渓谷には、中世都市と定住集落が数多く分布することが知られている。9 世紀以後に新たに築かれた都市は少なくとも 7 件にも及び、元来存在した諸都市も、シャフリスタンを取り囲む外城壁が新たに追加されるなどして、大幅に拡張された（cf. Кожемяко 1959）。

1132 年には、耶律大石に率いられて遠く中国東北部から金に追われて西遷してきたカラ・キタイ（Qara Khitai 西遼）が、東カラハン朝を従属させて、チュー渓谷東部のバラサグン（クズ・オルド Quz-Ordu に改称）に本拠を構えた。13 世紀初頭にはチンギス・ハンの将軍ジェベ（Jebe）率いるモンゴル軍がトルキスタンに侵攻し、カラ・キタイは 1218 年に滅亡した。チュー渓谷に残された数少ない中世都市（バラサグンやベロヴォドスコエ・クレポスト Berovodoskoe Krepost）はこの頃にはほぼ放棄され、モンゴル侵攻後は定住集落の数も激減し、地域的な停滞が以後数世紀も続いた（Джуманалиев 2016: 240, 261–263）[13]。

近世・近代

モンゴル帝国の侵攻後、14 世紀には、チュー渓谷は三王家のウルス（所領）の 1 つであるチャガタイ・ハン国（Chagatai Khanate）の版図に入った。1340 年代には、チャガタイ・ハン国の本拠地であったセミレチエの勢力（モグール）と、マー・ワラー・アンナフルの勢力（チャガタイ）の反目が強まった結果として同国は東西に分裂し、セミレチエとその周辺にはモグーリスターン・ハン国（Moghulistan Khanate）が成立した。15 世紀後半には、ウズベクとカザフの北方からの圧力が強まり、モグーリスターン・ハン国は天山山脈南方のオアシス地帯に退却した。この間のチュー渓谷では主にトルコ・モンゴル系遊牧民が活動していたと思われるが、考古学的事象からはあまり定かではない。

18 世紀初頭には、セミレチエはジュンガル（Dzungar Khanate）の支配下に入ったが、長続きしなかった。1755 年にはジュンガルの内紛に清朝が介入し、1759 年にその版図に組み込んで新疆と呼称した。1820 年代には、フェルガナを拠点としてセミレチエにまで勢力を伸ばした、ウズベク系のコーカンド・ハン国（Khanate of Kokand）が新疆に介入し始め、清朝の支配を度々脅かすようになった。他方、同時期の西トルキスタンでは、ロシア帝国によりカザフ草原にセミレチエ州を含む 6 州が設置され、こ

れ以後、南下政策が推し進められていった。1864 年になると、ロシア帝国はコーカンド・ハン国の軍事的攻略を開始し、1865 年には当時中央アジア有数の商業都市であったタシュケントを占領した。1876 年には、ロシア帝国はフェルガナを征服し、遂にコーカンド・ハン国は滅亡した。ほぼ同時期に、ロシア帝国は隣接するヒヴァ・ハン国（Khanate of Khiva）及びブハラ・ハン国（Khanate of Bukhara）をも征服し、両国を保護国としてトルキスタンの植民地化を完了した。19 世紀中頃までのコーカンド・ハン国統治下におけるチュー渓谷には、定住農耕民であるウズベク人（＝サルト人 Sart）の入植が進んだが、ロシア帝国併合後は皆退去し、代わりにロシア人の入植が相次いだ（バルトリド 2011b: 104–108）[14]。また、1860 年代以降、トルキスタン全域で遊牧民の定住化が促進した（バルトリド 2011b: 20）[15]。

1917 年にロシア帝国が 2 月革命で倒れ、その後 10 月革命が起こると、中央アジア全域に及ぶトルキスタン自治ソヴィエト社会主義共和国が成立した。1925 年には、同共和国及びブハラ・ホラズム両人民共和国が解体されて民族別の共和国・自治共和国が設置される中でカザフ自治共和国が成立し、1936 年の再編により新たにキルギス・ソヴィエト社会主義共和国が設置された。チュー渓谷は同共和国の北部に位置した。1941 年には、チュー渓谷内を東西に貫流する農業用水路である大チュー運河の建設が始まり、23 万人が手作業での建設に携わった。また同時期には、集団農場（コルホーズ）による農地開拓が進んだ。

1991 年にはソヴィエト連邦の崩壊に伴って、キルギス・ソヴィエト社会主義共和国と同じ版図を持つキルギスタン共和国が独立した。1993 年には国号をキルギス共和国に改め、今日に至る。

表 2. 1　チュー渓谷における文化編年

時　代			年　代
青銅器時代	後期	Late Bronze Age	1300-800 BC
鉄器時代	前期	Early Iron Age	8th - 3rd centuries BC
	後期	Late Iron Age	2nd century BC - 5th century AD
中世	前期	Early Middle Age	6th - 8th centuries AD
	後期	Late Middle Age	9th - 14th centuries AD
近世		Early Modern	15th - 18th centuries AD
近代		Late Modern	19th - 20th centuries AD

上記の通史を踏まえて、考古学踏査の対象とした後期青銅器時代から近代までの年代観を表 2. 1 のようにまとめた。各時代の詳細は既に述べたので繰り返さないが、本書ではこの編年にしたがって以下各章の記述を進めたい。

2. 2. 調査地域周辺の調査略史

以下では、本プロジェクトの調査地域を含むチュー渓谷内周辺地域におけるこれまでの調査史を概説する。調査対象地域周辺の過去の調査状況全般を見通すことに重点を置くため、個別の発掘調査を詳細に取り上げることは敢えてしない。

チュー渓谷を対象とした学術調査は、1893 〜 1894 年に V. V. バルトリド（В. В. Бартольд）率いるサンクトペテルブルグ大学の中央アジア調査隊により初めて実施された（Бартольд 1897; ケンジェアフメト 2009: 227）。バルトリドは、7 世紀以降のイスラーム及び中国史料に見える情報を頼りに、チュー渓谷の東西基幹道路を西から東に横断して、道路沿いに所在した諸遺跡を記録した。チュー渓谷西部では、コーカンド・ハン国の要塞としてのシス・トベ及びノヴァ・ニコラエフカ（Novo Nikoraevka）や、クルガン及び石人・石列（バルバル）への言及があり、さらに、都市遺跡としてアク＝トベ・スレテンスコエ（Ak-Tobe Sretenskoe）やソークルークも記載されている（Бартольд 1897: 22–23）。また、現在のビシュケク以東では、アク・ベシムやブラナにも訪れたことがわかる（Бартольд 1897: 26–27）。しかし、この調査がもたらした遺跡情報は断片的であり、詳細な情報を提供する考古学的調査の実施には 20 世紀第二四半期まで待たなければならなかった。

1929 年 6 月 21 日から 7 月 26 日にかけて、モスクワ人類学研究所による中央アジア遠征の一環として、A. I. テレノジュキン（А. И. Тереножкин）によりチュー川左岸の考古学調査が実施された（Тереножкин 1935, 2012a/б）。テレノジュキンは、ビシュケク（当時のフルンゼ）を基点として、東はトクマクから西はカラ・バルタまで、東西幹線道路に概ね沿った地域において、クルガンを含む大小 124 件の遺跡を記録した。カラ・バルタ周辺ではノヴァ・ニコラエフカ（Nos. 95–96）やベロヴォドスコエ・クレポスト、フルンゼ東方ではノヴァポクロフカ 2、アク・ベシム、ブラ

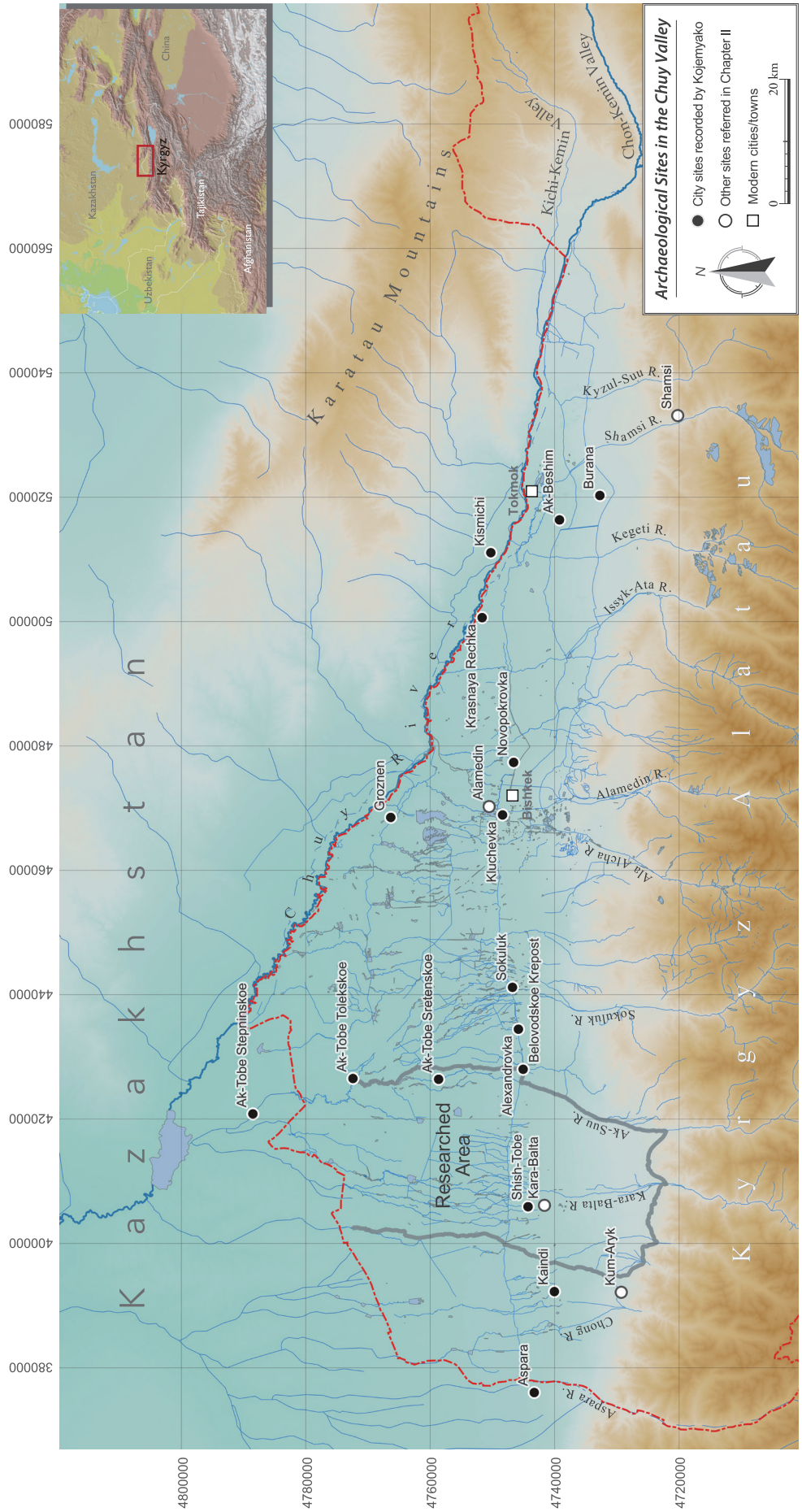

図 2. 2　チュー渓谷における主要遺跡分布

ナといった中世都市の記録があるものの、調査記録の大部分をクルガンが占めており、この時点でチュー渓谷にはかなり多くのクルガンが残されていたことがわかる。

1938 ～ 1940 年には、A. N. ベルンシュタム（A. H. Бернштам）率いる物質文化史研究所セミレチエ考古調査隊によりチュー渓谷における遺跡の調査が行われた。調査の主目的は、渓谷内に分布するかつての集落に共通する特徴を捉え、以後の研究の展望を広げることに加えて、歴史資料に度々言及がある中世都市バラサグンを同定することにあった（Бернштам 1950: 10）。イスラーム及び中国の地理・歴史書に基づいて、サルィグ（Saryg）に誤って同定されたクラスナヤ・レーチカ[16]と、バラサグンと考えられたアク・ベシムにおける発掘調査と同時に、1939 年及び 1940 年にはチュー渓谷全域及びイシク・クル湖北西の大小ケミン（Chon-Kemin, Kichi-Kemin）渓谷における大規模な踏査が実施され、西はメルケ（Merke）から東はノヴォロシースク（Novorossijka）まで、主な中世遺跡やクルガンが包括的に記録された（Бернштам 1950: 19–27）。また、1941 年 5 ～ 6 月には、ベルンシュタム以下総勢 27 名のソヴィエト連邦の考古学者たちによって、大チュー運河の建設に伴う考古学調査がチュー渓谷全体で実施された（Бернштам 1950: 84–85）。運河の建設区間には東西 20 km 毎に 1 調査分隊が置かれ、計 10 調査分隊より同時並行的に、運河建設地とその近傍における遺跡の記録と遺物の回収が行われた（Бернштам 1950: 86–103）。これらの記録と遺物の分類により、青銅器時代、サカ・烏孫時代、ソグド・トルコ時代、カルルク時代、カラハン朝時代、カラ・キタイ時代（文化）、モンゴル・ティムール時代が認識され（Бернштам 1950: 104–142）、1938 ～ 1940 年の調査成果と併せて、チュー渓谷の居住史が通史的に明らかにされた。

1953 年には、キルギス考古学・民族学総合調査隊が組織された。この分遣隊であるチュー川流域考古学調査分隊を率いた L. R. クズラソフ（Л. Р. Кызласов）は、1953 ～ 1954 年にアク・ベシムにおいて規模の大きな発掘調査を行った（ケンジェアフメト 2009: 231; Kyzlasov 2010: 247）。1954 ～ 55 年には、P. N. コジェミャコ（П. Н. Кожемяко）に率いられた別働隊により、チュー渓谷に分布する中世遺跡の調査研究が実施された（Кожемяко 1959）。コジェミャコによる包括的な現地調査により、18 の城壁を持つ中世都市・町と 44 の小居住址・要塞が記録され、このうち約半数において層位的試掘が行われた。結果として、多くの中世居住址の利用年代が明らかになったばかりでなく、一部では時期による居住域の変化（拡大）も確認された。この調査研究の成果は 1959 年に出版され、今日では、チュー渓谷の中世考古学研究の基礎資料の 1 つとなっている。

1960 年代以降は、チュー渓谷内の主要な中世都市遺跡における発掘調査が進められた。特にチュー渓谷東部に位置するクラスナヤ・レーチカ、アク・ベシム、ブラナにおいては、今日に至るまで、多様な組織により発掘調査が断続的に実施されている（cf. コルチェンコ 2016）。他方、チュー渓谷西部における既知の考古学調査件数は、東部に比べて希薄といえる。1975 年には、先述のチュー川流域考古学調査分隊により、カラ・バルタの約 20 km 南西に位置するクム・アルィクにおいて、38 基から成る墳墓群が発掘調査された（Кожомбердиев 2012）。31 基の発掘調査により、墳丘の下に地下式横穴と多様な副葬品を伴う被葬者が検出され、この墓域がケンコル文化に属するものであることが判明した。また、1978 年にはベロヴォドスコエ・クレポストにおいて緊急発掘調査が実施され、7 世紀から 12 世紀まで居住が途絶えなかったことを再確認するとともに、シャフリスタン最上層は 16 ～ 18 世紀にも利用された可能性が示された（Мокрынин 2012）。これらの調査の他に、1960 ～ 1970 年代には、中世都市シス・トベに加えて、小規模な居住地あるいは要塞であったペトロパヴロフカ及びコシュ・コルゴンにおいて地域の考古学者による発掘調査が行われたものの、調査報告書が刊行されていないため詳細は不明である（アマンバエワ私信）[17]。

2011 年には、独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所とキルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所（現　歴史考古学民族学研究所）による中央アジア文化遺産保護に係る国際研修事業の一環として、アク・ベシム及びケン・ブルン（Ken-Bulun）における考古学調査が新たに行われた（山内・アマンバエヴァ編 2016）[18]。同研修事業は 3 ヶ年（2011 ～ 2013 年）にわたり実施され、キルギス共和国をはじめとする中央アジア 5 ヶ国の専門家を対象に、遺跡の測量、発掘調査、出土遺物の記録・保存処理といった、遺跡の考古学調査の際に必要とされる一連の調査技術を移転した。

近年では、チュー渓谷東部のアク・ベシムにおいて 2015 年以降現在に至るまで発掘調査が継続している（城倉他 2016, 2017, 2018; 帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所 2019, 2020, 2021）他、2000 年代半ばからクラスナヤ・レーチカ（Torgoev et al. 2019）やノヴァポクロフカ 2（Kolchenko

and Rott 2019)、また、チュー渓谷西部のアク＝トベ・チューレクスコエにおいても断続的に考古学調査が実施されており、中世都市についての知見がますます蓄積されている。

註

1)「セミレチエ」とはロシア語で「7 つの河川」を意味しており、カザフ語の Zhetisu に由来する。「7」というのは具体的な河川の本数を述べたものではなく、多数の河川が流れていることを意味している（ケンジェアフメト 2009: 219）

2）チュー渓谷南に広がるキルギス山脈北麓では、筆者の知る限り、東部のケゲティ渓谷内には森林の生育が見られた。

3）本節の記述のうち特に引用がない箇所については、主に以下の概説書によっている。書誌の詳細については引用参照文献一覧を参照のこと。
Baumer 2012, 2014; Джуманалиев 2016; Osmonov and Turdalieva 2016; 小松編 2000。

4）アンドロノヴォ文化複合は研究史上、複数の考古文化の通時的・共時的複合体として捉えられてきた。最近では、併存するアラクル（Alakul）文化とフョドロフカ（Fyodorovka）文化のみがアンドロノヴォ文化複合を構成し、周縁に存在するチェルカスクル（Cherkaskul）文化やパホモヴォ（Pakhomovo）文化等は類アンドロノヴォ（Andronoid）文化として理解される場合もある（Grigoriev 2021: 26）。

5）M. G. モシュコワはチュー渓谷の鉄器時代を、1）前期サカ時代（前 8 ～前 5 世紀）、2）サカ時代（前 5 ～前 3 世紀）、3）前期烏孫時代（前 3 ～前 1 世紀）、4）中期烏孫時代（前 1 ～後 3 世紀）、5）後期烏孫時代（後 2 ～ 5 世紀）に区分している（Мошкова 1992: 75）。

6）ペルシア人は、北方のイラン系部族を「サカ」と総称していた（Beckwith 2009: 68, note 38）。また、古代ギリシア・ローマの歴史家にとって、「サカ」はスキタイ（Scythian）の 1 部族と考えられていたようである（cf. Yablonosky 1995a: 194–195）。現在では、「サカ」は東部ステップ地帯及びタリム盆地のイラン系部族を指して用いられる（Beckwith 2009: 68, note 38）。なお、歴史資料に現れる「スキタイ／サカ」の民族名称の系統関係については、Beckwith 2009: 377–380 (Appendix B) に詳しい。

7）角田文衛は、ケンコル文化の地下式横穴墓が紀元後 1 世紀頃の所産であると論じ、被葬者がコーカソイドとの混血が見られるモンゴロイドと考えられることを加味して、同文化が匈奴に帰されるとした（角田 1971: 272–277）。しかしながら、ケンコル文化の担い手が誰だったのかという問題については、現在でも結論に至っていない。

8）新疆の波馬（Boma）からは、5 ～ 6 世紀に比定される類似した黄金製仮面が出土している（cf. Baumer 2014: 111）。

9）本来、「中世」という時代名称は、「古代」や「近世」とともに、定住社会に視座を置いており、騎馬遊牧民が支配したチュー渓谷における時代呼称として適当ではない。チュー渓谷の場合、6 世紀におけるソグド人の植民により突如として定住社会に組み込まれたことから、チュー渓谷も同時期のソグディアナ周辺における時代区分、すなわち「中世」に該当すると看做されることになった。しかしながら、共通の理解を得られる別の用語が今のところ存在しないので、本書ではやむを得ず「中世」の用語使用を踏襲することにした。

10）アク・ベシムは 19 世紀の学術研究の開始当初、バルトリドによりバラサグンに同定された。ベルンシュタムとクズラソフもこの説に従ってアク・ベシム遺跡の発掘調査を進めた。ベルンシュタムは、第 2 シャフリスタンの発掘調査（I･II 区）により中国系と考えられる遺物が大量に出土したことから、これらの遺物を西遷してきたカラ・キタイ（西遼）に帰して、第 2 シャフリスタンを 11 ～ 12 世紀に位置づけられる「契丹区」と呼んでいた（cf. Бернштам 1950: 19, 29）。しかし後に、出土文字資料がウイグル語であると誤認して、検出した建築遺構を 9 世紀にトルファンと高昌から来たウイグル人に帰した（ケンジェアフメト 2009: 230）。なお、後に B. A. リフシッツ（Livšic）は、チュー渓谷で出土した土器や瓦に刻まれていた言語がソグド語であることを明らかにしている（ケンジェアフメト 2009: 233）。一方クズラソフは、1953 ～ 1954 年に実施した発掘調査によって第 1 シャフリスタンの最上層の年代が 9 ～ 10 世紀であると確認し、結果的にアク・ベシム遺跡＝バラサグン説を棄却している（Kyzlasov 2010: 263）。

1961 年には G. クロウソン（Clauson）により、「アク・ベシム遺跡＝スイアブ」説が唱えられた（Clauson 1961）。論考ではクズラソフによる最新の発掘成果が援用されていたものの、もとより史料の不足に起因して論証が十分ではなかったため、学界で広く受け入れられるには至らなかったという（ケンジェアフメト 2009: 237）。

上記の状況は、1982 年に杜懐寶碑が地域住民により第 2 シャフリスタンで発見されたことにより大きく変わることになった。安西副都護であった杜懐寶が亡き母のために一佛二菩薩を造らせた旨を記した同漢文石碑は 682 年頃に作られたと推定され、「碎葉鎮」の文字がはっきりと刻まれている。これは『大唐西域記』巻一において言及されている「素葉」あるいは「碎葉」（スイアブ）と同一であり、アク・ベシム遺跡こそがスイアブであることがここに証明された（内藤 1997: 151–158）。これ以後、アク・ベシム遺跡＝スイアブ説は確定した。

11）後述の『旧唐書』を含むこれらの同時代史料の他に、賈耽（730–805）の『皇華四達記』（『新唐書』地理志七下所引）にもチュー渓谷の諸都市の配置に関する以下の記述がある。

「熱海（イシク・クル湖）から 40 里で凍城に至る。谷を出て碎葉川（チュー渓谷）口に至り、80 里で裴羅将軍城（バラサグン）に至る。また西に 20 里ゆくと碎葉城（スイアブ）に至る。城の北には碎葉水（チュー川）があり、水北 40 里には羯丹山があり、十姓（西突厥）可汗はいつもここに君長を擁立している。碎葉から西へ 40 里ゆくと米国城（ケン・ブルン）に至る。また 30 里ゆくと新城（ナヴィカト／クラスナヤ・レーチカ）に至る。」（訳は松田 1963: 18 及

び柿沼 2019: 52 を参照。括弧内は筆者加筆。）

また、751 年にタラス河畔の戦いで捕虜となった杜環による記録『経行記』（杜佑の『通典』193 巻辺防 9 石国条本注所引）には、スイアブ以西の状況が以下の通り記されている。

「砕葉国は・・・また砕葉城がある。天宝 7（748）年に、北庭節度使の王正見が征伐し、城壁は砕き壊され、邑居は荒廃した。むかし交河公主が「居止」されたところで、大雲寺が建てられており、いまだ残存していた。砕葉川の西は石国［チャーチュ Čač ／タシュケント］と接し、だいたい距離は 1000 余里である。砕葉川沿い［チュー渓谷］には異姓の部落があり、異姓の突厥がおり、それぞれ兵馬数万を擁していた。城堡同士は密集し、日々干戈を交えている。およそ農業を営む者はみな甲冑を身にまとい、好き勝手に略奪しあって奴婢としていた。砕葉川［チュー渓谷］の西の端には怛邏斯［タラス］とよばれる城があり、石国人の鎮が置かれていた。これこそ天宝 10（751）年に高仙芝の軍が敗れた場所である。これより西海（カスピ海）までは、3 月から 9 月には雲もなく雨も降らず、みな雪水で農業を行っている。オオムギ、コムギ、コメ、エンドウマメ、サヤエンドウ（？）がよく採れる。ワイン、糜酒、ヨーグルトを飲む・・・。」（訳は柿沼 2019: 52 を参照。角括弧内は筆者加筆。）

9 世紀以降、イスラームの様々な地理歴史家・旅行家によっても、チュー渓谷に所在する中世都市に関する記録が度々残されている（Бернштам 1950: 7–10）。以下、ベルンシュタムの記述に従い、主要な著者とその記録年代、そして記録内容の概略について列挙する。

・アル＝フワーリズミー（al-Khuwārizmī）：9 世紀、ナヴィカトへの言及あり。

・イブン・フラダードビフ（Ibn Khurradadhbih）：9 世紀、チュー川左岸について報告あり。

・アル＝タバリ（al-Tabari）：9 ～ 10 世紀、ナヴィカトとスイアブへの言及あり（8 世紀の資料を引用か）。

・クダーマ（Kudāma）：9 ～ 10 世紀、チュー渓谷の都市間の道程について詳述（メルケからスイアブ以東まで）。

・アル＝ムカッダスィー（al-Muqaddasī）：10 世紀、チュー渓谷内に所在した都市のリストを示す（Collins 1994）。

・マフムード・アル＝カシュガリ（Mahmūd ibnu 'l-Hussayn ibn Muhammad al-Kāšǧarī）：11 世紀、バラサグンとスイアブに言及あり。

・イブン・アル＝サマアニ（Ibn al-Sam'ānī）：12 世紀、バラサグンの地理について言及あり。

・ラシード＝アッディーン（Rashīd al-Dīn）：14 世紀、タルサケントとカルバリクという 2 つの集落に言及あり。

・アル＝ウマリ（al-Umari）：14 世紀、モンゴル征服後の都市（バラサグンを含む）への言及あり。

・イブン・アラブシャー（Ibn 'Arabshah）：15 世紀、ティムール時代に復興された都市としてアスパラに言及あり。

・アル＝ジュルジャニ（al-Jurjani）：15 世紀、チュー渓谷とイシク・クル湖周辺の小集落にのみ言及あり。

12）近年の一連の発掘調査により、唐による砕葉城は現在のアク・ベシム遺跡における第 2 シャフリスタンに比定されている（城倉他 2016, 2017, 2018; 帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所 2019, 2020, 2021 etc.）。過去の調査による比定については、前掲註 10 を参照のこと。

13）13 世紀以降のチュー渓谷の諸都市については、実際に言及が少なくなるようである（Бернштам 1950: 9）。15 世紀のアル＝ジュルジャニによる記録には、かつての都市が全く見出せず、これに代わって小集落のみが記されていることに鑑みれば、チュー渓谷における都市の大部分がこの時期までには廃絶されてしまったと考えるのが自然である。

14）ロシア人が入植した 19 世紀後半には、コーカンド・ハン国の要塞とその周辺にサルト人（＝ウズベク人）の集落が残されており、このうち主要なもの（約 1,000 戸）がピシュペク（現在のビシュケク）であった（バルトリド 2011b: 104–105）。なお、コーカンド・ハン国の要塞は、チュー渓谷を東西に貫く交易路の南側（山側）に集中していたことが示唆されている（バルトリド 2011b: 107）。

15）バルトリドによれば、トルキスタンにおける遊牧民の割合は、1867 年には 84% を記録したが、1875 年頃には 57%、1877 年には 47% と大幅に減少し、1917 年の革命直前の時期には 30% 程度まで落ち込んだらしい（バルトリド 2011b: 20）。

16）B. D. ガリャチェワによれば、サルィグはミーリャンファン（Milyanphan）に比定できるが、K. バイパコフ（K. Байпакову）はグロズネン（Groznen）に比定している（Горячева 2010: 49, Таблица 2）。

17）ペトロパヴロフカとコシュ・コルゴンからの出土遺物は、ペトロパヴロフカ集落内にある考古資料室に常設展示中である（第 IV 章 S011 参照）。

18）筆者も 2011 年度の研修には東京文化財研究所のメンバーとして参加している。なお、国際研修事業に先立つ 2011 年 6 月にチュー渓谷を視察したが、この時にはチュー渓谷西部にも訪れている。これは、研修計画当初にはチュー渓谷西部の諸遺跡を研修の題材とすることを想定していたからである。

III.　調査成果の概要

1. 登録遺跡の分類体系

本プロジェクトにおける遺跡分類体系は、5 つの大分類と 15 の小分類により構成される。94 件の各登録遺跡は、この分類体系のうちいずれかの項目に分類されることになる。なお、1 つの遺跡が複数の遺構を含む場合には、複数の項目に分類されることもしばしば生じる。このため、分類項目別の集計では、1 遺跡が複数回数えられることになるため、分類別集計全体の総計は、全登録遺跡数よりも必然的に多くなる。

以下では、各小分類の定義について簡潔に解説する。

【居住址（Settlement）】

居住地とそれに関連する防御施設を含む。

a. 都市（City）

大規模な遺丘とそれを取り囲む周壁を有する大型居住址である。チュー渓谷を含む中央アジアにおける 6 ～ 12 世紀頃の都市構造は概ね共通している（cf. ケンジアフメト 2009: 240; バルトリド 2011a: 79–83）。中心部には内城（シャフリスタン Shakhristan）が位置し、多くの場合、周囲地表面から数 m 高まった遺丘を成し、遺丘上面縁辺部には塔を伴う堅固な城壁が廻る。シャフリスタン内部、あるいはシャフリスタンの城壁上の一部には、周囲よりも顕著に高くなった城塞（シタデル Citadel）が存在する。シタデルには、都市の支配者が居住したと考えられている。シャフリスタンの周辺には、広大な外城（ラバト Rabat）が広がる。ラバトは、1 重または 2 重の長大な外周壁により外部とは隔絶された居住区となっている。

都市の規模は、シャフリスタンだけで 10 ha を超える。

b. 町（Town）

都市よりも規模が顕著に小さく、都市の構成要素（シャフリスタン、シタデル、ラバト）のいずれかを現状で欠く、中型居住址を指す。町にも規模の違いがあり、中核部（遺丘）の規模が概ね 6 ha 以上の面積を有するものを「大型」とし、4 ha 程度のものを「中型」に細分している。

c. 城塞（Fort）

方形の囲壁や小型の遺丘から成り、面積が 1 ha 未満の小型居住址である。都市や町の周辺の要衝や、見晴らしの利く丘上に位置することから、遺跡への居住とともに、大・中型居住址を防御する目的も有していたと考えられる。

d. 望楼（Watchtower）

方形遺構から成る小規模遺跡（面積 1,000 m^2 未満）である。しばしば四隅に塔を有する。都市や町の周縁に所在しており、防御目的の施設と考えられる。

【生活遺構（Domestic remain）】

日常生業に関わる痕跡である。

a. 建物遺構（Isolated building）

耕作地縁辺に多く分布する小型の矩形建物跡である。単独あるいは 2 ～ 3 棟がまとまって所在する。おそらくは農耕に関わる一時的な利用のために造られたのだろう。

b. 囲い込み遺構（Enclosure）

調査地域で多くみられた、土塁と周溝から成る遺構である。土塁・周溝の内側は平坦面であり、いかなる遺構も認められない。ほとんどが円形や不整円形を呈するが、稀に矩形のものも存在する。また、稀有な事例として、石造りの囲い込み遺構（S041）が 1 基ある。同遺構は、単独で存在する場合と、複数が近接して造られる場合がある。

機能の特定は現状では難しいが、おそらくは遊牧に強く関係した遺構と考えられる。

c. 逗留地（Encampment）

土塁と溝により区画された平坦面を伴う矩形遺構であ

る。本プロジェクトでは、1 件のみ（S038）がこれに該当する。遊牧民の逗留地と推定したが、機能は不明である。また、囲い込み遺構の中にも逗留地の痕跡が含まれる可能性もある。

【葬祭遺構（Funerary remain)】

埋葬や葬送儀礼に関連すると考えられる遺構から成る。

a. クルガン（Kurgan/Tumulus）

墳丘基部の直径が 15 m 以上、現況で高さ 2.0 m 以上が残る大型円墳であり、複数基がおおよそ南北 1 列に並ぶ。特に大型のものは直径 50 m を超える。N039 のみが現在単独で存在しているが、おそらくは農地開墾で他のクルガンが削平された結果であろう。こうした墳墓の築造は、鉄器時代前期に遡ると考えられる。

b. 墓地（Cemetery）

多数の墓から成る共同墓地と看做しえる遺跡である。墓は主として小規模な円墳から成り、直径 2.0 ～ 10 m、高さは 1.0 m 未満である。より大きな直径 10 m 程度の円墳から成る墓地ではせいぜい 5 ～ 10 基程度しか見られないが、より小さな円墳から成る墓地では、数十基の墓が認められた。

年代決定は難しいが、鉄器時代後期から近世にかけて築造されたと推定される。

c. 単独墓（Grave）

1 基あるいは 2 ～ 3 基のみで存在する墓である。多くは円形を呈し、墳丘部とこれを取り囲む土塁・周溝により構成される墓である。1 基は隅丸長方形（S029）、1 基は長円形（S038-2）の平面形を呈していた。円墳の場合、基部の直径は常に 15 m 未満に収まり、直径 10 m 程度のものが主体を占める。

d. 追悼遺構（Memorial enclosure）

外側に土塁、内側に周溝が廻る方形の小型遺構である。規模は様々であるが、1 辺 10 ～ 20 m が多い。周溝の内側には平坦面のみが見られる。本プロジェクトでは Zone I においてのみ当該遺構を確認しており、そのほとんどが小河川東岸に位置していた。遺構の構造や立地から、また、稀に採集できた土器の型式・年代から、モンゴル高原や南シベリア周辺に多く分布する、突厥の追悼遺構と同種の遺構と考えている（cf. 林 2005: 48–51）。

【遺物散布地（Artifact scatter)】

遺構を伴わず、遺物の散布のみが見られる遺跡である。

a. 土器散布地（Ceramic scatter）

土器片が主体的に散布する遺跡である。本プロジェクトでは N018 のみがこれに分類される。

b. 石器散布地（Lithic scatter）

石器が主体を占める遺物散布地であるが、本プロジェクトでは当該カテゴリーの遺跡は皆無である。

【その他遺構（Miscellaneous feature)】

上記 4 つの大分類のいずれにも該当しない遺跡をまとめた。

a. 複室遺構（Multi-room feature）

N033 においてのみ 2 基が認められた、不整矩形を呈する比較的大型の遺構である。内部は、溝よって複数の空間に区画されている。時期・機能ともに不明である。

b. 石列（Stone alignment）

本プロジェクトでは、S033 のみが確認された。粗い石積みによる、S 字形に彎曲する石列である。時期・機能ともに不明である。

2. 調査の成果

本プロジェクトにおいて登録した計 94 遺跡のうち 7 遺跡は、遠方からの観察の後、衛星画像上で確認・記録したクルガンである。また、94 遺跡のうち、4 遺跡はテレノジュキンにより、9 遺跡はコジェミャコによりかつて調査されており、2 遺跡では地元考古学者により発掘調査が行われた（表 3. 1）。

前述のとおり[1)]、様々な制約のため、調査地域全体を面的に網羅する悉皆踏査の実施は叶わなかった。しかしながら、調査方法の工夫により、耕作が及んでいない、あるいは、徹底した削平が行われていない現地表面において、近現代以前と考えられる地物の多くを効率的に記録でき、地域文化史を再構築するための有意義な遺跡データを得ることができた。このデータを用いて、以下では調査成果の概要を示したい。

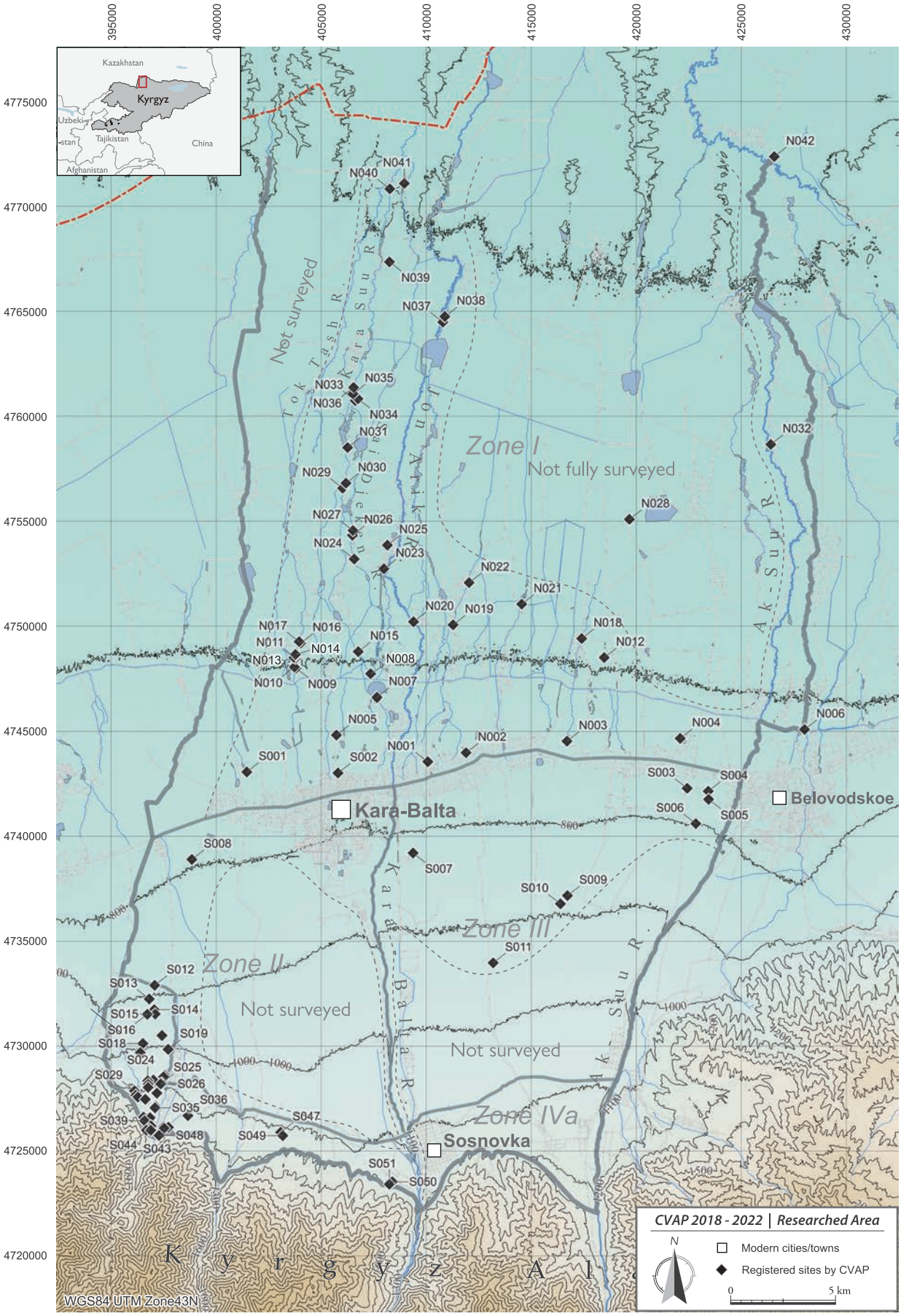
395000
400000
405000
410000
415000
420000
425000
430000
4775000
4770000
4765000
4760000
4755000
4750000
4745000
4740000
4735000
4730000
4725000
4720000
Kazakhstan
Kyrgyz
Uzbekistan
Tajikistan
China
Afghanistan
Not surveyed
Tok Tash R
Kara Suu R
Jon Arik
Zone I
Not fully surveyed
Ak-Suu R
Kara-Balta
Belovodskoe
Zone III
Zone II
Not surveyed
Not surveyed
Kara Balta R
Zone IVa
Sosnovka
Kyrgyz Al
CVAP 2018 - 2022 | Researched Area
Modern cities/towns
Registered sites by CVAP
0
5 km
N
WGS84 UTM Zone43N

図 3. 1　登録遺跡分布図

2. 1. 遺跡の分布傾向

まず、全体的な遺跡分布を見ると、Zone I 西部と Zone IVb に多くの遺跡が集中していることがわかる（図 3. 1–2）。もちろん、これは踏査密度の偏りを一義的には示しているが、仔細に観察すると一定の傾向を見出すことができる。Zone I 西部では無数の小河川が南から北に貫流しているが、このうち東寄りのジョン・アリク（Djon Arik）川は、南から流れてくる主要河川カラ・バルタ川の北延長部分に相当し、Zone I における主要河川である。それにもかかわらず、ジョン・アリク川流域において確認できた遺跡は、わずか 6 件にとどまる（図 3. 3）。さらに、この 6 件中には都市と町が含まれていない。他方で、ジョン・アリク川の西側を南北に流れるカラ・スウ（Kara-Suu）川岸では、15 件の遺跡を確認できただけでなく、これらには都市 1 件（N005 シス・トベ）と町 1 件（N040）が含まれている。また、カラ・スウ川の東西両側をそれぞれ流れるサイ・ジェケン（Sai-Djeken）川とトク・タシュ（Tok-Tash）川の流域には、都市や町は所在しないものの、ジョン・アリク川流域での件数を超える遺跡が位置している。以上の北西部における遺跡分布傾向の差は、おそらくはシス・トベに起因すると考えられる。シス・トベが所在するカラ・スウ川流域とその周辺では、当該都市が機能していた期間中は居住活動が活発であったため、ジョン・アリク川流域に比べて多様な遺跡が残されたのだろ

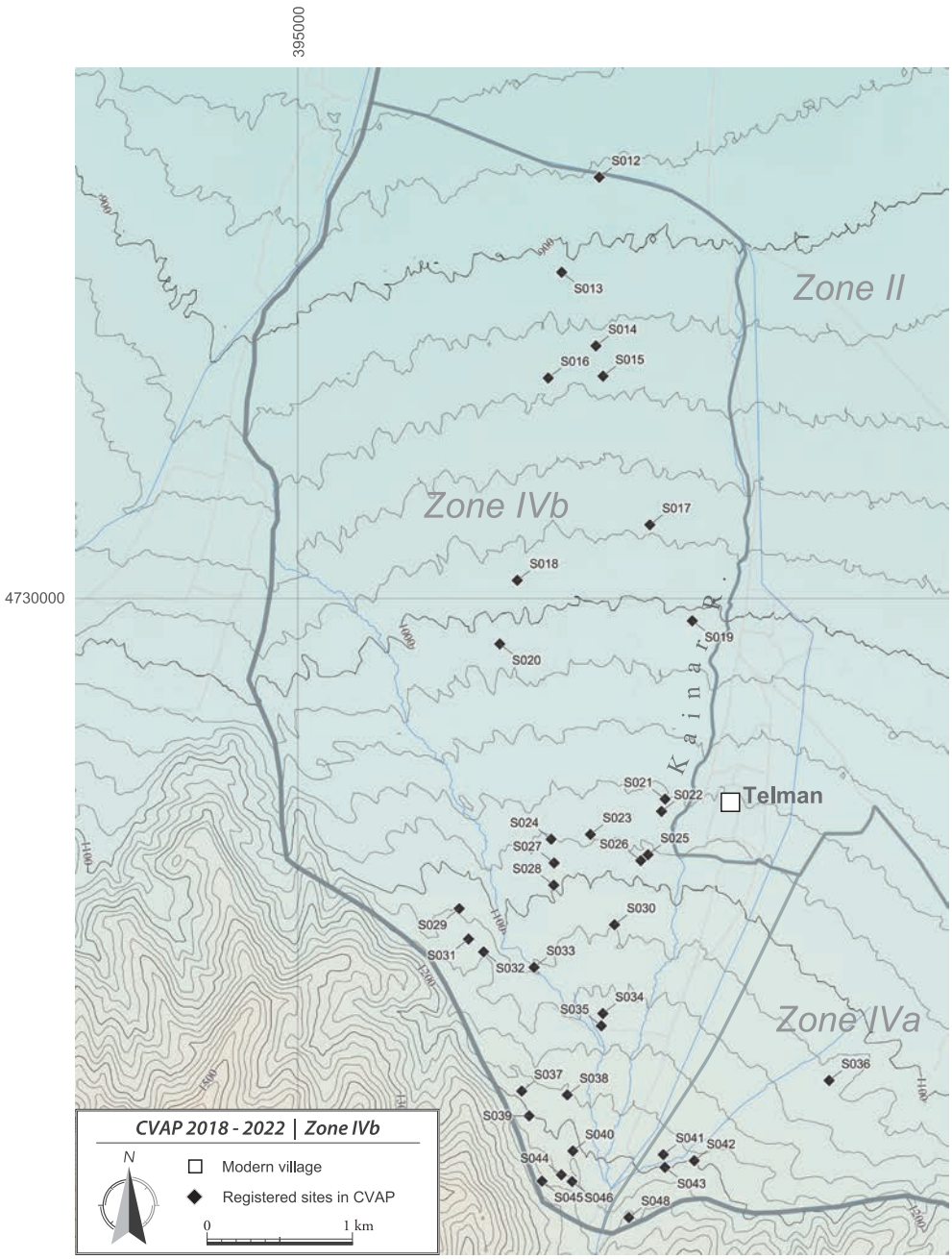

図 3. 2　登録遺跡分布図（Zone IVb）

表 3. 1　既調査遺跡一覧

Site No.	Site Name	Researched in 1929 by Тереножкин	Researched in 1954-1955 by Кожемяко
N001	Novo Nikolaevka	Тереножкин 20126: 59	Кожемяко 1959: 135-136
N002	Petropavlovka	-	Кожемяко 1959: 137
N003	Poltavka	-	Кожемяко 1959: 122-125
N004	Petrovka	-	Кожемяко 1959: 145-146
N005	Shish Tobe	-	Кожемяко 1959: 79-84
N006	Belovodskoe Krepost	-	Кожемяко 1959: 97-99
N021	Komintern	-	Кожемяко 1959: 137
N032	Ak-Tobe Sretenskoe	-	Кожемяко 1959: 99-102
N042	Ak-Tobe Tolekskoe	-	Кожемяко 1959: 118-122
S003	Petrovka 4	Тереножкин 20126: 62–63	-
S004	Petrovka 3	Тереножкин 20126: 62	-
S005	Petrovka 1	Тереножкин 20126: 62	-
S006	Kara-Balta	Тереножкин 20126: 58	-

う。

Zone IVb にも遺跡の集中が見られる（図 3. 2）が、これは同地域が大規模な農地開拓を受けておらず、小渓谷と小規模な段丘面が連続するかつての地勢を保存していることに起因する。実際、Zone IVb の北方、Zone II 西部には平坦に削平された農地が広がっており、クルガンと近現代の廃墟を除いて、遺跡を確認できなかった。加えて、同地はキルギス山脈北麓に位置しており、飲用水が豊富に流れて牧草地も卓越することから、遊牧に大変好ましい。このため、主に遊牧民により、歴史的に盛んに利用されてきたことが容易に推測される。

2. 2. 遺跡種類の出現傾向

次に、遺構種類別の遺跡数について概観する（図3. 4）。調査地域全体で、葬祭遺構は 43 遺跡（全体の 41.0%）において確認されており、遺跡分類中で最多を占める。

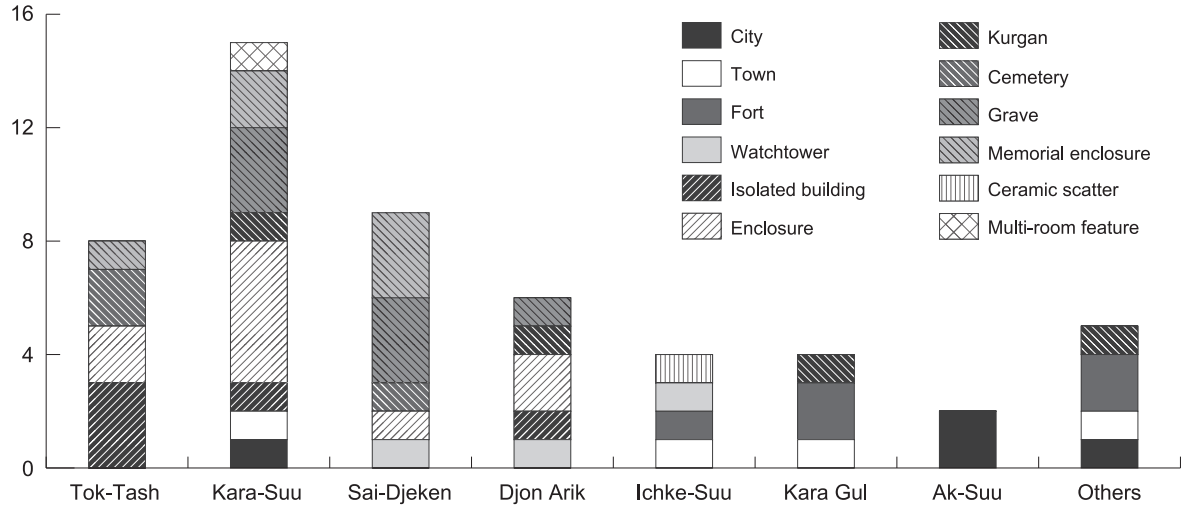

図 3. 3　小河川流域別分布遺跡数

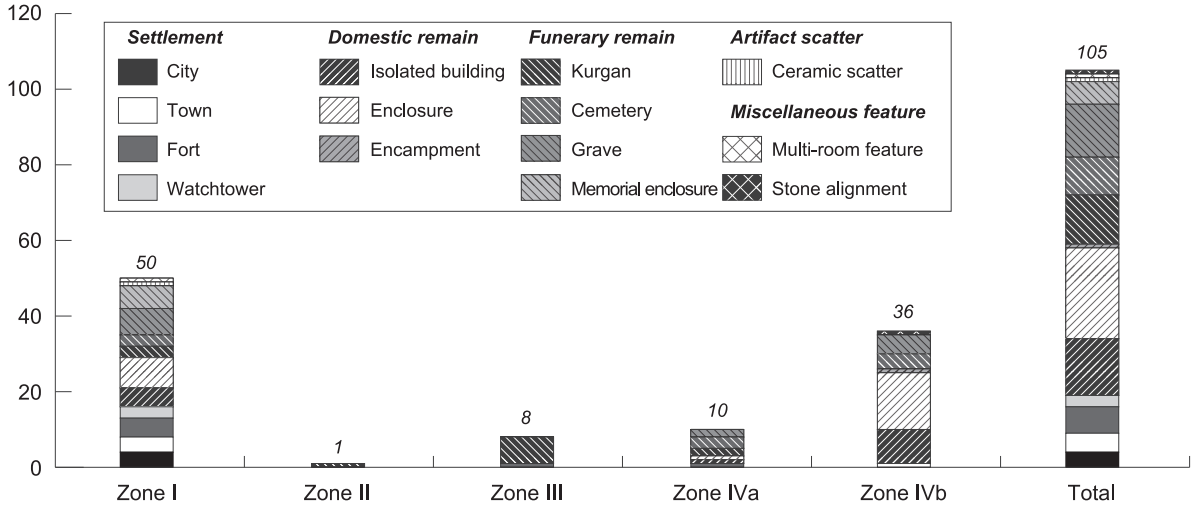

図 3. 4　遺構種類別出現傾向

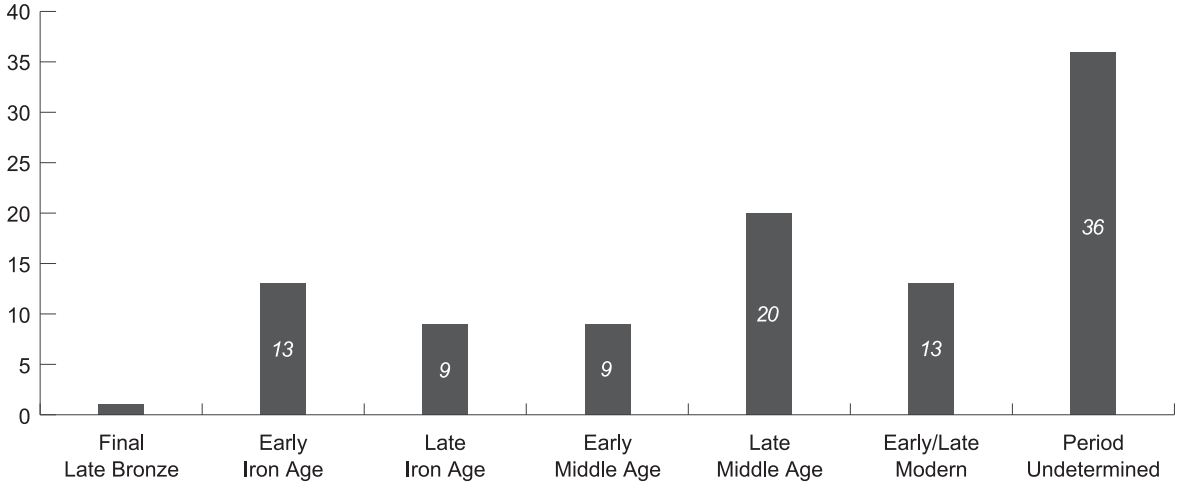

図 3. 5　時期別遺跡数

表 3. 2　時期別・種類別遺跡数一覧

Category	Type	Final LB	Early IA	Late IA	Early Mid	Late Mid	Early/Late Modern	UD	Total
Settlement	City	0	0	0	3	4	1*	0	***4***
	Town	0	0	0	0	5	0	0	***5***
	Fort	0	0	0	0	6	0	1	***7***
	Watchtower	0	0	0	0	3	0	0	***3***
Domestic remain	Isolated building	0	0	0	0	0	9	6	***15***
	Enclosure	0	0	0	0	0	0	26	***26***
	Encampment	0	0	0	0	0	0	1	***1***
Funerary remain	Kurgan	0	13	0	0	0	0	0	***13***
	Cemetery	0	0	7	0	2	3	0	***10***
	Grave	0	0	2	0	0	0	12	***14***
	Memorial enclosure	0	0	0	6	0	0	0	***6***
Artifact scatter	Ceramic scatter	1	0	0	0	0	0	0	***1***
Miscellaneous feature	Multi-roomed remain	0	0	0	0	0	0	1	***1***
	Stone alignment	0	0	0	0	0	0	1	***1***

* これはベロヴォドスコエ・クレポストであるが、近世・近代は都市ではなく小村落である。

なかでもクルガンは、その規模の大きさと存在感において圧倒的であり、Zones II・III を中心に、Zone IVb を除く調査地域全域にわたって広域に分布していることがわかる。他方、墓地と単独墓は Zones I・IV にのみ分布する。追悼遺構は数が少ないものの、Zone I においてのみ認められた。

葬祭遺構に次いで多い生活遺構（40 件、全体の 37.1%）は Zone IVb にその多くが分布しており（25 件）、同地区全体の 69.4% を占める。Zone I の生活遺構（13 件）は Zone IVb に次ぐ多さであるものの、同地区全体の 26% を占めるにとどまる。その面積の狭隘さと相俟って、Zone IVb における生活遺構の密集状況は明らかである。なお、生活遺構に分類した囲い込み遺構と建物遺構の間には、分布傾向の差異は認められない。

居住址は、そのほとんど全て（19 遺跡中 16 遺跡）が Zone I に集中する。Zone I 以外では、Zones III・IVa にそれぞれ 1 件の城塞（S011 及び S051）が、Zone IVb に中型の町 1 件（S026）が認められた。居住址の多くは、6 世紀にソグド人により建設され、12 世紀にかけて発達した都市システムに由来すると考えられる。

上記の他に確認した、土器散布地とその他遺構は件数が極めて僅少であり、分布傾向の把握が難しい。

2. 3. 時期別遺跡数

最後に、時期別遺跡数の変遷について概略を述べておきたい。考古学踏査による遺跡の時期決定は、一般的に表採遺物に依ることが多い。ところが、本プロジェクトの調査対象地域では、遺物は都市・町に分類される居住址においてのみ表採可能であり、耕作活動による地下土層からの巻き上げ等のため偶然採集できた数例を除け

ば、小規模遺跡における表採遺物は皆無であった。このため、遺跡・遺構自体の構造、遺跡の立地、遺構同士の先後関係、また、当地の歴史的背景や先行調査に基づいて、確認した遺跡・遺構の時期を推定するよる他なかった。

これまでの調査研究から[2)]、調査対象地域の利用は鉄器時代（前 8 ～後 5 世紀頃）と中世（後 6 ～ 14 世紀頃）に最も盛んであったことが判明しており、多くの遺跡がいずれかの時期に位置づけられる（図 3. 5）。鉄器時代以前に位置づけられる遺跡は、おそらくは後期青銅器時代末（前 10 ～前 9 世紀頃）の所産と考えられる 1 件のみである。鉄器時代の遺跡は、22 件のクルガンと円墳群から成る。その規模から判断して、クルガンを鉄器時代前期、円墳群を鉄器時代後期の所産と看做せる。中世の遺跡は主として居住址から成り、最大で計 26 件を数える。このうち中世前期（6 ～ 8 世紀）の所産は 9 件であり、6 遺跡の追悼遺構を含んでいる。中世後期（9 ～ 14 世紀）と考えられる遺跡は 20 件あり、やはりそのほとんどが居住址に分類される。近世・近代（15 ～ 19 世紀）には、本プロジェクトにおいて記録した遺跡は 13 件にとどまる。しかし、特に 19 世紀頃に位置づけられうる比較的新しい時期の建物遺構を、Zone I 及び Zone IVb の踏査中に数多く確認しているので、実数はこれよりもかなり多くなるだろう。上記の他、年代不明な遺跡が 36 件存在する。これらは、囲い込み遺構、小規模な建物遺構、そしてその他遺構に分類した各種遺跡から成る。

註

1）本書第 I 章第 2 節「調査の方法」を参照。

2）本書第 II 章第 2 節参照。

IV.　登録遺跡一覧

1. 概要

本章では、チュー渓谷西部の考古学踏査において確認・登録した各遺跡について、その概要を記述する。

各遺跡には、N あるいは S と、その後に続く 3 桁の数字から成る「遺跡番号」を割り当てている。かつての東西交易路沿いに所在したと考えられる都市・大型町のうち、シャフリスタンが最も南に位置しているノヴァ・ニコラエフカ（N001）を起点として、これより北に位置する遺跡には N から始まる番号（N 番号）、これよりも南に位置する遺跡には S から始まる番号（S 番号）を付した。続く 3 桁の番号は、N 番号では南から北へ、S 番号では北から南へ、起点座標からの各遺跡の緯度座標の距離に応じて規則的に割り振られている。「遺跡番号」の後には、遺跡名がある場合には記入した。

「遺跡番号」に続く「登録番号」は、現地踏査時に便宜的に付した遺跡の番号である。遺跡データの管理は、この番号に基づいている。また、「調査日」は実際に現地を訪れた年月日を示す。

遺跡の座標は、現地にて GNSS 受信機を用いて取得した座標値から算出した。WGS84 による経度緯度座標とともに、これを変換した UTM 座標（UTM zone 43N）も示した。標高値もまた、現地踏査時に取得した数値である。

「規模」は、現地踏査による所見に基づいて、QGIS あるいは Google Earth 上で測定した遺跡の面積を示している。都市・町の場合、かつて存在した外周壁は現在ではほぼすべて失われているため、シャフリスタンの面積のみを計測した。

「種別」は、第 III 章において示した遺跡分類体系に則った遺跡の種類を表している。左側に大分類、右側に小分類を示した。

採集遺物がある場合には、遺物の種類と数を明記している。

遺跡の「推定時期」は、本プロジェクトによる所見を過去の調査研究成果に照らし合わせた結果を示している。なお、本プロジェクトでは発掘調査を実施していないため、今後の調査の進展により、推定時期が覆る可能性は十分に考えられる。

「概要」では、遺跡の立地や規模、遺跡を構成する遺構の寸法や形態的特徴等について記述し、時期や機能の判定根拠となる基本情報を示した。なお、都市や町に分類される N001・003・005・006・021・032・042 についてはコジェミャコによる報告（Кожемяко 1959）が既刊であるため、これに依拠して遺跡情報を記述し、遺跡の現況を適宜付け加えた。

なお、7 件のクルガン（N023・N039・S003・S004・S005・S006・S009）は現地踏査時に遠方から確認しており、実際に当該地点に赴いたわけではない。後日、上記のクルガンに関するデータを衛星画像により取得し、これに基づいて各記述を行った。

2. 北半部の登録遺跡

N001 ノヴァ・ニコラエフカ（Novo Nikolaevka）
登録番号：CV18009
調査日：2018.10.01
WGS84：73.89963 E; 42.839272 N
UTM zone 43N：410077.071 m E; 4743553.044 m N
規模：64,629 m^2
標高：755 m
種別：居住址／町（大型）
採集遺物：土器片 5 点（胴部片を除く）
推定時期：9 ～ 12 世紀
概要：本遺跡はカラ・バルタとビシュケクを結ぶ東西幹線道路の約 750 m 北、シス・トベの南シャフリスタンの約 3.8 km 東の、小河川西岸の段丘面上平坦地に位置する（図 4. 1–2）。なお、遺跡の 0.5 ～ 1.0 km 西には、シス・トベの外郭壁東辺が存在したと考えられるが、現存しない（図 4. 11）。現況では、周囲を住宅地に囲まれて

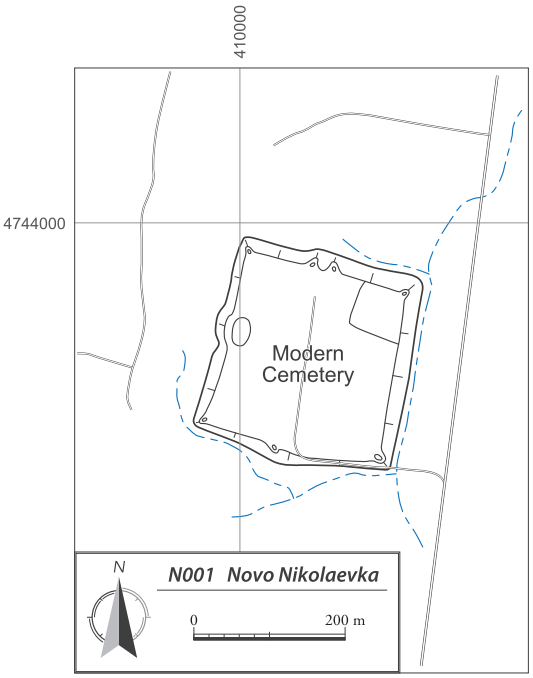

図 4. 1　ノヴァ・ニコラエフカ（N001）平面図

おり遺跡上の平坦面は墓地として利用されている。このため遺跡表面の状況把握が極めて難しかったので、以下では、遺跡の詳述はコジェミャコによる 1959 年の報告に依拠し、これに現況を加味する。

遺跡はその基部で、東西約 260 m、南北約 270 m のほぼ平面正方形、周囲地表面より約 7.0 m 高い断面台形の遺丘を呈している。踏査時には確認できなかったが、1954 年の踏査時には遺丘上縁辺に高さ 1.0 ～ 1.5 m の城壁が残存しており、遺丘上四隅と城壁上には等間隔に塔が配置されていた（Кожемяко 1959: 136）。また、西城壁中央に円形のシタデルが認められ、基部の直径は約 50 m を測る（Кожемяко 1959: 136）。北城壁と南城壁の中央には大型の塔状遺構から成る城門の痕跡が認められ、城門間には遺跡を縦断する目抜き通りの痕跡が残る。これらの城門の他に、北西隅や北東辺に小規模な出入口が存在したようである（Кожемяко 1959: 136）。

城壁内北東隅には大きな窪地が存在し、その最深部は周辺地表面と同じ標高に達する。コジェミャコはこの窪地を「中庭（Courtyard）」と呼称しているが、機能は不明である。なお、この「中庭」に面する北城壁及び東城壁にはそれぞれ小規模な出入口が認められた（Кожемяко 1959: 136）。また、遺跡の南東部には高まりが確認された。遺跡内では、褐色彩文を伴う白釉皿・鉢、狭い頸と屈曲する環状把手を有する水差し、中央に複弁ロゼット形の把手を有する蓋等、カラハン朝時代の特徴を示す土器類が採集された（Кожемяко 1959: 136）。

図 4. 2　ノヴァ・ニコラエフカ（N001）全景（南東から）

1954 年当時、ノヴァ・ニコラエフカの台形遺丘の周辺には、かなり破壊を受けてはいたものの、居住址と思しき小丘が多数認められたようである（Кожемяко 1959: 136）。これらの小丘が約 1.0 km 北の範囲にまで認められたことから、本来の遺跡範囲はかなり広大であった可能性がある。こうした小丘は現存しない。

先行調査：Тереножкин 2012б: 59; Кожемяко 1959: 136

N002 ペトロパヴロフカ（Petropavlovka）

登録番号：CV19015

調査日：2019.10.05

WGS84：73.921844 E; 42.843353 N

UTM zone 43N：411898.005 m E; 4743983.327 m N

規模：4,821 m^2

標高：746 m

種別：居住址／要塞

採集遺物：土器片 8 点、瓦片 1 点

推定時期：10 ～ 12 世紀

概要：本遺跡は東西幹線道路の 550 m 北、ノヴァ・ニコラエフカの 1.8 km 東の、小河川合流部の南に広がる狭い平坦地に位置する。1954 年にコジェミャコにより既調査の遺跡である（Кожемяко 1959: 137）。1970 年代にも地元の考古学者により発掘調査が行われ、現在、出土資料はペトロパヴロフカ集落内に所在する資料室に展示中である。この発掘調査の報告書は刊行されていない。遺跡は、少なくとも高さ 5.0 m の小丘状を成し、東西約 65 m、南北約 75 m のほぼ長方形の平面を呈している（図 4. 3）。この遺丘の周囲には、幅が一定しない浅い溝が廻るが、南東隅のみ溝が途切れ、高まりが見られる。平坦面を成す丘上は現在墓地として利用されており、いかなる遺構も確認できなかったが、周辺には焼成レンガが散布していた。

図 4. 3　ペトロパヴロフカ（N002）空撮全景（南から）

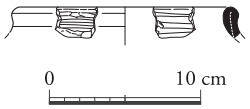

図 4. 4　ペトロパヴロフカ（N002）採集土器

図 4. 5　ペトロパヴロフカ（N002）採集瓦写真

Fig. no.	Site no.	Form/Type	Period (Century)	Quality	Rim diam. (mm)	Interior	Exterior	Core	Slip/Wash	Inclusion	Surface treatment (int.)	Surface treatment (ext.)	Comparable materials
4. 4	N002	Short-necked jar	Kara Khanid (Late 11th - Early 12th)	Medium	ca. 150	Orange (5YR7/6)	Orange (2.5YR6/6)	Orange (2.5YR6/8)	-	Large quantities of red grit 0.5-1.5 mm in diam. and mica, small quantities of quartz 0.5-1.0 mm in diam.	Rough horizontal smoothing	Horizontal smoothing	帝京大学文化財研究所他 2020: Fig. 4. 54: 15-19-042

遺物については、少量の土器片と（丸）瓦片 1 点を採集した（図 4. 4–5）。瓦は淡橙色を帯びており、酸化焔焼成されたと考えられる。瓦の凸面・凹面は縦方向のヘラナデにより調整される。端面をケズリ落として仕上げており、いかなる装飾も施されない。

周囲の遺跡分布状況等に鑑みて、本遺跡はカラハン朝時代の小居住址の 1 つと推測される。これは、コジェミャコにより提示された遺跡の時期（10 ～ 12 世紀）と一致する。

なお、コジェミャコによれば、本遺跡の 0.7 ～ 0.9 km 北東にもう 1 つの長方形遺構（東西約 25 m、南北約 65 m）が存在した。1954 年においても、同遺構は酷く壊されており、現在ではもはや存在しない。

先行調査：Кожемяко 1959: 137

N003 パルタフカ（Poltavka）

登録番号：CV18007

調査日：2018.09.29

WGS84：73.980529 E; 42.848856 N

UTM zone 43N：416701.223 m E; 4744534.073 m N

規模：65,521 m^2

標高：738 m

種別：居住址／町（大型）

採集遺物：なし

図 4. 6　パルタフカ（N003）平面図（Кожемяко 1959: Рис. 29 を改変し作成）

図 4. 7　パルタフカ（N003）遠景（南西から）

推定時期：9 ～ 12 世紀

概要：本遺跡はカラ・バルタとビシュケクを結ぶ東西幹線道路の約 580 m 北、ペトロフカ（Petrovka）集落とパルタフカ集落の間を南北に流れる小河川間の段丘上に位置する（図 4. 6–7）。1954 年にコジェミャコにより調査が行われているため、以下の記述は既刊報告（Кожемяко 1959: 122–125）に依拠する。

遺跡は平面不整形の丘状を呈し、その基部で東西最大約 230 m、南北約 440 m を測る。遺丘（シャフリスタン）自体を取り囲むような城壁は確認されていない。遺丘のほぼ中央の狭隘な箇所には直径約 50 m、高さ約 4.0 m の小型円丘が認められ、シタデルと看做されている（Кожемяко 1959: 123）。なお、シタデルとは別に南東部と南西部にもシタデルと同程度の高さの小丘が存在した。

遺丘の南側 1.0 km まで、また、東のペトロフカ集落の北縁・西縁の範囲まで小丘が点在しており、また、遺丘周囲には城壁が存在したようであるが、これらは集団農場の建設の折、1952 年に削平されてしまった（Кожемяко 1959: 123–124）。コジェミャコが現地調査を行った 1954 年には、遺丘の 1.5 ～ 2.0 km 東、ペトロフカ集落のすぐ東において、南北長 800 m にわたる城壁の一部がかろうじて残存していた。おそらくは、遺丘の北方・南方 1.5 ～ 2.0 km の箇所にも、元来は城壁が廻っていたと考えられる。この場合、城壁の総長は 10 km にも及ぶ。

コジェミャコは、本遺跡の 3 地点において試掘調査を実施した（Кожемяко 1959: 124–125）。遺丘上南西部の小丘上に設けられた試掘トレンチ 1（8.0 m^2）では、厚さ 3.0 m にも及ぶ文化層を検出した。土器が大量に出土し、褐色・黒色彩文を有する白釉陶器や緑釉陶器が含まれた。また、ガラス製品の破片も、上層において出土した。試掘トレンチ 2（8.0 m^2）は試掘トレンチ 1 の 500 m 南の、高さ 0.8 m、直径 10 m の小丘上に設定された。このトレンチにおいて検出された文化層は厚さ 1.95 m に及び、灰層も伴っていたが、出土土器数は僅少であった。出土土器の中には、試掘トレンチ 1 から出土したものと同様のロクロ成形の供膳具が認められた。試掘トレンチ 3（8.0 m^2）は、遺丘南の独立丘上に設定され、厚さ 2.0 m の文化層堆積が検出された。深さ 1.0 ～ 2.0 m では、南北に走るパフサ（練土）製の壁体が試掘トレンチ全体で認められた。出土土器は試掘トレンチ 1 と同様であった。上記試掘トレンチの出土土器から、パルタフカの利用年代は 9 ～ 12 世紀とみられており、それ以前の時期（6 ～ 8 世紀）の利用痕跡は確認されていない。

先行調査：Кожемяко 1959: 122–125

N004 ペトロフカ（Petrovka）

登録番号：CV19016

調査日：2019.10.05

WGS84：74.046486 E; 42.850603 N

UTM zone 43N：422092.348 m E; 4744665.607 m N

規模：41,102 m^2

標高：730 m

種別：居住址／町（中型）

採集遺物：土器片 31 点

推定時期：9 ～ 12 世紀

概要：本遺跡は、ベロヴォドスコエ・クレポスト（N006）の約 6.0 km 西、小河川間の段丘上に位置する（図 4. 8–9）。遺跡は、不整多角形の遺丘（東西約 165 m、南

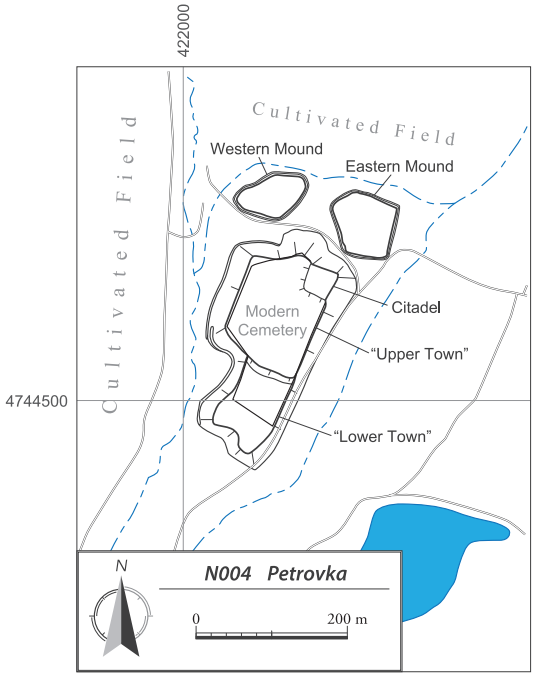

図 4. 8　ペトロフカ（N004）平面図

北約 295 m）と北に隣接する 2 つの低丘から成る。2019 年現在、いずれの遺構も墓地として利用されている。1954 年にはコジェミャコが踏査しており、短報がある（Кожемяко 1959: 145–146）。以下の記述では、コジェミャコの報告も参照した。

遺丘（シャフリスタン）は、北半の「上の町」と南半の「下の町」に分かれる。「上の町」は矩形を呈しており、その上面では東西約 105 m、南北約 130 m を測り、周囲より約 6.0 m 高い。縁辺には明確な城壁は見られない。北東隅には直径約 50 m、高さ 1.5 m の台状の高まりが見られ、シタデルと考えられる。また、南西隅にもやや小さい高まり（直径約 40 m、高さ 1.5 m）がある。北辺中央部が北に突出することから、主たる城門はこの場所に位置した

図 4. 9　ペトロフカ（N004）シャフリスタン空撮全景（北から）

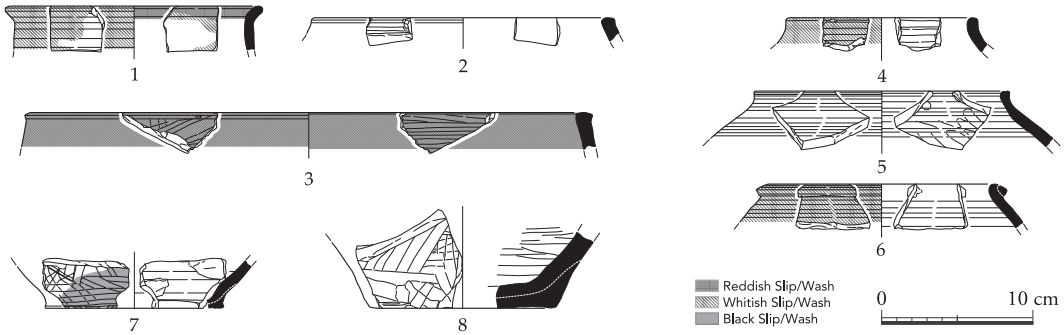

図 4. 10　ペトロフカ（N004）採集土器

Fig. no.	Site no.	Form/Type	Period (Century)	Quality	Rim diam. (mm)	Interior	Exterior	Core	Slip/Wash	Inclusion	Surface treatment (int.)	Surface treatment (ext.)	Comparable materials
4.10:1	N004	Bowl?	Kara Khanid	Medium	ca. 170	Reddish brown (5YR4/6)	Reddish brown (2.5YR4/6)	Reddish brown (2.5YR4/6)	Trace of white wash (orange: 5YR7/6) on ext., orange wash (Orange: 2.5YR6/8) on int. rim, and traces of white wash (Light yellow orange: 7.5YR8/4) on int. body.	Large quantities of gray/black grit 0.5-2.0 mm in length, some chaff fragments, smal quantities of calcite 0.5-1.0 mm in diam.	Wheel smoothing (partially abraded)	Wheel smoothing	
4.10:2	N004	Bowl?	Kara Khanid (Late 11th - Early 12th)	Medium	UD	Orange (5YR6/6)	Orange (5YR6/6)	Dull orange (5YR6/4)	-	Large quantities of blackened red grit 0.5-1.0 mm in diam. and mica, small quantities of calcite 0.5-1.0 mm in length.	Heavily abraded (horizontal smoothing?)	Horizontal smoothing	帝京大学文化財研究所他 2020: Fig. 4. 53: 15-19-033
4.10:3	N004	Large bowl	Kara Khanid	Medium	375	Orange (2.5YR6/8)	Orange (2.5YR6/8)	Orange (2.5YR6/6)	Red wash (Reddish brown: 2.5YR4/8) on both sides.	Large quantities of red grit 0.5-2.5 mm in length and mica.	Horizontal smoothing	Right diagonal smoothing on vertical smoothing	
4.10:4	N004	Short-necked jar	Kara Khanid (Late 11th - Early 12th)	Coarse to medium	127	Orange (5YR6/6)	Orange (5YR6/6)	Bright reddish brown (2.5YR5/6)	White wash (Dull yellow orange: 10YR7/4) on ext.	Large quantities of reddish grit 1.0-2.5 mm in length, very small quantities of calcite 0.5-1.0 mm in diam.	Horizontal smoothing	Horizontal smoothing	帝京大学文化財研究所他 2020: Fig. 4. 54: 15-19-042
4.10:5	N004	Short-necked jar	Kara Khanid (Late 11th - Early 12th)	Medium to fine	168	Orange (2.5YR6/6)	Orange (2.5YR6/6)	Orange (2.5YR6/6)	Self washed on ext?	Large quantities of red grit 1.0 mm in diam. and mica.	Left diagonal smoothing on rough wheel smoothing	Rough wheel smoothing	帝京大学文化財研究所他 2020: Fig. 4. 54: 15-19-043
4.10:6	N004	Holemouth jar	Kara Khanid	Medium	165.5	Bright reddish brown (5YR5/6)	Bright reddish brown (5YR5/6)	Dark reddish brown (5YR3/4)	White wash (Dull orange: 7.5YR7/4) on ext.	Large quantities of sand grit 1.0-3.0 mm in diam., small quantities of calcite 0.5-1.5 mm in length.	Wheel smoothing	Wheel smoothing	
4.10:7	N004	Flat base (jar)	UD	Medium to fine	118	Orange (5YR7/6)	Dull orange (7.5YR7/4)	Orange (5YR6/6)	Soot marks on ext.	Large quantities of black grit 0.5-1.0 mm in diam. and mica, some calcite less than 0.5 mm in diam.	Wheel smoothing	Horizontal smoothing on diagonal smoothing	
4.10:8	N004	Flat base (jar)	UD	Medium	122	Orange (5YR6/6)	Orange (5YR7/6)	Dull orange (7.5YR5/4)	-	Large quantities of sand grit 0.5-2.0 mm in diam. and mica, small quantities of calcite/quartz 0.5-1.0 mm in diam.	Horizontal smoothing on wheel marks	Horizontal and diagonal smoothing on diagonal scraping.	

と考えられる。「下の町」は、上面が東西約 70 m、南北約 120 m を測り、北辺が「上の町」に接続し、東辺は「上の町」の東辺の南延長線上にある。周囲との比高差は、3.0 m を超えない。上面は、南方に傾斜する緩斜面を成す。遺丘の基部北西辺から西辺にかけて、西側の河川沿いの湿地帯に面するかたちで長い外堤が築かれている。

遺丘の北には、2 つの低丘が東西に並ぶ。東の丘は、東西約 87 m、南北約 85 m の不整円形を呈する。西の丘は、東西約 78 m、南北約 56 m の長円形を呈する。いずれも外周の内側に周溝、その外側に土塁が廻る。

遺丘の北辺・西辺基部中央と東の丘では、土器片が多く散布していた。採集土器は概ねカラハン朝時代の所産と考えられる（図 4. 10）。

先行調査：Кожемяко 1959: 145–146

N005 シス・トベ／ヌジケト（Shish Tobe/Nuzket）

登録番号：CV18001

調査日：2018.09.26

WGS84：73.846175 E; 42.850179 N

UTM zone 43N：405725.648 m E; 4744823.739 m N

規模：358,627 m^2（シャフリスタン）

標高：737 m

種別：居住址／都市

採集遺物：土器片 8 点（胴部片を除く）

推定時期：6 ～ 12 世紀

概要：本遺跡はカラ・バルタ市街地北部に一部重複する、本プロジェクト調査対象地域内で最大の都市遺跡である（図 4. 11–12）。遺跡内には、複数の小河川が南から北へ貫流している。遺跡は、ほぼ中央に位置するシャフリスタン、内郭、外郭から成る。1954 年にコジェミャコにより調査が行われているため、以下では、コジェミャコによる報告（Кожемяко 1959: 79–84）に依拠して同遺跡につ

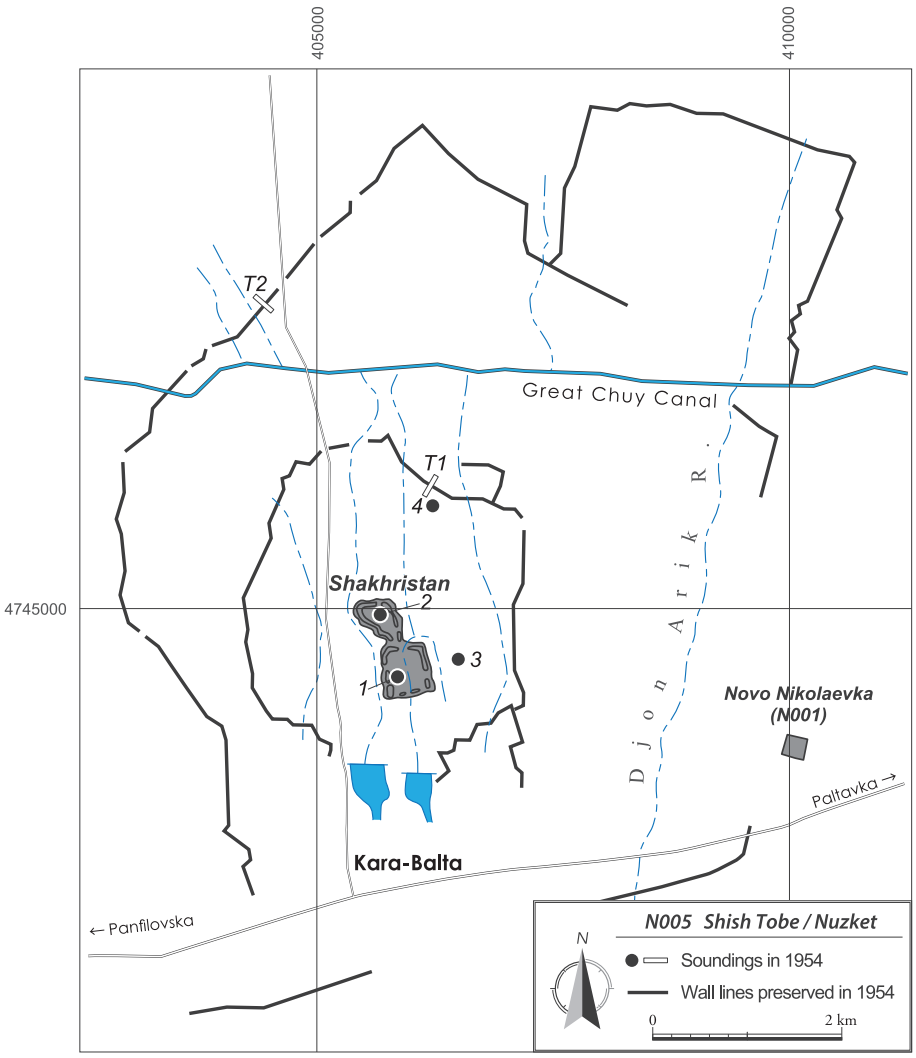

図 4. 11　シス・トベ／ヌジケト（N005）平面図（Кожемяко 1959: Рис. 5 を改変し作成）

図 4. 12　シス・トベ／ヌジケト（N005）シャフリスタン空撮全景（南から）

いて詳述する。

小河川東岸に位置するシャフリスタンは最大で、東西約 750 m、南北約 1.0 km を測り、、2 つの部分から成る。北西シャフリスタン（東西約 410 m、南北約 500 m）は周囲よりも数 m 高い不整多角形を呈し、周囲を浅い谷で囲まれている。元来は外周を城壁が廻っていたようであるが、本踏査時には現地表面での確認が難しかった。コジェミャコにより複数の城門が認められており、特に北辺中央の城門は大きく、最も標高が高い場所にある建物に通じていたという。遺丘の形成年代は 3 段階に分かれると考えられ、いずれの段階も南東シャフリスタンよりも新しい（Кожемяко 1959: 81）。現況では、北東部分に直径約 150 m の穴が穿たれており、廃棄物の遺棄場として利用されている。

南東シャフリスタンは、城壁により平行四辺形（東西約 480 m、南北約 480 m）に囲まれている。城壁には、南壁上で 5 ヶ所、西壁上で 2 ヶ所、北壁上で 2 ヶ所、東壁上で 2 ヶ所の塔状遺構がコジェミャコにより記録された（Кожемяко 1959: 80）。他よりも大規模な塔状遺構が見られることから、城門は東壁にあったと考えられている。なお、西壁は小河川流路に面することから、残存状態が良好ではない。城壁内部は東側の標高が低い。現状では、南東シャフリスタンの北東部分は溜池状になり、南西部分は主に墓地として利用されている。南東シャフリスタンの南西隅には円丘状の高まり（東西約 100 m、南北約 120 m）が見られ、シタデルと考えられている。南東シャフリスタンの北壁には、幅約 130 m にわたり北西シャフリスタンが接続している。南東シャフリスタンの建設時期は、北西シャフリスタンよりも古いと考えられている（Кожемяко 1959: 81）。

シャフリスタンの周囲には、総長 12 km 以上の平面不整多角形の内郭壁が認められた。内郭壁の南辺は、1954 年に貯水池の建設のため長さ 1.0 km にわたり破壊されたが、他の部分もほとんどが今日までに削平されてしまい、現地表面でその痕跡を確認することはもはや難しい。在りし日の内郭壁は高さ 1.5 ～ 1.7 m まで残存し、その基部の幅が 10 ～ 12 m、頂部の幅が 3.0 m を測った（Кожемяко 1959: 81）。内郭壁上には、所々で塔の痕跡である小丘が見られた。内郭壁の両側には、幅 6.0 ～ 10 m、深さ 0.8 ～ 1.0 m の堀が切られていた。内郭壁内には、様々な規模の小丘が分布していた（Кожемяко 1959: 81）が、その大多数は破壊されてしまったと思われる。なお、内郭壁の南東辺・南西辺・北東辺の一部では、長さ約 1.0 km にわたり別の壁体が突出し、外郭の空間を区分していたとみられる（Кожемяко 1959: 82）。

外郭は、内郭壁から 0.5 ～ 3.0 km 外縁を廻る外郭壁（総

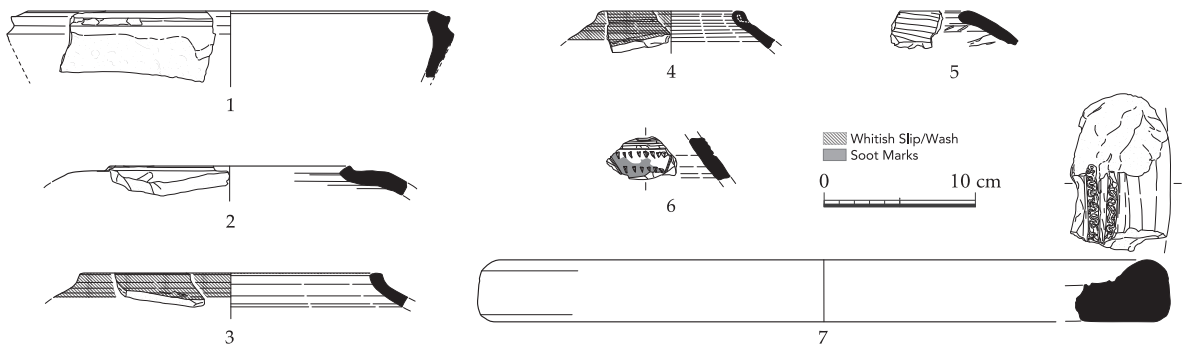

図 4. 13　シス・トベ／ヌジケト（N005）採集土器（北西シャフリスタン）

Fig. no.	Site no.	Form/Type	Period (Century)	Quality	Rim diam. (mm)	Interior	Exterior	Core	Slip/Wash	Inclusion	Surface treatment (int.)	Surface treatment (ext.)	Comparable materials
4.13:1	N005	Large bowl	Late 8th - Early 9th?	Medium	268	Bright reddish brown (2.5YR5/8)	Bright reddish brown (2.5YR5/8)	Dull reddish brown (5YR5/3)	-	Small quantities of black grit 0.5-1.0 mm in diam., several white grit 0.5-1.0 mm in diam.	Wheel smoothing (partially abraded)	Wheel smoothing (heavily abraded)	
4.13:2	N005	Short-necked jar	Kara Khanid (Late 8th - Early 9th?)	Coarse to medium	158	Orange (2.5YR6/6)	Dull orange (2.5YR6/4)	Dull orange (2.5YR6/4)	-	Large quantities of sand grit 0.5-2.0 mm in length.	Horizontal smoothing	Horizontal smoothing	帝京大学文化財研究所他 2021: Fig. 3. 74: 13-10-104, 105
4.13:3	N005	Short-necked jar	Kara Khanid (Late 11th - Early 12th)	Medium to fine	200	Orange (7.5YR7/6)	Orange (7.5YR7/6)	Dull orange (7.5YR7/4)	Pale white wash (Light yellow orange: 7.5YR8/3) on ext.	Large quantities of black/gray grit 0.5 mm in diam., small quantities of calcite 1.0-3.0 mm in diam.	Wheel smoothing	Wheel smoothing	帝京大学文化財研究所他 2020: Fig. 4. 54: 15-19-042
4.13:4	N005	Short-necked jar	Kara Khanid	Medium	94	Dull orange (5YR6/4)	Dull orange (5YR6/4)	Dull orange (5YR6/4)	Pale white wash (Pale yellow: 2.5Y8/3) on ext.	Large quantities of black grit 0.5-1.5 mm in length and calcite 1.0-2.5 mm in length.	Wheel smoothing	Wheel smoothing	
4.13:5	N005	Holemouth jar	UD	Coarse to medium	UD	Orange (5YR6/6)	Bright reddish brown (5YR5/6)	Brownish gray (7.5YR6/1)	-	Large quantities of black and gray grit 0.5-1.5 mm in length.	Horizontal and diagonal smoothing	Diagonal burnishing	
4.13:6	N005	Jug (shoulder)	7th - 10th	Medium to fine	UD	Orange (5YR7/6)	Orange (5YR7/6)	Orange (5YR7/6)	Red slip (Reddish brown: 5YR4/8) on ext?	Small quantities of black and red grit 0.5-1.0 mm in length.	Wheel smoothing	Horizontal burnshing	Горячева 2010: Рис. 25
4.13:7	N005	Lid	Kara Khanid (Late 11th - Early 12th)	Coarse	458 (base)	Dull orange (7.5YR7/3)	Dull yellow orange (10YR7/4)	Brownish gray (10YR5/1)	-	Large quantities of sand grit 0.5-1.5 mm in length, a few gravels 9.0 mm in length.	Horizontal smoothing, incised decoration (upper surface)	Scraping (lower surface)	

長約 28 km）により区画され、外郭壁で囲まれた範囲は推計で 50 km^2 に達する（Кожемяко 1959: 82）。外郭壁の位置は、その北東部でシャフリスタンから約 5.0 km を測るが、南西部ではその距離は著しく近くなる。1954 年の調査当時には、外郭壁の西・北・東辺の残存状態が良好であり、南辺は西部と北部が残っていた。外郭壁は高さ約 1.4 m、その基部で幅 12 m の断面半球形を呈し、両側に深さ 0.6 m、幅 8.0 m の堀が切られていた。

コジェミャコは、同遺跡の発達過程を明らかにするために、4 つの試掘トレンチにおいて発掘調査を実施した（Кожемяко 1959: 82–84）。試掘トレンチ 1（6.5 m^2）は南東シャフリスタンの北東寄りの箇所に設定され、深さ 4.6 m に及ぶ文化層堆積が検出された。この試掘トレンチの土層堆積から、4 つの建築段階が区分された。また、発掘調査により、6 ～ 12 世紀に位置づけられる多くの土器片が出土した。下層では、型作りの土器が主体を占める。なかでも、赤色スリップ土器は特徴的である。中層も、型作りの土器により特徴づけられる。上層では、様々な型式のロクロ成形の土器が主体的に出土し、10 ～ 12 世紀に位置づけられた。北西シャフリスタンには試掘トレンチ 2（6.0 m^2）が設けられ、深さ 4.1 m まで掘削された。深さ 3.0 m までの文化層堆積からのみ、施釉陶器とロクロ成形の土器が併せて出土した。このトレンチの文化層堆積は、7 ～ 12 世紀のものと看做されている。シャフリスタンの東に位置する小丘上に設置された試掘トレンチ 3（10 m^2）では、厚さ 2.07 m の文化層堆積が検出された。上層出土土器は型作り・ロクロ成形いずれも存在したが、下層では型作りが支配的である。これらの土器片から、下層は 6 ～ 9 世紀、上層は 10 ～ 12 世紀に位置づけられた。シャフリスタン外のもう 1 つの発掘区、試掘トレンチ 4（10 m^2）は、内郭壁北東辺から 170 m 南に位置する矩形囲壁遺構（42 m × 60 m）に設けられた。この矩形遺構は、一般住民の住居址と考えられている。トレンチは深さ 1.2 m まで掘削されたが、文化層堆積には変化が見られなかった。出土土器は、型作りとロクロ成形が同率で認められ、10 ～ 12 世紀に位置づけられる。

コジェミャコの調査により、シス・トベの最も古い時代に構築された箇所は南東シャフリスタンとシタデルであり、いずれも 6 世紀にまで遡り、12 世紀まで利用されたと考えられている（Кожемяко 1959: 84）。他方、北西シャフリスタンの利用は 7 世紀までは遡りえず、10 ～ 12 世紀に集中的に居住されたと理解できる。北西シャフリスタンの

居住開始時期には、シャフリスタン外でも住居が営まれるようになり、10 世紀には居住域が内郭全体にまで拡大したと考えられている。なお、本プロジェクトにおける北西シャフリスタンでの採集土器は、概ね 7 ～ 12 世紀の年代を示している（図 4. 13）。

先行調査：Кожемяко 1959: 79–84

N006 ベロヴォドスコエ・クレポスト
（Belovodskoe Krepost）

登録番号：CV18004

調査日：2018.09.27

WGS84：74.118857 E; 42.855025 N

UTM zone 43N：428011.446 m E; 4745093.205 m N

規模：約 150,000 m^2（シャフリスタン全域、現況の北端残存部は 13,450 m^2）

標高：714 m

種別：居住址／都市

採集遺物：土器片 6 点（胴部片を除く）

推定時期：7 ～ 13 世紀、16 ～ 18 世紀

概要：本遺跡（シャフリスタン）は、カラ・バルタとビシュケクを結ぶ東西幹線道路の約 1.9 km 北、ベロヴォドスコエ集落の約 3.5 km 北の、小河川合流地点南の段丘面上に構築されている（図 4. 14–15）。シャフリスタン北部は、東西に流れる大チュー運河により南北に分断されており、分断された北端部にシタデルが所在する。北端部のシタデルとその周辺は、現在では墓地として利用されている。また、大チュー運河の南、シャフリスタンの西側には貯水池が存在し、シャフリスタン西辺を部分的に浸食している。1954 年にコジェミャコにより、また、1978 年にキルギス科学アカデミーによる調査が行われているため、以下では、これらの報告（Кожемяко 1959: 97–99; Мокрынин 2012）に依拠して同遺跡について記述する。

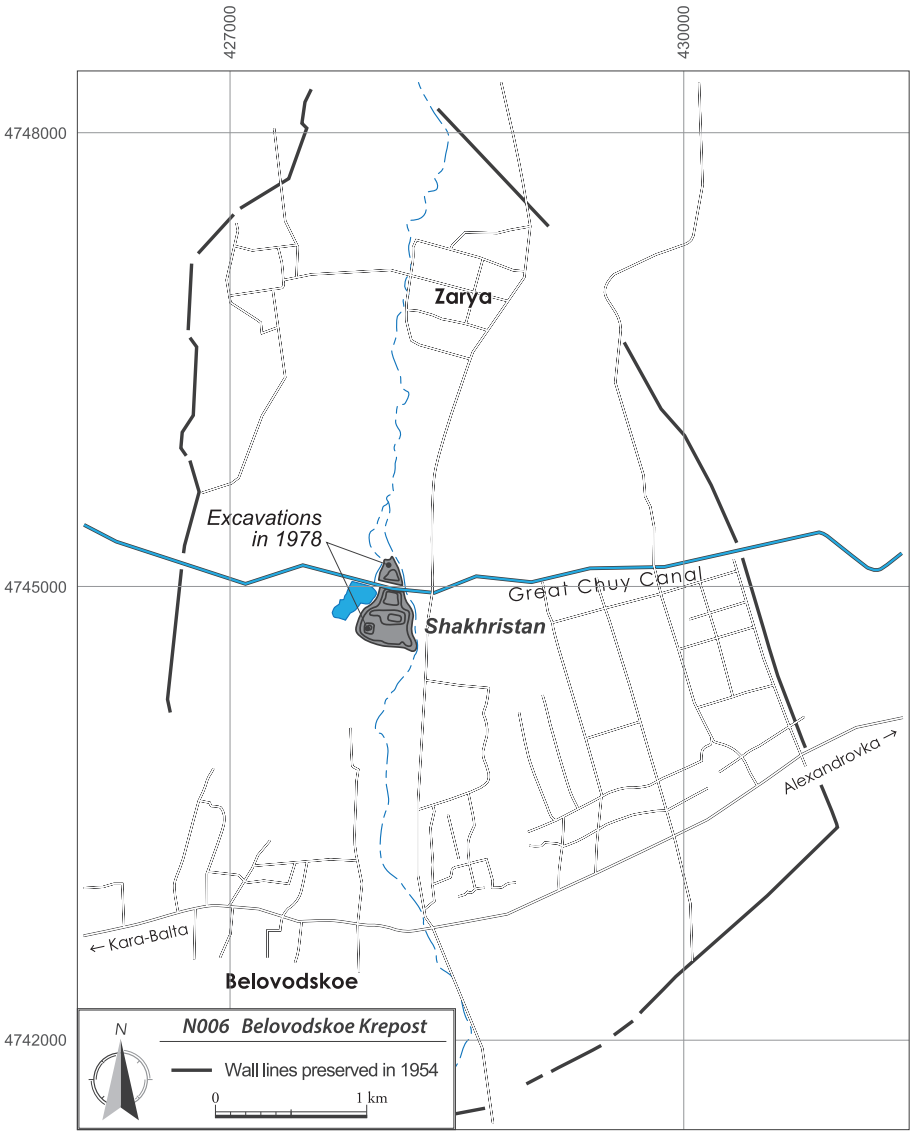

図 4. 14　ベロヴォドスコエ・クレポスト（N006）平面図（Кожемяко 1959: Рис. 11 を改変し作成）

シャフリスタンは、段丘面に制約を受けた平面不整三角形を呈し、最大で東西約 360 m、南北約 570 m を測る。シャフリスタンは北から、シタデル、中央区、南区に区分される。北端に位置するシタデルはその南部分が大チュー運河の建設時に破壊され、現在では遺跡の断面が露出している。現況のシタデルは、その基部で東西約 71 m、南北約 57 m を測り、周辺地表面より 5.0 m 程度高くなっている。大チュー運河を挟んで南に位置する中央区と南区の間には、基部の幅が 12 m に達する残存高 1.0 ～ 1.5 m の区画壁が東西方向に存在した。壁の両側には、深い溝が切られていた（Кожемяко 1959: 97）。南区の南西隅には城壁及び四隅の塔を有する矩形遺構（70 × 80 m）が存在し、内部空間が 2 分割されていた。この矩形遺構は、1954 年の調査当時は比較的無傷のままで残されていたが、その後の遺跡内の開発に伴い南半分が破壊されてしまった。1978 年には、残存していた北半部（東西 52 ～ 56 m、南北 34 m）において 20 m 四方のトレンチにおいて緊急発掘が行われた（Мокрынин 2012: 101–108）。発掘調査により、パフサ（練土）あるいはレンガで造られた壁体を持ついくつかの矩形建物を含む、複数の建築層から成る 2 つの建築期が確認された。出土遺物の所見から、下層は 6 ～ 8 世紀、上層は 11 ～ 13 世紀初頭に位置づけられた。また、最上層では僅かな建築遺構に伴うかたちで、16 ～ 18 世紀の所産とみられる施釉陶器・染付磁器の破片や鉛製の銃弾が出土しており、当該期における再居住を示している（Мокрынин 2012: 108）。シャフリスタンへの出入口は、南辺の南東隅から西に 60 m の地点に存在したとみられ、城門の痕跡が確認された（Кожемяко 1959: 98）。2018 年現在、中央区・南区の大部分には構造物が建てられており、コジェミャコが記録した遺構はその多くが既に破壊されてしまったと考えられる。

図 4. 15　ベロヴォドスコエ・クレポスト（N006）シャフリスタン全景（北から）

シタデルの北 100 ～ 120 m の段丘面テラス上には、数十の土坑墓から成る墓地が所在しており、1978 年にはこのうち 28 基が発掘調査された（Мокрынин 2012: 115–

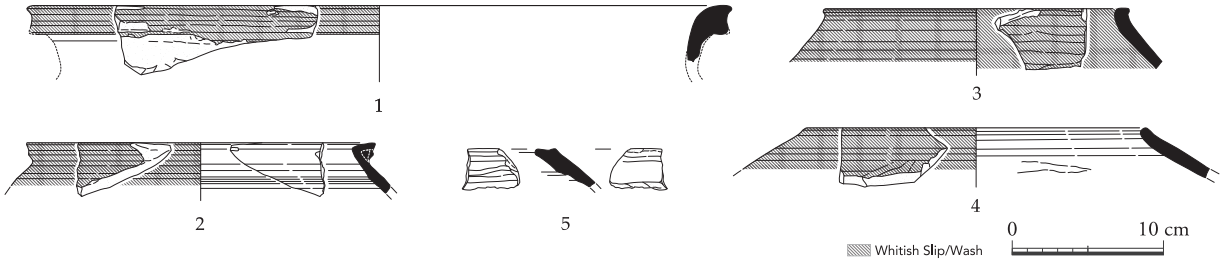

図 4. 16　ベロヴォドスコエ・クレポスト（N006）採集土器

Fig. no.	Site no.	Form/Type	Period (Century)	Quality	Rim diam. (mm)	Interior	Exterior	Core	Slip/Wash	Inclusion	Surface treatment (int.)	Surface treatment (ext.)	Comparable materials
4.16:1	N006	Pithos	6th - 8th	Medium	466	Orange (2.5YR6/6)	Orange (2.5YR7/6)	Orange (2.5YR7/6)	Pale white wash (Light yellow orange: 7.5YR8/4) on ext.	Large quantities of red and black grit 0.5-3.0 mm in diam., very small quantities of white fragments 0.5-3.0 mm in length.	Wheel smoothing	Wheel smoothing	Kyzlasov 2010: Fig. 47: 47, 50
4.16:2	N006	Short-necked jar	Kara Khanid (Late 9th - Early 10th)	Medium	230	Orange (5YR6/6)	Orange (5YR6/6)	Orange (5YR6/6)	Pale white wash (Orange: 5YR7/8) on ext?	Several white grit (limestone?) 0.5-1.5 mm in diam., a few calsite 0.5-1.0 mm in diam., very small quantities of gray grit 0.5-1.0 mm in diam.	Wheel smoothing	Wheel smoothing	帝京大学文化財研究所他 2021: Fig. 3. 63: 13-18-001
4.16:3	N006	Short-necked jar	Kara Khanid (Late 11th - Early 12th)	Medium to fine	256	Dull orange (5YR6/4)	Orange (5YR7/6)	Dull orange (5YR6/4)	White wash (Dull yellow orange: 10YR7/3) on both sides.	Small quantities of black and red grit 0.5-1.0 mm in diam.	Horizontal smoothing	Wheel smoothing	帝京大学文化財研究所他 2020: Fig. 4. 54: 15-19-043
4.16:4	N006	Holemouth jar	Kara Khanid (Late 11th - Early 12th)	Medium to fine	220	Dull orange (5YR7/4)	Dull orange (5YR6/4)	Dull orange (5YR7/4)	White wash (Pale yellow: 2.5Y8/3) on both sides.	Small quantities of calcite 1.0-2.0 mm in diam. and red and black grit 1.0-3.0 mm in diam.	Wheel smoothing on upper part and horizontal smoothing on lower part.	Wheel smoothing	
4.16:5	N006	Holemouth cooking pot	UD	Coarse	UD	Orange (7.5YR7/6)	Orange (5YR6/6)	Light gray (2.5Y7/1)	-	Large quantities of sand grit 0.5-2.0 mm in length.	Horizontal smoothing	Horizontal smoothing	

126)。貨幣（開元通宝等）をはじめとする出土遺物から、この墓地はイスラーム化以前の 9 ～ 10 世紀に主に造営されたと考えられている（Мокрынин 2012: 125–126)。

今日ではほぼ消失しているが、外周には長大な城壁が廻っていたことがわかっている（Кожемяко 1959: 99)。外周壁は総長 17.5 km に及び、基部の幅は 12 ～ 13 m、残存高は 1.5 ～ 1.7 m を測った。また、外周壁沿い外側の大部分で、外堀が認められた。外周壁内（ラバト）では、1954 年調査時にシャフリスタンの東にいくつかの小丘が見られたのみであったが、居住地として開発されていたと考えられている。

採集遺物は全て、10 ～ 13 世紀の年代を示している。1954 年には、施釉陶器、水道管、カラハン朝のコインが採集された（Кожемяко 1959: 99)。本プロジェクトにおいて採集した土器群（図 4. 16）もこの年代観と矛盾しないが、より古い時期の所産と考えられる資料をも含んでいる（図 4. 16: 1–2)。コジェミャコはひと際高いシタデルの存在に着目し、同遺跡の起源が 8 ～ 9 世紀に遡る可能性を示唆した（Кожемяко 1959: 99)。1978 年に行われたシタデル南の重機により切り通された断面の調査によって、7 ～ 12 世紀に位置づけられる土器群が連続的に認められたこと（Мокрынин 2012: 109–115）により、コジェミャコの指摘の妥当性は立証されている。本踏査による採集土器もコジェミャコの見解を裏付けるかもしれない。

先行調査：Кожемяко 1959: 97–99; Мокрынин 2012

N007

登録番号：CV18021
調査日：2018.10.05
WGS84：73.870432 E; 42.86499 N
UTM zone 43N：407655.062 m E; 4746606.126 m N
規模：571 m^2
標高：701 m
種別：居住址／望楼
採集遺物：なし
推定時期：10 ～ 12 世紀？
概要：本遺跡はサイ・ジェケン川の北岸に位置する（図 4. 17)。平面形は約 17 m 四方の方形であり、四隅には塔の痕跡と考えられる小型円形遺構が取り付く。4 つの塔のうち、北東・南東の 2 つは東側を走る無舗装道路により部分的に破壊されていた。4 つの塔を除き、望楼本体は基部の幅 3.3 m の壁から成り、その外周には幅約 2.2 m の溝が廻る。方形遺構内部には平坦面が広がり、いかなる遺構も見られなかった。

N008

登録番号：CV19002
調査日：2019.10.02
WGS84：73.865607 E; 42.876503 N
UTM zone 43N：407352.182 m E; 4747724.886 m N
規模：186 m^2
標高：693 m
種別：葬祭遺構／単独墓
採集遺物：なし
推定時期：不明
概要：本遺跡は、サイ・ジェケン川の東岸に位置する（図 4. 18)。外寸で東西約 15 m、南北約 12 m の楕円形遺構 1 基から成る。外側には幅約 1.3 m の土塁が廻り、その内側には同じ幅の周溝が掘られる。周溝の内側は周囲よりも一段高く、平坦ではあるが墳丘状を呈する。なお、東側では土塁・周溝が途切れて開口部を成しており、出入口として機能していた可能性もある。

図 4. 17　N007 全景（北西から）

図 4. 18　N008 全景（北西から）

N009

登録番号：CV19009

調査日：2019.10.03

WGS84：73.822131 E; 42.878406 N

UTM zone 43N：403804.193 m E; 4747984.945 m N

規模：324 m^2

標高：691 m

種別：生活遺構／囲い込み遺構

採集遺物：なし

推定時期：不明

概要：本遺跡は、トク・タシュ川の東岸段丘縁辺に位置する（図 4. 19）。同遺跡は 1 基の楕円形遺構から成り、外寸で東西 21.4 m、南北 14.3 m を測る。楕円形遺構は、外側を廻る土塁（幅 2.0 m 以上、0.2 ～ 0.3 m 高）と、その内側の周溝（幅 1.9 m、深さ 0.9 m）から成る。周溝の内側には平坦面（東西 12.7 m、南北 7.3 m）が広がり、いかなる遺構も見られない。土塁・周溝の南側中央は途切れており、出入口として機能していた可能性がある。

N010

登録番号：CV19008

調査日：2019.10.03

WGS84：(N010-1) 73.82118 E; 42.87892 N; (N010-2) 73.821095 E; 42.878825 N

UTM zone 43N：(N010-1) 403727.405 m E; 4748043.097 m N; (N010-2) 403720.271 m E; 4748032.707 m N

規模：292 m^2 (N010-1: 187 m^2; N010-2: 105 m^2)

標高：692 m

種別：生活遺構／建物遺構（N010-1）・囲い込み遺構（N010-2）

採集遺物：なし

推定時期：不明

概要：本遺跡はトク・タシュ川の中洲状段丘の東側縁辺に位置する。相互に接続する 1 基の建物遺構と 1 基の囲い込み遺構から成る。北側の建物遺構（N010-1）は、西辺が未舗装道路により大きく破壊されているものの、平面矩形を呈している。外側に土塁（幅約 1.0 m）が廻り、その内側に周溝（幅約 1.0 m）、さらにその内側には土塁が廻る（図 4. 20）。この最も内側の土塁は、泥レンガ製の壁の痕跡と考えられる。その内側には平坦面のみが見られる。壁体をも含む内寸は現状で、東西 5.6 m、南北約 7.0 m を測る。南に接する平面長方形の囲い込み遺構（N010-2）は、斜面下側の東辺が開く逆コの字型溝（幅約 1.0 m）から成る（図 4. 21）。N010-2 北辺は N010-1 南辺と溝を共有する。内側には東側にやや傾斜する平坦面が見られ、東西約 5.5 m、南北 6.8 m を測る。N010-1 南辺に土塁が見られないことから、N010-2 が N010-1 南辺の一部を壊して付け足されたと考えられる。

図 4. 19　N009 全景（北東から）

図 4. 20　N010-1 全景（北西から）

図 4. 21　N010-2 全景（北西から）

N011

登録番号：CV19006

調査日：2019.10.03

WGS84：73.821831 E; 42.882775 N

UTM zone 43N：403786.482 m E; 4748470.505 m N

規模：214 m^2

標高：691 m

種別：生活遺構／建物遺構

採集遺物：なし

推定時期：近世・近代

概要：本遺跡はトク・タシュ川の東岸縁辺に位置し、隅丸長方形遺構 1 基から成る（図 4. 22）。同遺構は、外側の周溝（幅 1.6 m、深さ 0.4 m）とその内側を廻る土塁により構築される（図 4. 23）。土塁の内側には平坦面のみが見られ、東西 7.8 m、南北 3.5 m を測る。遺構の土塁はおそらく泥レンガ製壁体基部の痕跡と考えられる。

N012

登録番号：CV18008

調査日：2018.10.01

WGS84：74.001674 E; 42.884698 N

図 4. 22　N011 遠景（北西から）

図 4. 23　N011 全景（北東から）

UTM zone 43N：418475.198 m E; 4748494.427 m N

規模：2,635 m^2

標高：687 m

種別：居住址／城塞

採集遺物：なし

推定時期：10 ～ 12 世紀？

概要：本遺跡はイチケ・スウ川の西岸段丘上縁辺に位置する、平面方形（57 m 四方）の小丘である（図 4. 24）。北・西・南辺外周には幅広の溝が廻り、東辺は段崖になっている。小丘縁辺四周は堤状に高まり、おそらくは泥レンガ製壁体基部の痕跡と考えられる。現況では、四隅に明確な塔の痕跡は認められないが、元来取り付いていた可能性もある。

規模の大きさに鑑みて、一般的な住居遺構とは考えにくく、望楼等の公共的な機能を想定すべきであろう。また、類似遺構として S001 及び S051 が挙げられ、両遺構とも N012 とほぼ同時期の所産と考えられる。

N013

登録番号：CV19005

調査日：2019.10.03

WGS84：73.820812 E; 42.883046 N

UTM zone 43N：403703.653 m E; 4748501.9 m N

規模：258 m^2

標高：698 m

種別：葬祭遺構／墓地

採集遺物：なし

推定時期：（円墳）不明；（小型墓）近世・近代

概要：本遺跡はトク・タシュ川西岸の段丘突端部緩斜面上に位置する（図 4. 25）。中核となる円墳 1 基と、その周囲に配置される少なくとも 7 基の小型墓から成る。円墳は、最も標高の高い突端部付近中央部に造営されてい

図 4. 24　N012 全景（北から）

る。土盛によるとみられる墳丘（直径約 5.0 m、高さ約 1.0 m）と、周囲の外側を廻る土塁（幅 1.0 m）とその内側の周溝（幅 1.0 m、深さ 0.3 ～ 0.4 m）から成り、直径は約 9.0 m を測る（図 4. 26）。墳丘頂部は陥没しており、盗掘を受けたことを示している。円墳周囲の小型墓 7 基は、いずれも直径 2.0 m 未満の墳丘を持つ。これらのうち、南西に位置する大型の 2 基は盗掘を受けていた。

N014

登録番号：CV19007

調査日：2019.10.03

WGS84：(N014-1) 73.821651 E; 42.884308 N; (N014-2) 73.821581 E; 42.884492 N

UTM zone 43N：(N014-1) 403774.12 m E; 4748640.984 m N; (N014-2) 403768.771 m E; 4748661.459 m N

規模：593 m^2 (N014-1: 247 m^2; N014-2: 325 m^2)

標高：690 m

種別：生活遺構／建物遺構

採集遺物：なし

推定時期：近世・近代

概要：本遺跡はトク・タシュ川東岸の段丘縁辺に位置する。南北に連なる 2 基の矩形遺構から成る。いずれも、外側に周溝（幅 1.0 ～ 1.5 m）、その内側を土塁（幅約 1.0 m）が廻り、このうち土塁は泥レンガ製壁体基部の痕跡と考えられる。南の矩形遺構（N014-1）は外寸約 14.6 m 四方の規模であり、土塁は北辺・南辺及び東辺の一部、周溝は北辺・西辺にのみ見られる（図 4. 27）。東辺の中央部は開口しており、出入口として機能していたと思われる。内部には平坦面が広がり、北東隅・南東隅には盗掘坑と思われる土坑が掘削されていた。北の矩形遺構（N014-2）は、外寸で東西 16.7 m、南北 14.3 m を測る（図 4. 28）。N014-2 は、その南辺の溝を N014-1 の北辺と共有しているように見えるが、南辺付近の溝・土塁の保存状況が良好ではないため判断が難しい。遺構のほぼ中央を、北東から南西の方向に獣道が切り通っている。

N015

登録番号：CV19001

調査日：2019.10.02

WGS84：73.858251 E; 42.88591 N

UTM zone 43N：406765.377 m E; 4748777.782 m N

規模：324 m^2

図 4. 25　N013 遠景（東から）

図 4. 26　N013 円墳全景（南東から）

図 4. 27　N014-1 全景（南東から）

図 4. 28　N014-2 全景（北西から）

標高：688 m
種別：葬祭遺構／追悼遺構
採集遺物：なし
推定時期：6 ～ 8 世紀？
概要：本遺跡はサイ・ジェケン川東岸段丘縁辺付近に位置する（図 4. 29）。1 基の方形遺構から成り、外寸で 18 m 四方を測る。外周は、外側を廻る土塁とその内側の周溝（幅約 1.5 m、深さ 0.5 ～ 0.7 m）より区切られるが、周溝の内側中央にも東西溝が切られており、内部空間を南北に等分している。北東隅及び南東隅では土塁が途切れることから、出入口が存在した可能性がある。遺物を採集できなかったが、主に立地、平面形、構造に鑑みて、突厥の追悼遺構に類する施設と推測される。

図 4. 29　N015 空撮全景（南東から）

図 4. 30　N016 空撮遠景（北西から）

N016
登録番号：CV19003
調査日：2019.10.03
WGS84：73.824683 E; 42.889259 N
UTM zone 43N：404029.505 m E; 4749187.208 m N
規模：245 m^2
標高：676 m
種別：葬祭遺構／追悼遺構
採集遺物：土器片 8 点
推定時期：6 ～ 8 世紀？
概要：本遺跡はトク・タシュ川東岸の段丘縁辺に位置する（図 4. 30–31）。東半部が耕作により破壊されているが、元来は方形に近い平面形であったと考えられる。現況では、外寸で東西約 13 m、南北約 17 m を測る。外側に土塁（幅約 1.0 m）、その内側に周溝（幅約 1.0 m）が廻り、周溝の内側には平坦面のみが広がる。なお、土塁の南西隅付近が途切れる。

耕作により破壊された東半部において、数点の土器片を採集した。採集土器のうち 1 点はソグド系カップの口縁部小片であり、6 ～ 8 世紀頃に比定できる（図 4. 32）。

図 4. 31　N016 全景（北西から）

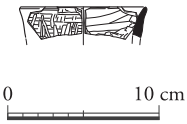

図 4. 32　N016 採集土器

Fig. no.	Site no.	Form/Type	Period (Century)	Quality	Rim diam. (mm)	Interior	Exterior	Core	Slip/Wash	Inclusion	Surface treatment (int.)	Surface treatment (ext.)	Comparable materials
4.32	N016	Cup	6th - 8th	Fine	84	Orange (2.5YR6/6)	Orange (5YR6/6)	Orange (2.5YR6/6)	-	Small quantities of sand grit 0.5-1.0 mm in diam., large quantities of mica.	Horizontal smoothing	Horizontal and then vertical burinishing on wheel smoothing	Маршак 2012: Ил. 147: 1, 2, 4; Кожемяко 1959: Табл. V: 9

N017

登録番号：CV19004

調査日：2019.10.03

WGS84：73.823708 E; 42.889857 N

UTM zone 43N：403950.821 m E; 4749254.949 m N

規模：1,935 m^2（円墳：149 m^2）

標高：687 m

種別：葬祭遺構／墓地

採集遺物：なし

推定時期：（円墳）不明；（小型墓）近世・近代

概要：本遺跡はトク・タシュ川西岸の段丘縁辺上、N016の北西方向の対岸に位置する（図 4. 33）。遺跡範囲の北端には、円墳が所在する。円墳は外寸で東西約 10 m のやや楕円形を呈しており、周囲に溝（幅 1.0 m、深さ 0.3 ～ 0.4 m）が廻る。溝の内側は低く盛り上がっており、中央部付近に 2 つの窪みが穿たれている。これらは盗掘坑と思われる。

円墳の南側には、舗装道路までの約 110 m の間に、円形の土盛から成る小型墓（直径約 1.6 m）が多数見られた。なお、舗装道路の南側には現代の墓地が所在する。

N018

登録番号：CV18010

調査日：2018.10.02

WGS84：73.98838 E; 42.892768 N

UTM zone 43N：417401.225 m E; 4749403.159 m N

規模：1,722 m^2

標高：689 m

種別：遺物散布地／土器散布地

採集遺物：土器片 1 点

推定時期：前 10 ～前 9 世紀頃

概要：本遺跡はマルタバル（Maltabar）集落内を南北に流れるイチケ・スウ川東岸段丘上に位置する（図 4. 34）。いかなる遺構も確認できなかったが、ごく少量の土器片の散布を確認した。このうち、採集した 1 点は深鉢の口縁部小片であり、口縁部直下の外面には左上がりの斜行刻みが施された隆帯が水平に添付されている（図 4. 35）。この土器片は終末期青銅器時代（カラスク文化）の所産と考えられる（cf. 藤川編 1999: 21; Grigoriev 2021: 25）。おそらくは、周辺にかつてあった集落あるいは墓地から、浸食と氾濫により流出したものであろう。

N019 アイダルベック（Aidarbek）

登録番号：CV19018

調査日：2019.10.07

WGS84：73.913312 E; 42.897961 N

UTM zone 43N：411278.952 m E; 4750056.394 m N

規模：8,891 m^2

図 4. 33　N017 空撮全景（北から）

図 4. 34　N018 全景（北西から）

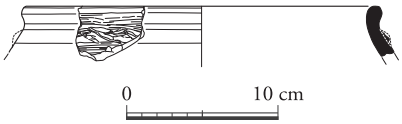

図 4. 35　N018 採集土器

Fig. no.	Site no.	Form/Type	Period (Century)	Quality	Rim diam. (mm)	Interior	Exterior	Core	Slip/Wash	Inclusion	Surface treatment (int.)	Surface treatment (ext.)	Comparable materials
4.35	N018	Deep bowl	Late Bronze (Karasuk)	Coarse	238	Dull yellow orange (10YR7/3)	Orange (5YR7/6)	Gray (N6/)	-	Large quantities of calcite 1.0-4.0 mm in length and mica 0.5-1.5 mm in length.	Horizontal smoothing	Horizontal smoothing, a horizontal band diagonally incised.	Бернштаи 1950: Табл. XXX: 1, 3, XXXII: 8

標高：679 m
種別：居住址／要塞
採集遺物：土器片 4 点
推定時期：9 ～ 12 世紀？
概要：本遺跡は東カラ・グル川の西岸、西の小河川との合流部南の段丘上に位置する（図 4. 36–38）。遺跡は小丘を呈しており、平面形は東西 97 m、南北 124 m の長方形を呈する。この小丘は四方を小河川の流路により囲まれているが、北西部の橋状部分からのみアクセス可能である。丘上は北半部が高く、その南端に東西に細長い高まりが見られた。丘上南半部は南方に傾斜する斜面が広がる。遺物の散布は少量しか認められなかった。

現在、丘上は墓地として利用されている。付近の住民の話では、元来古い墓地として用いられていた。一部の墓は発掘され、3 体の埋葬人骨が出土したという。

図 4. 36　アイダルベック（N019）空撮全景（北から）

図 4. 37　アイダルベック（N019）空撮俯瞰（上が北）

図 4. 38　アイダルベック（N019）全景（南西から）

N020

登録番号：CV19019
調査日：2019.10.07
WGS84：73.890214 E; 42.89905 N
UTM zone 43N：409394.792 m E; 4750201.92 m N
規模：984 m^2
標高：677 m
種別：居住址／望楼
採集遺物：なし
推定時期：10 ～ 12 世紀？
概要：本遺跡はジョン・アリク川の東岸に位置する（図 4. 39）。遺跡はほぼ平面方形（約 33 m 四方）の矩形遺

図 4. 39　N020 全景（北東から）

図 4. 40　N020 空撮俯瞰（上が南）

図 4. 41　コミンテルン（N021）コロナ衛星写真（1967 年撮影）（左）と現況衛星写真（Google Earth）（右）の比較

構から成る（図 4. 40）。四周に土塁（幅約 3.0 m、高さ 0.4 m）が廻り、四隅の外側には塔と思われる小型円形遺構が取り付く。なお、土塁は、泥レンガ製壁体基部の痕跡と考えられる。これらの外周には溝（幅 2.5 m、深さ 0.4 m）の痕跡が見られる。土塁の内側には平坦面が存在し、東西 22 m、南北 21 m を測る。なお、北辺・東辺・南辺の中央では周溝が途切れており、遺構内側への開口部を成している。このうち東辺の開口部は、元来存在した出入口であった蓋然性がある。

2019 年現在、遺構の南西隅塔の一部が浸食を受けている。

N021 コミンテルン（Komintern）

登録番号：CV18002

調査日：2018.09.26

WGS84：73.954505 E; 42.910467 N

UTM zone 43N：414547.071 m E; 4751042.942 m N

規模：不明

標高：671 m

種別：居住址／要塞

採集遺物：なし

推定時期：10 ～ 12 世紀

概要：本遺跡は、シス・トベ（N005）の外郭壁から約 1.0 km 北東、コトゥル・スウ（Kotur Suu）川岸に位置したが、今日では北端部の一部を除いてそのほとんどが破壊されており、養殖用の池が広がっている。1967 年に撮影されたコロナ衛星写真には、破壊される前の N021 の平面形が写っている（図 4. 41）。1954 年にコジェミャコにより調査が行われているため、以下では、コジェミャコによる報告（Кожемяко 1959: 137）に依拠して同遺跡を記述する。

遺跡は、東西約 70 m、南北約 130 m の矩形マウンドから成り、長軸が南北軸に沿う。北半は高さ 5.0 m、南半は高さ 3.5 m である。遺丘の周囲には幅 12 m、深さ 1.0 ～ 1.5 m の溝が廻る。出入口は南辺に認められた。地表では、ロクロ成形と型作りいずれの土器も採集された。なお、2018 年には土器片を含むいかなる遺物も採集できなかった。

遺跡の立地と採集遺物に基づき、同遺跡は 10 ～ 12 世紀にシス・トベ・コンプレックスの一部として機能していたと評価されている。

先行調査：Кожемяко 1959: 137

N022

登録番号：CV19020

調査日：2019.10.07

WGS84：73.922337 E; 42.916127 N（N022-1）

UTM zone 43N：412041.627 m E; 4752064.291 m N（N022-1）

規模：95 m 長

標高：665 m

種別：葬祭遺構／クルガン

採集遺物：なし

推定時期：前 8 ～前 3 世紀

概要：本遺跡は東カラ・グル川東岸の平坦面上に位置する。遺跡は南北に並ぶ 2 基のクルガンから成る。北の N022-1 は直径 34 m、高さ 2.0 ～ 3.0 m を測り、頂部には現代の墓地が所在する（図 4. 42）。南の N022-2 は直径 36 m、高さ 2.0 ～ 3.0 m を測る。いずれも頂部には大

土坑が見られ、盗掘を受けたと考えられる。

N023

登録番号：CV22103

調査日：未踏査

WGS84：73.872536 E; 42.921615 N（北端）

UTM zone 43N：407985.095 m E; 4752726.906 m N（北端）

規模：237 m 長

標高：666 m

種別：葬祭遺構／クルガン

採集遺物：なし

推定時期：前 8 ～前 3 世紀

概要：踏査中に車上から目視した後、衛星写真上でも確認した。本遺跡はジョン・アリク川の西岸、ジョン・アリク村南端付近に位置する。衛星写真上で確認できる限り、少なくとも 4 基のクルガンが南北に連なっている。クルガンの規模は、直径約 34 m を測る。

N024

登録番号：CV19024

調査日：2019.10.08

WGS84：73.855138 E; 42.925621 N

UTM zone 43N：406571.32 m E; 4753191.077 m N

規模：105 m^2

標高：660 m

種別：葬祭遺構／単独墓

採集遺物：なし

推定時期：不明

概要：本遺跡はサイ・ジェケン川東岸の段丘斜面上縁辺に位置する。遺跡は 1 基の円形墓から成る（図 4. 43）。遺構は外側を廻る土塁（幅 1.8 m、高さ 0.3 m）とその内側の周溝（幅 2.0 m、深さ 0.3 ～ 0.4 m）により構築され、周溝の内側は直径 3.5 m の低い墳丘状を呈している。

N025

登録番号：CV19023

調査日：2019.10.08

WGS84：（N025-1）73.874397 E; 42.931767 N；（N025-2）73.874796 E; 42.932295 N；（N025-3）73.875177 E; 42.934354 N

UTM zone 43N：（N025-1）408152.081 m E; 4753852.198 m N；（N025-2）408185.406 m E; 4753910.434 m N；（N025-3）408219.553 m E; 4754138.667 m N

規　模：19,708 m^2（N025-1: 265 m^2; N025-2: 210 m^2; N025-3: 140 m^2）

標高：631 m

種別：生活遺構／囲い込み遺構

採集遺物：なし

推定時期：不明

概要：本遺跡は、N023 の約 1,100 m 北の、ジョン・アリク川西岸の段丘平坦面に位置する。遺跡は 3 ヶ所の遺構から成る（図 4. 44）。

南端の N025-1 では、少なくとも 3 つの遺構の重複が見られた（図 4. 45）。最古の遺構は大型楕円形囲い込み遺構であり、北西と東の外側を廻る僅かに残る土塁と、その内側の周溝（幅 1.0 m、深さ 0.2 m）から成る。周溝の内側には周辺の地表より僅かに低い平坦面が広がり、現況で東西約 19 m、南北約 7.6 m を測る。この大型楕円形囲い込み遺構の東寄り北辺を壊して、円形囲い込み遺構が造られている。円形囲い込み遺構は同じ場所に僅かに西に位置をずらして造り替えられている。いずれも外側を廻る土塁とその内側の周溝から成る。東側のより古い円形囲い込み遺構は、東端の一部が残るのみであ

図 4. 42　N022-1 全景（南東から）

図 4. 43　N024 全景（南から）

り、周溝の内側（東西 1.0 m、南北 3.0 m）は低いマウンド状を呈する。このマウンドは、新しい円形囲い込み遺構の東側の築墨によるものと考えられる。西側のより新しい円形囲い込み遺構は東側の古い円形囲い込み遺構を壊しているが、外側を廻る土塁（幅 1.3 m、高さ 0.1 ～ 0.2 m）は両遺構を囲んでいる。内側の周溝（幅 1.9 m、深さ 0.3 ～ 0.4 m）は古い円形囲い込み遺構の周溝とスムースに接続する。周溝の内側は東西 4.0 m、南北 3.5 m を測り、ほぼ中央部には後世の掘削の痕と見られる浅い窪みがある。

N025-2 は 1 基の隅丸長方形遺構であり、N025-1 の 55 m 北東に位置する（図 4. 46）。遺構は外側を廻る土塁（幅 2.0 m、高さ 0.2 m）とその内側の周溝（幅約 1.5 m、深さ 0.3 m）から成り、土塁は北東部が、周溝は南東部が途切れている。周溝の内側（東西約 5.0 m、南北約 7.5 m）には平坦面が広がり、南西には後世に掘削されたと思しき斜行溝、また、南端には浅い窪みが見られた。この遺構は、囲い込み遺構に分類できる。

北端の N025-3 は 2 基の重複する円形囲い込み遺構から成り、N025-1 の 280 m 北北東に位置する（図 4. 47）。古い円形囲い込み遺構は南端部のみが残存する。南側は外側を廻る土塁（幅 1.2 m、高さ 0.2 m）とその内側の周溝（幅 0.9 m、深さ 0.3 ～ 0.4 m）により囲まれており、周溝の内側は低いマウンド状を呈する。このマウンドは、N025-1 の場合と同様、新しい円形囲い込み遺構の南辺築墨によるものと考えられる。北側には、より新しい円形囲い込み遺構が南側の古い円形囲い込み遺構の大部分を壊して造られている。新旧の土塁（北側は幅 1.4 m、高さ 0.2 m）は西側ではスムースに接続するが、東側では接続せず開口している。新しい円形囲い込み遺構の内側の周溝は幅 1.3 m、深さ 0.35 m を測り、周溝の内側（東西 4.5 m、南北 4.0 m）には平坦面が広がる。

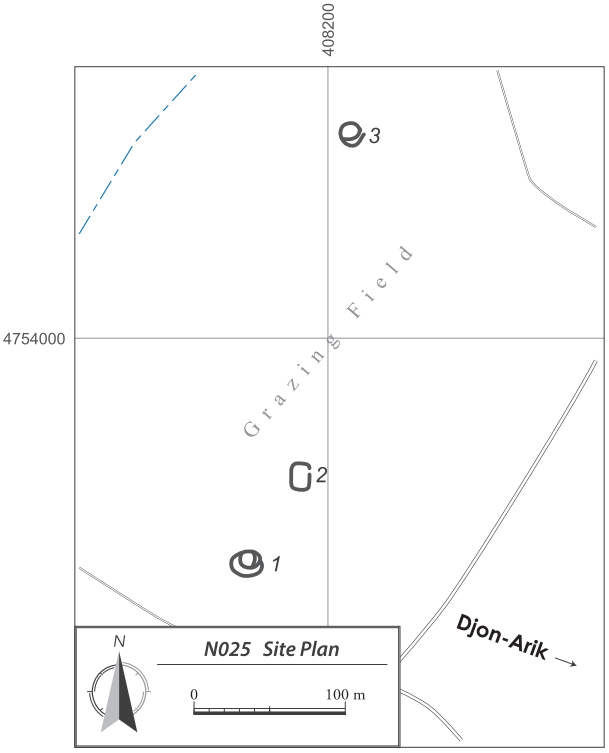

図 4. 44　N025 平面図

図 4. 45　N025-1 全景（南西から）

図 4. 46　N025-2 全景（南西から）

図 4. 47　N025-3 全景（南西から）

N026

登録番号：CV19025

調査日：2019.10.08

WGS84：（N026-1）73.853902 E; 42.935805 N；（N026-2）73.854126 E; 42.935949 N；（N026-3）73.854117 E; 42.935501 N

UTM zone 43N：（N026-1）406485.853 m E; 4754323.296 m N；（N026-2）406504.284 m E; 4754338.977 m N；（N026-3）406502.871 m E; 4754289.237 m N

規模：940 m2（N026-1: 190 m^2; N026-2: 150 m^2; N026-3: 137 m^2）

標高：651 m

種別：生活遺構／囲い込み遺構；葬祭遺構／単独墓？

採集遺物：なし

推定時期：不明

概要：本遺跡は、サイ・ジェケン川東岸の段丘緩斜面上縁辺に位置する。遺跡は南北に連なる 3 基の小型遺構から成る。

N026-1 は、中央に位置する隅丸長方形遺構である（図 4. 48）。外側を廻る土塁（幅 1.6 ～ 2.1 m、高さ 0.2 ～ 0.3 m）とその内側の周溝（幅 1.7 m、深さ 0.4 ～ 0.5 m）により構築されており、周溝の内側（東西約 5.5 m、南北約 3.5 m）には平坦面のみが見られる。囲い込み遺構に分類できる。

N026-2 は、遺跡北端に位置する楕円形遺構である（図 4. 49）。外側を廻る土塁（幅 1.8 m、高さ 0.2 ～ 0.3 m）とその内側の周溝（幅 1.7 m、深さ 0.4 m）により構築されており、開口部は見られない。周溝の内側（東西約 5.0 m、南北約 3.6 m）は北に向かって傾斜し、土塁よりも高い小丘を呈している。円形墓の一種か。

N026-3 は、遺跡南端に位置する小型の円形墓と考えられる遺構である（図 4. 50）。外側を廻る土塁（幅 1.8 m、高さ 0.2 m）とその内側の周溝（幅 1.5 m、深さ 0.3 m）により構築されており、土塁北東部に開口部が見られる。周溝の内側（東西約 3.6 m、南北約 4.8 m）は土塁と同じ高さの低い小丘を呈する。

N027

登録番号：CV19026

調査日：2019.10.08

WGS84：73.854204 E; 42.937843 N

UTM zone 43N：406513.412 m E; 4754549.07 m N

規模：592 m^2

図 4. 48　N026-1 全景（北東から）

図 4. 49　N026-2 全景（北東から）

図 4. 50　N026-3 全景（北から）

図 4. 51　N027 全景（南東から）

標高：654 m
種別：生活遺構／追悼遺構？
採集遺物：なし
推定時期：6 ～ 8 世紀？
概要：本遺跡は、N026 の約 200 m 北、サイ・ジェケン川東岸の舌状に突出した段丘上に位置する。矩形遺構 1 基とこれに取り付く溝から成る（図 4. 51）。矩形遺構は外側を廻る土塁（幅 1.9 m、高さ 0.2 m）とその内側の周溝（幅 1.5 m、深さ 0.2 ～ 0.3 m）により造られており、周溝の内側（東西 6.5 m、南北 7.0 m）は平坦面を成す。土塁の南西部は開口して付属溝が取り付き、南に 1.0 ～ 2.0 m 延びた後に東に屈曲し、矩形遺構の土塁・周溝と平行して延びる。付属溝の幅は 3.2 m を測り、その南には土塁が平行する。この付属溝は、後世に追加されたと考えられる。

矩形遺構の機能については推測の域を出ないものの、追悼遺構の可能性も考えられる。

N028

登録番号：CV18011
調査日：2018.10.02
WGS84：74.002716 E; 42.940408 N
UTM zone 43N：419672.6 m E; 4755084.881 m N
規模：575 m^2
標高：644 m
種別：居住址／望楼？
採集遺物：なし
推定時期：10 ～ 12 世紀？
概要：本遺跡はイチケ・スウ川の東岸段丘上に位置する（図 4. 52）。調査時には草本類の繁茂が激しく、地表面における残存遺構の観察が難しかった。衛星写真を参照すると、30 m 四方程度の小丘状の方形遺構を確認できた。この方形遺構の外周には溝が廻っている蓋然性が高い。また、衛星写真では方形遺構の四隅が突出しているようにも見えることから、四隅に塔が取り付いていたのかもしれない。

N029

登録番号：CV19027
調査日：2019.10.08
WGS84：73.84783 E; 42.955964 N
UTM zone 43N：406021.067 m E; 4756568.626 m N
規模：250 m^2
標高：635 m
種別：生活遺構／囲い込み遺構
採集遺物：なし
推定時期：不明
概要：本遺跡は、カラ・スウ川東岸に突出した段丘上に位置する楕円形遺構 1 基から成る（図 4. 53）。楕円形遺構は外側を廻る土塁（幅 2.4 m、高さ 0.2 ～ 0.3 m）とその内側の周溝（幅 2.0 m、深さ 0.3 ～ 0.4 m）により構築されるが、東辺の土塁は後世に掘削された 2 基の土坑により破壊されており、また、南辺の土塁は浸食を受けたためかほとんど残存していない。周溝の内側は東西約 9.0 m、南北約 5.0 m の平坦面であるが、東端の一部が僅かに低くなっている。

N030

登録番号：CV19028
調査日：2019.10.08
WGS84：（N030-1）73.849731 E; 42.958128 N；（N030-2）73.849829 E; 42.957721 N；（N030-3）73.849815 E; 42.957427 N；（N030-4）73.849679 E; 42.957036 N；（N030-5）73.849081 E; 42.95709 N

図 4. 52　N028 全景（南から）

図 4. 53　N029 全景（北東から）

UTM zone 43N：（N030-1）406179.37 m E; 4756806.826 m N；（N030-2）406186.745 m E; 4756761.52 m N；（N030-3）406185.067 m E; 4756728.975 m N；（N030-4）406173.47 m E; 4756685.619 m N；（N030-5）406124.775 m E; 4756692.283 m N

規模：7,381 m^2（N030-1: 287 m^2; N030-2: 450 m^2; N030-3: 332 m^2; N030-4: 283 m^2; N030-5: 281 m^2）

標高：633 m

種別：生活遺構／囲い込み遺構・建物遺構

採集遺物：土器片 2 点（N030-1: 1 点 ; N030-2: 1 点）

推定時期：不明

概要：本遺跡は、N029 の北東約 140 m、カラ・スウ川の東岸段丘上平坦面に位置する 5 基の遺構から成る（図 4. 54）。

最北端で確認した N030-1 は、彎曲する溝が取り付いた楕円形囲い込み遺構（総長南北 24 m）である（図 4. 55）。楕円形遺構は、外側を廻る土塁（幅 2.9 m、高さ 0.2 m）とその内側の周溝（幅約 2.0 m、深さ 0.5 m）から成るが、土塁は保存状態が概して良くない。周溝の内側（東西 3.5 m、南北 7.6 m）は平坦面を成し、いかなる遺構も認められない。土塁の北東部が一部途切れており、出入口として機能していた可能性もある。周溝北西部に彎曲した溝が 1 本取り付く。溝の西側には土塁の痕跡が見られる。土塁・周溝は、楕円形遺構のものとほぼ同寸法である。

N030-2 は、N030-1 の 25 m 南東に位置する矩形建物遺構である（図 4. 56–57）。遺構の北辺・西辺は外側の周溝（幅 1.7 m、深さ 0.4 m）とその内側を廻る土塁（幅 1.5 m、高さ 0.2 m）から成るが、南辺・東辺は外側を廻る土塁（幅 2.2 m、高さ 0.2 m）とその内側の周溝（幅 1.2 m、深さ 0.3 ～ 0.4 m）により画されており、2 種類の構築方法が混在している。遺構の北東隅では周溝・土塁が途切れており、出入口があったと思われる。土塁の内側（東西約 9.0 m、南北約 11 m）には平坦面のみが広がる。なお、N030-2 の南西隅には溝が接続し、東側に土塁を伴って南南西方向に 12 m 程度延びる。この溝は南端で東に彎曲して、N030-3 の北西隅に接続する。

N030-3 は、N030-2 の 13 m 南に位置する矩形建物遺構である（図 4. 56, 58）。遺構は、外側の周溝（幅 1.8 m、深さ 0.4 m）とその内側を廻る土塁（幅 1.7 m、高さ 0.3 m）から成る。南辺中央に開口部が見られるが、後世の作出と見られる。土塁の内側（東西約 5.0 m、南北約 9.0

図 4. 54　N030 空撮俯瞰（上が北）

図 4. 55　N030-1 全景（南東から）

図 4. 56　N030-2+3 空撮俯瞰（上が北）

図 4. 57　N030-2 全景（北西から）

図 4. 58　N030-3 全景（北西から）

図 4. 59　N030-4 空撮俯瞰（上が北）

図 4. 60　N030-5 全景（北東から）

m）には平坦面のみが広がっている。遺構の北西部には、N030-2 から延びる溝が接続する。なお、N030-2 と N030-3 の間には、西側を上述の接続溝により区切られた中庭上の平坦面が位置している。

最南東端に所在する N030-4 は、2 つの隣接する円形囲い込み遺構から成る（図 4. 59）。西側の遺構は、溝（幅 1.3 m、深さ 0.3 ～ 0.4 m）が周囲を廻り、その内側（東西約 8.5 m、南北約 8.5 m）には平坦面のみが存在する。東側の遺構は、西側の遺構の南東部を破壊して造られている。遺構は周囲を廻る溝（幅 1.4 m、深さ 0.3 m）から成り、その内側（南北約 6.0 m）には平坦面が見られる。小型遺構は南東半が残存しておらず、元来の内寸の東西長は不明である。

最南西端に所在する N030-5 は、楕円形囲い込み遺構である（図 4. 60）。遺構は外側を廻る土塁（幅 1.3 m、高さ 0.2 m 未満）とその内側の周溝（幅 1.4 m、深さ 0.2 ～ 0.3 m）から成り、東辺・西辺の土塁は残存しておらず、南辺の土塁も僅かな痕跡をとどめるのみである。周溝

の南東部は途切れており、出入口であった可能性もある。周溝の北西部には他の溝が取り付き、北方に延びる。周溝の内側（東西約 8.5 m、南北約 5.0 m）には平坦面のみが広がる。

N031

登録番号：CV19014

調査日：2019.10.04

WGS84：（N031-1）73.850401 E; 42.973425 N；（N031-2）73.850708 E; 42.973311 N

UTM zone 43N：（N031-1）406257.171 m E; 4758504.8 m N；（N031-2）406282.113 m E; 4758491.797 m N

規模：861 m^2（N031-1: 326 m^2; N031-2: 237 m^2）

標高：628 m

種別：葬祭遺構／追悼遺構；生活遺構／囲い込み遺構？

採集遺物：なし

推定時期：（N031-1）6 ～ 8 世紀？；（N031-2）不明

概要：本遺跡は、カラ・スウ川東岸の段丘上に位置する 2 基の遺構から成る。

N031-1 は方形遺構であり、外側を廻る土塁（幅 1.5 m、高さ 0.2 m）とその内側の周溝（幅 1.2 m、深さ 0.3 m）から成る（図 4. 61）。南東隅では土塁が途切れて、開口部を呈している。周溝の内側（約 10 m 四方）は平坦面である。遺物を収集できなかったが、平面形や立地等に鑑みると、追悼遺構の可能性が考えられる。

図 4. 61　N031-1 全景（北東から）

図 4. 62　N031-2 全景（北東から）

N031-2 は、外側を廻る土塁（幅 1.5 m）とその内側の周溝（幅 1.5 m、深さ 0.3 ～ 0.4 m）から成る隅丸長方形遺構である（図 4. 62）。土塁は、北東隅と南東隅で途切れている。周溝の内側（東西約 8.0 m、南北約 3.5 m）には平坦面が広がる。遺構の南西部の一部は、後世の掘削により破壊されている。囲い込み遺構に分類できる。

N032 アク＝トベ・スレテンスコエ（Ak-Tobe Sretenskoe）

登録番号：CV18005

調査日：2018.09.27, 28

WGS84：74.097435 E; 42.977002 N

UTM zone 43N：426405.625 m E; 4758655.862 m N

規模：144,961 m^2（シャフリスタンのみ）

標高：628 m

種別：居住址／都市

採集遺物：土器片 6 点（胴部片を除く）

推定時期：6 ～ 12 世紀

概要：本遺跡（シャフリスタン）は、ベロヴォドスコエ・クレポスト（N006）の約 13.5 km 北北西、スレテンカ（Sretenka）集落の 4.5 km 北西、アク・スウ川の東岸に位置する（図 4. 63–64）。遺跡は、ほぼ中央に位置するシャフリスタンと、これを取り囲む外周壁（内郭壁と外郭壁）から成る。1954 年にコジェミャコにより調査が行われているため、以下では、コジェミャコによる報告（Кожемяко 1959: 99–102）に依拠して同遺跡を記述する。

シャフリスタンは、東西約 410 m、南北約 490 m の平面不整五角形を呈し、南西隅が大きく突出する。西側の 2 辺と南西突出部は、アク・スウ川に面している。また、南辺の外側には、アク・スウ川に由来する湿地帯が所在する。シャフリスタンは城壁（周辺地表面からの高さ 2.5 ～ 2.7 m、内側地表面からの高さ 1.0 m）に囲まれており、西隅と南西隅に大型の丘状遺構が残り、塔の痕跡と看做される（Кожемяко 1959: 99）。西隅には 2 基の塔が所在し、直径はそれぞれ 20 m 及び 35 m、城壁からの高さは 3.0 m に達し、城壁の外側に張り出している。南西隅に 1 基の塔が所在するが、その範囲は城壁上に収まっている。また、城壁上には計 16 基の塔が認められた。約 50 m 間隔で配置されていたとすると、元来は 30 以上の

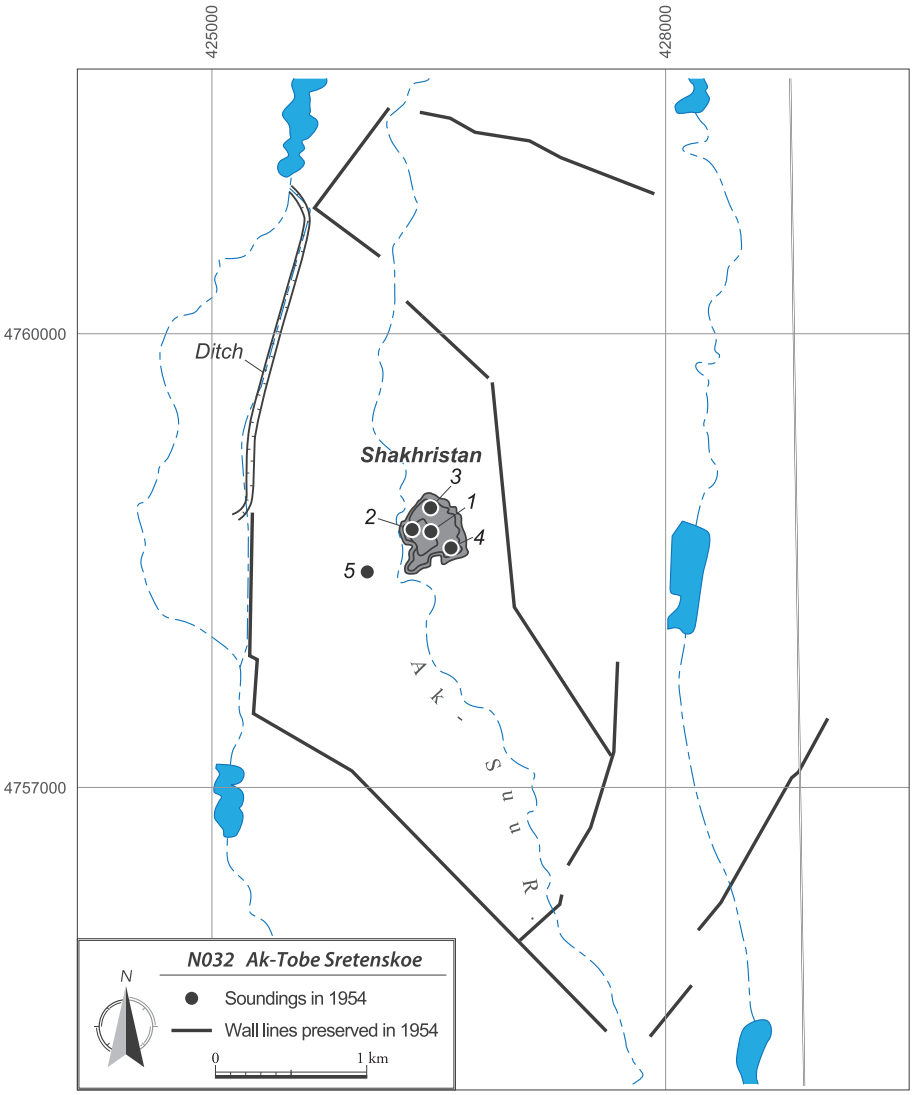

図 4. 63　アク＝トベ･スレテンスコエ（N032）平面図（Кожемяко 1959: Рис. 12 を改変し作成）

図 4. 64　アク＝トベ・スレテンスコエ（N032）シャフリスタン西壁（南から）

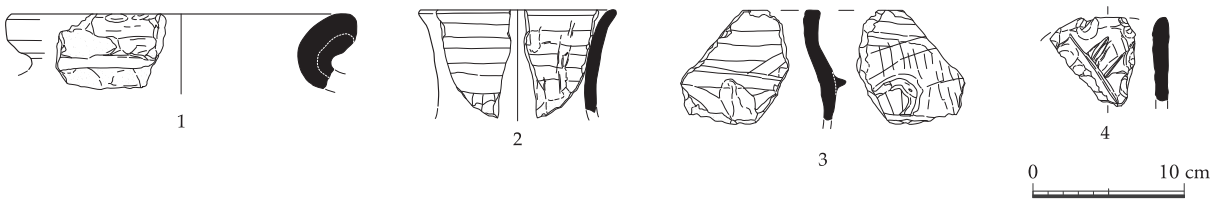

図 4. 65 アク＝トベ・スレテンスコエ（N032）採集土器

Fig. no.	Site no.	Form/Type	Period (Century)	Quality	Rim diam. (mm)	Interior	Exterior	Core	Slip/Wash	Inclusion	Surface treatment (int.)	Surface treatment (ext.)	Comparable materials
4.65:1	N032	Pithos	Late 9th - Early 10th	Medium	232	Orange (5YR7/6)	Orange (7.5YR7/6)	Dull reddish brown (5YR5/4)	-	Large quantities of black and red grit 1.0 mm in diam.	Unclear	Wheel smoothing	帝京大学文化財研究所他 2020: Fig. 3. 45: 13-19-011
4.65:2	N032	Necked jar	UD	Coarse to medium	131	Orange (5YR7/6)	Dull orange (5YR6/4)	Dull orange (5YR7/4)	-	Large quantities of black and red grit 0.5-1.0 mm in diam.	Wheel smoothing, traces of squeezing to make the neck part.	Wheel smoothing	
4.65:3	N032	Cooking pot	Late 8th - Early 9th	Coarse	UD	Dull yellow orange (10YR6/3)	Dull orange (7.5YR7/4)	Dull orange (7.5YR6/4)	-	Large quantities of black grit 0.5-3.0 mm in diam.	Horizontal smoothing on diagonal smoothing, thumb indentations.	Diagonal and horizontal smoothing on vertical smoothing	帝京大学文化財研究所他 2021: Fig. 3. 73: 13-18-099
4.65:4	N032	Lid	Late 8th - Early 9th	Coarse to medium	UD	Orange (5YR7/6) (top)	Dull orange (5YR7/4) (bottom)	Dull orange (5YR6/3)	-	Large quantities of red and black grit 1.0-3.0 mm in diam.	Incised decorations (top)	-	帝京大学文化財研究所他 2021: Fig. 3. 77: 13-18-135

塔が存在したとみられる（Кожемяко 1959: 100）。シャフリスタンの西半部では、周囲よりも 1.2 ～ 2.0 m 高い矩形プラットフォームが北東 - 南西軸で約 240 m、北西 - 南東軸で約 220 m の範囲に広がる。このプラットフォームの中央部北西寄りの地点にはシタデルと考えられる矩形の小丘（基部で 40 × 40 m、高さ 5.0 m）が所在する。また、少し離れた場所には、シタデルと思しきもう 1 つの小丘（基部で 24 × 30 m、高さ 3.0 m）が存在したようである。

シャフリスタンの周辺、アク・スウ川両岸に沿った内郭壁の内側には、1954 年の調査時点では、一般住居址の存在を示唆する多くの小丘が点在した。内郭壁は総長 12.5 km に及び、アク・スウ川西岸の北西端部には塔（直径 16 m、高さ 2.0 m）が取り付く（Кожемяко 1959: 100）。外周壁の他の箇所では塔は見られない。アク・スウ川西岸の内郭壁は、北西部の約 2.0 km にわたって途切れ、この代わりに深い小峡谷が入り込み自然の障壁を成している。外郭壁（基部の幅 8.0 ～ 10 m、残存高 1.0 ～ 1.5 m）は、内郭壁の東方にのみ展開していた。内郭壁の北端及び南端から続くかたちで、総長約 12 km にわたり居住址を取り囲んでいたと考えられる（Кожемяко 1959: 101）。外郭壁は外側に堀を備えていた。外郭壁東辺の大部分は、1954 年調査時には耕作により既に消失していた。外周壁内の地域においても、耕作に起因する土地の削平により、住居址はことごとく破壊されてしまった。

コジェミャコは、シャフリスタンの 4 ヶ所において試掘を行った（Кожемяко 1959: 101）。試掘トレンチ 1（6.0 m^2）は矩形プラットフォーム上に設定され、厚さ 4.8 m の文化層堆積を検出した。出土土器から、上層（0 ～ -1.2 m）は 10 ～ 12 世紀、中層（-1.2 ～ -3.5 m）は 8 ～ 10 世紀、下層（-3.5 ～ -4.2 m）は 6 ～ 8 世紀に位置づけられた。シタデルの西には試掘トレンチ 2（8.0 m^2）が設定され、居住層を含まない複雑な土層堆積が確認された。シャフリスタン北西部の試掘により、2 つの建築層が確認された。シャフリスタン北東部には、試掘トレンチ 3（6.0 m^2）が深さ 2.05 m まで掘削され、2 つの建築層が確認された。試掘トレンチ 1 ～ 3 から出土した遺物は、6 ～ 9 世紀に遡るもの含んでいた。最後に、試掘トレンチ 5（8.0 m^2）はシャフリスタン西の小丘上に設定され、厚さ 2.25 m の文化層堆積が検出された。出土土器から、これらの文化層は 8 ～ 11 世紀に位置づけられた。本プロジェクトにおいて地表面で採集した土器（図 4. 65）もこの年代観と矛盾しない。

ところで、ガリャチェワは同都市の居住期間を 9 ～ 12 世紀と見積もっている（Горячева 2010: 49, Таблица 2）。しかし、この年代観の明確な根拠が示されていないため、本書ではコジェミャコの見解（6 ～ 12 世紀）に従って居住時期を理解しておきたい。ただし、都市域の規模は 10 ～ 12 世紀になって最大化したと考えられる。

先行調査：Кожемяко 1959: 99–102

N033

登録番号：CV19012

調査日：2019.10.04

WGS84：（N033-1）73.854332 E; 42.993726 N；（N033-2）73.854504 E; 42.993618 N；（N033-3）73.854799 E; 42.993433 N；（N033-4）73.854298 E; 42.993462 N

UTM zone 43N：（N033-1）406622.298 m E; 4760742.508 m N; (N033-2) 406622.4 m E; 4760742.655 m N; (N033-3)

406646.168 m E; 4760721.783 m N；（N033-4）406605.371 m E; 4760725.56 m N

規模：4,481 m^2（N033-1: 209 m^2; N033-2: 540 m^2; N033-3: 385 m^2; N033-4: 180 m^2）

標高：619 m

種別：（N033-1）生活遺構／囲い込み遺構；（N033-2, 3）その他遺構／多室遺構；（N033-4）葬祭遺構／単独墓

採集遺物：なし

推定時期：不明

概要：本遺跡は、カラ・スウ川東岸の突出した段丘上に位置する 4 基の遺構から成る（図 4. 66）。

N033-1 は、外側を廻る土塁（幅 1.2 m）とその内側の周溝（幅 1.0 m）から成る楕円形囲い込み遺構である（図 4. 67）。周溝の内側（東西約 10 m、南北約 5.0 m）には平坦面が広がる。遺構の南辺は、最近の轍により破壊されている。

N033-2 は、N033-1 の東に隣接する長方形遺構である（図 4. 68）。遺構は外側を廻る土塁（幅 1.2 m）とその内側の周溝（幅 1.0 m）から構築されており、周溝の内側（東西約 10 m、南北約 16 m）はいくつかの空間に分割されている。この内部を分割する溝は、遺構が放棄された後に掘削された可能性もあり、内側は元来 1 つの空間であったかもしれない。なお、遺構の北寄り部分には東西に轍が通り、遺構を部分的に破壊している。

N033-3 は、N033-2 の南東に隣接して造られた長方形遺構である（図 4. 69）。遺構は外側を廻る土塁（幅 1.2 m）とその内側の周溝（幅 1.0 m）により構築されるが、土塁の西辺は現存しない。北辺の中央では土塁と周溝が途切れており、開口部を成す。内側（東西約 13.5 m、南北約 10 m）は溝により 3 つの空間（東・北西・南西）に分割される。北と北西の空間は平坦面であったが、南西の空間はマウンド状に盛り上がる。

N033-4 は、小型の円墳と考えられる（図 4. 70）。外周の外側には土塁（幅 1.2 ～ 1.5 m）、内側には周溝（幅 1.2 m、深さ 0.3 ～ 0.4 m）が廻り、周溝の内側（直径 4.5 m）には低い墳丘が見られる。

N034

登録番号：CV19011

調査日：2019.10.04

WGS84：（N034-1）73.855992 E; 42.994471 N；（N034-2）73.85626 E; 42.994864 N；（N034-3）73.85619 E; 42.995153 N

UTM zone 43N：（N034-1）406747.357 m E; 4760828.735

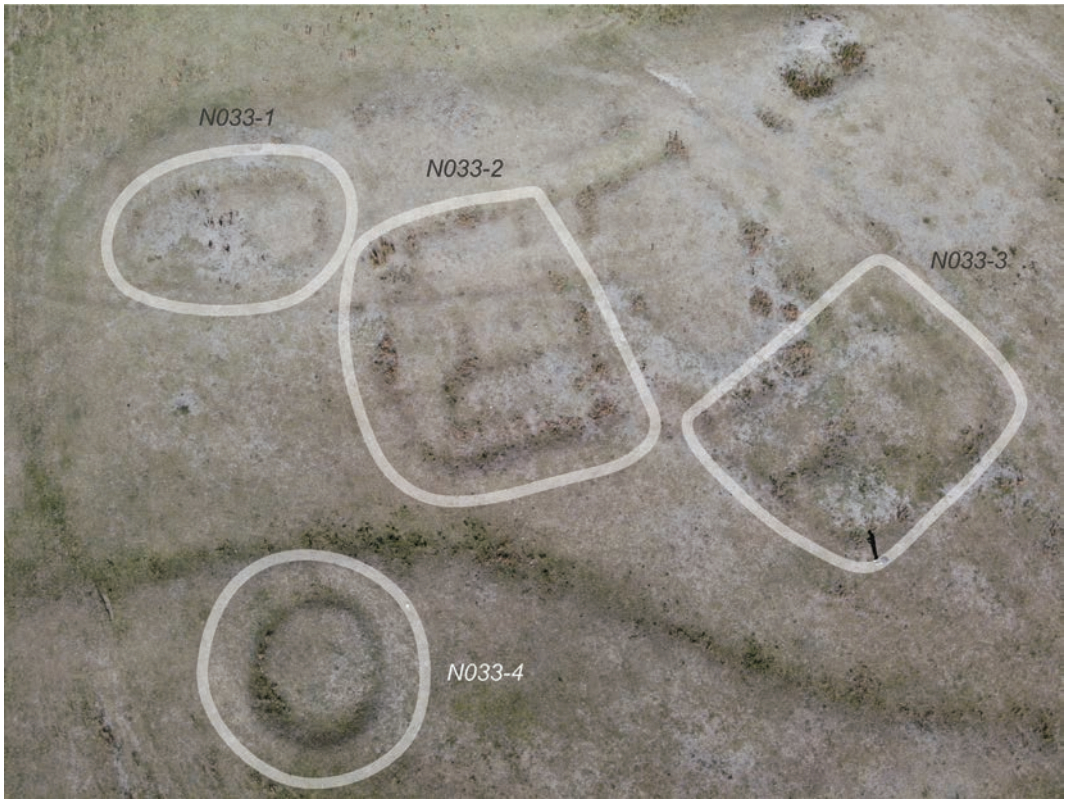

図 4. 66　N033 空撮俯瞰（上が北）

図 4. 67　N033-1 全景（北西から）

図 4. 69　N033-3 全景（北西から）

図 4. 68　N033-2 全景（南東から）

図 4. 70　N033-4 全景（南西から）

m N；（N034-2）406767.429 m E; 4760879.073 m N；（N034-3）406762.16 m E; 4760911.244 m N

規模：2,931 m^2（N034-1: 245 m^2; N034-2: 173 m^2; N034-3: 190 m^2）

標高：612 m

種別：生活遺構／囲い込み遺構（N034-1, 3）；葬祭遺構／単独墓（N034-2）

採集遺物：なし

推定時期：不明

概要：本遺跡は N033 の約 130 m 北東、カラ・スウ川東岸の段丘上平坦面に位置し、少なくとも 3 基の遺構から成る（図 4. 71）。

N034-1 は、2 基の重複する囲い込み遺構から成る（図 4. 72）。両者共に外側を廻る土塁（幅 1.2 m、高さ 0.2 ～ 0.3 m）とその内側の周溝（幅 1.5 m、深さ 0.3 ～ 0.4 m）により構築される。北の楕円形遺構の方が古く、現況の内寸は東西約 6.0 m、南北約 6.0 m を測るが、元来の南北長はより長かった。南の隅丸矩形遺構は、北の楕円形遺構の南端を壊して造られている。この隅丸矩形遺構の内寸は、東西約 5.0 m、南北約 3.5 m とより小型である。なお、両遺構の内側はいずれも平坦面を成す。

N034-2 は、N034-1 の約 35 m 北東に位置し、小型の円墳と考えられる（図 4. 73）。低い墳丘（東西約 5.0 m、南北約 4.0 m）の外周を、外側の土塁（幅 1.2 m、高さ 0.2 ～ 0.3 m）とその内側の周溝（幅 1.0 m、深さ 0.3 ～ 0.4 m）が廻るが、東辺の土塁は現在の耕作地により破壊されている。なお、円墳の北西には、外側を廻る土塁とその内側の周溝から成る別の円形遺構の一部が認められ、元来存在した遺構である蓋然性が高い。

最北の N034-3 は、N034-1 の約 60 m 北に位置する楕円形囲い込み遺構である（図 4. 74）。遺構は、外側を廻る土塁（幅 1.0 m）とその内側の周溝（幅 1.0 m）から成り、周溝の内側（東西約 8.0 m、南北約 6.0 m）には平坦面が広がる。土塁は残存状態が悪く、特に東辺と南辺では僅かな痕跡のみが見られた。東辺中央では土塁・周溝共に途切れており、出入口と考えられる開口部が見られる。

図 4. 71　N034 空撮全景（南から）

図 4. 72　N034-1 全景（北東から）

図 4. 74　N034-3 空撮俯瞰（上が北）

図 4. 73　N034-2 全景（南東から）

図 4. 75　N035-1 全景（北西から）

N035

登録番号：CV19010

調査日：2019.10.04

WGS84：（N035-1）73.853152 E; 42.996511 N；（N035-2）73.853102 E; 42.996406 N

UTM zone 43N：（N035-1）406516.637 m E; 4761065.437 m N；（N035-2）406512.339 m E; 4761053.821 m N

規模：347 m^2（N035-1: 76 m^2; N035-2: 155 m^2）

標高：596 m

種別：葬祭遺構／単独墓

採集遺物：なし

推定時期：不明

概要：本遺跡は、カラ・スウ川西岸の段丘上に位置する、2 基の円墳と考えられる遺構から成る。

N035-1 は北の円墳であり、極めて低い墳丘（直径 4.8 m、高さ 0.2 ～ 0.3 m）と、その外周を廻る溝（幅約 1.0 m、深さ 0.1 ～ 0.2 m）から成る（図 4. 75）。溝の外側、南東辺の一部には土塁と思われる痕跡が見られたが、定かではない。

N035-2 は、N035-1 の約 5.0 m 南に位置する円墳である（図 4. 76）。僅かに楕円形を成す低い墳丘（直径約 5.5 m、高さ 0.4 ～ 0.5 m）と、これを取り囲む外側を廻る土塁（幅約 1.5 m）とその内側の周溝（幅約 1.5 m、高さ 0.4 m）から成る。土塁は残存状況が悪く、北辺と南辺に僅かに残るのみである。

N036

登録番号：CV19013

調査日：2019.10.04

WGS84：（N036-1）73.853398 E; 42.999255 N；（N036-2）73.853334 E; 42.999148 N；（N036-3）73.853266 E; 42.999002 N

図 4. 76　N035-2 全景（北東から）

UTM zone 43N：（N036-1）406540.723 m E; 4761369.935 m N；（N036-2）406535.406 m E; 4761358.062 m N；（N036-3）406529.642 m E; 4761341.924 m N

規模：783 m^2（N036-1: 161 m^2; N036-2: 212 m^2; N036-3: 192 m^2）

標高：618 m

種別：葬祭遺構／追悼遺構？

採集遺物：なし

推定時期：6 ～ 8 世紀？

概要：本遺跡は、カラ・スウ川西岸の段丘上縁辺に位置する、南北に並ぶ 3 基の矩形遺構から成る。遺構が位置する段丘面は浸食を受け続けてきたと思われ、いずれの遺構も東辺が残存しない。これらの遺構は、その平面形と構築方法に鑑みて、追悼遺構と推測される。

最も北に位置する N036-1 は、外側を廻る土塁とその内側の周溝（幅 1.2 m）から成るが、土塁の残存状況は悪く明瞭ではない（図 4. 77）。周溝の内側は現況で東西約 5.5 m、南北約 5.8 m を測り、平坦面を成す。遺構の東部は現存しない。

N036-2 は、N036-1 の南辺に接して造られている。N036-1 と同様に、外側を廻る土塁とその内側の周溝（幅

図 4. 77　N036-1 全景（南西から）

図 4. 78　N036-2 全景（南東から）

1.4 m）から成る（図 4. 78）。土塁は全体的にあまり残存せず、土塁・周溝共に東辺付近は現存しない。周溝の内側は、現況では東西約 8.0 m、南北 5.5 ～ 6.0 m の平坦面を成す。

N036-3 は、N036-2 の約 7.0 m 南に位置する（図 4. 79）。この遺構は最も残りが悪く、遺構の東側半分以上が段丘の浸食作用により失われている。残存部分を参照すると、外周外側に土塁、その内側に周溝（幅 1.4 m）が廻っていたと考えられる。現況では、外寸で南北 9.5 m を測る。

N037

登録番号：CV19022
調査日：2019.10.07
WGS84：73.905033 E; 43.027819 N
UTM zone 43N：410790.964 m E; 4764485.799 m N
規模：201 m^2
標高：600 m
種別：葬祭遺構／単独墓
採集遺物：なし
推定時期：不明

図 4. 79　N036-3 全景（北西から）

図 4. 80　N037 全景（南東から）

概要：本遺跡は、ジョン・アリク川東岸の段丘上に位置する円墳である（図 4. 80）。遺構は東西 5.8 m、南北 3.7 m を測る楕円形の低い墳丘と、外側を廻る土塁（幅 1.9 m、高さ 0.2 m 未満）とその内側の周溝（幅 2.1 m、深さ 0.3 m）から成る。墳丘に盗掘坑は認められなかった。

N038

登録番号：CV19021
調査日：2019.10.07
WGS84：（N038-1）73.906181 E; 43.030185 N;（N038-2）73.906096 E; 43.030072 N
UTM zone 43N：（N038-1）410887.855 m E; 4764747.399 m N；（N038-2）410880.801 m E; 4764734.817 m N
規模：912 m^2（N038-1: 444 m^2; N038-2: 494 m^2）
標高：603 m
種別：生活遺構／囲い込み遺構（N038-1）・建物遺構（N038-2）
採集遺物：なし
推定時期：（N038-1）不明；（N038-2）近世・近代
概要：本遺跡は、ジョン・アリク川東岸の段丘上に位置し、部分的に重複する 2 基の遺構から成る（図 4. 81）。

元来存在した N038-1 は楕円形囲い込み遺構と見られ、北側に部分的に現存する（図 4. 82）。この遺構は、外側を廻る土塁（幅 2.1 m、高さ 0.2 m）とその内側の周溝（幅

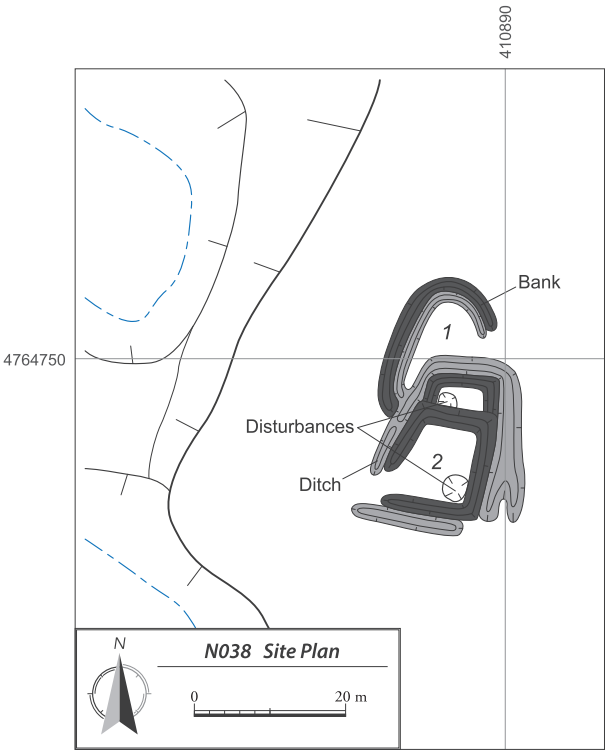

図 4. 81　N038 平面図

図 4. 82　N038-1 全景（北東から）

図 4. 83　N038-2 全景（北西から）

1.8 m、深さ 0.3 ～ 0.4 m）から成り、周溝の内側には平坦面が広がる。東辺の一部では土塁・周溝が途切れており、開口部を成す。現況では、南東半が N038-2 により破壊されており、内寸は東西約 9.0 m、南北約 7.0 m を測る。

N038-2 は、N038-1 の南東半部を壊して造られた矩形建物遺構である（図 4. 83）。この遺構は、外周を溝（幅 2.3 m、深さ 0.5 m）に囲まれた、南北に連なる 2 つの空間から成る。各空間は土塁（幅 2.3 m、高さ 0.4 m）により区画されているが、この土塁は、泥レンガ製壁体基部の痕跡と考えられる。北の空間は、東西約 5.0 m、南北 3.5 m を測る。空間内にはいくつかの窪みが見られた。南の空間は約 9.0 m 四方の方形を成しており、周囲の地表面よりも高い平坦面が広がる。平坦面の南東隅には、盗掘坑と思しき土坑が掘削されていた。

N039

登録番号：CV22102
調査日：未踏査
WGS84：73.873379 E; 43.053322 N
UTM zone 43N：408250.79 m E; 4767352.23 m N
規模：直径 62 m
標高：610 m
種別：葬祭遺構／クルガン
採集遺物：なし
推定時期：前 8 ～前 3 世紀
概要：踏査中に車上から確認した後、衛星写真上で再確認した。本遺跡は、カラ・スウ川東岸の段丘上に位置する、1 基の大型クルガンから成る。衛星写真上では、直径約 60 m を測る。現状では明確なクロップ・マークは残っていないが、元来は複数基が南北に連なっていたものと考えられる。

N040

登録番号：CV19029
調査日：2019.10.10, 2022.09.22
WGS84：73.873016 E; 43.084664 N
UTM zone 43N：408267.262 m E; 4770832.942 m N
規模：43,862 m^2（シャフリスタン）
標高：551 m
種別：居住址／町（中型）
採集遺物：土器片 11 点
推定時期：9 ～ 10 世紀頃
概要：本遺跡は西のトク・タシュ川と東のカラ・スウ川の合流地点南岸平坦面に位置する（図 4. 84）。周囲は、遺跡から北北東約 30 km の地点を北西方向に流れるチュー川に注ぐ小河川によって形成された沖積平野であり、平坦面が広がる。遺跡は平面不整五角形を呈しており、城壁が外周を廻る（図 4. 85–86）。現況目視可能な範囲で、東西約 274 m、南北約 227 m を測る。城壁は浸食により崩落して断面台形を呈しており、基部で厚さ 15 m 程度、高さは城壁外側の現地表面から最大で 7.0 m 程度残存している。城壁上には、塔の痕跡と考えられる円形の高まりが少なくとも 21 ヶ所で認められた。西南・東南・東隅・北東隅・北西隅付近の他、北面・西面中央・南面中央では、やや大きめの塔が 2 基並ぶ。城壁の状態や内外の状況から判断すると、北面・西面中央・南面中央の塔は、元来の出入口、城門であった可能性が高い。城壁の内側は外側よりも少なくとも 4.0 m 程度高い平坦面を呈しており、南西部にくぼみ、南部から東部にかけて僅かな高まりが見られる他には目立った起伏や遺構の痕跡は認められない。遺構の痕跡も特に見られなかった。城壁の外側は、北・西・東面の城壁近くを小河川に囲まれる一方、南側は平坦地であり、現在は耕作地として利用されている。南側の耕作地内には比較的多くの土器片

図 4. 84　N040+041 空撮遠景（北西から）

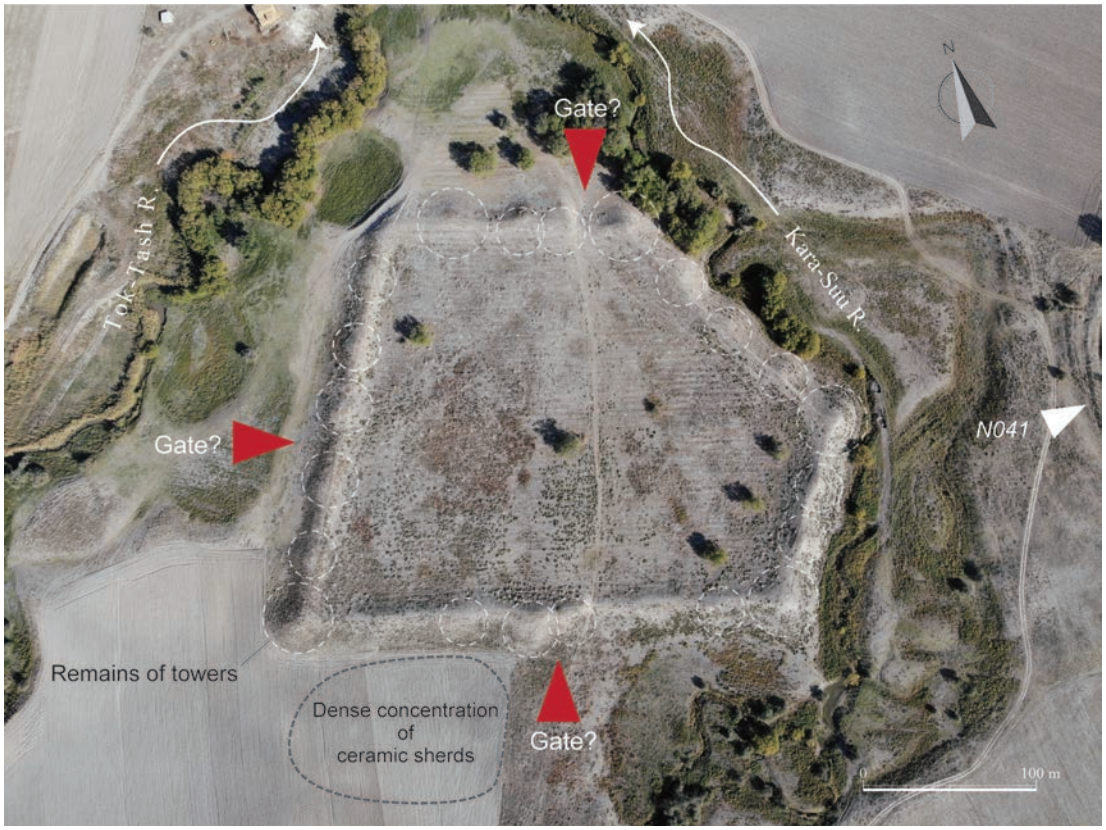

図 4. 85　N040 空撮俯瞰（上が北）

図 4. 86　N040 全景（北東から）

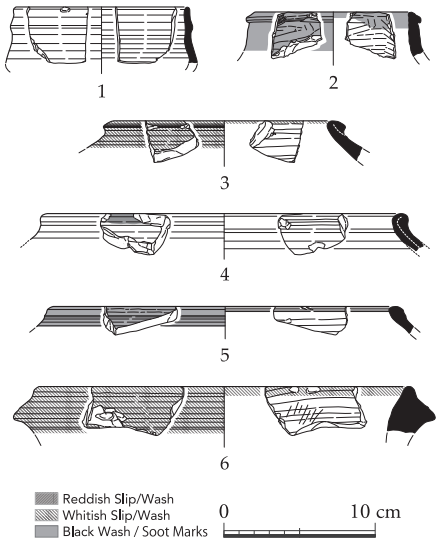

図 4. 87　N040 採集土器

Fig. no.	Site no.	Form/Type	Period (Century)	Quality	Rim diam. (mm)	Interior	Exterior	Core	Slip/Wash	Inclusion	Surface treatment (int.)	Surface treatment (ext.)	Comparable materials
4.87:1	N040	Cup	Late 9th - Late 10th	Fine	116	Orange (2.5YR6/6)	Orange (2.5YR6/6)	Orange (2.5YR6/6)	-	Large quantities of mica, small quantities of red and black grit 0.5-1.0 mm in diam.	Wheel smoothing	Wheel smoothing	山藤 2023: 図 7: 10
4.87:2	N040	Necked jar	Late 9th - Late 10th?	Coarse	116.5	Orange (5YR6/6)	Orange (5YR6/6)	Yellow-ish gray (2.5Y5/1)	Blackened on rim and ext (sooted?).	Large quantities of sand grit 0.5-4.0 mm in length, small quantities of mica.	Horizontal and diagonal smooth-ing	Horizontal smoothing (some-how random)	
4.87:3	N040	Short-necked jar	Late 9th - Late 10th?	Medium	160	Orange (2.5YR6/6)	Orange (5YR6/6)	Orange (2.5YR6/6)	White wash (Dull orange: 7.5YR7/3) on ext.	Large quantities of red and black grit 0.5-3.0 mm in length, small quantities of calcite 0.5-1.0 mm in diam.	Horizontal smoothing	Wheel smoothing	
4.87:4	N040	Short-necked jar	Late 9th - Late 10th	Medium	243	Orange (5YR6/6)	Orange (5YR6/6)	Dull orange (5YR6/4)	Soot marks on ext. rim.	Large quantities of limestone fragments 0.5-1.0 mm in diam., small quantities of gray grit 0.5-1.0 mm in diam. and calcite 0.5-1.0 mm in diam.	Wheel smoothing	Wheel smoothing	帝京大学文化財研究所他 2020: Fig. 4. 54: 15-19-042
4.87:5	N040	Holemouth jar	Late 9th - Late 10th?	Coarse to medium	235	Dull orange (5YR6/4)	Grayish brown (5YR5/2)	Orange (5YR7/6)	Blackened on ext (sooted?).	Large quantities of black and red grit 0.5-1.5 mm in diam. and mica, very small quantities of limestone fragments 0.5-1.5 mm in length.	Horizontal smoothing	Wheel smoothing	
4.87:6	N040	Pithos	Late 9th - Late 10th?	Medium	246	Dull orange (7.5YR6/4)	Dull orange (7.5YR7/4)	Dull orange (7.5YR7/4)	White wash (Pale yellow: 2.5Y8/3) on ext.	Large quantities of black grit 0.5-1.0 mm in diam., several quartz 0.5 mm in diam., a few mica.	Horizontal smoothing on diagonal scraping	Wheel smoothing	

が散布していたことから、城壁外南側では何らかの居住活動が行われていた可能性が高い。なお、N040 の北東には、カラ・スウ川を挟んで南北に細長い丘上に、多数の小規模な円墳から成る墓域（N041）がある。この墓域の年代は、N040 よりも古いと考えられる。

N040 では、少数ながらも図示に堪える土器片を採集した（図 4. 87）。これだけで時期の確定は難しいが、内傾する口縁部を持つカップ（図 4. 87: 1）や口縁部が僅かに立ち上がる粗製無頸壺（調理具）（図 4. 87: 4, 5）の存在から、おおよそ 9 世紀後半～ 10 世紀後半の年代を与えることができるだろう（cf. 城倉他 2018; 櫛原 2020; 山藤 2023）。ただし、これらの資料の大部分は城壁外で採集されており、城壁内部の年代をそのまま示すとは限らないので、注意が必要である。

2022 年には、同遺跡において小型 UAV による空撮を実施し、SfM-MVS による遺跡の簡易な地形図を作成した（図 4. 88）。空撮は高度 60 m から行い、各写真の重複率が少なくとも 70% になるように撮影設定した。Metashape により生成した DEM（Digital Elevation Model）に基づく等高線図は、遺跡全体の地形的特徴を十分に示しており、地上での観察を補完している。

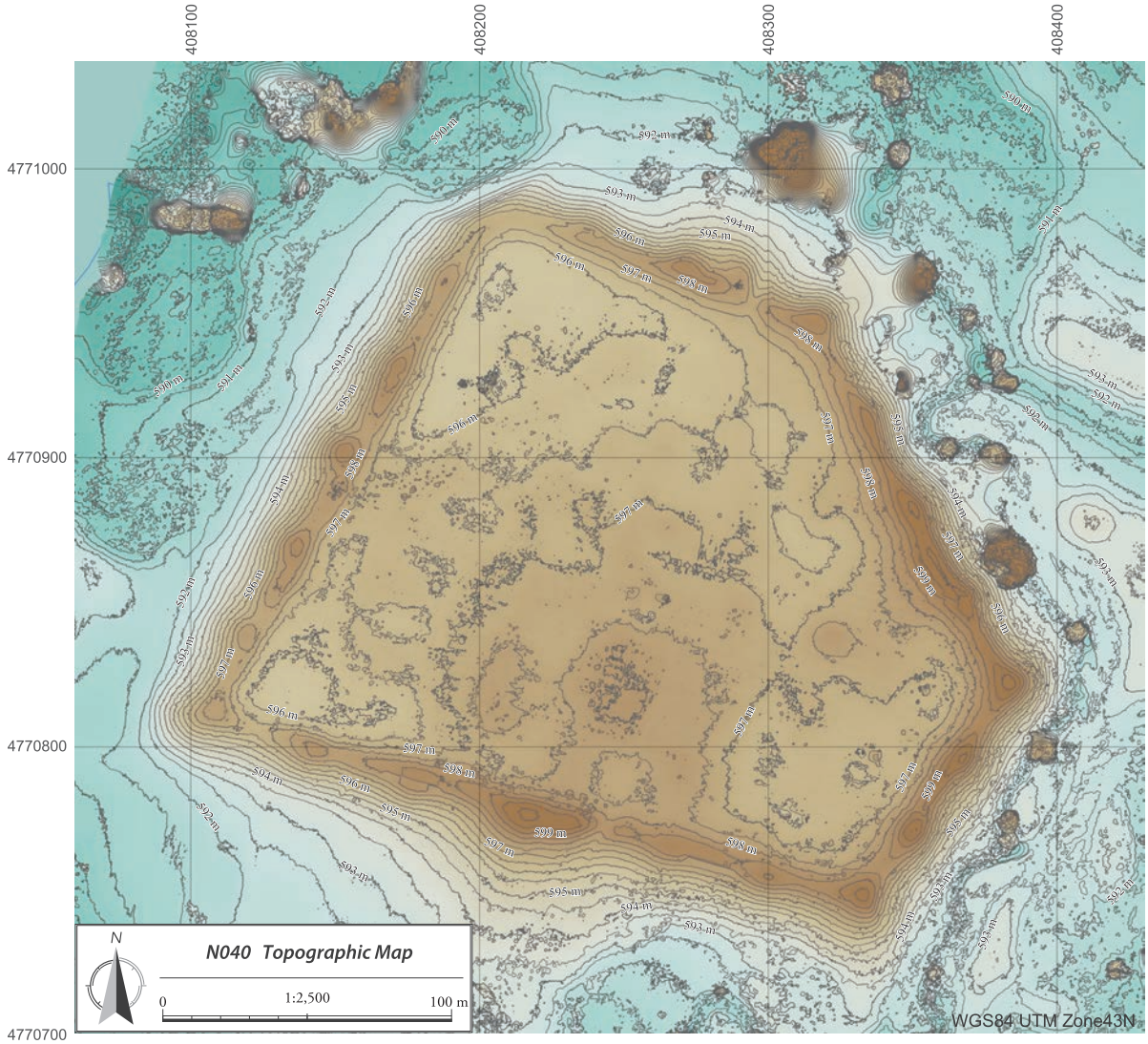

図 4. 88　N040　UAV 測量図（1: 2,500）

N041

登録番号：CV19030

調査日：2019.10.10

WGS84：73.881455 E; 43.087096 N

UTM zone 43N：408957.77 m E; 4771093.971 m N

規模：141,923 m^2

標高：594 m

種別：葬祭遺構／墓地

採集遺物：なし

推定時期：1 ～ 5 世紀頃?

概要：本遺跡は、西のカラ・スウ川と東のサイ・ジェケン川の間に横たわる南北に長い丘陵上（東西最大約 370 m、南北約 900 m）に位置する（図 4. 84）。墓地は 100 基以上の小型円墳（直径約 8.0 m、高さ 1.0 m 程度）から成る（図 4. 89）。墳丘は土盛により造られており、葺き石等の散布は見られない。また、各墳丘の周囲には土塁・周溝は認められなかった。墓域内では、少なくとも 2 基の墳丘頂部に盗掘坑が掘削されていた。

図 4. 89　N041 全景（北から）

表採できた遺物は皆無であったが、規模や密集状況に鑑みて、ケンコル文化に属する可能性がある。

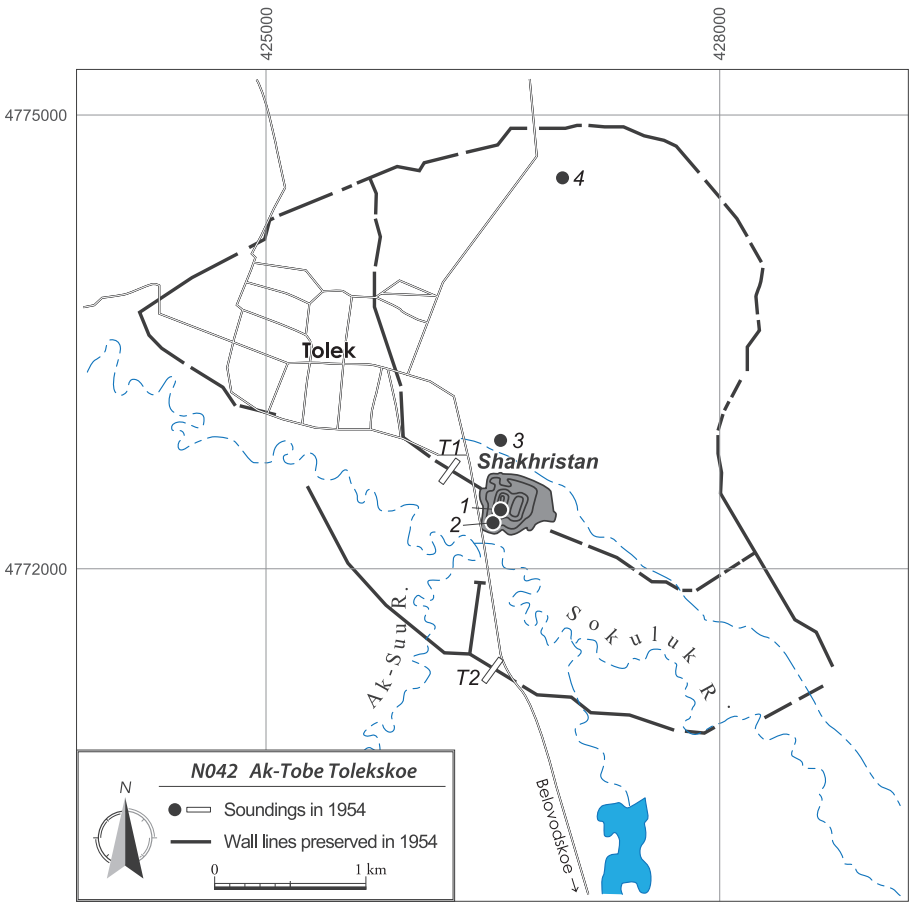

図 4. 90　アク＝トベ・チューレクスコエ（N042）平面図（Кожемяко 1959: Рис. 26 を改変し作成）

N042 アク＝トベ・チューレクスコエ
（Ak-Tobe Tolekskoe）

登録番号：CV18006

調査日：2018.09.28

WGS84：74.097653 E; 43.100506 N

UTM zone 43N：426570.717 m E; 4772370.35 m N

規模：178,663 m^2（シャフリスタン）

標高：583 m

種別：居住址／都市

採集遺物：なし

推定時期：9 ～ 12 世紀

概要：本遺跡（シャフリスタン）は、アク＝トベ・スレテンスコエ（N032）の約 13.8 km 北、今日のチューレク（Tolek）集落の南東外側の、アク・スウ川とソークルーク川の合流地点北東岸に位置する（図 4. 90–91）。遺跡は、中央南寄りに位置するシャフリスタンとシタデル、及び、一帯を取り囲んでいた外周壁から成る。1954 年にコジェミャコにより調査が行われているため、以下では、コジェミャコによる報告（Кожемяко 1959: 118–122）に依拠して同遺跡を記述する。

シャフリスタンは、平面不整多角形を呈し、東西約 530 m、南北約 460 m を測る。全体は城壁で囲まれており、東と西に城門の痕跡が確認された（Кожемяко 1959: 118）。城壁の南・西・北辺では塔の遺構が残存した。シャフリスタンでは 4 段の居住面が確認されており、中央西寄りの 200 m 四方の第 3 居住面北西隅に、シタデル（東西約 80 m、南北約 60 m、高さ 2.0 ～ 2.5 m）が所在する。

図 4. 91　アク＝トベ・チューレクスコエ（N042）全景（南西から）

1954 年調査時には、外周壁の残存状態は良好であった（Кожемяко 1959: 119）。総長 9.5 km の外周壁（基部幅 10 ～ 14 m、残存高 1.2 ～ 1.8 m）は所々で途切れ

ていたが、これは城門の痕跡と解されている。なお、コジェミャコによる外周壁の断ち割り調査（図 4. 90 中 T1・T2）により、元来の壁体幅が 3.0 m であることが判明している。外周壁内（ラバト）には区画壁が造られており、シャフリスタンを挟むように配されて、ラバトを南北に二分している。なお、コジェミャコにより図示されていないが、外周壁の西隅からは、別方向に城壁が延びていたという（Кожемяко 1959: 120）。ラバトには、特にシャフリスタンの南側において、大小遺構が丘のかたちで多く分布していた（Кожемяко 1959: 120）。

コジェミャコは、4 ヶ所において試掘調査を実施した（Кожемяко 1959: 121）。2 ヶ所はシャフリスタン、2 ヶ所はその外側である。試掘トレンチ 1（10 m^2）は第 3 居住面上に設定され、厚さ 6.2 m の文化層堆積が確認された。文化層は 3 段階に区分された。これらのうち、上層は 10 ～ 12 世紀、下層は 9 ～ 10 世紀に位置づけられた。試掘トレンチ 2（10 m^2）は第 2 居住面に設定され、厚さ 5.1 m の文化層堆積が検出された。ここでは、4 つの建築層が確認された。出土土器に基づき、この第 2 居住面はロクロ成形の土器と施釉陶器が普及する以前、すなわち 10 世紀以前に形成されたと考えられた（Кожемяко 1959: 122）。シャフリスタンの北方、ラバト内の丘（直径 25 m、高さ 2.0 m）上に試掘トレンチ 3 が設けられ、厚さ 2.7 m の文化層堆積が得られた。発掘調査の結果、上層（-2.0 m まで）は 11 ～ 12 世紀、下層は 9 ～ 10 世紀に位置づけられた。試掘トレンチ 4 は、外周壁に程近いラバト北部に設定され、厚さ 1.65 m の文化層堆積が確認された。2 つの建築層が区分され、いずれも 11 ～ 12 世紀に位置づけられた。以上から、同居住址は 11 ～ 12 世紀に急激に拡大したことが示唆される。

今日では、シャフリスタン第 3 居住面上は墓地として利用されており、外周壁のほとんどは耕作により破壊されてしまった。

先行調査：Кожемяко 1959: 118–122

3. 南半部の登録遺跡

S001

登録番号：CV19017
調査日：2019.10.05
WGS84：73.794381 E; 42.83383 N
UTM zone 43N：401459.498 m E; 4743067.196 m N
規模：6,478 m^2
標高：736 m
種別：居住址／城塞
採集遺物：なし
推定時期：10 ～ 12 世紀か
概要：本遺跡は、小河川間の段丘上に位置する大型方形遺構である（図 4. 92）。規模は外寸で 76 m 四方、内寸で 50 m 四方を測り、外側に周溝（幅 3.5 m、深さ 1.0 m）、その内側に土塁（幅 4.5 m、高さ 0.6 m）が廻る。土塁の内側には、西部と南東部に窪地が見られる以外は、周囲の地表面よりも僅かに低い平坦面が広がり、いかなる遺構も認められない。

北西隅と南西隅では周溝が途切れており、出入口であった可能性もある。また、東辺の土塁と重複するかたちで未舗装道路が南北に貫いているため不確実ではあるが、北東隅・南東隅の周溝も途切れて開口部を成していた蓋然性が高い。

なお、遺構の四隅には、塔の痕跡は一切認められなかった。

類似した遺構として、N012 と S051 が挙げられる。おそらく、両遺構と同時期の所産であろう。

S002

登録番号：CV19031
調査日：2019.10.10
WGS84：73.847397 E; 42.833922 N
UTM zone 43N：405800.128 m E; 4743016.635 m N
規模：344 m^2
標高：747 m
種別：葬祭遺構／追悼遺構
採集遺物：なし
推定時期：6 ～ 8 世紀？
概要：本遺跡は、シス・トベ（N005）シャフリスタン南西隅から約 1.0 km 南、サイ・ジェケン川東岸の段丘縁

図 4. 92　S001 全景（南東から）

辺付近に位置する、ほぼ方形の矩形遺構 1 基から成る（図 4. 93）。矩形遺構は外側を廻る土塁（幅 3.2 m、高さ 0.45 m）とその内側を周溝（幅 2.4 m、深さ 0.6 m）から成り、内寸は東西約 7.5 m、南北約 8.5 m を測る。土塁の四隅は途切れ、幅 2.4 m の開口部を成している。

周溝の内側は、周囲よりも僅かに高い平坦面を成しており、その中央部には南北に並ぶ 2 基の盗掘坑とその東隣に盗掘による廃土山が見られる。

S003 ペトロフカ 4（Petrovka 4）
登録番号：CV22038
調査日：未踏査（遠方からの観察のみ）
WGS84：74.050891 E; 42.829223 N（北端）
UTM zone 43N：422425.512 m E; 4742287.396 m N（北端）
規模：261 m 長
標高：763 m
種別：葬祭遺構／クルガン
採集遺物：なし
推定時期：前 8 〜前 3 世紀
概要：本遺跡は、ペトロフカ集落東部を通る東西幹線道路の約 880 m 南の耕作地境に位置する（図 4. 94）。テレノジュキンによる 1929 年の踏査における、No. W119 に比定できる（cf. Тереножкин 2012a: Рис. 2-a, 2012б: 62–63, Рис. 21）。

現況では、南北 1 列に並ぶ 3 基のクルガン（直径 35 〜 40 m）が残存する。テレノジュキンによれば、1929 年時点では直径 25 〜 38 m、高さ 0.6 〜 2.0 m のクルガンが 10 基残存していた（Тереножкин 2012б: 63）。その後、他のクルガンは農地開墾や耕作活動により削平されたのだろう。
先行調査：Тереножкин 2012б: 62–63, Рис. 21

S004 ペトロフカ 3（Petrovka 3）
登録番号：CV22037
調査日：未踏査（遠方からの観察のみ）
WGS84：74.063156 E; 42.828081 N（北端）
UTM zone 43N：423426.577 m E; 4742149.364 m N（北端）
規模：435 m 長
標高：762 m
種別：葬祭遺構／クルガン
採集遺物：なし
推定時期：前 8 〜前 3 世紀

図 4. 93　S002 全景（北東から）

概要：本遺跡は、ペトロフカ集落東部を通る東西幹線道路の約 650 m 南の耕作地内に位置する（図 4. 94–95）。テレノジュキンによる 1929 年の踏査における、No. 114 に比定できる（cf. Тереножкин 2012a: Рис. 2-a, 2012б: 62, Рис. 21）。

現況では、ほぼ南北に並ぶ 3 基のクルガン（直径 25 〜 30 m）が残存するが、縁辺部は耕作により部分的に破壊を受けている。1929 年にはテレノジュキンによって、南にもう 1 基のクルガンが確認された（Тереножкин 2012б: 62, Рис. 21）。このクルガンは、その後の農地開墾や耕作活動によりほぼ完全に削平されたと思われ、衛星写真上でわずかなクロップ・マークが見られるのみである。
先行調査：Тереножкин 2012б: 62, Рис. 21

S005 ペトロフカ 1（Petrovka 1）
登録番号：CV22035
調査日：未踏査（遠方からの観察のみ）
WGS84：74.063422 E; 42.824581 N（北端）
UTM zone 43N：423444 m E; 4741760.462 m N（北端）
規模：636 m 長
標高：772 m
種別：葬祭遺構／クルガン
採集遺物：なし
推定時期：前 8 〜前 3 世紀
概要：本遺跡は、ペトロフカ集落東部を通る東西幹線道路の約 790 m 南の耕作地境に位置する（図 4. 94, 96）。テレノジュキンによる 1929 年の踏査における、No. 115 に比定できる（cf. Тереножкин 2012a: Рис. 2-a, 2012б: 62, Рис. 21）。

現況では、ほぼ南北に並ぶ 7 基のクルガン（直径 25 〜 35 m）から成る。このうち、北端の 1 基は激しい破壊を受けていた。テレノジュキンによれば、1929 年時

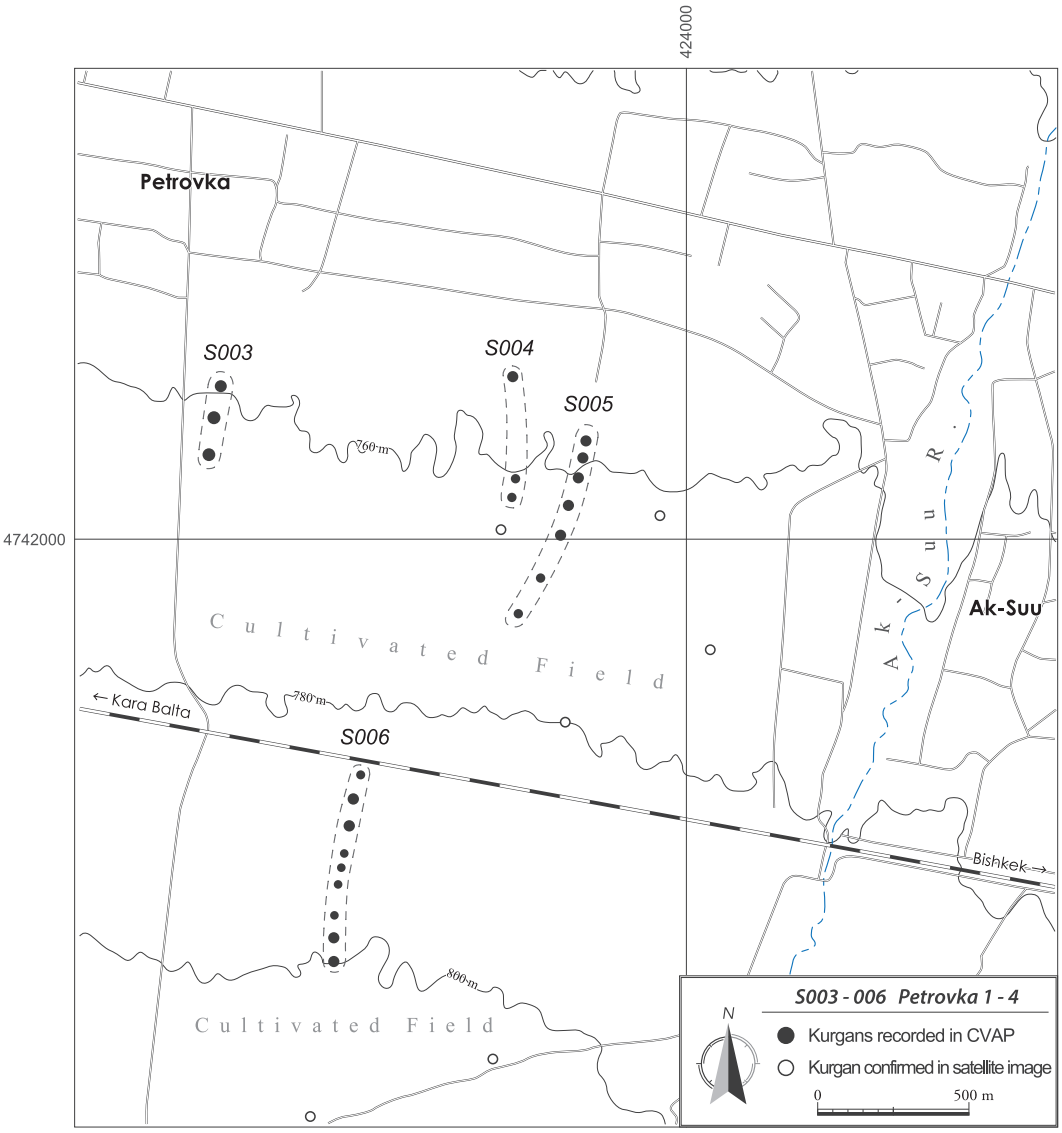

図 4. 94　ペトロフカ 1–4（S003–006）位置図

図 4. 95　ペトロフカ 3（S004）遠景（東から）

図 4. 96　ペトロフカ 1（S005）空撮全景（北から）

点では高さ 1.0 ～ 1.5 m のクルガンが 8 基残存していた（Тереножкин 2012б: 62, Рис. 21）。元来はさらに多くのクルガンが南北に連なっていた可能性があるが、農地開墾や耕作活動により完全に削平されたと思われる。

なお、1929 年の調査では、S005 の東に平行して南北に並ぶ 7 基のクルガンが存在した（Тереножкин 2012б: 62, Рис. 21）が、現在では単独のクルガンが数基のみ点在する（図 4. 94）。

先行調査：Тереножкин 2012б: 62, Рис. 21

S006 ペトロフカ 2（Petrovka 2）
登録番号：CV22036
調査日：未踏査（遠方からの観察のみ）
WGS84：74.056125 E; 42.814102 N（北端）
UTM zone 43N：422834.507 m E; 4740603.465 m N（北端）
規模：656 m 長
標高：799 m
種別：葬祭遺構／クルガン
採集遺物：なし
推定時期：前 8 ～前 3 世紀
概要：本遺跡は、ペトロフカ集落東部を通る東西幹線道路の約 2.0 km 南の耕作地内、ビシュケク - カラ・バルタを結ぶ鉄道のすぐ南に位置する（図 4. 94, 97）。テレノジュキンによる 1929 年の踏査で確認された遺跡中には、これに比定できるクルガンは認められなかった。

現況では、ほぼ南北に並ぶ 9 基のクルガン（直径 25 ～ 38 m）から成り、南端のクルガンが最も大きい。

S007 カラ・バルタ（Kara-Balta）
登録番号：CV18019
調査日：2018.10.04
WGS84：73.892197 E; 42.790929 N
UTM zone 43N：409372.821 m E; 4739204.803 m N
規模：1,837 m 長
標高：819 m
種別：葬祭遺構／クルガン
採集遺物：なし
推定時期：前 8 ～前 3 世紀
概要：本遺跡は、現在のカラ・バルタ市街地南東方向のカラ・バルタ川東岸平坦面上に位置する。ソヴィエト時代の飛行場跡が北部に重複しており、また、西側には石油精製工場が隣接する。本遺跡は、テレノジュキンによる 1929 年の踏査における Nos. 91–93 に相当する（Тереножкин 2012б: 58, Рис. 2-a）。1929 年には 16 基が記録されたが、現況では南北 1 列に連なる 13 基のクルガンのみが残存する（本調査では北から S007-1 ～ 13 の番号を付した）（図 4. 98–100）。いずれの墳丘も、多量の小円礫（径 2 ～ 5 cm）と少量の大円礫（径 10 ～ 15 cm）が混じる土砂により構築されている。それぞれの特徴については以下のとおり。

図 4. 97　ペトロフカ 2（S006）遠景（北東から）

S007-1：直径 25 ～ 30 m、飛行場の管制塔により大規模に破壊された。
S007-2：直径 55 ～ 60 m、北側はテラス上に削平されている。
S007-3：直径約 40 m、頂部に平坦面あり。
S007-4：直径約 45 m、頂部に平坦面あり。
S007-5：直径約 50 m、頂部に盗掘の痕跡と思しき大土坑あり。
S007-6：直径約 20 m、頂部に平坦面あり。
S007-7：直径約 25 m、南東部が掘削による破壊、西部が工場壁建設のため一部破壊を受ける。
S007-8：直径約 35 m、頂部に平坦面あり。
S007-9：直径約 40 m、頂部に盗掘の痕跡と思しき大土坑あり。
S007-10：直径 40 ～ 45 m、頂部に盗掘の痕跡と思しき大土坑あり。
S007-11：直径 45 ～ 50 m、頂部に盗掘の痕跡と思しき大土坑あり。
S007-12：直径約 65 m（本遺跡における最大規模）、頂部に鉄塔等の構造物の痕跡あり。
S007-13：直径約 35 m、頂部に平坦面あり。南側は耕作により部分的に破壊されている。

なお、西側に隣接する石油精製工場の敷地内にも複数のクルガンがかつては存在したと思われるが、現在は既に大部分が破壊されてしまっている。その残滓は認められるかもしれないが、敷地内に立ち入ることができないため確認は不可能である。

現在保存されているクルガン群の近傍には、遺跡保護に関する説明板が立てられている（図 4. 101）。

S008 エフィロノス（Efironos）
登録番号：CV22032
調査日：2022.09.20
WGS84：73.763015 E; 42.795945 N（北端）
UTM zone 43N：398841.772 m E; 4738897.178 m N（北端）

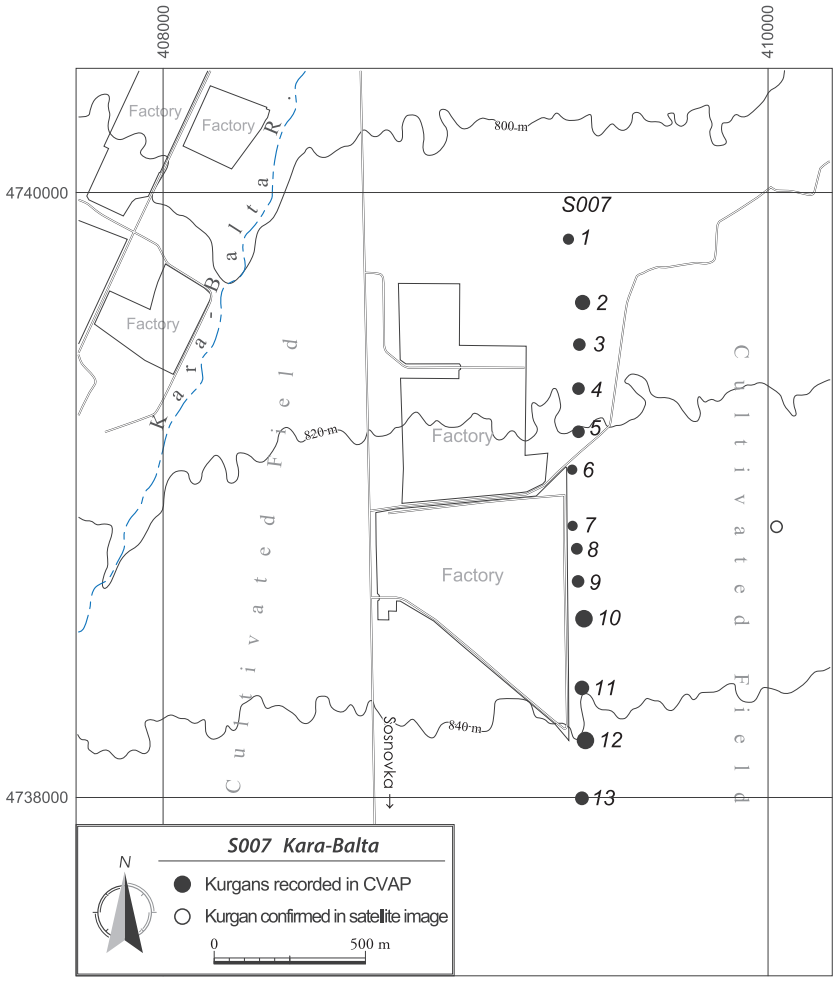

図 4. 98　カラ・バルタ（S007）位置図

図 4. 99　カラ・バルタ（S007）全景（北東から）

図 4. 100　カラ・バルタ（S007）全景（南東から）

規模：632 m 長

標高：804 m

種別：葬祭遺構／クルガン

採集遺物：なし

推定時期：前 8 〜前 3 世紀

概要：本遺跡は、エフィロノス集落の約 1.5 km 南東、耕作地内の平坦面に位置する。現況では、南北 1 列に並ぶ 5 基の大型クルガンから成る（図 4. 102–103）。北端の S008-1 が最大であり、南にいくにつれて概ね小型化する傾向がある。全てのクルガンが盗掘を受けていた。各クルガンの詳細は北から以下のとおり。

S008-1：直径約 70 m、頂部に大土坑あり（盗掘坑か）。

S008-2：直径約 53 m、東側と南側が耕作により破壊を受ける。頂部に盗掘の痕跡と思しき大土坑あり。

図 4. 101　カラ・バルタ（S007）説明版

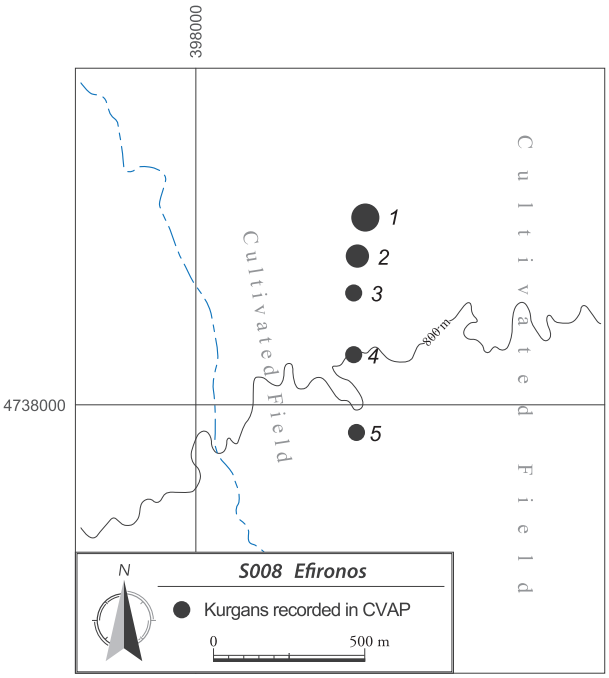

図 4. 102　エフィロノス（S008）位置図

図 4. 103　エフィロノス（S008）空撮全景（北から）

S008-3：直径約 42 m、頂部に盗掘の痕跡と思しき大土坑あり。

S008-4：直径約 35 m、墳丘中央部から北側にかけて激しく破壊されている。

S008-5：直径約 40 m、頂部に 3 基の土坑（大型 1 基、小型 2 基）あり。盗掘坑か。

S009

登録番号：CV22102

調査日：未踏査（遠方からの観察のみ）

WGS84：73.9819 E; 42.782574 N

UTM zone 43N：416724 m E; 4737173 m N

規模：425 m 長

標高：879 m

種別：葬祭遺構／クルガン

採集遺物：なし

推定時期：前 8 ～前 3 世紀

概要：本遺跡は、パルタフカの約 7.3 km 南の耕作地内を南北に流れる小河川沿いに位置する（図 4. 104）。衛星画像から判別する限りでは、南北に連なる少なくとも 10 基のクルガンが現存している。調査日程に都合上、近傍までは到達したが、現地での記録を行っていない。多くは盗掘を受けていると思われ、頂部に円形の陥没が見られる。また、2 基（北端から 3 基目及び 4 基目）は激しく破壊されている様子がわかる。

S010

登録番号：CV18020

調査日：2018.10.04

WGS84：73.96828 E; 42.77971 N

UTM zone 43N：416390.689 m E; 4736783.831 m N

規模：105 m 長

標高：873 m

種別：葬祭遺構／クルガン

採集遺物：なし

推定時期：前 8 ～前 3 世紀

概要：本遺跡は、パルタフカの約 7.6 km 南南東の緩やかに傾斜した耕作地内に位置する、おおよそ南北に並ぶ 2 基のクルガンから成る（図 4. 105）。クルガンのすぐ南には東西に水路が流れている。北の S010-1 は直径約 30 m を測り、頂部が破壊されている。S010-2 は直径 28 m 程度であり、頂部には近現代の鉄塔跡と思しき構築物の痕跡が見られた。

図 4. 104　S009 遠景（北西から）

図 4. 105　S010 全景（東から）

S011 コシュ・コルゴン（Kosh Korgon）

登録番号：CV18003

調査日：2018.09.27, 29

WGS84：73.939626 E; 42.749921 N

UTM zone 43N：413187.749 m E; 4733969.071 m N

規模：計測不可（現存しない）

標高：934 m

種別：居住址／要塞

採集遺物：土器片 3 点

推定時期：10 ～ 12 世紀

概要：本遺跡は、ペトロパヴロフカ（N002）から約 10 km 南の耕作地内に位置していたが、耕作による徹底的な削平のため現存しない（図 4. 106）。1963 ～ 1970 年に地元の考古学者により発掘調査が行われ、出土資料はペトロパヴロフカ集落内にある資料室に展示中である（図 4. 107）が、発掘調査報告書は刊行されていない。

2018 年に現地を訪れたところ、いずれの遺構も耕作による削平のため完全に破壊されていたが、西側耕作地内を南北に縦断する崖上（東側）の平坦面の一部において、土器片の集中箇所が認められた。ここで採集した土器は全て、カラハン朝時代（10 ～ 12 世紀）の所産と考えられる（図 4. 108）。おそらくは、この土器片集中箇所周辺に元来、建物が存在したのだろう。

図 4. 106　コシュ・コルゴン（S011）遠景（南西から）

図 4. 107　コシュ・コルゴン（S011）出土遺物の展示状況（ペトロパヴロフカ考古資料室）

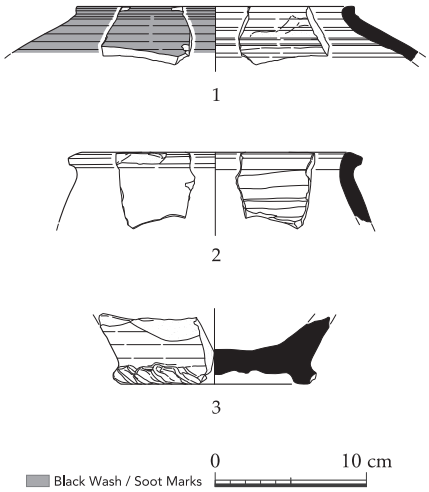

図 4. 108　コシュ・コルゴン（S011）採集土器

Fig. no.	Site no.	Form/Type	Period (Century)	Quality	Rim diam. (mm)	Interior	Exterior	Core	Slip/Wash	Inclusion	Surface treatment (int.)	Surface treatment (ext.)	Comparable materials
4.108:1	N032	Short-necked jar	Kara Khanid (Late 11th - Early 12th)	Medium	232	Orange (5YR7/6)	Orange (7.5YR7/6)	Dull reddish brown (5YR5/4)	-	Large quantities of black and red grit 1.0 mm in diam.	Unclear	Wheel smoothing	帝京大学文化財研究所他 2020: Fig. 4. 54: 15-19-042
4.108:2	N032	Necked jar	Kara Khanid	Coarse to medium	131	Orange (5YR7/6)	Dull orange (5YR6/4)	Dull orange (5YR7/4)	-	Large quantities of black and red grit 0.5-1.0 mm in diam.	Wheel smoothing, traces of squeezing to make the neck part.	Wheel smoothing	
4.108:3	N032	Cooking pot	Kara Khanid	Coarse	UD	Dull yellow orange (10YR6/3)	Dull orange (7.5YR7/4)	Dull orange (7.5YR6/4)	-	Large quantities of black grit 0.5-3.0 mm in diam.	Horizontal smoothing on diagonal smoothing, thumb indentations.	Diagonal and horizontal smoothing on vertical smoothing	

S012

登録番号：CV18014

調査日：2018.10.03

WGS84：（S012-1）73.740281 E; 42.741455 N；（S012-2）73.739497 E; 42.741426 N；（S012-3）73.739574 E; 42.741135 N

UTM zone 43N：（S012-1）397072.923 m E; 4732898.328 m N; (S012-2) 396828.036 m E; 4732871.547 m N; (S012-3) 396833.856 m E; 4732839.139 m N

規模：4,049 m^2（S012-1: 476 m^2; S012-2: 307 m^2; S012-3: 202 m^2）

標高：880 m

種別：生活遺構／建物遺構

採集遺物：なし

推定時期：近世・近代

概要：本遺跡は、踏査対象地域南西部のカイナル川の西側へ流れる小支流間の上下段丘面に位置する、3 基の遺構から成る。現状ではいずれも幅 1.0 m 程度の土塁により形成されているが、これは元来存在した壁体の基部と思われる。いずれの遺構の内部にも、いかなる構造物も認められなかった。

上位段丘面に位置する S012-1 は、幅約 1.0 m の土塁により構築されており、東西約 25 m、南北約 20 m のやや歪んだ矩形を呈する（図 4. 109）。S012-2 及び S012-3 は、S012-1 の東側の低位段丘上に位置している。S012-2 は南に流れる小河川の東岸に位置し、南北約 25 m、東西約 15 m の長方形を呈する（図 4. 110）。S012-3 は、S012-2 の約 10 m 南に所在する。西半分を小河川により壊されているため、現状では半円形（東西 11 m、南北 19 m）を呈するが、元来は円形であったと考えられる（図 4. 111）。

これらの遺構の性質を同定するためには、現段階では材料に欠いている。しかし、土塁のみから成る構造や小河川に比較的近い立地に鑑みると、これらの遺構が近世以降のものであり、日常生活に直接的に関わっていたと推測することができるだろう。

図 4. 109　S012-1 全景（南東から）

図 4. 110　S012-2 全景（東から）

図 4. 111　S012-3 全景（北東から）

図 4. 112　S013-1 全景（北から）

図 4. 113　S013-2 全景（北西から）

S013

登録番号：CV18015

調査日：2018.10.03

WGS84：（S013-1）73.73946 E; 42.735785 N；（S013-2）73.739566 E; 42.735661 N

UTM zone 43N：（S013-1）396814.832 m E; 4732245.013 m N；（S013-2）396824.124 m E; 4732231.286 m N

規模：844 m^2（S013-1: 130 m^2; S013-2: 89 m^2）

標高：905 m

種別：生活遺構／建物遺構（S013-1）・囲い込み遺構？（S013-2）

採集遺物：なし

推定時期：（S013-1）近世・近代；（S013-2）不明

概要：本遺跡は、S012 の 500 m 南の小段丘東縁に位置する。遺跡は、近接する 2 基の矩形遺構から成る。北の S013-1 は、現在の耕作地南縁の平坦面に位置し、東西約 15 m、南北約 11 m を測る（図 4. 112）。遺構は壁体基礎の残滓と思しき幅 1.0 ～ 1.5 m の土塁により形成され、東側の方形の主室（約 8 m 四方）と、西側に増築された小部屋（南北約 8.0 m、東西約 3.0 m）から成る。南の S013-2 は小段丘東縁に位置し、東半分は傾斜面に構築されている（図 4. 113）。外側を廻る土塁（幅 1.0 ～ 1.5 m）とその内側の周溝から成り、外寸は東西約 9.0 m、南北約 10 m を測る。周溝の内側には、他遺構は見られない。

S013-1 は耕作活動に伴う家屋の痕跡と考えられ、比較的新しい時期に属すると考えられる。

S014

登録番号：CV18016

調査日：2018.10.03

WGS84：（S014-1）73.742408 E; 42.731243 N；（S014-2）73.742684 E; 42.731173 N；（S014-3）73.742795 E; 42.731591 N；（S014-4）73.74245 E; 42.73148 N；（S014-5）73.742749 E; 42.732227 N；（S014-6）73.743212 E; 42.731406 N

UTM zone 43N：（S014-1）397050.179 m E; 4731737.985 m N；（S014-2）397071.936 m E; 4731729.109 m N；（S014-3）397081.715 m E; 4731775.39 m N；（S014-4）397053.288 m E; 4731763.485 m N；（S014-5）397079.001 m E; 4731846.071 m N；（S014-6）397115.546 m E; 4731754.339 m N

規模：6,712 m^2（S014-1: 250 m^2; S014-2: 256 m^2; S014-3: 165 m^2; S014-4: 186 m^2; S014-5: 213 m^2; S014-6: 325 m^2）

標高：924 m

種別：生活遺構／囲い込み遺構（S014-1, 2, 4 ～ 6）、葬祭遺構／単独墓（S014-3）

採集遺物：なし

推定時期：不明

概要：本遺跡は、S013 の約 500 m 南東、小段丘上に位置する 6 基の円形遺構から成る（図 4. 114）。このうち 5 基は囲い込み遺構、1 基は円形墓と考えられる。

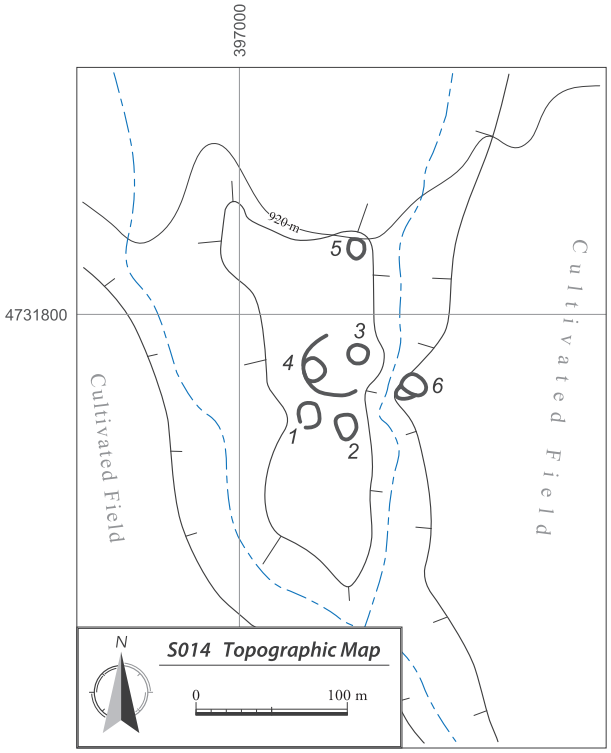

図 4. 114　S014 平面図

囲い込み遺構は S014-1、2、4 ～ 6 から成る。S014-1 は幅 1.0 ～ 1.5 m、高さ約 1.5 m の壁体により構築され、直径約 18 m を測る（図 4. 115）。内部は周辺よりも一段下がっており、平坦面のみが広がっている。S014-2 は S014-1 の東隣に位置し、その東半分は緩斜面上に構築される（図 4. 116）。外側を廻る低い土塁（幅 1.0 ～ 1.5 m）とその内側の浅い周溝（幅約 1.0 m）から成り、長径（南北）約 18.6 m、短径（東西）約 16.6 m を測る。周溝の内側には平坦面のみが広がる。S014-4 は、北に傾斜する崖面沿いに造られた、東西約 13 m、南北約 18 m の楕円形遺構であり、土塁のみから構築されている（図 4. 117）。S014-4 の南辺には、崖面に沿って掘削された彎曲する溝状遺構が接続している。S014-5 は最北端に立地し、東西約 15 m、南北約 17 m の円形を呈する（図 4. 118）。遺構は、外側を廻る土塁とその内側の周溝により構築されている。S014-6 は、S014-3 の東方、小河川を挟んだ対岸に位置する（図 4. 119）。南北に円形遺構 2 基が重複し、北側が南側の大部分を壊して造られており、東西約 17 m、南北 24.6 m を測る。残りの良い北側の円形遺構は、外側を廻る低い土塁とその内側の浅い周溝から成り、内部は僅かに西に傾斜する平坦面を成す。

図 4. 115　S014-1 全景（南から）

図 4. 116　S014-2 全景（北西から）

図 4. 117　S014-4 全景（北から）

図 4. 118　S014-5 全景（東から）

円形墓として、S014-3 を記録した。S014-3 は、周囲を溝のみにより画されており、直径約 13 m を測る（図 4. 120）。小段丘面の最上部に立地している。

S015

登録番号：CV18017
調査日：2018.10.03
WGS84：（S015-1）73.742993 E; 42.729644 N；（S015-2）73.743055 E; 42.729379 N
UTM zone 43N：（S015-1）397098.94 m E; 4731529.929 m N；（S015-2）397099.342 m E; 4731529.441 m N
規模：1,044 m^2（S015-1: 100 m^2; S015-2: 100 m^2）
標高：931 m
種別：生活遺構／囲い込み遺構？
採集遺物：なし
推定時期：不明
概要：本遺跡は、S014 の約 200 m 南南東、小河川の西側段丘東縁の傾斜面に立地する。2 基の円形遺構から成り、いずれも直径約 10 m を測る（図 4. 121）。北の S015-1 は、外側を廻る土塁とその内側の周溝から成る。南の S015-2 は、浅い周溝のみから構築されている。いずれの内部も平坦面のみが広がり、他遺構は認められない。

図 4. 119　S014-6 遠景（北から）

図 4. 120　S014-3 全景（南から）

図 4. 121　S015 全景（北東から）

S016

登録番号：CV18018
調査日：2018.10.03
WGS84：（S016-1）73.739979 E; 42.729024 N；（S016-2）73.740004 E; 42.728841 N
UTM zone 43N：（S016-1）396722.076 m E; 4731517.038 m N；（S016-2）396848.675 m E; 4731473.422 m N
規模：1,334 m^2（S016-1: 284 m^2; S016-2: 402 m^2）
標高：930 m
種別：生活遺構／建物遺構

採集遺物：なし
推定時期：近世・近代
概要：本遺跡は、S014 の約 320 m 南西の、段丘面西縁辺付近に位置する。遺跡は隣接する 2 基の矩形遺構から成る。いずれも、外側の周溝と、泥レンガ製壁体基部の痕跡と思われる内側を廻る土塁により構成される。北の S016-1 は、南東 - 北西約 17 m、南西 - 北東約 15 m を測り、外側の周溝（幅 1.5 m）とその内側を廻る土塁（幅約 1.0 m、高さ約 0.5 m）から成る（図 4. 122）。土塁の内側は、周囲の地表面よりも僅かに高くなっている。南の S016-2 は、東西 19.6 m、南北 18.8 m を測り、外側の周溝（幅約 1.2 m）とその内側を廻る土塁（高さ約 0.4 m）から成る（図 4. 123）。周溝は土塁の東辺で途切れており、土塁の北東隅及び南東隅から東方に長さ 1.0 ～ 2.0 m の別の土塁（控え壁）が突き出す特異な平面形を呈する。

これらの遺構は、耕作活動に関わる家屋の痕跡と考えられる。

図 4. 122　S016-1 全景（南東から）

図 4. 123　S016-2 全景（南東から）

S017

登録番号：CV22002
調査日：2022.09.12
WGS84：73.747168 E; 42.720217 N
UTM zone 43N：397420.964 m E; 4730507.041 m N
規模：422 m^2
標高：972 m
種別：生活遺構／囲い込み遺構
採集遺物：なし
推定時期：不明
概要：本遺跡は、S014 の約 1.3 km 南南東の、段丘面西縁付近に位置する。外側を廻る低い土塁（幅 2.2 m）とその内側のやや深い周溝（幅 2.5 m）により構築される、1 基の不整楕円形遺構から成り、内寸は東西約 17 m、南北約 9.0 m を測る（図 4. 124）。東端部の土塁と周溝は、耕作により壊されている。遺構の南東部には幅 2.8 m の開口部が見られ、元来の出入口の可能性もある。内部には平坦面のみが広がる。

S018

登録番号：CV22004
調査日：2022.09.12
WGS84：73.736108 E; 42.716653 N
UTM zone 43N：396509.461 m E; 4730124.772 m N
規模：54 m^2
標高：982 m
種別：生活遺構／建物遺構
採集遺物：なし
推定時期：近世・近代
概要：本遺跡は、S017 の約 1.0 km 南西の、小段丘面西縁辺に位置する 1 基の矩形遺構から成る（図 4. 125）。遺構は浅い周溝（幅 1.3 m）により構築されており、ほぼ

図 4. 124　S017 全景（北から）

図 4. 125　S018 空撮俯瞰（上が北）

隅丸方形である。内寸は、東西約 5.0 m、南北約 4.5 m を測り、内部は凹凸が目立つ。遺構西辺の一部は、浸食により壊されている。

明確な壁体の痕跡（土塁）が認められないものの、その平面形や構築方法、内部の状況に鑑みて、元来は耕作に関わる建物であった蓋然性が高い。

S019

登録番号：CV22001
調査日：2022.09.12
WGS84：73.75085 E; 42.714304 N
UTM zone 43N：397712.729 m E; 4729845.966 m N
規模：670 m^2
標高：979 m
種別：生活遺構／建物遺構
採集遺物：なし
推定時期：近世・近代
概要：本遺跡は、S017 の約 700 m 南東の、小河川東岸段丘上の平坦面に位置する 1 基の矩形遺構から成る（図 4. 126）。遺構は最大で東西約 10.5 m、南北約 21.6 m の長方形を呈しており、泥レンガ製壁体の基部と思しき土塁（幅 1.2 ～ 1.5 m）により構成され、北辺と西辺の外周には幅 2.0 m 程度の浅い溝が掘られている（図 4. 127）。

土塁による区画（部屋）は計 4 つ認められ、概ね南北に並んで配置される。最北端の部屋 1 は内寸で、東西約 5.6 m、南北約 6.5 m を測る。部屋 1 の東内壁に取り付くかたちで、小型の部屋 2 が存在する。部屋 2 の内寸は、東西約 2.5 m、南北約 2.9 m を測る。部屋 1 には、部屋 3 が南接する。部屋 3 の内寸は東西約 8.0 m、南北約 7.5 m であり、部屋 1 よりも広い。部屋 3 と部屋 2 の間には部屋 1 を構成する壁体（土塁）が存在せず、東側に開口した出入口になっている。最南端の部屋 4 は部屋 3 に南接し、内寸は東西約 8.0 m、南北約 2.2 m である。南辺を構成する壁体（土塁）の残存状況は良好とは言えないが、東端に壁体（土塁）が途切れる出入口と考えられる部分が見られる。なお、いずれの部屋内も平坦面ではなく、何らかの遺構が存在したものと考えられる。

耕作地内という立地や、壁体の残滓としての土塁により構築されることに鑑みて、比較的新しい時期（18 ～ 19 世紀頃）に建てられた、農耕に関わる建物址と考えられる。

S020

登録番号：CV22003
調査日：2022.09.12
WGS84：73.734717 E; 42.712694 N
UTM zone 43N：396388.974 m E; 4729686.851 m N
規模：199 m^2
標高：1,004 m

図 4. 126　S019 空撮遠景（北西から）

図 4. 127　S019 空撮俯瞰（上が北）

種別：生活遺構／囲い込み遺構
採集遺物：なし
推定時期：不明
概要：本遺跡は、S018 の約 450 m 南南西、小河川の西岸小段丘の稜線上に位置する（図 4. 128）。外側を廻る土塁（幅 1.8 m）とその内側の周溝（幅 1.9 m）により構成される 1 基の円形遺構から成り、内寸は直径約 5.0 m を測る。周溝の内側には平坦面のみが広がる。遺構の東辺・南辺の土塁は保存状態が悪く、僅かな痕跡のみが残る。

S021
登録番号：CV22006
調査日：2022.09.13
WGS84：73.748789 E; 42.703274 N
UTM zone 43N：397525.816 m E; 4728623.641 m N
規模：213 m^2
標高：1,061 m
種別：生活遺構／囲い込み遺構？
採集遺物：なし
推定時期：不明

図 4. 128　S020 全景（北西から）

図 4. 129　S021 全景（西から）

概要：本遺跡は、S019 の約 1.2 km 南、小河川西岸の段丘縁辺に位置する 1 基の矩形遺構から成る（図 4. 129）。矩形遺構は、深い周溝（幅約 2.0 m）により造られ、内寸は東西約 5.0 m、南北約 7.5 m を測る。遺構の東半は段丘斜面上に構築されている。周溝の内側は、周囲よりも 10 ～ 20 cm 程度標高が高い平坦面を成し、いくつかの小さな窪みが見られる。

S022
登録番号：CV22005
調査日：2022.09.13
WGS84：73.748502 E; 42.702507 N
UTM zone 43N：397501.048 m E; 4728538.818 m N
規模：188 m^2
標高：1,067 m
種別：生活遺構／囲い込み遺構？
採集遺物：なし
推定時期：不明
概要：本遺跡は、S021 の約 100 m 南、小河川の対岸（東岸）の段丘縁辺に位置する、1 基の不整楕円形遺構から成る（図 4. 130）。遺構は浅い周溝（幅約 1.6 m）により構築されるが、周溝の内側に幅 1.0 ～ 1.5 m の僅かな土塁も見られる。遺構西辺は段丘縁辺の獣道により破壊されている。土塁も含む内寸は、東西約 5.0 m、南北約 10 m であり、内側には平坦面のみが広がる。

S023
登録番号：CV22009
調査日：2022.09.13
WGS84：73.742565 E; 42.701013 N
UTM zone 43N：397012.326 m E; 4728380.138 m N
規模：201 m^2

図 4. 130　S022 全景（北東から）

標高：1,072 m
種別：生活遺構／建物遺構
採集遺物：なし
推定時期：不明
概要：本遺跡は、S021 の約 570 m 南西の小河川の東岸段丘縁辺、東西に走る無舗装道路の北側に位置する 1 基の矩形遺構から成る（図 4. 131）。遺構は外側の周溝（幅 1.6 m）とその内側を廻る土塁（幅 1.0 m）により構築されるが、東辺はほとんど残存せず、北辺の周溝も僅かに痕跡が残るのみである。土塁の内側は東西約 4.0 m、南北約 5.5 m を測り、周囲の地表面より 20 ～ 30 cm 高い平坦面が広がる。おそらく泥レンガ製壁体の基部と考えられる土塁を確認できることや、耕作地近傍の立地に鑑みて、同遺構は農耕に関連する建物跡と考えられる。

S024

登録番号：CV22010
調査日：2022.09.13
WGS84：73.739279 E; 42.700679 N
UTM zone 43N：396742.636 m E; 4728347.061 m N

図 4. 131　S023 全景（北から）

図 4. 132　S024 空撮俯瞰（上が北）

規模：483 m^2
標高：1,079 m
種別：生活遺構／囲い込み遺構？
採集遺物：なし
推定時期：不明
概要：本遺跡は、S023 の約 270 m 西の小河川西岸段丘上、東西に走る無舗装道路の南側に位置する 1 基の大型矩形遺構から成る（図 4. 132）。遺構は、外側の周溝（幅 2.0 m）と泥レンガ壁体の基部と考えられるその内側を廻る土塁（幅 1.0 m）により構築される。周溝の北西、南西隅、東辺中央は途切れており、出入口であった可能性がある。特に、東辺中央では土塁も途切れており、通路として機能していた可能性が高い。土塁の西辺北部には、内側に 2.0 m 程度突き出る土塁が取り付く。遺構内は、東西約 10 m、南北約 12 m を測る。

本遺構は、建物の泥レンガ製壁体の存在を示唆する土塁を残すものの、その規模は一般的な住居や倉庫にしては大きすぎる。このため、家畜の放牧をも含む日常生活に関わる遺構として、これを囲い込み遺構に分類する。

S025

登録番号：CV22008
調査日：2022.09.13
WGS84：73.747424 E; 42.699811 N
UTM zone 43N：397408.319 m E; 4728240.75 m N
規模：109 m^2
標高：1,081 m
種別：生活遺構／建物遺構
採集遺物：なし
推定時期：近世・近代
概要：本遺跡は、S024 の 670 m 東、S026 範囲内の小河川西岸傾斜面上に位置する、1 基の長円形遺構から成

図 4. 133　S025 全景（南西から）

る（図 4. 133）。遺構は外側を廻る土塁（幅 1.2 m）とその内側の周溝（幅 1.7 m）により形成され、北東部の土塁に開口部が見られる。また、傾斜面上方に位置する南辺部分の土塁は、斜面への土砂流出のためか、僅かな痕跡を残すにとどまる。内寸は東西約 2.5 m、南北約 6.5 m を測る。周溝の内周には、外側の土塁よりも 20 cm 程度高い別の土塁（幅 1.1 m）が廻る。このため、内側の利用可能な空間はかなり狭い。

遺構の構造と S026 内の立地に鑑みて、S026 廃絶後に建てられた建物遺構の可能性がある。

S026 タシュ・マザール（Tash Mazar）
登録番号：CV22007
調査日：2022.09.13
WGS84：73.746825 E; 42.699436 N
UTM zone 43N：397358.639 m E; 4728199.836 m N
規模：63,778 m^2
標高：1,090 m
種別：居住址／町
採集遺物：土器片 28 点
推定時期：中世後期（12 世紀以後）？
概要：本遺跡の北辺部を無舗装道路が東西に貫いており、その北側で土器や動物骨を多量に採集できることが地元住民に知られていた。2022 年調査では、遺跡の範囲が東西道路の南側にも広がっていることを新たに確認した。遺跡は、北方へ流れる 2 本の小河川間の約 6 ha（東西約 150 m、南北約 340 m）の範囲に広がっており、範囲全体が北に向かって緩やかに傾斜する（図 4. 134–135）。遺跡範囲には、住居址と思われる多くの小丘が密集し、多量の土器が散布していた。遺跡の北部では大型矩形遺構が認められ、公共的な性格を有する施設の存在が窺える。また、遺跡の各所で大型の円礫を用いた石列が認められた（図 4. 136）。なお、遺跡全体を取り囲む周壁の存在は確認できなかった。

踏査では多くの土器片と石製品 1 点を採集した（図 4. 137–139）。これらには、大型貯蔵壺（図 4. 137: 1, 2）、

図 4. 134　タシュ・マザール（S026）空撮全景（南西から）

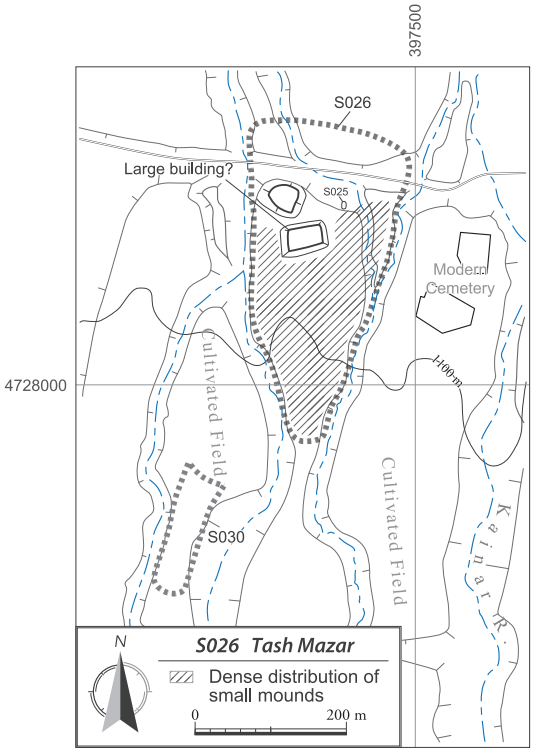

図 4. 135　タシュ・マザール（S026）平面図・空撮俯瞰（上が北）

図 4. 136　タシュ・マザール（S026）北部に露出する石列遺構（南西から）

図 4. 138　タシュ・マザール（S026）採集土器写真

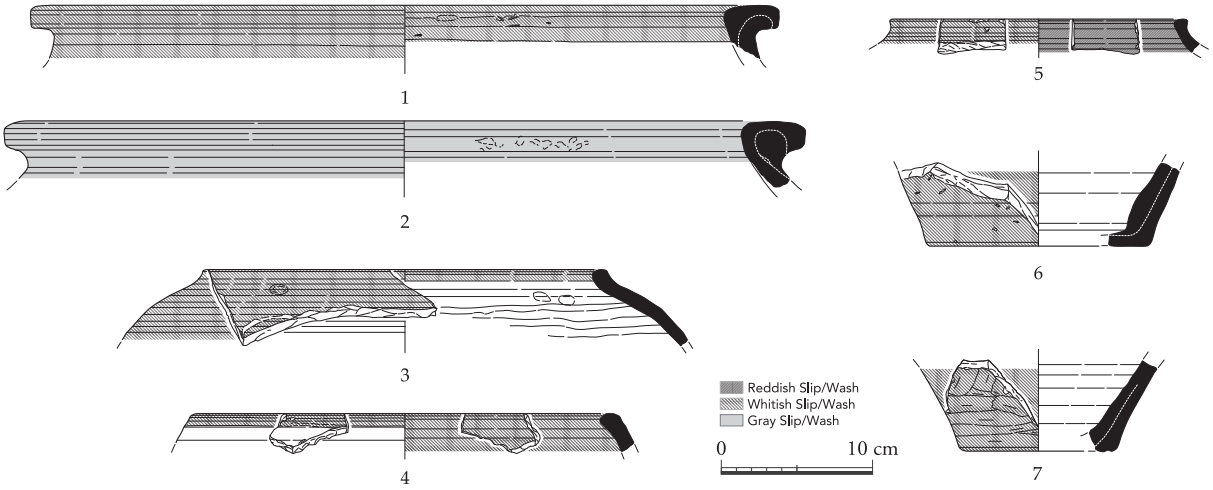

図 4. 137　タシュ・マザール（S026）採集土器

Fig. no.	Site no.	Form/Type	Period (Century)	Quality	Rim diam. (mm)	Interior	Exterior	Core	Slip/Wash	Inclusion	Surface treatment (int.)	Surface treatment (ext.)	Comparable materials
4.137:1	S026	Pithos	After 12th?	Coarse	495	Orange (5YR6/8)	Orange (5YR6/8)	Bright red-dish brown (5YR5/8)	White wash (Dull yellow orange: 10YR7/3) on both sides.	Very large quantities of chaffs 7.0 mm in length, somehow large quantities of red grit 1.0-2.0 mm in length, small quantities of calcite 0.5-2.0 mm in diam.	Horizontal smoothing (on tournette?)	Horizontal smoothing (on tournette?)	
4.137:2	S026	Pithos	After 12th?	Coarse	530	Bright red-dish brown (2.5YR5/8)	Orange (5YR6/8)	Grayish brown (5YR5/2)	Grayish wash (Dull brown: 7.5YR6/3) on both sides.	Very large quantities of chaffs 4.0-6.0 mm in length and dark red/gray grit, small quantities of calcite 1.0-2.0 mm in diam.	Horizontal smoothing (on tournette)	Horizontal smoothing (on tournette)	
4.137:3	S026	Short-necked jar	Late 11th - Early 12th?	Very fine (metallic)	268	Orange (5YR6/6)	Orange (5YR6/6)	Dull orange (5YR6/4)	White wash (Dull orange: 7.5YR7/4) on rim and ext.	Small quantities of calcium carbonate 0.5-2.0 mm in diam., gray grit less than 1.0 mm in diam., and minute mica.	Wheel smooth-ing on upper part, horizontal smoothing on lower part.	Wheel smoothing, a trace of handle.	帝京大学文化財研究所他 2020: Fig. 4. 54: 15-19-042
4.137:4	S026	Holemouth jar	After 12th?	Coarse to medium	284	Dull brown (7.5YR5/4)	Dull brown (7.5YR5/4)	Dull brown (7.5YR5/4)	White wash (Dull yellow orange: 10YR7/3) on rim and int.	Large quantities of sand grit 0.5-2.0 mm in diam.	Wheel smoothing	Wheel smoothing, partially horizontal smoothing.	
4.137:5	S026	Short-necked jar	Late 11th - Early 12th?	Medium	197	Orange (2.5YR6/6)	-	Orange (5YR6/6)	White wash (Pale yellow: 2.5Y8/4) on ext., orange wash (very thin) (Dull orange: 7.5YR7/4) on int.	Small quantities of red and gray grit 0.5-3.0 mm in length, very small quantities of minute calcite less than 1.0 mm in diam.	Wheel smoothing	Wheel smoothing	帝京大学文化財研究所他 2020: Fig. 4. 54: 15-19-043
4.137:6	S026	Flat base (jar)	UD	Coarse	146	Orange (5YR6/6)	Orange (5YR6/6)	Orange (5YR6/8)	White wash (Light yellow orange: 10YR8/4) on ext.	Very large quantities of chaffs 4.0 mm in length, large quantities of sand grit 0.5-2.0 mm in diam., very small quantities of minute quartz less than 0.5 mm in diam.	Horizontal smoothing (on tournette)	Wheel smoothing (abraded surface)	
4.137:7	S026	Flat base (jar)	UD	Medium to fine	106	Dull orange (7.5YR6/4)	Dull orange (7.5YR6/4)	Dull orange (7.5YR6/4)	White slip (Pale yellow: 2.5Y8/3) on ext.	Large quantities of sand grit 0.5-2.5 mm in diam., very small quantities of chaffs 3.0 mm in length, several grogs 2.0 mm in diam.	Wheel smoothing	Vertical smooth-ing on the upper, horizontal smoothing on the lower	

図 4. 139　タシュ・マザール（S026）採集石製品写真

短頸あるいは無頸の貯蔵壺（図 4. 137: 3–5）、壺類の平底（図 4. 137: 6, 7）、壺や水差しの把手が含まれる（図 4. 138）。これらの土器群はカラハン朝以降、すなわち 12 世紀以後に仮に位置づけられるだろう。1 点採集した石製品は花崗岩製であり、上面に浅い平坦な窪みが作り出されている（図 4. 139）。こうした痕跡から、この石製品は磨石や礎石として用いられた可能性が考えられる。

S027

登録番号：CV22011
調査日：2022.09.13
WGS84：73.739554 E; 42.699214 N
UTM zone 43N：396762.732 m E; 4728184.044 m N
規模：9,500 m^2
標高：1,086 m
種別：葬祭遺構／墓地
採集遺物：なし
推定時期：前 2 世紀〜後 5 世紀
概要：本遺跡は、S024 の約 50 m 南の段丘面に広がる円墳群である（図 4. 140）。少なくとも 19 基が東西約 60 m、南北約 230 m の範囲に、概ね列を成して分布している。墓の規模は小さく、直径 7.0 〜 8.0 m、高さは 1.0 m に満たない。南端の円墳は例外であり、直径は同様であるが、高さは 1.5 m 程度を測る。おそらく墳丘の多くは、耕作活動により削平されてしまったのだろう。墳丘の頂部付近には、20 cm 大の礫がしばしば見られた。おそらくは墓の構築物と思われる。

年代決定は難しいが、墳丘や墓地の規模に鑑みて、鉄器時代後期の所産と思われる。

図 4. 140　S027 空撮全景（北から）

S028

登録番号：CV22012
調査日：2022.09.13
WGS84：73.739549 E; 42.697837 N
UTM zone 43N：396760.041 m E; 4728031.142 m N
規模：340 m^2
標高：1,092 m
種別：生活遺構／建物遺構
採集遺物：なし
推定時期：不明
概要：本遺跡は、S027 の南端部の段丘面東縁に位置する 1 基の不整矩形遺構から成る（図 4. 141）。遺構は、外側のやや深い周溝（幅 1.7 m）と、その内側を廻る現地表面からの高さが 20 〜 30 cm 程度の土塁（幅 1.3 m）により構築されており、土塁の内側は東西約 6.5 m、南北約 8.0 m を測る。ただし、遺構の東辺は段丘東縁の斜面上に立地しているため、東辺には土塁が明確には認められない。土塁の内側には平坦面のみが見られるが、周囲よりも 20 cm 程度高い。

土塁は泥レンガ製壁体基部の痕跡と考えられ、また、

図 4. 141　S028 空撮俯瞰（上が北）

現在も耕作地となっている段丘上平坦面に東接することから、農耕活動に関連する何らかの建物が存在した可能性が高い。

S029

登録番号：CV22019

調査日：2022.09.15

WGS84：（S029-1）73.731646 E; 42.696296 N；（S029-2）73.731472 E; 42.696692 N

UTM zone 43N：（S029-1）396110.151 m E; 4727869.711 m N；（S029-2）396096.559 m E; 4727913.899 m N

規模：1,652 m^2（S029-1: 625 m^2; S029-2: 189 m^2）

標高：1,108 m

種別：生活遺構／囲い込み遺構（S029-1）、葬祭遺構？／単独墓？（S029-2）

採集遺物：なし

推定時期：不明

概要：本遺跡は、S028 の約 680 m 西、小河川西岸の段丘東縁に位置する、2 基の小型遺構から成る（図 4. 142）。

南の S029-1 は、円形の囲い込み遺構と考えられる（図 4. 143）。遺構は深めの周溝（幅 2.3 m）により構築されるが、南の外周に土塁の痕跡が僅かに見られた。内寸は東西約 7.5 m、南北約 8.5 m を測り、内部には平坦面のみが広がる。東部は段丘縁辺のため激しい浸食を受けている。この円形遺構の南西には、幅 2.1 m の深めの溝が取り付き、南方向に大きく彎曲する。この彎曲溝の内側は、東西約 10 m、南北約 14.5 m を測り、ほぼ平坦面である。なお、彎曲溝の内側には、幅 1.0 m 程度の僅かな高まりが認められ、土塁の痕跡の可能性がある。

北の S029-2 は、S029-1 から北西方向に延びる山脚状地形の尾根上に立地する隅丸長方形遺構である（図 4. 144）。遺構は外側を廻る土塁（幅約 0.8 m）とその内側の周溝（幅約 1.8 m）により構築され、周溝の内側は東西約 3.0 m、南北約 8.0 m を測る。周溝の内側は尾根地形のままであり、小丘状に隆起している。こうした特徴から、この遺構は生活遺構というよりも葬祭遺構（単独墓か）と考えられる。なお、S038-2 も S029-2 と同様の構造を呈している。

図 4. 142　S029 空撮全景（北から）

図 4. 143　S029-1 空撮俯瞰（上が北）

図 4. 144　S029-2 全景（南西から）

S030 タシュ・マザール南（Tash Mazar South）

登録番号：CV22013

調査日：2022.09.14

WGS84：73.744697 E; 42.695443 N

UTM zone 43N：397177.754 m E; 4727759.022 m N

規模：4,200 m^2

標高：1,114 m

種別：葬祭遺構／墓地

採集遺物：土器片 6 点

推定時期：中世後期（12 世紀以後）？

概要：本遺跡は、S026（タシュ・マザール）南端から約 130 m 南西、S026 の西側を区画する小河川の東岸に広がる段丘面の南半部分に位置する（図 4. 145）。現況では、墓地は東西約 40 m、南北約 130 m の範囲に広がり、少なくとも 41 基の円墳が分布している（図 4. 146）。墓は、直径 3.0 ～ 4.0 m、高さ 1.0 m 未満と小型であり、その分布には規則性が認められない。なお、S030 の北側に広がる耕作地内では、S026 で採集したものと同様の土器片を少量ながらも採集できた（図 4. 147）。

S030 と S026 の立地の近さや、S030 に北接する耕作地における採集土器に鑑みて、S030 は S026 と同時代の墓地であり、その範囲は元来、段丘の北側にも及んでいた可能性が高い。

S031

登録番号：CV22018

調査日：2022.09.15

WGS84：73.732466 E; 42.69442 N

図 4. 145　S026+030 空撮全景（南西から）

図 4. 146　タシュ・マザール南（S030）空撮全景（北から）

図 4. 147　タシュ・マザール南（S030）採集土器写真

UTM zone 43N：396174.192 m E; 4727660.383 m N
規模：255 m^2
標高：1,124 m
種別：生活遺構／囲い込み遺構
採集遺物：なし
推定時期：不明
概要：本遺跡は、S029 の約 200 m 南南東、小河川西岸の段丘東縁に位置する 1 基の不整円形遺構である（図 4. 148）。北東に向かって緩やかに傾斜する平坦面上に立地し、現在の耕作地に近接している。遺構は、外側を廻る低い土塁（幅 1.8 ～ 2.2 m）とその内側の深めの周溝（幅 1.7 m）により構築されるが、東辺は段丘崖面に立地するため、残存状態が良好ではない。土塁は、南半部がより高く残存し、その北部は傾斜地形に起因して、周溝の内側よりも低い。周溝の内側は、東西約 6.5 m、南北 6.5 ～ 7.0 m を測り、平坦面のみが認められる。

S032

登録番号：CV22017
調査日：2022.09.15
WGS84：73.733746 E; 42.693642 N
UTM zone 43N：396277.745 m E; 4727572.418 m N
規模：20,926 m^2
標高：1,132 m
種別：葬祭遺構／墓地
採集遺物：なし
推定時期：前 2 世紀～後 5 世紀？
概要：本遺跡は、S029 の約 400 m 南東、北西及び南東を流れる小河川に挟まれた不整五角形の段丘面上に位置する（図 4. 149）。墓地の規模は最大で、東西約 140 m、南北約 240 m を測る。この範囲内に、少なくとも 20 基の円墳を確認した。墓の規模は、直径 7.0 ～ 8.0 m、高さ 1.0 m 未満であり、周囲に石材等の散布は認められなかった。段丘の縁辺部には、比較的最近（19 世紀以降）の泥レンガ製矩形建物の痕跡が見られる。

墓の規模や形態に鑑みて、S027 とほぼ同時期の所産と考えられる。

S033

登録番号：CV22016
調査日：2022.09.15
WGS84：73.737999 E; 42.692726 N
UTM zone 43N：396624.605 m E; 4727465.488 m N
規模：39 m 長
標高：1,110 m
種別：その他遺構／石列
採集遺物：なし
推定時期：不明
概要：本遺跡は、S032 の約 300 m 東の小河川東岸近傍に位置する、1 基の石列遺構から成る（図 4. 150）。遺構は、全体として S 字形に蛇行しており、北半部は小河川に沿い、南半部は小河川から離れて大きく東に彎曲した後、南に彎曲する。北端から南の東彎曲部までの距離は約 28 m を測り、その内側（東側）には平坦面のみが広がる。石列は、10 ～ 30 cm 大の円礫を積み上げて構築しており、幅は 2.4 m、残存度の違いのため高さは場所により変化するが、概ね 1.0 m 未満である。目地には土砂が充填される。

機能・時期共に不明であるが、おそらく小河川に対する堤防のような役割を果たしていたのではないかと考えられる。また、小河川の最低位段丘面に所在することを考えると、比較的最近の所産である可能性もある。

図 4. 148　S031 空撮俯瞰（上が北）

図 4. 149　S032 空撮全景（北東から）

図 4. 150　S033 全景（西から）

S034

登録番号：CV22015
調査日：2022.09.15
WGS84：73.743832 E; 42.689929 N
UTM zone 43N：397097.797 m E; 4727147.776 m N
規模：212 m^2
標高：1,144 m
種別：生活遺構／建物遺構？
採集遺物：なし
推定時期：不明
概要：本遺跡は、S033 の約 560 m 南東、小河川南東岸の段丘縁辺に位置する 1 基の矩形遺構である（図 4. 151）。遺構は、北・東・南辺を廻る周溝（幅 1.7 m）と北・南辺の周溝内側に見られる土塁（幅 2.1 m）により構築され、西辺は大きく開口している。東辺は段丘縁辺下に造られる。土塁の内側は、東西・南北共に約 7.5 m を測り、平坦面のみが見られる。

不規則的な型式ゆえに分類が難しいが、泥レンガ製壁体の存在を示唆する土塁が見られることから、仮に建物遺構と理解した。

図 4. 151　S034 全景（北西から）

S035

登録番号：CV22014
調査日：2022.09.15
WGS84：73.74372 E; 42.689164 N
UTM zone 43N：397087.359 m E; 4727062.964 m N
規模：126 m^2
標高：1,140 m
種別：葬祭遺構／単独墓
採集遺物：なし
推定時期：前 2 世紀〜後 5 世紀？
概要：本遺跡は、S034 の 90 m 南の段丘面下に位置する、重複する 2 基の小型墳丘墓から成る（図 4. 152）。保存状態の比較的良好な北西の 1 基（S035-1）は概ね方形を呈しており、東西約 5.6 m、南北約 5.0 m、高さ約 1.0 m を測る。頂部は東西約 3.0 m、南北約 2.5 m の矩形の平坦面を成し、その縁辺の一部（特に東辺）には円礫による 1 列の石列が見られる（図 4. 153）。S035-1 南東には、盗掘のため激しく破壊された円墳が所在する（S035-2）。この円墳は直径約 4.0 m を測り、中央には大きな盗掘坑が存在する。墓の周囲には、構築材と思しき 15 〜 25 cm 大の円礫が多く散布しており、西側の一部では石列を成している（図 4. 154）。

2 基の墓は僅かながら重複関係にある。北西の S035-1 の南東端が、南東の S035-2 の北西隅に覆いかぶさっているように見え、この状況に基づいて、北西の S035-1 のほうが南東の S035-2 よりも新しいと考えられる。

S036

登録番号：CV22031
調査日：2022.09.20
WGS84：73.762902 E; 42.685988 N

図 4. 152　S035 空撮俯瞰（上が北）

図 4. 153　S035-1 全景（東から）

図 4. 154　S035-2 石列（南から）

UTM zone 43N：398653.577 m E; 4726687.101 m N
規模：5,617 m^2
標高：1,134 m
種別：葬祭遺構／墓地
採集遺物：なし
推定時期：前 2 世紀〜後 5 世紀、近世？
概要：本遺跡は、カイナル川の東方約 1.3 km に位置する独立丘上南西端を占める墓地である（図 4. 155）。墓地の規模は最大で東西約 105 m、南北約 60 m を測る（図 4. 156）。

墓地は 2 種類の墓から成る。1 つは比較的大型の円墳であり、少なくとも 5 基が現存する。いずれも直径約 10 m、高さ約 1.0 m を測る。頂部には、構築材と思しき円礫（20 〜 30 cm 大）がいくつか散布する。また、頂部には盗掘坑とみられる直径約 1.0 m の土坑が穿たれていた。

もう 1 つの墓は、小型の円墳である。これらは数十基認められ、直径 2.5 〜 3.5 m、高さは 0.5 m 程度である。小型墓の多くでは円礫の散布は認められなかったが、20 〜 40 cm 大の円礫が表面に葺かれた小型墓が 1 基のみ見られた（図 4. 157）。この墓は、大型の円墳上に築かれており、大型円墳から石材を再利用したと考えられる。以上から、同遺跡が 2 時期にわたり利用された可能性が高い。初めに鉄器時代後期に大型円墳が築かれ、その後、おそらくは近世以降に近傍集落の住民の埋葬地として活用されたと思われる。

図 4. 155　S036 遠景（南西から）

図 4. 156　S036 空撮全景（北西から）

図 4. 157　S036 小型葺石墓（西から）

S037

登録番号：CV22021
調査日：2022.09.19
WGS84：（S037-1）73.737123 E; 42.685047 N；（S037-2）73.737713 E; 42.684666 N
UTM zone 43N：（S037-1）396540.102 m E; 4726613.85 m N；（S037-2）396587.806 m E; 4726570.82 m N
規模：2,030 m^2（S037-1: 348 m^2; S037-2: 453 m^2）
標高：1,192 m
種別：生活遺構／囲い込み遺構？
採集遺物：なし

推定時期：不明

概要：本遺跡は、S033 の 880 m 南、東のカイナル川から直接分岐して北西に流れる小河川の南西岸段丘上に位置する。

遺跡は 2 基の楕円形遺構から成る（図 4. 158）。北の S037-1 は、外側を廻る土塁（幅 2.3 m）とその内側の周溝（幅 2.3 m）により構築され、南西隅に出入口として利用できる開口部がある。周溝の内側は東西約 8.5 m、南北約 6.0 m を測り、平坦面のみが広がる。南の S037-2 は、S037-1 から約 40 m 南東の、西に傾斜する斜面に造られている（図 4. 159）。外側を廻る高めの土塁（幅 1.9 m）とその内側の深めの周溝（幅 2.7 m）により構築されるが、斜面の最上部に位置する東辺には、土塁・周溝は現存していない。周溝内側の傾斜面は、東西約 11.5 m、南北約 11 m を測り、複数の掘削痕跡が残る。

S037-1 は平坦面に造られていることから、家畜囲いとしての利用も考えられるが、S037-2 は傾斜面の立地故に機能推定が難しい。

図 4. 158　S037 空撮俯瞰（上が北）

図 4. 159　S037-2 全景（北西から）

S038

登録番号：CV22020

調査日：2022.09.19

WGS84：（S038-1）73.740947 E; 42.684853 N；（S038-2）73.740642 E; 42.684351 N；（S038-3）73.740499 E; 42.684576 N

UTM zone 43N：（S038-1）396853.063 m E; 4726587.633 m N;（S038-2）396827.245 m E; 4726532.261 m N;（S038-3）396815.902 m E; 4726557.42 m N

規模：2,534 m^2（S038-1: 167 m^2; S038-2: 314 m^2; S038-3: 326 m^2）

標高：1,178 m

種別：葬祭遺構／単独墓？（S038-1, 2）、生活遺構／逗留地？（S038-3）

採集遺物：なし

推定時期：不明

概要：本遺跡は、S037 の約 280 m 東、小河川東岸の低位段丘上に位置する 3 基の小型遺構から成る（図 4. 160）。

S038-1・2 は墓と考えられる。S038-1 は、同遺跡北端の段丘尾根上に立地する小型円形墓である（図 4. 161）。小丘状地形を、外側を廻る土塁（幅 1.3 m）とその内側の周溝（幅 1.5 m）により取り囲むことで構築されており、同遺構と一体的に捉えられる尾根の基部で測ると、直径約 20 m の規模である。周溝内側にある墳丘（自然丘）の頂部には東西約 5.0 m、南北約 2.0 m の平坦面が存在する。土塁と周溝は南辺が途切れており、内側へのアクセスが可能である。同様の構造は、S039-2 においても認められる。S038-2 は、長円形を呈している（図 4. 162）。S038-1 と同様に、尾根地形を、外側を廻る土塁（幅 1.4 m）とその内側の周溝（幅 1.6 m）により取り囲むことで構築

図 4. 160　S038 空撮俯瞰（上が北）

図 4. 161　S038-1 全景（南から）

図 4. 162　S038-2 全景（北西から）

図 4. 163　S038-3 全景（南東から）

される。同遺構と一体化した尾根の基部で測ると、北西 - 南東軸が約 20 m、北東 - 南西軸が約 29 m の規模となる。斜面の傾斜角が大きい西辺では土塁は造られておらず、狭い平坦面が削り出されている。また、東辺の中央部は、土塁が途切れて開口部を成している。周溝の内側は丘上に盛り上がっており、その中央部には、北西 - 南東軸で約 2.0 m、北東 - 南西軸で約 14.8 m の細長い平坦面が見られる。なお、S029-2 も S038-2 と同様の構造を呈している。

S038-3 は、S038-2 の約 12 m 北西、尾根から下がった河道沿いの低位段丘上に立地する（図 4. 163）。北・東・南辺を区画することで、東西約 4.0 m、南北約 12 m の長方形の平坦面を造り出している。北辺と東辺は外側を廻る土塁（幅約 1.4 m）とその内側の周溝（幅 1.7 m）により構築されているが、南辺は外側を溝、内側を土塁により区切られている。いずれも、溝はやや深く、土塁は低い。また、東辺は浸食を受けている。S038-3 は、その造りが不規則であるため特定の機能を有した遺構とは捉えられないが、平坦面を造り出すことを目的としていることから、短期逗留のための応急的な造成と見ることもできるだろう。

S039

登録番号：CV22022
調査日：2022.09.19
WGS84：（S039-1）73.737774 E; 42.683521 N；（S039-2）73.738226 E; 42.683374 N
UTM zone 43N：（S039-1）396590.904 m E; 4726443.6 m N；（S039-2）396627.691 m E; 4726426.723 m N
規模：750 m^2（S039-1: 375 m^2; S039-2: 133 m^2）
標高：1,205 m

図 4. 164　S039 空撮俯瞰（上が北）

図 4. 165　S039-2 全景（西から）

種別：生活遺構／囲い込み遺構（S039-1）、葬祭遺構／単独墓（S039-2）
採集遺物：なし
推定時期：不明
概要：本遺跡は、S037 の 130 m 南東、S037 と同じ段丘面北東縁辺に位置する 2 基の遺構から成る（図 4. 164）。

北西の S039-1 は、やや歪んだ円形の囲い込み遺構である。外側を廻る土塁（幅 2.3 m）とその内側の周溝（幅 1.9 m）により構築されるが、遺構の東辺は崖となっており、土塁は存在しない。また、北西部には、土塁と周溝が途切れる開口部（幅 3.2 m）が存在する。周溝の内側は、北西 - 南東軸で約 12 m、北東 - 南西軸で約 10 m を測り、平坦面のみが広がる。

S039-2 は段丘北方へ突出した小丘状地形を利用した円形墓と考えられる（図 4. 165）。中央の自然丘を、外側を廻る土塁（残存状態が悪く計測不可）とその内側の浅い周溝（幅 1.3 m）で取り囲み、墳丘を作出している。元来、南側には土塁は造られていなかったと考えられる。なお、土塁の基部で測ると、東西約 14 m、南北約 11 m の規模となる。周溝の内側にある墳丘（自然丘）の頂部には直径約 3.5 m の平坦面が存在する。同様の構造は、S038-1 においても認められる。

S040

登録番号：CV22023
調査日：2022.09.19
WGS84：73.741488 E; 42.681386 N
UTM zone 43N：396891.65 m E; 4726201.982 m N
規模：4,285 m^2
標高：1,211 m
種別：葬祭遺構／墓地

図 4. 166　S040 空撮全景（北から）

採集遺物：なし
推定時期：前 3 世紀～後 5 世紀？
概要：本遺跡は、S038 の約 300 m 南、小河川東岸の段丘面上に位置する（図 4. 166）。東西約 45 m、南北約 180 m の範囲に、少なくとも 6 基の円墳を確認した。墳丘は直径 5.0 ～ 10 m、高さ 1.0 m 未満であり、6 基のうち 3 基の頂部では 20 ～ 40 cm 大の円礫の散布が、また、1 基では石列を確認した。なお、1 基は盗掘を受けていた。いずれも激しい浸食を受けたと思われる。墓の規模に基づいて、鉄器時代後期の所産と推定する。

S041

登録番号：CV22030
調査日：2022.09.20
WGS84：73.749078 E; 42.681243 N
UTM zone 43N：397513.263 m E; 4726176.869 m N
規模：103 m^2
標高：1,184 m
種別：生活遺構／囲い込み遺構
採集遺物：なし
推定時期：不明
概要：本遺跡は、カイナル川の東方約 370 m、カイナル川から直接分岐して北東方向に貫流する小河川の北東岸に位置する（図 4. 167）。遺跡では、1 基の円形遺構が認められた（図 4. 168–169）。同遺構は石造であり、角礫（50 ～ 80 cm 大）の石積み（幅 1.4 m）と、南西部分のみ高さ 30 cm の概ね 2 列立石により構築されている。内寸は直径約 6.5 m を測り、内側の平坦面には、崩落あるいは上流から流されてきたと思われる礫がある程度まとまりを成して分布している。

本遺構は、当該プロジェクトにおいて確認できた唯一の石造囲い込み遺構である。

図 4. 167　S041 空撮遠景（北東から）

図 4. 168　S041 全景（南西から）

図 4. 169　S041 空撮俯瞰（上が北）

図 4. 170　S042 空撮全景（北西から）

図 4. 171　S043 全景（南東から）

S042

登録番号：CV22029

調査日：2022.09.20

WGS84：73.751685 E; 42.680896 N

UTM zone 43N：397726.285 m E; 4726135.178 m N

規模：2,276 m^2

標高：1,198 m

種別：葬祭遺構／墓地

採集遺物：なし

推定時期：前 2 世紀～後 5 世紀？

概要：本遺跡は、S041 の約 200 m 東南東、小河川南の段丘上に位置する円墳群である（図 4. 170）。本墓域では、東西約 65 m、南北約 50 m の範囲に少なくとも 8 基の円墳を確認した。墳丘の直径は約 10 m、高さは 1.0 m 未満であり、周囲には礫の散布は認められない。墓域の北端は崖面になっており、浸食を受けて崩落していることから、墓域の範囲は元来、北側にも続いていた可能性がある。

　墳丘の規模と浸食の状況に鑑みて、鉄器時代後期の所産と推定する。

S043

登録番号：CV22028

調査日：2022.09.20

WGS84：73.749229 E; 42.680454 N

UTM zone 43N：397524.338 m E; 4726089.072 m N

規模：90 m^2

標高：1,206 m

種別：葬祭遺構／墓地

採集遺物：なし

推定時期：前 2 世紀～後 5 世紀？

概要：本遺跡は、S041 の約 90 m 南、カイナル川から北東へ分岐する小河川南岸の段丘上に位置する。遺跡は少なくとも 3 基の円形集石から成る（図 4. 171）。いずれも、幅 1.3 ～ 1.6 m の円環状に 20 ～ 50 cm 大の円礫が散布しており、その内側の空間は、北の 2 基で直径 2.6 ～ 3.4 m、南の 1 基で直径 1.7 m を測る。西の 2 基は円環の一部が重複しているものの、新旧関係は定かではない。また、北端の 1 基の西側は、崖面の浸食により部分的に消失している。

　遺跡の現況に鑑みて、おそらくは墳丘が消失した円墳の痕跡だと考えられる。

S044

登録番号：CV22025

調査日：2022.09.19

WGS84：（S044-1）73.740556 E; 42.679896 N；（S044-2）73.740098 E; 42.6799 N

UTM zone 43N：（S044-1）396812.826 m E; 4726037.663 m N；（S044-2）396775.308 m E; 4726038.667 m N

規模：810 m^2（S044-1: 211 m^2; S044-2: 113 m^2）

標高：1,212 m

種別：生活遺構／囲い込み遺構

採集遺物：なし

推定時期：不明

概要：本遺跡は、S040 の 150 m 南西、カイナル川から北西に流れる支流の南岸段丘面縁辺に位置する 2 基の囲い込み遺構から成る（図 4. 172）。

東の S044-1 は、段丘面にほぼ南北方向に短く刻まれた小谷に面するかたちで、その西岸の北へ傾斜する緩斜面上に築かれた半円形遺構である。遺構は外側を廻る土塁（幅 1.6 m）とその内側の周溝（幅 1.8 m）により構築されるが、北辺はいずれも獣道により壊されており、土塁は西辺に僅かな痕跡をとどめるのみである。東辺は小谷に面するため土塁・周溝は存在しないが、元来存在したものが浸食により壊された可能性もある。周溝の内側は東西約 8.0 m、南北約 10.5 m の平坦面のみが広がるが、南西隅の一部に僅かな高まりが見られる。なお、南辺では途中で溝が途切れ、小谷崖面との間に幅 1.0 m 程度の開口部が認められる。

西の S044-2 は、S044-2 の約 25 m 西の涸れ谷東岸斜面上に位置する円形遺構である（図 4. 173）。遺構は外側を廻る低い土塁（幅 1.5 m）とその内側の浅い周溝（幅 1.5 m）により構築されるが、土塁の東辺・西辺と周溝の西辺は僅かな痕跡のみが残る。周溝の内側には、東西約 5.5 m、南北約 4.0 m のやや盛り上がった面が存在する。

斜面に立地することから、これらの遺構に対して家畜囲いとして機能を推定することは難しいかもしれないが、何らかのものを囲い込む目的で構築された遺構とは考えられるだろう。

S045

登録番号：CV22026

調査日：2022.09.19

WGS84：（S045-1）73.738934 E; 42.679488 N；（S045-2）73.738777 E; 42.679174 N；（S045-3）73.73849 E; 42.679325 N

図 4. 172　S044 空撮俯瞰（上が北）

図 4. 173　S044 全景（西から）

UTM zone 43N：（S045-1）396679.256 m E; 4725994.339 m N; (S045-2) 396665.872 m E; 4725959.663 m N; (S045-3) 396642.608 m E; 4725976.782 m N

規模：2,050 m^2（S045-1: 504 m^2; S045-2: 360 m^2; S045-3: 131 m^2）

標高：1,247 m

種別：生活遺構／囲い込み遺構

採集遺物：なし

推定時期：不明

概要：本遺跡は、S044 の約 120 m 南西、S044-2 の対岸の段丘面の南西方斜面上に位置する 3 基の囲い込み遺構から成る（図 4. 174–175）。

北東の S045-1 は最も大きく、隅丸長方形を呈する（図 4. 176）。遺構は外側を廻る土塁（幅 3.0 m）とその内側の周溝（幅 2.0 m）により構築されており、西辺中央が途切れて幅 3.5 m の開口部を呈する。周溝の内側は、北東 - 南西軸で約 17 m、北西 - 南東軸で約 10 m を測り、平坦面のみが広がる。

S045-2 は半円形を呈し、北西で S045-3 が立地する山脚の裾部に取り付く（図 4. 177）。遺構の保存状況は概し

図 4. 174　S045 空撮俯瞰（上が北）

図 4. 175　S045 空撮全景（東から）

図 4. 176　S045-1 全景（南西から）

図 4. 177　S045-2 全景（北東から）

て不良であり、所々で浸食を受けている。遺構は外側を廻る低い土塁（幅 1.7 m）とその内側の浅い周溝（幅 1.4 m）により構築されるが、いずれも北東部の大部分が壊されており、土塁は南部の 2 ヶ所で切り通されている。北東部には角礫（20 ～ 60 cm 大）の散布が認められ、部分的に 1 列に並ぶ様子も観察できた。南東部の周溝のさらに内側には、幅 1.2 m の溝が部分的に廻る。周溝の内側は、北東 - 南西軸で約 20 m、北西 - 南東軸で約 11 m を測り、前述の内溝と北部の攪乱坑を除けば、ほぼ平坦面から成る。

S045-3 は、S045-1 南西の山脚尾根上緩斜面に位置する円形遺構である（図 4. 178）。遺構は外側を廻る低い土塁（幅 1.6 m）とその内側の浅い周溝（幅 1.6 m）から成るが、土塁の西辺は獣道により壊されている。周溝の内側は東西約 6.0 m、南北約 5.5 m を測り、北東方向に傾斜する平坦面を成す。

遺構の立地や風化の程度に鑑みると、S045-2 は他の 2 基に比べて構築年代がより古いと考えられる。

図 4. 178　S045-3 全景（北西から）

図 4. 179　S044+046 空撮全景（北から）

S046

登録番号：CV22024

調査日：2022.09.19

WGS84：73.741461 E; 42.679492 N

UTM zone 43N：396886.306 m E; 4725991.697 m N

規模：156 m^2

標高：1,220 m

種別：生活遺構／囲い込み遺構

採集遺物：なし

推定時期：不明

概要：本遺跡は、S044 の約 80 m 南東、S044 と同一の段丘面上北縁辺に位置する 1 基の隅丸長方形遺構から成る（図 4. 179）。遺構は外側を廻る低い土塁（幅 2.3 m）とその内側の浅い周溝（幅 2.1 m）により構築されるが、北辺は段丘崖面の浸食により壊されている（図 4. 180）。溝の内側は東西約 6.0 m、南北約 3.0 m を測り、平坦面のみが広がる。

S047 オルト・カイルマ 2（Orto-Kairma 2）

登録番号：CV22034

調査日：2022.09.21

WGS84：73.816935 E; 42.679437 N

UTM zone 43N：403069.976 m E; 4725896.258 m N

規模：307 m 長

標高：1,113 m

種別：葬祭遺構／クルガン

採集遺物：なし

推定時期：前 8 ～前 3 世紀

概要：本遺跡は、オルト・カイルマ（Orto-Kairma）集落の約 350 m 南に位置する。遺跡は現況で、南北 1 列に並ぶ小規模なクルガン 5 基から成る（図 4. 181–182）。

図 4. 180　S046 空撮俯瞰（上が北）

周囲は耕作地として利用されている。各クルガンの詳細は、北から以下のとおり。

S047-1：直径約 25 m、頂部に 50 ～ 70 cm 大の巨礫、墳丘表面には 20 cm 大の円礫が見られる。盗掘坑は認められない。

S047-2：直径約 25 m、S047-3 よりも低い。頂部に盗掘坑は認められない。

S047-3：直径約 32 m、頂部平坦面に 20 ～ 40 cm 大の円礫が散布する。盗掘坑は認められない。

S047-4：耕作による破壊が激しく計測不可。墳丘上中央には 1 基の大土坑、東西端に各 1 基の土坑が見られる。20 ～ 30 cm 大の円礫が散見される。

S047-5：耕作による破壊が激しく計測不可。頂部には、15 ～ 25 cm 大の円礫が多く散布する。

S047-6：直径約 19 m、頂部に盗掘の痕跡と思しき大土坑あり。頂部付近に 20 cm 未満の円礫が少数散布する。

規模と立地に鑑みて、S049 とほぼ同時代の所産と考えられる。

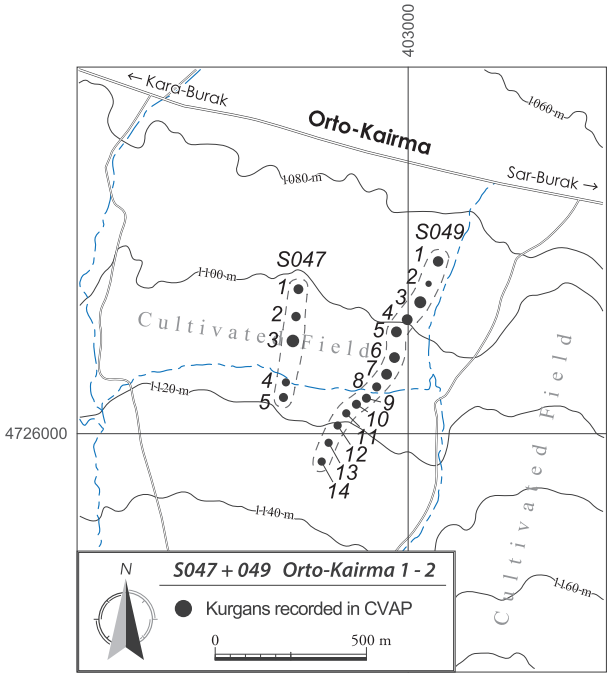

図 4. 181　オルト・カイルマ 1・2（S047+049）位置図

図 4. 182　オルト・カイルマ 2（S047）空撮全景（北から）

S048

登録番号：CV22027

調査日：2022.09.20

WGS84：73.746265 E; 42.677314 N

UTM zone 43N：397276.321 m E; 4725743.992 m N

規模：4,355 m^2

標高：1,234 m

種別：葬祭遺構／墓地

採集遺物：なし

推定時期：前 2 世紀～後 5 世紀？

概要：本遺跡は、S043 の 340 m 南西、カイナル川東岸の北へ傾斜する段丘面上に位置する（図 4. 183）。東西約 70 m、南北約 230 m の範囲に、ほぼ南北 1 列に並ぶ少なくとも 10 基の円墳を確認した。墳丘の残存状態は良好ではなく、残存高は 1.0 m に満たないが、直径は最大で約 10 m（3 基）を測り、この他に計測できた円墳は、直径約 7.5 m（1 基）、直径約 6.0 m（2 基）、直径 3.0 ～ 4.0 m（3 基）であった。墳丘の規模と配置に相関は認められない。10 基中 5 基では、20 ～ 40 cm 大の円礫が多く散布していた（図 4. 184）。また、3 基には盗掘を受け

図 4. 183　S048 空撮全景（北から）

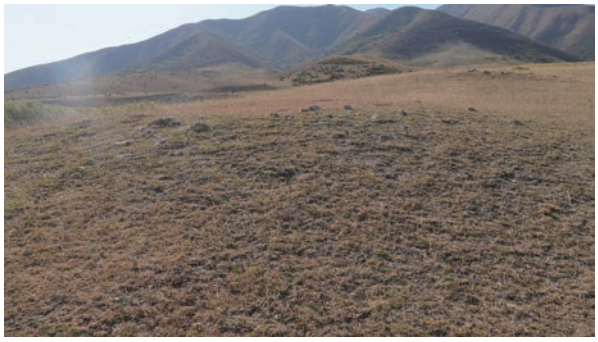

図 4. 184　S048 円墳（北から 5 基目）全景（北西から）

た痕跡が見られた。

　墳丘の規模と浸食の状況に鑑みて、鉄器時代後期の所産と推定する。

S049 オルト・カイルマ 1（Orto-Kairma 1）

登録番号：CV22033

調査日：2022.09.21

WGS84：73.81821 E; 42.677966 N

UTM zone 43N：403172.155 m E; 4725731.45 m N

規模：639 m 長

標高：1,118 m

種別：葬祭遺構／クルガン

採集遺物：なし

推定時期：前 8 ～前 3 世紀

概要：本遺跡は、オルト・カイルマ集落の約 200 m 南、S047（オルト・カイルマ 2）の約 300 m 東に位置する（図 4. 181, 185）。耕作地内において、北東から南西にほぼ 1 列に並ぶ 14 基のクルガンを確認した。各クルガンの詳細は、北から以下のとおり。

S049-1：直径約 26 m、墳丘が最も残存する。頂部には盗掘坑と思しき小土坑が見られる。南半に破壊の痕跡あり。

S049-2：破壊が激しく計測不可。中央部には盗掘坑の痕跡と思しき大土坑が見られる。

S049-3：直径約 25 m、頂部に盗掘坑は見られない。頂部に 25 cm 大の円礫の集中あり。

S049-4：直径約 26 m、頂部に盗掘坑は見られない。頂部に 20 cm 大の円礫が散布。

S049-5：直径約 24 m、頂部に盗掘坑は見られない。20 cm 大の円礫が周辺に数点散布する。

S049-6：直径約 25 m、墳丘南半分が盗掘あるいは耕作により破壊されている。

S049-7：破壊が激しく計測不可。頂部に盗掘の痕跡と思しき大土坑あり。

S049-8：破壊が激しく計測不可。頂部に東西方向の切り通しあり。周囲に 20 cm 大の円礫が数点散布。

S049-9：破壊が激しく計測不可。頂部に盗掘の痕跡と思しき大土坑あり。

S049-10：破壊が激しく計測不可。おそらく耕作によりほとんど残存せず。現存墳丘の頂部に盗掘坑あり。

S049-11：直径約 16 m、頂部に盗掘の痕跡と思しき大土坑あり。20 ～ 30 cm 大の円礫が墳丘裾部に散布する。

S049-12：直径 19 ～ 20 m、頂部に盗掘の痕跡と思しき大土坑あり。

S049-13：直径約 20 m、頂部に盗掘の痕跡と思しき大土坑あり。

S049-14：直径約 20 m、頂部に盗掘の痕跡と思しき大土坑あり。40 ～ 50 cm 大の円礫が地表に散布。

　規模と立地に鑑みて、S047 とほぼ同時代の所産と考えられる。

図 4. 185　オルト・カイルマ 1（S049）空撮全景（北から）

S050

登録番号：CV18013

調査日：2018.10.03

WGS84：（S050-1）73.882207 E; 42.658808 N；（S050-2）73.882271 E; 42.658984 N

UTM zone 43N：（S050-1）408385.632 m E; 4723533.725 m N；（S050-2）408393.063 m E; 4723552.212 m N

規模：1,249 m^2（S050-1: 118 m^2; S050-2: 32 m^2）

標高：1,181 m

種別：生活遺構／建物遺構（S050-1）、葬祭遺構／単独墓？（S050-2）

採集遺物：なし

推定時期：不明

概要：本遺跡は、モノルドール（Monoldor）集落の約 250 m 南、涸れ谷東岸に位置する、近接する 2 基の小型遺構から成る（図 4. 186）。南側には現代の墓地が広がる。

S050-1 は、南に立地するやや歪んだ方形を呈する建物遺構である。断面台形に造り出された同遺構は、外側の周溝とその内側を廻る土塁（幅約 2.0 m）により構築される。土塁は、泥レンガ製壁体基部の痕跡と考えられる。外寸は約 26 m 四方を測る。壁体内側の北西部には、盗掘の痕跡と思しき土坑が見られる。また、遺構の北西外には土坑状の窪みが存在する。

S050-2 は、S050-1 の北東に隣接する小型の円形遺構である。遺構は外側を廻る土塁とその内側の周溝により構築されており、外周の直径は約 9.0 m を測る。周溝の内側は自然地形のままと考えられるが、墳丘状に見える。構造が S038-1 や S039-2 に類似しており、S050-2 は墓である可能性が考えられる。

S051

登録番号：CV18012

調査日：2018.10.03

WGS84：73.880467 E; 42.65773 N

UTM zone 43N：408243.342 m E; 4723415.29 m N

規模：3,924 m^2

標高：1,194 m

種別：居住址／城塞

採集遺物：なし

推定時期：10 ～ 12 世紀？

概要：本遺跡は、モノルドール集落の 400 m 南、S050 の対岸の西段丘面に位置する 1 基の大型方形遺構から成る（図 4. 187）。遺構の北側には、モノルドール集落の共同墓地が所在し、遺構の北東部が区画柵により共同墓地の範囲に含まれている。

遺構は幅 2.0 ～ 3.0 m 程度の外周を取り囲む土塁から成り、東西約 60 m、南北約 64 m の規模を有する。土塁の内側には平坦面のみが広がる。四隅には、塔の存在を示唆する痕跡は一切認められない。また、開口部も存在しない。なお、土塁の東辺・西辺は、遺構を横切る現代の通路により、その一部が切り通されている。

土塁の外側に周溝は造られていないものの、構造・規模は N012 及び S001 と類似していることから、ほぼ同時期の所産と考えて差し支えないだろう。

図 4. 186　S050 全景（北西から）

図 4. 187　S051 全景（南東から）

V. 考　察

1. 時期別・種類別遺跡分布傾向

第 III・IV 章で見たとおり、登録した 94 遺跡のうち、後期青銅器時代末から近世・近代のいずれかに位置付けられた遺跡は 59 遺跡であった。ここには、既知の遺跡が 14 件含まれているので、本プロジェクトにより新規に登録した、時期を特定可能な遺跡は 45 件であった。以下、従来の調査成果も併せつつ、本プロジェクトによる登録遺跡の分布状況を時期別に把握していく。

後期青銅器時代末（前 1000 ～ 800 年頃）

後期青銅器時代末に帰される遺跡は僅か 1 件の土器散布地（N018）であり、Zone I 東部の河岸段丘上に所在する。青銅器時代の遺跡・遺物は、1941 年に大チュー運河建設時の調査でも数ヶ所（チュー渓谷東部のイワノフカ Ivanovka 南東、西部のジャイル及びカインディ）において確認されており（Бернштам 1950: 105–106）、このうちカインディの約 6 ～ 7 km 北東で認められた痕跡は N018 に最も近い。いずれもカラスク文化の所産と見られ、近傍に所在した集落に由来するものと思われる。

鉄器時代前期（前 8 ～前 3 世紀）

同時期には、13 件のクルガン群が認められた。墳丘径は 19 ～ 70 m を測り、その分布はキルギス山脈北麓（標高 1,100 m）から調査対象地域北限近くの沖積平野内（標高 600 m）まで広い範囲に及び、明確な傾向を見出すことはできない（図 5. 1）。ただし、このうち 8 件のクルガン群は Zones 2･3 北縁部分（現在の東西幹線道路南側）の標高 800 ～ 900 m 付近に集中しており、農地開拓による遺構削平の影響を考慮しても、当該地帯がクルガンの造営のために意図的に選択された可能性を否定できない。なお、本プロジェクトで登録したクルガン 73 基のうち計測可能であった 66 基について、その墳丘径と立地標高の相関係数は -0.4820769 となり、標高が高くなるほど墳丘径が小さくなるという負の相関関係にあることが明らかになった（図 5. 2）。この結果は、編年差（平野部から山麓部、またはその逆の順番でクルガンが築かれた）あるいは地域差（地勢に合わせて、平野部には大きめのクルガンが、山麓部には小さめのクルガンがほぼ同時期に築かれた）いずれかを示していると考えられるが、発掘調査によらない限りは結論を見ないであろう。

鉄器時代後期（前 2 ～後 5 世紀）

この時期には、クルガンに代わって円墳群 9 件が見られるようになる（図 5. 1）。このうち 8 件は Zone IVb の山麓部に集中する。いずれも円礫が部分的に露出した低い墳丘を持つことから、地下式の埋葬施設があるとみて間違いない。大規模な農地開拓を受けてきたとはいえ、北方の平野部にはこのような円墳は全く認められず、もとより山麓部にのみ築かれたとみるのが妥当であろう。なお、残りの 1 件は調査対象地域の北縁に位置する墓地 N041 であり、土盛りによるやや高め（1.0 m 高）の墳丘が特徴的である。少なくとも数十～百基の小型円墳が密集する同遺跡は、山麓部に分布する円墳群とは様相を異にしている。他方で、クム・アルィクにおけるケンコル文化の円墳群（Кожомбердиев 2012）への類似性が見られることから、仮に 1 ～ 5 世紀頃の所産と推定した [1)]。

N041 を除く 8 件の円墳群は、アラメディンやカラ・バルタの集落遺構（前 3 ～前 1 世紀）と時期が重複する可能性がある。烏孫に帰されたこれらの集落（cf. Мошкова 1992: 84）は、季節的な逗留地であったとみるのが適当だろう。遺跡の担い手の民族的帰属については今のところ留保するとして、これら一連の遺跡は、遊牧民による季節的な南北移動の経路上に所在したと推察できる。近代の中央アジア山岳地帯における垂直移動パターン（cf. Khazanov 1984: 38, 50; Emeljanenko 1994: 38–39）に照らせば、標高が低い平野部に所在するこれらの集落に冬営地が、夏場に草原が卓越する山麓部に夏営地が設けられたと考えられる。冬営地と夏営地の間の移動経路上に、山麓部の円墳群は営まれたのかもしれない。

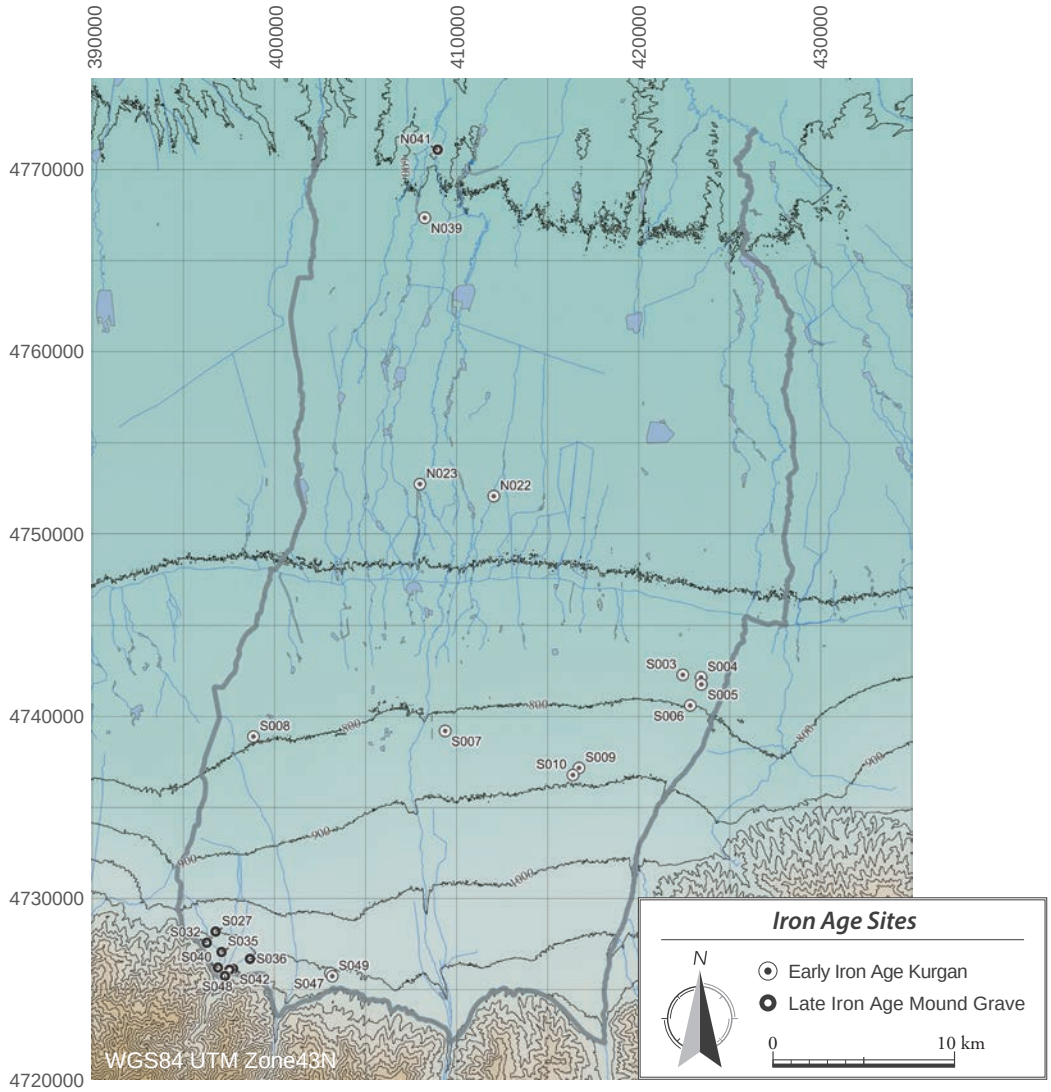

図 5. 1　鉄器時代の遺跡分布図

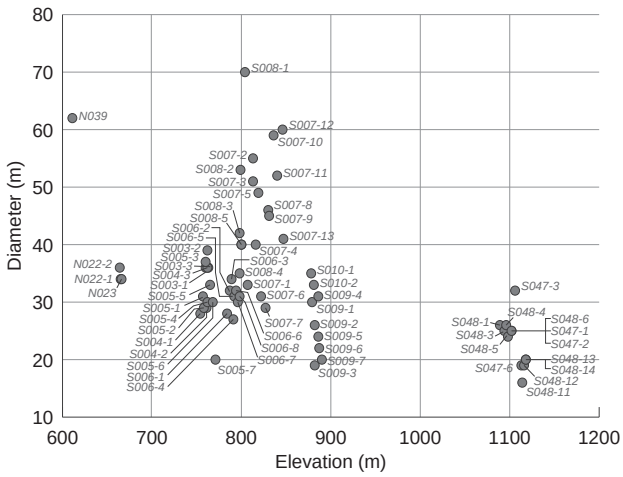

図 5. 2　クルガンの墳丘径と標高の相関

中世前期（6 ～ 8 世紀）

ソグド人がチュー渓谷に入植した 6 世紀にはシス・トベ（N005）とアク＝トベ・スレテンスコエ（N032）のみが定住地であり、その後 7 世紀にベロヴォドスコエ・クレポスト（N006）が築かれたと考えられる（図 5. 3, 表 5. 1）。チュー渓谷において 6 世紀に遡りうる都市・町は、シス・トベとアク＝トベ・スレテンスコエに加えて、ソークルーク、クラスナヤ・レーチカ、そしてアク・ベシム以外に確認されていない（cf. Горячева 2010: 37, Рис. 2）。これらの都市間をつなぐかたちで、8 世紀までの間に多くの都市あるいは町が築かれていった。こうした継続的な植民活動は、居住地と耕作域の拡大や東西交易の活発化に加えて、8 世紀初頭におけるアラブ人によるソグディアナの占領に伴うソグド人の同地への流入により、動機付けられていたと推測できる。調査対象地域における 3 つの居住址のうち

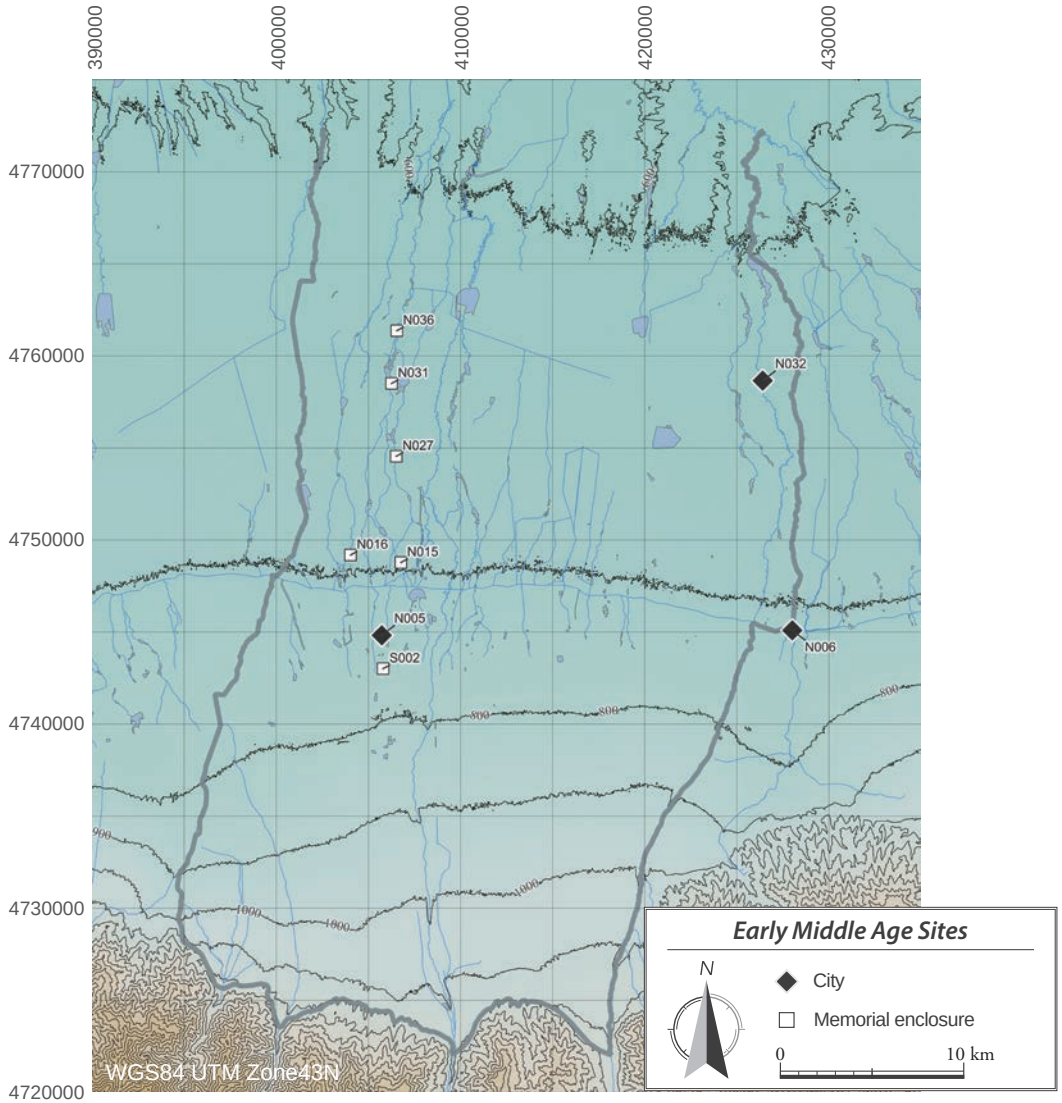

図 5. 3　中世前期の遺跡分布図

2 つ（N005, 006）は、鉄器時代前期に多くのクルガンが造営された標高 700 ～ 800 m の平野部に立地している。現在ではこの地帯以北にも開拓が及び無数の集落が営まれているが、かつては無数の小河川が流れこむ湿地帯が広がっていたと思われる [2)]。渓谷内で大きな都市を築くにあたり、おそらくは在地の遊牧民が拠った山麓部から十分に離れており、東西あるいは南北に交易路が通るために十分に平坦で障害物がなく、加えて、居住址の周囲で十分な水を確保してコムギやブドウの栽培も行える地勢が選ばれたのであろう（cf. Vaissière 2005: 114–115）。

中世前期には、遊牧民に関連する遺跡・遺構もまた、少なからず確認された。突厥の追悼遺構と看做しえる小型の矩形遺構は、いずれもシス・トベ近傍の水系沿岸に位置している。これらの遺構の多くは小河川の東岸に造営されており、モンゴル高原における類似する追悼遺構の外側東方に石列が続く一般的な特徴（林 2005: 51）に鑑みれば、この立地も偶然ではないのだろう。

上記から、平野部では、ソグド系植民都市の周辺において突厥（あるいは西突厥）系の遊牧民が広範に活動しており、両者が共生していた状況が看取される。

中世後期（9 ～ 14 世紀）

9 世紀から 12 世紀にかけて、拠点都市・町は主に東西交易路沿いに発展を遂げた。シス・トベ（N005）、ベロヴォドスコエ・クレポスト（N006）、及びアク＝トベ・スレテンスコエ（N032）はその範囲を大幅に拡大し、周囲に長大な城壁が廻るようになった（図 5. 4）。また、とアク＝トベ・チューレクスコエ（N042）が新たに建設され、同時期に北方への交易路が十分に整備されたことは明らかである。拠点都市であるシス・トベとベロヴォドスコ

表 5. 1　チュー渓谷における主要な中世都市遺跡（Горячева 2010: 49, Таблица 2 に基づき一部改変の上作成）

Site No.	Site Name	Period (Century AD)	Identification
N001	Novo Nikolaevka	9 - 12	-
N002	Petropavlovka	10 - 12	-
N003	Poltavka	9 - 12	-
N004	Petrovka	9 - 12	-
N005	Shish Tobe	6 - 12	Nuzket
N006	Belovodskoe Krepost	8 - 13, 16 - 18	Harrandjuvan
N021	Komintern	10 - 12	-
N032	Ak-Tobe Sretenskoe	6 - 12	-
N042	Ak-Tobe Tolekskoe	9 - 12	Yaga
-	Sokuluk	6 - 14	Djul
-	Alexandrovka	7 - 12	-
-	Groznen	9 - 12	Saryg
-	Kluchevka	7 - 12	-
-	Novopokrovka	7 - 12	Kirmirau
-	Krasnaya Rechka	6 - 12	Navikat
-	Kismichi	7 - 13	Bundjikat
-	Ak-Beshim	6 - 12	Suyab
-	Burana	10 - 14	Balasagun/ Quz-Ordu
	Ak-Tobe Stepninskoe	8 - 12	-
-	Kaindi	7 - 12	-
-	Ashpara	10 - 14	Aspara

エ・クレポストの間には、より小規模な町（N001, N003, N004）がほぼ 5 ～ 6 km 間隔で並ぶようになった。この交易路沿いから外れる町は、北方の平野部に新たに造られた N040 である。9 世紀後半から 10 世紀後半に利用されたとみられる N040 は、定住に必ずしも適しているとは言えない平野部深奥に位置しているのみならず、その範囲も多角形の城壁に囲まれており、通常の定住集落とは到底看做せない。また、城壁内の範囲には明確な建物遺構は見当たらず、僅かな凹凸が見られるだけである。さらに、城壁内には遺物があまり散布しておらず、年代決定の根拠とした土器片は主に城壁外南西において採集された。こうした一連の事実に鑑みて、N040 は実際的な居住地というよりは交易拠点として築かれたと考えられ、その利用時期は短かった可能性が高い。推測の域を出ないが、9 世紀に交易活動が活発化して拠点都市・町が拡大するに及び、8 世紀に既に建設されていた北方のアク＝トベ・ステプニンスコエ（Ak-Tobe Stepninskoe）につながる新た

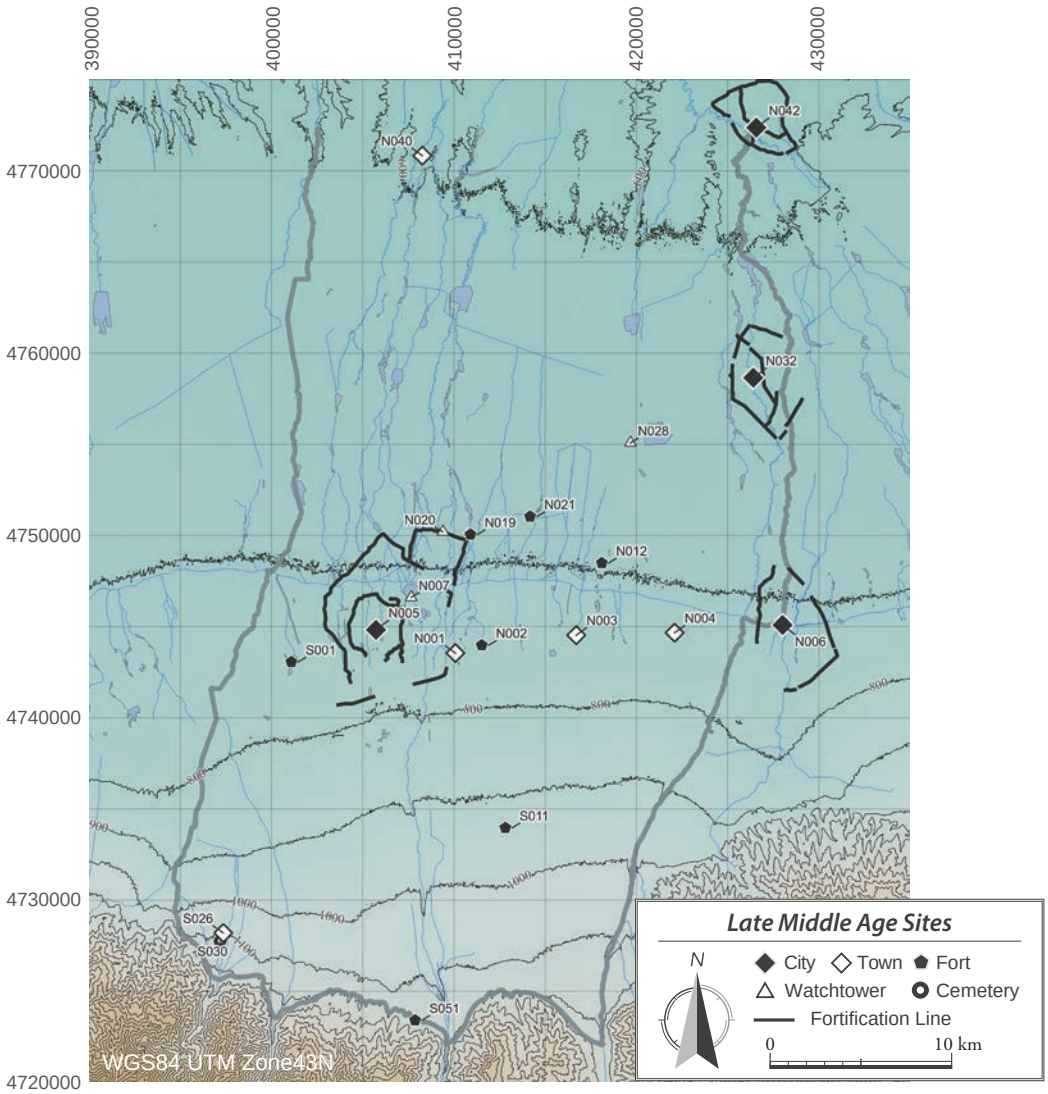

図 5. 4　中世後期の遺跡分布図

な交易路の活発化を視野に入れて、新規に拠点を築こうとしたのではないだろうか。しかし、その地勢や社会・経済的問題から、N040を経由する交易路はその後に発展することはなく、この代わりに、アク＝トベ・スレテンスコエ及びアク＝トベ・チューレクスコエを経由するアク・スウ川沿いに伸びる北方ルートが10世紀以降に発達したと考えると、これらの遺跡の分布状況を合理的に理解できる。

都市・町の周辺には、要塞と望楼が一定の間隔で分布している。シス・トベの周辺を見てみると、外郭城壁の北東にN019、南東にN002、南西にS001といった要塞が配置されている。また、シス・トベ近傍にはN007とN020という望楼がある。N007は内郭城壁のすぐ北東外側に、N020は外郭城壁北東に突出する城壁沿いに位置している。これらの望楼の築造には、時期差がある可能性が高い。コジェミャコによる調査結果に従えば、シス・トベは10世紀までには内郭壁内全体に居住地が拡大し、これ以降12世紀までに外郭壁が建造されたと考えられる（cf. Кожемяко 1959: 82–84）。この段階的な拡大状況に基づけば、N007は9～10世紀頃、N020は10～12世紀に造られたと解釈できるだろう。都市の段階的発展を示す遺跡分布状況であると言える。

山麓部には、おそらく12世紀以後に造られたと考えられるタシュ・マザール（S026）が位置している。町の周囲に城壁が存在せず、平面形も不定形である点で、これ以前の居住址とは様相を異にしている。これは、タシュ・マザールが純粋な定住農村であったことを物語っている。また、この町の南西には附属墓地（S030）が確認されており、居住が一定期間に亘っていたことがわかる。おそらくは、平野部に築かれた交易都市が衰退・廃絶していく中で、在地の定住農耕民が遺した居住址であろうと思われる。

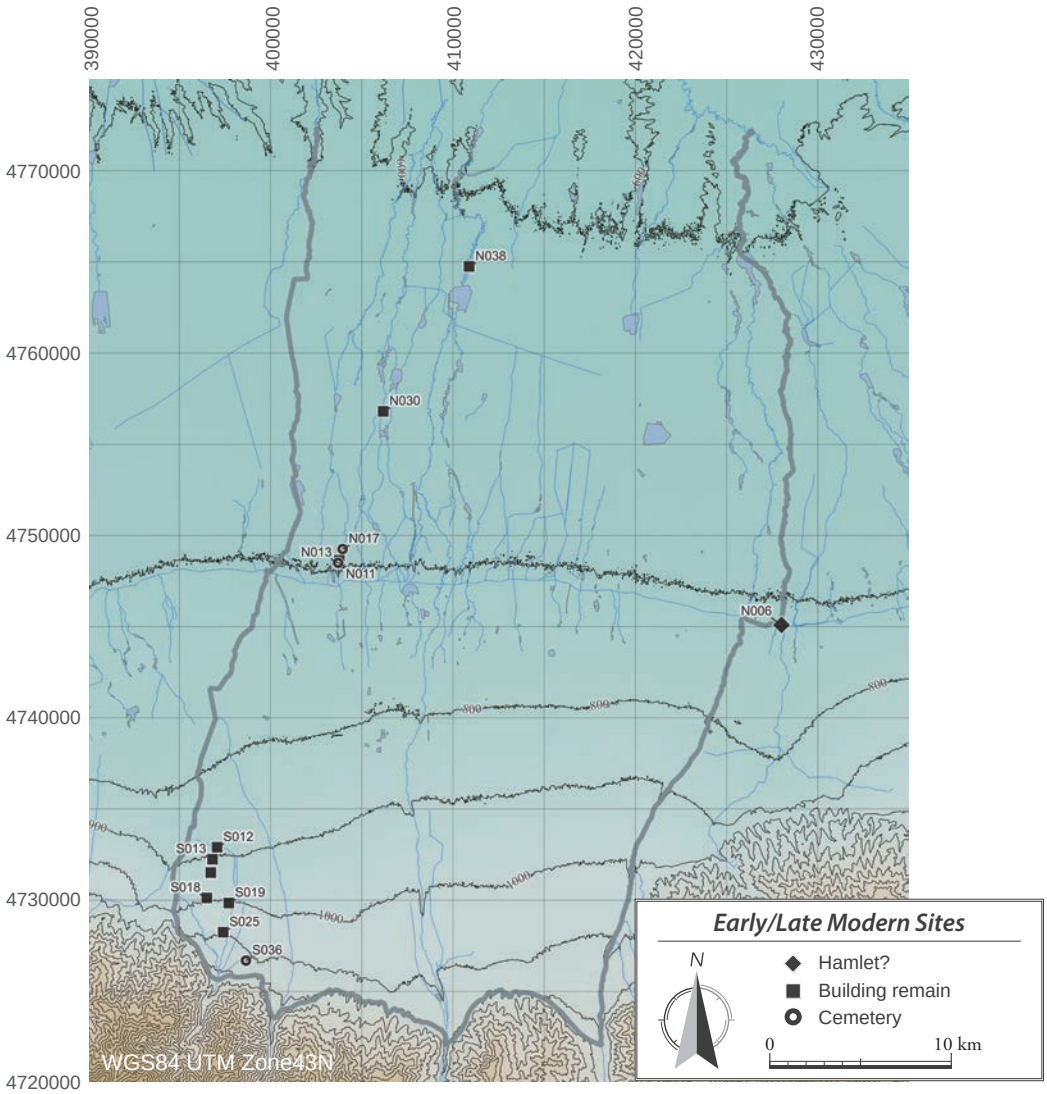

図5.5　近世・近代の遺跡分布図

近世・近代（15 ～ 19 世紀）

おそらく当該期に位置づけられるであろう遺跡は、ベロヴォドスコエ・クレポスト（N006）最上層の居住址、8 遺跡において 12 棟が認められた建物遺構、そして、墓地 3 件である。

ベロヴォドスコエ・クレポストにおけるシャフリスタン南西隅の調査によって、その最上層から 16 ～ 18 世紀の居住址が確認された（Мокрынин 2012: 108）。僅かな建築遺構とこれに伴う陶磁器やその他遺物から判断して、小集落が存在したと考えられる。

建物遺構の平面形はいずれも矩形を呈しており、1 部屋のものが多いが、なかには複数の部屋から成る遺構（S019）もある。こうした遺構は、現在の耕作地縁辺に残されていることが多い。建物遺構では遺物を採集できなかったことから、精確に年代を決定することは難しいが、遺構の構造や残存状況、また、その立地に鑑みて、その多くが近代の所産とみられる。

図 5. 5 では、建物遺構の分布は山麓部の Zone IVb に偏っているが、これは、当該地において多くの遺構が残されているのに対して、平野部ではおそらく農地開拓により多くが消滅してしまった事情によるものと思われる。いずれにしても、こうした比較的新しい遺跡・遺構については、もとより本プロジェクトの対象外であり、また、時間的な制約もあったことから、そのごく一部を記録したに過ぎない。特に、Zone IVb にはさらに多くの建物遺構が分布しており、かなり高い分布密度であることを付記しておく。

墓地は、2 件（N013・017）が平野部、1 件（S036）が山麓部において確認された。

時期不明の遺跡

先述のとおり、36 遺跡は年代不明の遺構を含んでい

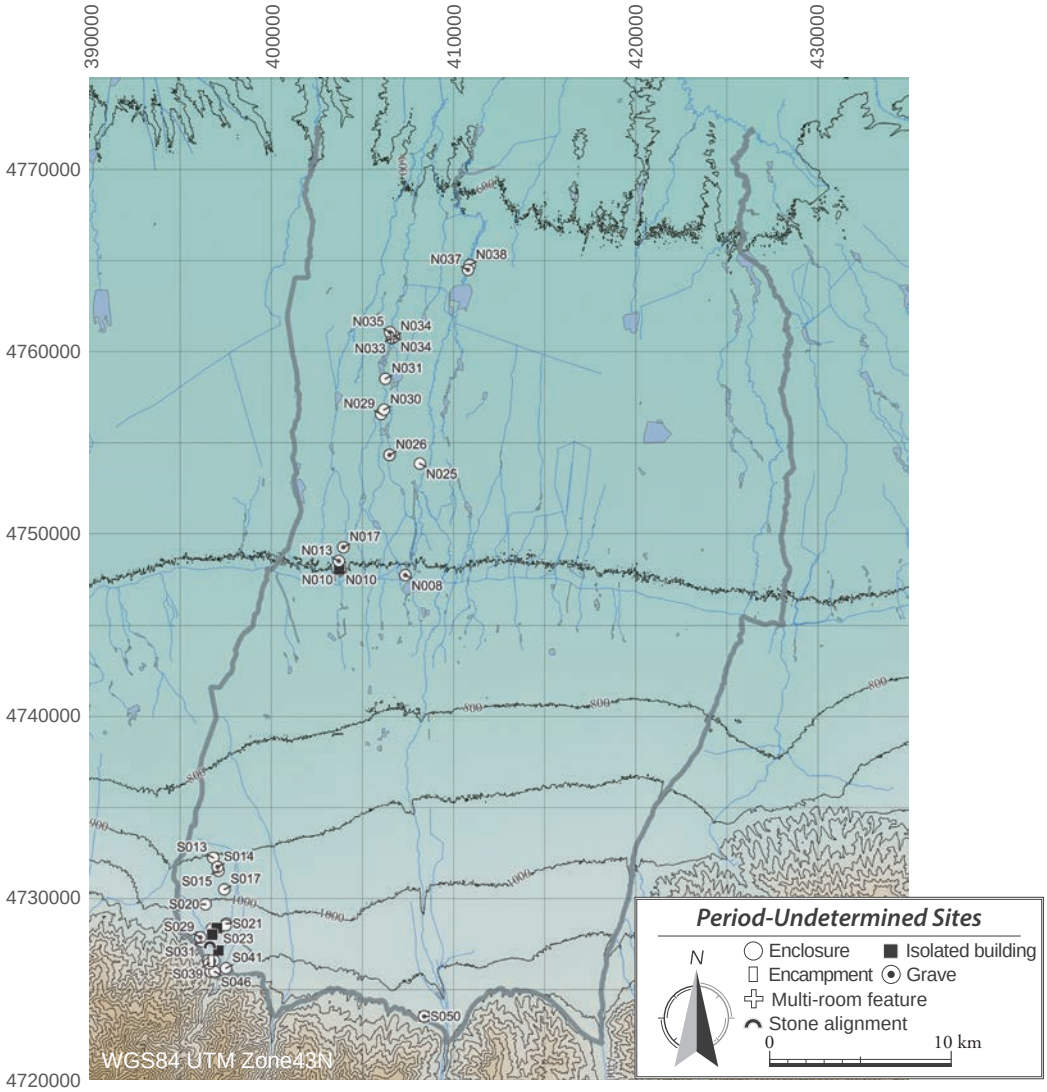

図 5. 6　時期不明の遺跡分布図

る[3]。このうち最も多いのは囲い込み遺構であり、26 遺跡において認められた（図 5. 6）。詳細については次節で論じるとして、基本的に平野部及び山麓部に広く分布しており、特に、農地開拓の影響をあまり受けていない Zone IVb にはかなりの密度で残されていた。同じく生活遺構のうち、年代不明の建物遺構は 5 遺跡において認められ、このうち 4 件が山麓部に立地する。これらもまた、近世・近代に位置づけられる蓋然性が高い。生活遺構に含めた逗留地は、山麓部に 1 件（S038）のみ所在するが、機能は不詳である。

葬祭遺構として、単独墓のみが含まれる。単独墓は、囲い込み遺構に次いで数的に卓越する。12 遺跡で認められた単独墓は、7 件が平野部、5 件が山麓部に分布する。このうち平野部に所在する 2 件（N013, 017）では、円形の単独墓の周囲に複数基の小型墓が築かれていた。

その他遺構として、複室遺構（N033）と石列（S033）がある。N033 は囲い込み遺構及び単独墓と共伴して、平野部の段丘面に位置している。S033 は山麓部に単独で認められた。

2. 囲い込み遺構の相対時期推定

上記のとおり、時期不明の遺跡は 36 件、遺構数にして 69 基に上り、本プロジェクトで確認した全遺構件数（n = 194）の実に 35.6% を占めている。時期不明としている理由は、現地表面において遺物が採集できず、また、遺構同士の先後関係が必ずしも明確ではないからである。しかし、数少ないながらも、相対的な時期差を示す可能性のあるいくつかの要素が存在する。時期不明遺構の中でも、とりわけ数の多い囲い込み遺構（n = 41）は、相対的な時期を推定するために分析対象としやすく、併せて、当該遺構が遊牧民の活動痕跡と考えられることから[4]、調査対象地域内における遊牧民の動向を通時的に知る手がかりを与えてくれるだろう。

2. 1. 囲い込み遺構の基礎的分析

相対年代について論じる以前に、まずは、囲い込み遺構に関する基本的な傾向について確認しておきたい。囲い込み遺構には、大きく 5 種類の平面形（楕円形 Elliptical、円形 Circular、半円形 Semicircular、矩形 Rectilinear、不定形 Irregular）があり、5 つの構築方法によって造られている（表 5. 2）。平面形と構築型式（Type）の関係を示したのが、図 5. 7 のヒストグラムである。この図によれば、楕円形が最も多く、円形及び矩形がこれに次ぐことがわかる。また、構築型式は Type A が圧倒的多数（41 基中 32 基、78.1%）であり、いずれの平面形においても Type A が主体を占めることがわかる。また、図 5. 8 には、これら各平面形のサイズ分布を示した。これを見ると、楕円形（n = 19、平均面積 263 m^2）が 250 ～ 299 m^2 を中心としたほぼ正規分布を示すのに対して、円形（n = 12、平均面積 204 m^2）は 100 ～ 149 m^2 に明らかに集中する。また、矩形（n = 8、平均面積 253 m^2）は 100 ～ 249m^2 に 6 基がまとまる。したがって、楕円形は円形・矩形に比べて概して大型であるということが言えるだろう。これらの傾向は Type A のみを示した場合にもほぼ変わりなく、数的に優位な Type A の傾向が全体の傾向に反映されていると考えてよい。

これらの平面形の空間分布には、明確な傾向差が見られる。囲い込み遺構は、平野部の Zone I と山麓部の Zone IV においてのみ確認されたので、平面形別に

表 5. 2　囲い込み遺構の構築型式一覧

型　式	構築方法
Type A	外側を廻る土塁と内側の周溝により造られる。
Type B	外側の周溝と内側を廻る土塁により造られる。
Type C	周溝のみから造られる。
Type D	土塁あるいは壁体のみから造られる。
Type E	石造りによる囲い込み遺構。

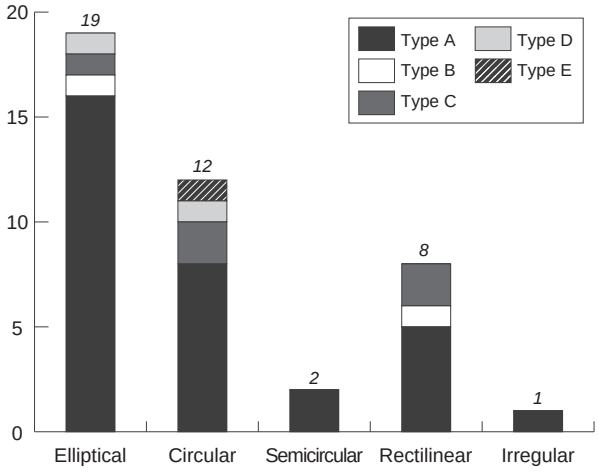

図 5. 7　囲い込み遺構の平面形と構築型式

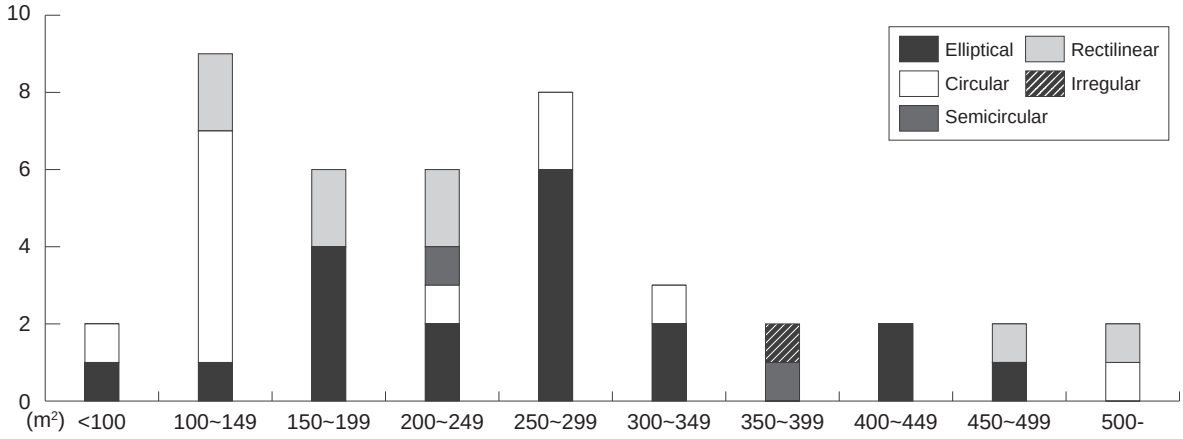

図 5. 8　囲い込み遺構のサイズ分布

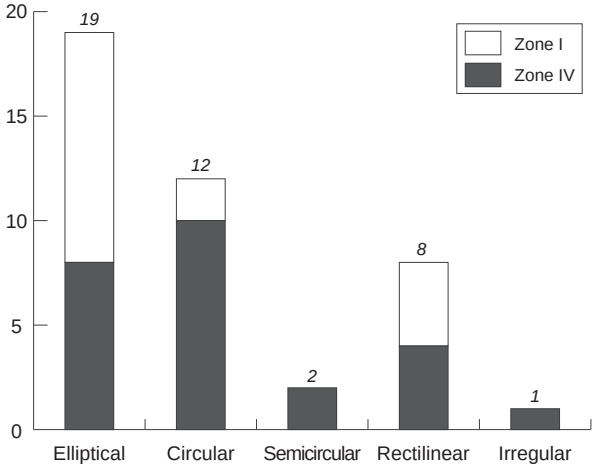

図 5. 9　囲い込み遺構の平面形別空間分布

これらの地域での分布数を比較した（図 5. 9）。すると、Zone I では専ら楕円形が卓越し、少数の矩形と円形を伴うのみであったが、Zone IV では円形が楕円形よりも数的に優位となり、全 5 種類の平面形が分布する状況が明らかとなった。後世の土地改変による影響を十分に考慮する必要はあるが、楕円形は平野部にやや多いものの平野部から山麓部にかけて広く造られ、円形は主に山麓部に造営された、ということは概ね言えるだろう。

2. 2. 相対時期の確認

囲い込み遺構の相対時期を考察するにあたり、最も信頼できるのは遺構の重複関係である。Zone I に位置する N025 と N034 では、楕円形がその他平面形の囲い込み遺構に壊される事例が認められた。N025 では、楕円形囲い込み遺構 N025-1 は、その北辺に重複する円形囲い込み遺構に壊されていた。また N034 では、遺跡の南に位置する N034-1 において、楕円形囲い込み遺構の南端に重複して、隅丸矩形囲い込み遺構が造られた。これらの重複事例に基づけば、楕円形は円形及び隅丸矩形よりも古い時期に造られたと解釈できる。

では、楕円形囲い込み遺構はいつ頃造られたのだろうか。まず、N038 において、楕円形囲い込み遺構が近世・近代の所産と思しき建物遺構に壊されていることに鑑みて、この遺構の造営は近世以前と考えるべきであろう。しかし、こうした遺構の重複事例は他に認められないので、さらなる時期の特定には別の手段を用いなければならない。そこで注目したいのが、複数種の遺構が共伴する複合遺跡における、特定遺構の反復的共伴関係である。こうした複合遺跡は、1 遺跡として登録したものとしては 8 件（N025, N026, N030, N033, N034, S014, S038, S045）あるが、数百 m 圏内の近傍に所在する複数の小規模遺跡も合わせて複合遺跡と看做せる事例もある（例えば、N038 と N037、N009 と N013）。当然ながら、複合遺跡の構成遺構が全て同時期に位置づけられるわけではないが、重複せずに高頻度で共伴する遺構同士は仮に同時期であると考えておきたい。こうした観点から複合遺跡を見直すと、楕円形囲い込み遺構と単独墓の組み合わせが浮かび上がる。楕円形囲い込み遺構と共伴する単独墓は、外側を廻る土塁とその内側の周溝を持つ小型円墳である。墳丘の高さは極めて低い場合が多く、外周直径は 10 m 程度である。代表的な複合遺跡である N033 では、楕円形囲い込み遺構と 2 基の複室遺構のすぐ南に、円形単独墓が築かれていた（図 5. 10）。また、N033 の北東に位置する N034 でも、2 つの楕円形囲い込み遺構の中間に円形単独墓を確認している。この他、4 件（N038-1+N037, N009+N013, S014, S037+S039-2）においても両者の共伴が見出せた。これに対して、円形囲い込み遺構と単独墓の共伴事例は 2 件（S014 及び S029）しかなく、楕円形囲い込み遺構との共伴事例を除外すると、S029 のみとなる。さらに、S029 における単独墓は隅丸長方形を

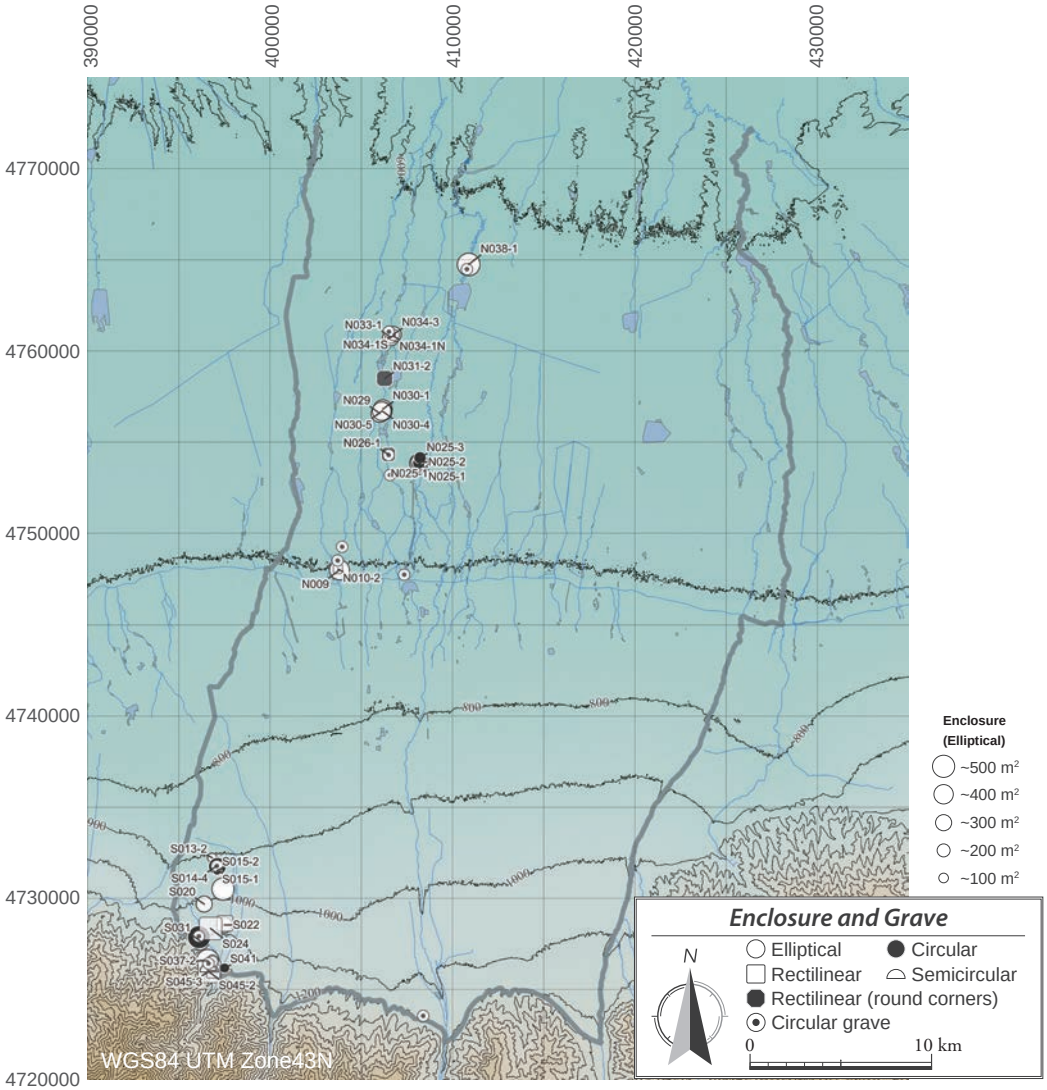

図 5. 10　囲い込み遺構及び単独墓の分布図

呈しており、円形単独墓とは明らかに種類が異なる。こうしてみると、円形囲い込み遺構と円形単独墓が共伴関係にある遺跡は皆無となる。隅丸矩形囲い込み遺構についても、N026 及び N034 において円形単独墓との共伴が認められたにすぎない。

楕円形囲い込み遺構との共伴事例が多い円形単独墓の造営時期は、遺跡踏査に特化した本プロジェクトでは判然とせず、独自の資料からこれ以上追及することは難しい。しかし、手掛かりがないわけではない。N008 は複合遺跡において認められたものと同様の円形単独墓 1 基のみから成るが、これはシス・トベ（N005）の内郭壁と外郭壁の間に立地している。上述のとおり、シス・トベでは 10 世紀には内郭壁まで、10 ～ 12 世紀には外郭壁まで都市域が拡大した可能性が指摘されている（cf. Кожемяко 1959: 82–84）ので、N008 の円形単独墓は外郭壁が存在しない 10 世紀以前か、シス・トベが放棄された 12 世紀以後に造られたと考えるのが自然である。おそらくは 12 世紀以後も外郭壁が残り、その内側は依然として小規模な定住集落や耕作地によって占められていた可能性を考慮すれば、円形単独墓は 10 世紀以前に造営された蓋然性が高いだろう [5)]。そうすると、楕円形囲い込み遺構も 10 世紀以前に位置づけられうることになる。

以上の分析から導かれる暫定的な結論は、楕円形囲い込み遺構と円形単独墓が 10 世紀以前に造られ、これ以後に、円形・隅丸矩形囲い込み遺構が造られるようになった、ということである。この時期差は遺構の空間分布とも符合し、時期が下るにつれて、遊牧活動の痕跡が徐々に山麓部に限定されていった状況が示唆される。

2. 3. 相対編年の可能性

ここまでの議論を踏まえて、楕円形・円形・隅丸矩形以外の囲い込み遺構も加えて、囲い込み遺構による相対編年の可能性を追求したい。

囲い込み遺構の中では、Type E の円形（S041）と Type A の半円形（S045-2）が最も古い段階に位置づけられそうである。いずれの囲い込み遺構も、風化が激しいばかりではなく礫を多用しており、その構造こそ異なるものの、造営の背景にある概念には共通したものが感じられる[6]。近傍に鉄器時代後期の円墳が集中し、また、カラ・バルタにおいてかつて検出された前 3 ～前 1 世紀の住居が平面円形（5.2 m × 4.4 m）であった（Мошкова 1992: 84）ことにも鑑み、S041 と S045-2 は鉄器時代後期に帰される蓋然性もあるだろう。

また、矩形囲い込み遺構は、今日でもキルギス北部やカザフスタンで度々見られる矩形の家畜囲いを連想させる。この種の家畜囲いは木柵により造られており、交通路を妨げないように斜面に築かれる事例も見られる（cf. Emeljanenko 1994: 53）[7]。本プロジェクトで確認した矩形囲い込み遺構のうち、比較的大型の S024 や S045-1 はこうした家畜囲いの痕跡とも看做せる。

これまでの考察結果から、仮の編年案をまとめた（図 5. 11）。囲い込み遺構は、S045-2 の半円形及び S041 の石造円形が最も古い型式と見られる。その後に出現が推測される楕円形囲い込み遺構は円形単独墓と共伴関係にあり、ほぼ同時期（10 世紀頃まで）に存在した蓋然性が高い。なお、楕円形囲い込み遺構は確かに平野部に多いが、山麓部にも一定数が認められることから、両地域が遊牧民の季節移動の経路上にあったことが示唆される。隅丸矩形・円形囲い込み遺構は、楕円形囲い込み遺構を壊して造られる事例（N025-1 及び N034-1）に鑑み、楕円形囲い込み遺構より新しい可能性が高い。このうち隅丸矩形囲い込み遺構は N026 において円形単独墓との共伴が見られたため、10 世紀頃まで造営年代が遡るかもしれない。円形囲い込み遺構については、年代の定点が存在しないため判断が難しい。しかし、山麓部に集中するその特徴的な空間分布を、カラハン朝支配下の 10 ～ 12 世紀における平野部での都市・町の相次ぐ建設や

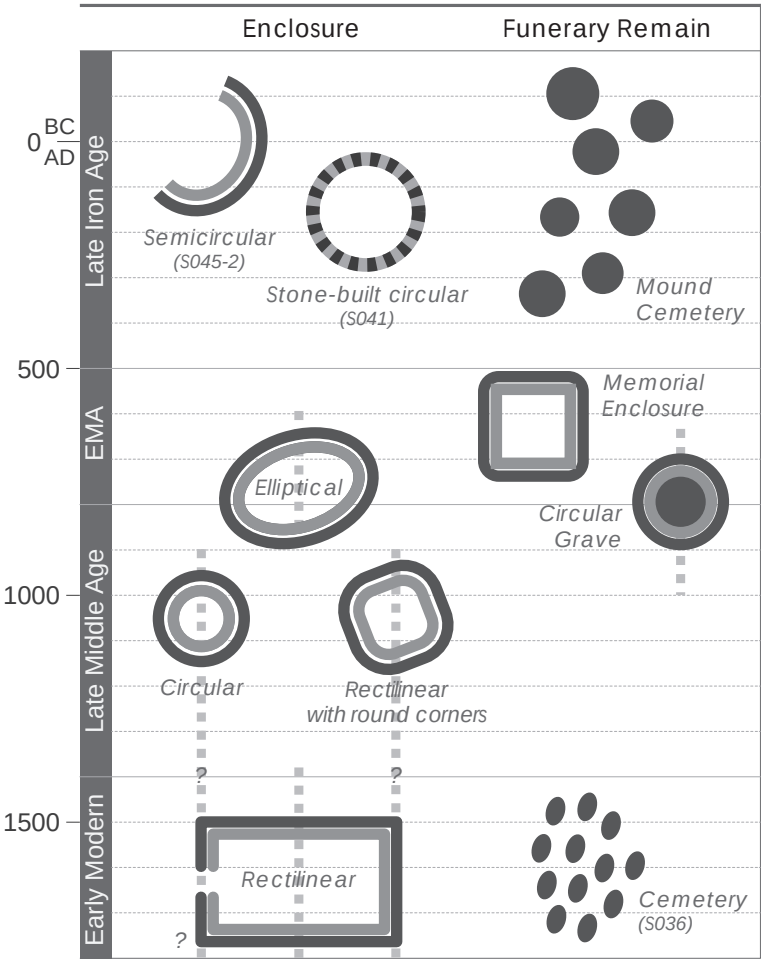

図 5. 11　囲い込み遺構の編年試案

周辺地域の開拓と結びつけるならば、遊牧民の多くが 10 ～ 12 世紀にそれまでの季節移動パターンを大幅に変更し、山麓部に円形囲い込み遺構を新たに造営したとも考えられる。近世以降は矩形囲い込み遺構が造られ、規模を変えながらこの平面形が今日まで維持されていると推測する。

3. 追悼遺構について

本プロジェクトでは、6 遺跡 8 基の矩形遺構を追悼遺構として登録した。これらの遺構に共通する特徴は、外側を土塁、その内側を周溝により囲まれる正方形に近い平面形を呈し、周溝の内側に周辺よりもやや高い平坦面のみが認められるという点である。その規模は、外寸で 10 ～ 20 m、内寸で 5.0 ～ 12 m 程度であり、それほど規模の大きな遺構ではない（表 5. 3）。また、単独で存在するもの（N015, N016, N027, S002）と、他の追悼遺構あるいは楕円形囲い込み遺構と共伴するもの（N031-1, N036-1 ～ 3）があり、N036 を除いて小河川の東岸に立地する。なお、唯一 N016 からは少数の土器片を採集しており、この中にソグド系カップの口縁部小片（図 4. 32）が含まれていたことから、同種の遺構の時期と機能を演繹的に推定している。

追悼遺構は主に突厥の所産と考えられ、アルタイ（Altai）地方やモンゴル高原において数多く確認されてきた（林 1991, 1996, 2005: 48–59）。他方で、より西に位置するセミレチエや天山山脈においては、追悼遺構の確認件数はより少ない（cf. Кубарев и Нускабай 2023: 82）。これらの遺構は、主に 2 種類に分類される。1 つは方形石囲いであり、概して 1 辺 2.0 ～ 3.0 m 程度に板石を立て並べ、内部に礫を石堆状に充填する遺構である（林 2005: 48–49; Tishkin and Seregin 2022）。なかには、複数基が南北に並ぶ事例もある。もう 1 つは土塁と周溝を持つ矩形遺構であり、方形石囲いよりも規模が大きく、内側には複数の方形石囲い、石槨、あるいは建物遺構が見られる（林 2005: 50–51）。いずれの種類も石人・石列（バルバル）を伴い、方形石囲いでは東辺外側に石人と東方に一直線に並ぶ石列（バルバル）を、土塁・周溝遺構では周溝内側に石人、外側に 1 列に延びる石列（バルバル）を確認できる。なお、これらに比べて規模ははるかに大きいが、第二突厥時代（8 世紀）のキョル・テギン廟（ホショー＝ツァイダム II　Khusho-Tsaidam II）やビルゲ可汗廟（ホショー＝ツァイダム I　Khusho-Tsaidam I）もまた、同類の遺跡と看做される（林 2005: 51–57）。

また、V. E. ヴォイトフ（В. Е. Войтов）は、調査が行われた追悼遺構 55 基を用いて、5 型式の分類を示した（Войтов 1986; 林 1991）。詳細は省略するが、各型式は 1）可汗クラスの大規模遺構であり、亀趺（きふ）を伴うもの（6 世紀末～ 8 世紀後半）、2）大規模遺構であるが、亀趺を伴わないもの（7 世紀初頭～ 8 世紀初頭）、3）中央の土堆に一対の南北に並ぶ石槨を持つもの（7 ～ 8 世紀）、4）単独の石槨、5）土堆と東方にのびる 1 あるいは 2 列の石列（バルバル）から成るものと定義づけられ、1 ～ 4 型式はさらに 15 に細分された。これらのうち、1・2・3A 型式は土塁・周溝遺構であり、3B・3C・4 型式は先述の方形石囲いに相当する。

図 5. 12 は、これまで調査が行われた追悼遺構（ヴォイトフ分類の 1 ～ 3A 型式）と本プロジェクトで確認した追悼遺構、合わせて 27 基の外寸規模をプロットした散布図である[8]。x 軸には東西長（m）、y 軸には南北長（m）をとっている。遺構のデータは、既存の集成的研究（Войтов 1986: Таблицы 1–3;　林 1991, 2005: 238–239）に依っている。このグラフを参照すると、規模には大きな相違があるものの、近似曲線の相関係数（R2 乗値）は 0.8219 を示すことから、遺構の縦横比には一定の法則性が見られることは確かである。なお、チュー渓谷西部の追悼遺構は一見してかなり小型の範疇であるが、N015・S002 とヴォイトフによる 2 型式（ツァガン＝オボ II

表 5. 3　チュー渓谷西部における追悼遺構の規模

遺跡名	外寸		内寸		備考
	東西長（m）	南北長（m）	東西長（m）	南北長（m）	
N015	18.0	18.0	11.5	10.5	
N016	(13.0)	17.0	8.8	12.5	西半分のみ現存
N027	13.3	12.8	8.0	9.0	
N031-1	15.4	15.4	10.0	10.0	
N036-1	10.3	10.6	5.5	5.8	
N036-2	13.6	11.6	8.0	6.0	
S002	18.7	19.7	10.0	10.0	内側に南北に並ぶ盗掘坑あり

*N036-3 は遺存状態が悪いため、上の表には含まれない。

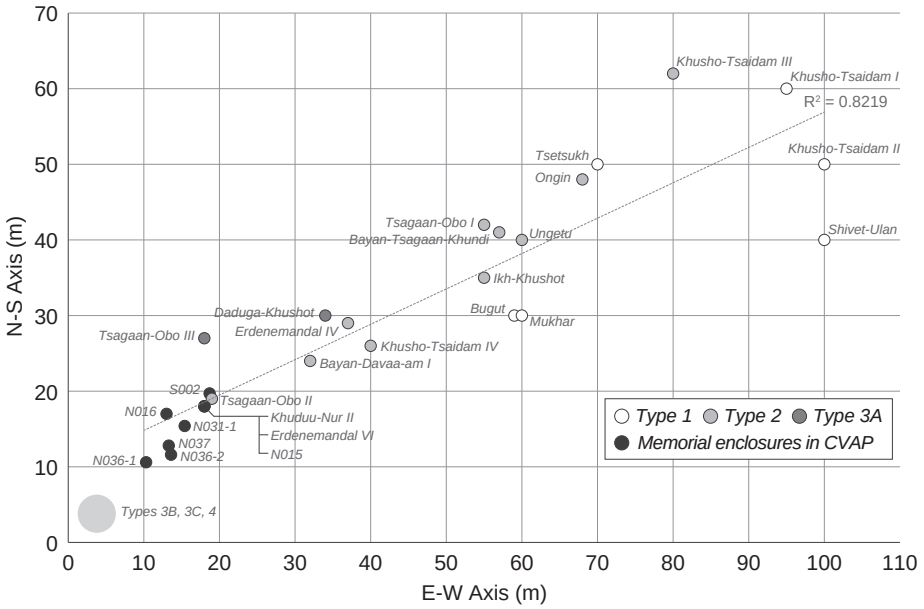

図 5. 12　既調査追悼遺構のサイズ分布（外寸）*"Type" はヴォイトフによる型式を表す。

Tsagan-Obo II、エルデネマンダル VI　Erdenemandal VI）及び 3A 型式（フドゥー＝ヌル II　Khuduu-Nur II）の 3 基は規模がほぼ同じであることも観察できる。この 2 型式は、祠堂を持たない 2D 型式に細分されたものである。また、ヴォイトフの 3B（石人あり）・3C（石人なし、未調査）・4 型式の方形石囲いは平均して 2 m 四方内外であり、図 5. 12 のグラフ上で最も小型の N036-1 よりもさらに小規模である。したがって、平面規模や土塁・周溝の存在に基づくのならば、チュー渓谷西部の追悼遺構は、ヴォイトフが確認した 2D・3A 型式の小型ヴァリエーションであり、3B 型式までの間隙を埋めると捉えることもできるだろう[9]。また、この解釈が間違っていないとすれば、チュー渓谷西部の追悼遺構はヴォイトフの 3 型式の時期、7 ～ 8 世紀頃の所産と考えられるだろう。

先述のとおり、チュー渓谷西部の追悼遺構では、周溝の内側にいかなる遺構も認められなかった。これは遺構を構成した石材が後世に持ち去られてしまったことによるのかもしれないが、その有無については今後発掘調査によって確認する他ないであろう。また、度々見られた小河川東岸の立地は、遺構の東方に石人・石列（バルバル）が存在しえたことを示しており、耕作地の開墾に伴い石人・石列（バルバル）も抜き去られてしまったとも考えられる[10]。以上、追悼遺構と判断するための論拠が心許ないのは確かであるが、他の囲い込み遺構とは明らかに異なるその特徴から、やはり追悼遺構と捉えておくのが妥当であろう。

4. 定住 - 遊牧相互関係史の再構築

本章では、確認した遺跡・遺構の通史的な変遷を仔細に検証し、チュー渓谷西部の地域史の復元に努めてきた。一連の過程で、北方のステップ世界と南方のオアシス世界の境界に横たわるチュー渓谷における、定住社会と遊牧社会の絶え間ない関係性の一端が浮かび上がってきた。そこで本節では両社会の関係史を簡潔にまとめ、本章の締めくくりとしたい。

これまで知られてきたとおり、後期青銅器時代から鉄器時代におけるチュー渓谷西部では、遊牧を主生業とする集団が活発に往来していた。特に鉄器時代前期には、天山山脈北麓沿いの緩斜面に直径 20 m を超えるクルガンが多数築かれた。続く鉄器時代後期には、より小型の円墳が山麓部に造られるようになった。また山麓部には、この時期に属すると考えられる囲い込み遺構も見られる。北方の平野部では同時期の集落址が見つかっていることから、鉄器時代後期には、山麓部と平野部を南北に移動する季節移動経路が確立していた可能性がある。

6 世紀になると、西方からソグド人が入植し、平野部中央に東西に連なる諸都市を建設した。こうして始まった中世前期は、チュー渓谷における最初の都市化の時期として知られている（cf. Vaissière 2005: 114）。この時期のチュー渓谷は西突厥の支配下にあり、玄奘の記録によれば、それに従属しながらも独立した首長を頂く商業都市国家が林立していたことがわかる。チュー渓谷西部では、その初期に築かれた拠点都市シス・トベ（N005）の周

辺に突厥に帰される追悼遺構が複数所在しており、これに加えて、楕円形囲い込み遺構も同時期の平野部に存在した可能性もあることから、都市定住民はトルコ系遊牧民と共生関係にあったことが推察される。ただし、定住・遊牧両集団は、相互の領分へ浸潤しない一定の距離を置いた協調関係にあったようにも見え、潜在的な緊張関係も想定しなければならないだろう（cf. Горячева 2010: 63）。

9 世紀以降の中世後期には、チュー渓谷の都市化はより一層進んだ。カラハン朝の支配下に入った 10 ～ 12 世紀にかけては、平野部の広範囲が都市域（城壁内）に編入され、また、交易路も整備されるに及び、遊牧民の季節移動パターンが大きく変わった可能性がある。おそらくは 10 世紀以降のものと考えられる円形囲い込み遺構は山麓部に集中し、平野部ではほとんど見られないことは既に述べたとおりである。この傾向は、カラハン朝における季節移動パターンと関係があるかもしれない。カラハン朝のハーンは同じくトルコ系遊牧王朝であった西突厥の可汗とは異なり、冬季には都市に居住したことが知られている（梅村 1999: 81）[11]。このことを踏まえると、ハーンにならい遊牧的生業を維持していたトルコ系遊牧民は、夏季には山麓部にキャンプを営んだものの、冬季には都市内に居住した故に、平野部にほとんど痕跡を残さなかったと理解することもできる。カラハン朝が中継貿易に多大な関心を振り向けていたこと（Duturaeva 2022: 18）も勘案すると、チュー渓谷の商業都市との直接的関係をより強化し、東西国際交易をコントロールするために、あえて半定住化の道を選んだのかもしれない。

なお山麓部には、おそらくは 12 世紀以後に造られた定住集落タシュ・マザール（S026）が所在した。この集落には城壁が見当たらず、その立地と併せて、他の居住址とは一線を画している。タシュ・マザールが位置する山麓部の緩斜面には、古来遊牧民の重要な放牧地であったと考えられる草原が広がっており、タシュ・マザールの住民が近傍の遊牧民と併存していたことは疑いようもない。この集落は、東西交易路上の拠点都市が・町が衰退していく過程で、在地の定住農耕民により新たに造られたとみられる。

近世・近代には、それまで展開した定住・遊牧社会の濃密な共生関係は終焉した。イスラームの地理書によれば、13 世紀以降のチュー渓谷平野部では都市や町は放棄され、小村落のみがかろうじて存在したようである。この状況には、同時期に生じていた乾燥化も影響を及ぼしたかもしれない[12]。山麓部では、北東から移動してきたキルギスを主体とする遊牧民が引き続き活動していたとみられる。チュー渓谷において再び定住化の波が押し寄せるのは、ロシア帝国の統治下で新たに町が築かれ、遊牧民の定住化政策が進められるようになる 19 世紀後半以降のことである[13]。

以上をまとめると、元来遊牧民が生業を営んでいた北方のステップ地帯南縁のチュー渓谷に、南方のオアシス地帯から都市定住文化を伴ったソグド人が植民を始めたことで、定住・遊牧両社会の直接的な接触が始まった。生業環境の境界線上でのこうした共生関係は 8 世紀後半以降ますます緊密となり、遊牧民の半定住化とも看做せる現象さえも見られるようになった。なお、両社会関係が緊密な時期には、天山北路による国際交易も活発化しており、定住・遊牧両社会共に大きな恩恵を受けたことは疑う余地がない。14 世紀に入ると、モンゴル帝国の侵略に相前後してほとんどの都市・町が放棄されたことにより、それまでの定住・遊牧社会の関係は崩壊し、チュー渓谷はその基層にあった遊牧主体の社会に総じて回帰することになったと考えられる。

註

1）本書第 II 章 2. 1 及び第 IV 章 2 節参照。

2）コジェミャコの報告においても、シス・トベ（N005）やノヴァ・ニコラエフカ（N001）の近辺では湿地帯が記録されており、（Кожемяко 1959: 79, 136）、ペトロフカ（N004）の周囲では現在でも旧地形を窺い知ることができる。

3）本書第 III 章 2. 3 参照。

4）本プロジェクトでは、土塁と周溝から成る遺構を囲い込み遺構として一括したが、その機能は多岐にわたる可能性がある。筆者は、多くの囲い込み遺構が家畜囲いとして機能したと類推してきたが、家畜を収容するには面積が狭小すぎる事例（100 m^2 未満、円形・楕円形囲い込み遺構に含まれる）のみならず、斜面に立地する遺構（S015 や S037-2）も存在し、一元的には説明できないことが徐々に明らかになってきた。本書では、現時点での資料の不足から、囲い込み遺構の機能論は展開しないが、今後機会があれば別紙にて考察しようと思う。

5）円形単独墓 N008 の造営が 10 世紀以前だとすれば、その後の都市域拡大に伴い破壊されなかったことが不思議に思われるかもしれない。しかし、N008 はサイ・ジェケン川東岸際に位置しており、居住や耕作はここまで及ばなかったと考えられる。また、農地開拓により元来の地勢が徹底的に改変されてもなお、本プロジェクトの考古学踏査により遺跡が記録されたのは、主要な小河川の沿岸にまでは開墾が及ばなかったためであり、N008 が残された事情と同様であったことが理解できる。

6）なお、イシク・クル湖南東岸の上ジュウク（Chak Juuku）

渓谷では、矩形の石造囲い込み遺構が見つかっているが、時期は不詳である（Chang et al. 2021）。近傍に鉄器時代のクルガンが多く分布することに鑑みれば、鉄器時代の所産であっても不自然ではないだろう。

7）2022 年 8 月に筆者が訪れた中世都市遺跡ケン・ブルン（Ken-Bulun）においても、地元民によりその東斜面に矩形の家畜囲いが造られていた。

8）ヴォイトフの 1 型式には、8 世紀中葉〜後半のウイグルの可汗廟 2 基（ホション＝タル Khushon-Tal 及びモゴイン＝シネ＝ウス Mogoin-Shine-Usu）が 1D 型式として含まれている（Войтов 1986: Таблица 1; 林 1991: 171–174）。しかし、本書はチュー渓谷を研究対象としているため、図 5. 12 からはこれらの遺構データを除外している。

9）最近報告されたカザフスタン南東部のカラキスタク（Karakystak）とウルケン・カクパク（Ulken Kakpak）のように、セミレチエ・天山山脈の追悼遺構（方形石囲い）は石人・石列（バルバル）を欠き、アルタイ・モンゴル高原に比べて規模も小さいとされる（Кубарев и Нускабай 2023: 82）。このことに基づいてチュー渓谷西部の追悼遺構（土塁・周溝遺構）を見れば、その平面規模の小ささは、地域的なヴァリエーションの範疇で捉えられるかもしれない。なお、カラキスタクとウルケン・カクパクの方形石囲い（ヴォイトフ分類の 3C 型式に相当）は、8 〜 10 世紀のカルルクに帰されている（Кубарев и Нускабай 2023: 83）。

10）ブラナの遺跡内では現在、多数の石人が屋外に展示されている。おそらくは主に周辺地域から蒐集されたとみられ、チュー渓谷内にもかつては石人を伴う追悼遺構が多数残されていたことが示唆される。

11）7 世紀に玄奘がチュー渓谷を通過した際には、西突厥の可汗はその牙庭（首都）を碎葉に置いており、夏は避暑のため千泉（現メルケ）に移ったことが記されている（『大慈恩寺三蔵法師伝』巻二）。ここで言及される碎葉の牙庭は、カラタウ山脈中の羯丹山南麓にあった可能性が論証されている（内藤 1988: 1–21）。このように、西突厥の可汗は都市に居住することはなく、7 世紀までの遊牧民と定住民の生活空間には一定の区別が維持されていたと考えて差し支えないであろう。この状況は、8 世紀後半以降に大きく変化した。内藤みどりによれば、8 世紀中葉から後半にかけての突騎施（テュルギシュ）可汗蘇祿の時代に、各都市の首長から貨幣発行権が剝奪された可能性があり、また、碎葉城に唐からの可敦であった交河公主を留め置くと同時に、蘇祿自身がナヴィカト（現クラスナヤ・レーチカ）に居る等、都市が副牙的に扱われたことにも鑑みて、遊牧民が都市民に対してそれ以前にはなかったような直接的な関係をとり始めたようである（内藤 1988: 20）。

12）本書第 II 章 1.2 参照。

13）本書第 II 章註 15 参照。

VI.　おわりに

本書では、チュー渓谷考古学プロジェクトによる調査成果をまとめるとともに、その結果に基づいて、チュー渓谷西部における都市定住民と遊牧民が織りなした歴史的・文化的動態について論じてきた。本章では、これまでの内容を総括した後に、今後の展望について触れておきたい。

2018 ～ 2022 年の 3 シーズンに亘り実施した本プロジェクトは、これまでに精細かつ包括的な遺跡分布研究が存在しないチュー渓谷西部にその焦点を絞った。その目的は、チュー渓谷における中世植民都市の形成とそれに伴う東西交易路（天山北路）の発達を、在来の遊牧社会との関係の中で理解することであった。天山山脈北麓に広がるチュー渓谷はステップ地帯の南縁に位置しており、天山山脈とステップ地帯を南北に季節移動する遊牧民にとって、格好の経由地あるいは逗留地となっていたと考えられる。6 世紀のソグド人進出以降は中央アジアにおける都市定住社会の北限に組み込まれたことにより、同渓谷における在来の遊牧民と都市定住民の密接な関係が始まった。都市定住民は天山北路による東西交易を推進し、ここに至って、遊牧民による南北移動軸と都市定住民による東西移動軸が交わる結節点という歴史的・社会的・文化的に重要な意義を有するチュー渓谷が出現したのである。こうした歴史的事情にもかかわらず、6 世紀以後のチュー渓谷における調査研究は概ね天山北路沿いに連続的に所在する中世都市に専らの関心を傾け、それ以前から存在していた遊牧民に関わる痕跡を積極的に見出してこなかった。加えて、チュー渓谷の中でも、天山北路やその支線の経路から大きく外れた地域のほとんどは未調査のまま残されており、中世における都市化、シルクロード交易の展開、定住 - 遊牧社会の関係といった歴史的・文化的に重要なトピックを論じる以前に、そうした議論の根拠となる地域文化史に関わる基礎データの蓄積を実施する必要があった。

上記の経緯を背景として計画したチュー渓谷西部の考古学踏査では、在来遊牧民の南北方向の季節移動や東西交易路の時期による路線移動の可能性を意識して、南北に長大な調査対象地域（東西約 35 km、南北約 50 km、面積約 1,270 km^2）を設定した。しかしながら、時間的・人的制約により調査対象地域全域に対して悉皆的調査を実施することは難しく、39% 未満（500 km^2 未満）の面積に対してのみ重点的な遺跡記録を遂行できた。なお、このように調査面積は大幅に減少したわけであるが、調査区設定の当初の意図を十分に考慮し、南北に展開するように考古学踏査を実施した。

考古学踏査の結果、調査対象地域内において計 94 遺跡を記録した。これらには既知の 14 遺跡が含まれており、このうち 6 遺跡はかつて東西交易路沿いに存在した拠点都市・町である。これらの既知の遺跡も合わせて全体の分布傾向を見ると、調査地域北西部（Zone I 西部）と南西部（Zone IVb）における遺跡の集中が看取された。この傾向は調査密度を反映している一方で、Zone I 西部には拠点都市シス・トベ（N005）が存在し、また、キルギス山脈北麓の Zone IVb は農地開拓以前の地勢を残していること等、部分的に元来の分布傾向を示していると考える合理的な根拠がある。遺跡種別に着眼すると、葬祭遺構が全体の 41.0% を占め、これに次いで生活遺構（全体の 37.1%）が多い。葬祭遺構はクルガンが全域的に、墓地・単独墓は Zones I・IVb のみに分布する。また、生活遺構の約 70% が Zone IVb に集中する傾向を見出せた。なお、居住址のほとんどは Zone I に所在している。都市や町を除く多くの場合、現地表面で遺物を採集することができなかったため、精密な時期決定は困難を極めた。そこで主に遺構の規模・構造・立地に着目し、おおよその時期を推定した。遺跡数が他に比べて多かったのは、鉄器時代前期と中世後期であった。こうした努力にもかかわらず、36 件の遺跡の時期は不詳とせざるを得なかった。

時期別の遺跡分布傾向の概略を改めて示しておきたい。まず、本プロジェクト最古の遺跡として、後期青銅器時代（カラスク文化、前 1000 ～ 800 年頃）の土器散布

地（N018）が認められた。N018 は Zone I 東部に所在するが、大チュー運河建設時には同様の痕跡が確認されており、チュー渓谷内に当該期の集落や墓地が少なくとも数ヶ所は存在したのであろう。鉄器時代前期（前 8 ～前 3 世紀）には 13 件のクルガンが調査地域全域に分布するが、標高 800 ～ 900 m に集中的に築かれる傾向がある。また、標高が上がるほどに墳丘径が小さくなる顕著な傾向も見出せた。鉄器時代後期（前 2 ～後 5 世紀）には円墳群 9 件が認められ、このうち 8 件は山麓部の Zone IVb に所在する。かつて沖積平野内のカラ・バルタにおいて同時期の集落址が検出されたことに鑑みて、山麓部と平野部を季節的に移動した遊牧集団の存在が推測される。中世前期（6 ～ 8 世紀）には 3 つの都市（シス・トベ、アク＝トベ・スレテンスコエ、ベロヴォドスコエ・クレポスト）が築かれ、東西交易が開始されたとみられる。シス・トベとベロヴォドスコエ・クレポストは標高 700 ～ 800 m の平野部に立地しており、これより北方に存在した湿地帯より南で、かつ、在地の遊牧民の生活領域の一部であった山麓部と十分な距離がとれる肥沃な地点を意識的に選んだと考えられる。また、シス・トベ周囲の水系沿いには 8 基の追悼遺構が認められ、都市定住民と遊牧民が相互に距離をとりながらも近傍で生業を営んだ状況が窺える。この状況は玄奘による記録（『大唐西域記』巻一）とも符合する。中世後期（9 ～ 12 世紀）には都市定住社会が大幅に拡大し、長大な城壁を有する都市の周囲に町や要塞・望楼が一定の間隔で配置されるようになった。なお、こうした配置から外れて見つかった町 N040 は推定存続期間が 9 世紀後半から 10 世紀後半と短く、周囲に目立った遺構も認められないため、北方に抜ける交易路を新たに開拓しようと試行錯誤した痕跡ではないかと考えられる。なお、12 世紀以後の山麓部には城壁を持たない在地の定住集落タシュ・マザール（S026）が造られ、近傍の遊牧民と共生関係にあったことは想像に難くない。近世・近代（15 ～ 19 世紀）には、ベロヴォドスコエ・クレポスト（N006）における小居住址、耕作地縁辺に所在する単独の建物遺構、3 件の墓地が認められたものの、遺跡分布は概して希薄である。14 世紀のモンゴル帝国による侵略以後、都市・町が放棄されて、小村落のみが散在した状況を表しているのだろう。

36 件の時期不明遺跡（構成遺構数 69 基）のうち、26 件の遺跡は 41 基の囲い込み遺構を含んでいた。囲い込み遺構は遊牧民による痕跡と考えられ、チュー渓谷西部の定住 - 遊牧社会関係を考察する上でその年代観は欠かせない。そこで、これらの囲い込み遺構の一部と他遺構との重複関係を手掛かりに、型式変遷の復元を試みた。楕円形囲い込み遺構を円形囲い込み遺構が壊すこと、楕円形囲い込み遺構と円形単独墓が共伴すること、また、楕円形囲い込み遺構と円形囲い込み遺構の空間分布の差に着目し、また、シス・トベ外郭（10 ～ 12 世紀に成立）内に円形単独墓が存在することから、楕円形囲い込み遺構及び円形単独墓を 10 世紀以前に位置づけた。これに伴い、円形・隅丸矩形囲い込み遺構を 10 ～ 12 世紀以降の成立と見て、大型矩形囲い込み遺構を近世以降の所産と推定した。さらに、山麓部で確認した半円形及び石造円形囲い込み遺構（S045-1, S041）を、その風化の進行具合から鉄器時代後期に位置づけた。

時期を推定できた遺跡と、時期不詳に含まれていたが仮の型式変遷を復元した囲い込み遺構を組み合わせると、定住 - 遊牧社会関係の変遷が浮かび上がってきた。鉄器時代後期には、おそらくは南の山麓部と北の平野部を結ぶ季節移動経路が確立しており、この経路上に円墳群や囲い込み遺構が残されたと考えられる。中世前期には西方から植民したソグド人により拠点都市が建設された。特に大きな拠点都市シス・トベ（N005）の周辺には、突厥に帰される追悼遺構が分布し、また、同時期の可能性がある楕円形囲い込み遺構も平野部に多数存在した。楕円形囲い込み遺構はステップが卓越する山麓部にも一定数分布し、同地で放牧を行っていた遊牧民の存在が窺える。これらを組み合わせると、当時存在したトルコ系遊牧民はそれ以前の南北（垂直）方向の季節移動を踏襲しており、その経路上に存在した都市定住民とは協調しつつも相互不干渉の潜在的緊張関係にあったと推測される。中世後期には平野部において都市域の拡大と居住址数の増加が見られ、東西交易のさらなる活発化が窺える。他方で、10 世紀以後に位置づけた円形囲い込み遺構はそのほとんどが山麓部に分布し、平野部ではほぼ見られない。この現象は、10 ～ 12 世紀にチュー渓谷を支配したカラハン朝が都市定住社会への関与を強めた結果、と理解することもできる。通常の垂直方向の季節移動では南の山麓部あるいは山岳部と北の平野部の双方に一定数の痕跡が残されるとすれば、円形囲い込み遺構が平野部に存在しないことは不可解である。しかし、平野部への移動時にカラハン朝のトルコ系遊牧民が都市内に居住したとすれば、この現象も説明がつくだろう。東西国際交易を手中に置くために、カラハン朝はあえてこのような半定住策を採ったとも解釈できる。近世・近代には、チュー渓谷西部の各所に定住小村落がかろうじて営まれ、山麓部を中心に遊牧民が活動する状況となったと考えられる。

両者の関係については不詳である。

以上、本プロジェクトによる限られた調査成果に基づいて、チュー渓谷西部における文化動態の通史的復元を試みてきた。依然問題として残り続けているのは、囲い込み遺構をはじめとする小型遺構の年代であろう。本プロジェクトで確認した小型遺構では遺物をほとんど表採できず、年代を確定するための材料に欠く。この状況を解消するために、本書で分類した各種類の遺構に対して試掘調査を実施することが望ましい。試掘調査により、遺物の回収と構造の解明が期待できる。また、各小型遺構の機能の解明も大きな課題である。本プロジェクトでは、建物遺構を除く小型遺構を遊牧民の所産と推定して、調査研究を推進してきた。考古学踏査による現地表面での観察では、これらの遺構を定住民に由来する施設（例えば、住居や倉庫等）と積極的に評価する要素が欠如していたためであるが、発掘調査と採集土壌等の分析によって、これら遺構の機能も確定する必要があるだろう。本プロジェクトは広大な地域を調査対象としたが、将来的にはチュー渓谷西部の各地で悉皆的な調査を実施し、現時点で残されている遺跡を十分に記録することが望まれる。過去 60 年間に、比較的大型の遺跡でさえも農地開拓や宅地開発により削平されてしまった。史跡保護の法的効力が不十分な状況をしばらくは克服できないのであれば、せめて記録保存という選択肢により、チュー渓谷西部における文化財の現況を将来に遺す責務を一研究者としては感じざるを得ない。また、こうした記録を残すことができれば、チュー渓谷西部全体の文化的動態をより精密に把捉することもできるようになるだろう。上記の課題が解消されて、天山北路の一翼を担うチュー渓谷西部の歴史的・文化的・社会的意義がより鮮明になり、ひいては中央ユーラシアにおけるシルクロード交易を取り巻く定住・遊牧両社会の相互関係とその変遷がより一層明らかにされるのを願うばかりである。

補遺　登録遺跡リスト

Site No.		Name	Entire Size (m2)	Category	Type	Plan	Size (m2)	Zone	Water system	Estimated Century	43T UTM E(X)	43T UTM N(Y)	ASL (m)	References
N001		Novo Nikolaevka	64629	Settlement	Large town	Square	64629	I	Kara-Gul	9 - 12	410077.071	4743553.044	755	Кожемяко 1959: 135-136; Тереножкин 20126: 59
N002		Petropavlovka	4821	Settlement	Fort	Rectilinear	4821	I	E.Kara-Gul	10 - 12	411898.005	4743983.327	746	Кожемяко 1959: 137
N003		Poltavka	65521	Settlment	Large town	Irregular	65521	I	Ichke-Suu	9 - 12	416701.223	4744534.073	738	Кожемяко 1959: 122-125
N004		Petrovka	41102	Settlement	Medium town	Irregular	41102	I	Kichi Ak-Suu	9 - 12?	422092.348	4744665.607	730	Кожемяко 1959: 145-146
N005		Shish Tobe (Nuzket)	358627	Settlement	City	Rectilinear, irregular	358627	I	Kara-Suu	6 - 12	405725.648	4744823.739	737	Кожемяко 1959: 79-84
N006		Belovodskoe Krepost	150000	Settlement	City→Hamlet	Triangular	150000	I	Ak-Suu?	7 - 13 16 - 18	428011.446	4745093.205	714	Кожемяко 1959: 97-99
N007		-	571	Settlement	Watchtower	Square	571	I	Sai-Djeken	10 - 12?	407655.062	4746606.126	701	
N008		-	186	Funerary remain	Grave	Circular	186	I	Sai-Djeken	-	407352.182	4747724.886	693	
N009		-	324	Domestic remain	Enclosure	Elliptical	324	I	Tok-Tash	-	403804.193	4747984.945	691	
N010	1	-	243	Domestic remains	Isolated building	Square	187	I	Tok-Tash	-	403727.405	4748043.097	692	
	2			Domestic remains	Enclosure?	Rectilinear?	105	I	Tok-Tash	-	403720.271	4748032.707	692	
N011		-	214	Domestic remain	Isolated building	Rectilinear with round corners	214	I	Tok-Tash	15 - 19?	403786.482	4748470.505	691	
N012		-	2635	Settlement	Fort	Square	2635	I	Ichke-Suu?	10 - 12?	418475.198	4748494.427	687	
N013		-	258	Funerary remain	Cemetery	Circular	258	I	Tok-Tash	- 15 - 19	403703.653	4748501.9	698	
N014	1	-	593	Domestic remain	Isolated building	Square	247	I	Tok-Tash	15 - 19?	403774.12	4748640.984	690	
	2			Domestic remain	Isolated building	Square	325	I	Tok-Tash	15 - 19?	403768.771	4748661.459	690	
N015		-	324	Funerary remain	Memorial enclosure	Square	324	I	Sai-Djeken	6 - 8?	406765.377	4748777.782	688	
N016		-	245	Funerary remain	Memorial enclosure	Rectilinear (Square)	245	I	Tok-Tash	6 - 8?	404029.505	4749187.208	676	
N017		-	1935	Funerary remain	Cemetery	Elliptical	1935	I	Tok-Tash	- 15 - 19	403950.821	4749254.949	687	
N018		-	1722	Artifact scatter	Ceramic scatter	-	1722	I	Ichke-Suu?	10 - 9 BC	417401.225	4749403.159	689	
N019		Aidarbek	8891	Settlement	Fort	Rectilinear	8891	I	E.Kara-Gul	9 - 12?	411278.952	4750056.394	679	
N020		-	984	Settlement?	Watchtower?	Square	984	I	Djon-Arik	10 - 12?	409394.792	4750201.92	677	
N021		Komintern	-	Settlement	Fort?	Not pre-served	Not preserved	I	Kotur-Suu	10 - 12	414547.071	4751042.942	671	Кожемяко 1959: 137
N022		-	95 m in length	Funerary remain	Kurgan	Circular	34 m + 36 m in diam.	I	E.Kara-Gul	8 - 3 BC	412041.627	4752064.291	665	
N023		-	237 m in length	Funerary remain	Kurgan	Ciruclar	34 m in diam.	I	Djon-Arik	8 - 3 BC	407985.095	4752726.906	666	
N024		-	105	Funerary remain	Grave	Circular	105	I	Sai-Djeken	-	406571.32	4753191.077	660	
N025	1	-	19708	Domestic remains	Enclosures	Elliptical, circular	265	I	Djon-Arik	-	408152.081	4753852.198	631	
	2			Domestic remain	Enclosure	Elliptical	210	I	Djon-Arik	-	408185.406	4753910.434	631	
	3			Domestic remains	Enclosures	Circular	140	I	Djon-Arik	-	408219.553	4754138.667	631	
N026	1	-	940	Domestic remain	Enclosure	Rectilinear with round corners	190	I	Sai-Djeken	-	406485.853	4754323.296	651	
	2			Funerary remain	Grave?	Elliptical	150	I	Sai-Djeken	-	406504.284	4754338.977	651	
	3			Funerary remain	Grave?	Circular	137	I	Sai-Djeken	-	406502.871	4754289.237	651	
N027		-	592	Funerary remain	Memorial enclosure?	Square	592	I	Sai-Djeken	6 - 8?	406513.412	4754549.07	654	
N028		-	575	Settlement	Watchtower?	Square	575	I	Ichke-Suu?	10 - 12?	419672.6	4755084.881	644	
N029		-	250	Domestic remain	Enclosure	Elliptical	250	I	Kara-Suu	-	406021.067	4756568.626	635	
N030	1	-	7381	Domestic remain	Enclosure	Elliptical	287	I	Kara-Suu	-	406179.37	4756806.826	633	
	2			Domestic remain	Isolated building	Rectilinear	450	I	Kara-Suu	-	406186.745	4756761.52	633	
	3			Domestic remain	Isolated building	Rectilinear	332	I	Kara-Suu	-	406185.067	4756728.975	633	
	4			Domestic remain	Enclosure	Elliptical	283	I	Kara-Suu	-	406173.47	4756685.619	633	
	5			Domestic remain	Enclosure	Elliptical	281	I	Kara-Suu	-	406124.775	4756692.283	633	
N031	1	-	861	Funerary remain	Memorial enclosure	Square	326	I	Kara-Suu	6 - 8?	406257.171	4758504.8	628	
	2			Domestic remain?	Enclosure?	Rectilinear with round corners	237	I	Kara-Suu	-	406282.113	4758491.797	628	

Site No.		Name	Entire Size (m^2)	Category	Type	Plan	Size (m^2)	Zone	Water system	Estimated Century	43T UTM E(X)	43T UTM N(Y)	ASL (m)	References
N032		Ak-Tobe Sretenskoe	144961	Settlement	City	Pentagonal	144961	I	Ak-Suu	6 - 12	426405.625	4758655.862	628	Кожемяко 1959: 99-102
N033	1	-	4481	Domestic remain	Enclosure	Elliptical	209	I	Kara-Suu	-	406622.298	4760742.508	619	
	2			Miscellaneous feature	Multi-room feature	Rectilinear with round corners	540	I	Kara-Suu	-	406622.4	4760742.655	619	
	3			Miscellaneous feature	Multi-room feature	Rectilinear with round corners	385	I	Kara-Suu	-	406646.168	4760721.783	619	
	4			Funerary remain	Grave	Circular	180	I	Kara-Suu	-	406605.371	4760725.56	619	
N034	1N	-	2931	Domestic remain	Enclosure	Elliptical	113	I	Kara-Suu	-	406747.357	4760828.735	612	
	1S			Domestic remain	Enclosure	Rectilinear with round corners	132	I	Kara-Suu	-	406747.337	4760828.587	612	
	2			Funerary remain	Grave	Circular	173	I	Kara-Suu	-	406767.429	4760879.073	612	
	3			Domestic remain	Enclosure	Elliptical	190	I	Kara-Suu	-	406762.16	4760911.244	612	
N035	1	-	347	Funerary remain	Grave	Circular	76	I	Kara-Suu	-	406516.637	4761065.437	596	
	2			Funerary remain	Grave	Circular	155	I	Kara-Suu	-	406512.339	4761053.821	596	
N036	1	-	783	Funerary remain	Memorial enclosure?	Square	161	I	Kara-Suu	6 - 8?	406540.723	4761369.935	618	
	2			Funerary remain	Memorial enclosure?	Square	212	I	Kara-Suu	6 - 8?	406535.406	4761358.062	618	
	3			Funerary remain	Memorial enclosure?	Square	192	I	Kara-Suu	6 - 8?	406529.642	4761341.924	618	
N037		-	201	Funerary remain	Grave	Circular	201	I	Djon-Arik	-	410790.964	4764485.799	600	
N038	1	-	912	Domestic remains	Enclosure	Elliptical	444	I	Djon-Arik	-	410887.855	4764747.399	603	
	2			Domestic remain	Isolated building	Rectilinear	494	I	Djon-Arik	15 - 19?	410880.801	4764734.817	603	
N039		-	62 m in diam.	Funerary remain	Kurgan	Circular	62 m in diam.	I	Kara Suu	8 - 3 BC	408250.79	4767352.23	610	
N040		-	43862	Settlement	Medium town	Pentagonal	43862	I	Tok-Tash Kara-Suu	9 - 10	408267.262	4770832.942	551	
N041		-	141923	Funerary remain	Cemetery	Ciruclar	141923	I	Sai-Djeken	1 - 5?	408957.77	4771093.971	594	
N042		Ak-Tobe Tolekskoe	178663	Settlement	City	-	178663	I	Ak-Suu	9 - 12	426570.717	4772370.35	583	Кожемяко 1959: 118-122
S001		-	6478	Settlement?	Fort	Square	6478	I	-	10 - 12?	401459.498	4743067.196	736	
S002		-	344	Funerary remain	Memorial enclosure	Square	344	I	Sai-Djeken	6 - 8?	405800.128	4743016.635	747	
S003		Petrovka 4	261 m in length	Funerary remain	Kurgans	Circular	35-38 m in diam.	III	Ak-Suu	8 - 3 BC	422425.512	4742287.396	763	Тереножкин 20126: 62–63
S004		Petrovka 3	435 m in length	Funerary remain	Kurgans	Circular	24-35 m in diam.	III	Ak-Suu	8 - 3 BC	423426.577	4742149.364	762	Тереножкин 20126: 62
S005		Petrovka 1	636 m in length	Funerary remain	Kurgans	Circular	21-36 m in diam	III	Ak-Suu	8 - 3 BC	423444	4741760.462	772	Тереножкин 20126: 62
S006		Petrovka 2	656 m in length	Funerary remain	Kurgans	Circular	25-37 m in diam.	III	Ak-Suu	8 - 3 BC	422834.507	4740603.465	799	Тереножкин 20126: 58
S007		Kara-Balta	1837 m in length	Funerary remains	Kurgans	Circular	20-65 m in diam.	III	Kara-Balta	8 - 3 BC	409372.821	4739204.803	819	
S008		Efironos	632 m in length	Funerary remain	Kurgans	Circular	35-70 m in diam.	II	-	8 - 3 BC	398841.772	4738897.178	804	
S009		-	425 m in length	Funerary remain	Kurgans	Circular	19-29 m in diam.	III	-	8 - 3 BC	416724	4737173	879	
S010		-	105 m in length	Funerary remains	Kurgans	Circular	30+32 m in diam.	III	Tash-Arik	8 - 3 BC	416390.689	4736783.831	873	
S011		Kosh Korgon	-	Settlement	Fort	Not preserved	Not preserved	III	Kairma	10 - 12	413187.749	4733969.071	934	Amanbaeva pers.comm.
S012	1	-	4049	Domestic remain	Isolated building	Square	476	IVb	Kainar	15 - 19	397072.923	4732898.328	880	
	2			Domestic remain	Isolated building	Rectilinear	307	IVb	Kainar	15 - 19	396828.036	4732871.547	880	
	3			Domestic remain	Isolated building	Semicircular	202	IVb	Kainar	15 - 19	396833.856	4732839.139	880	
S013	1	-	844	Domestic remain	Isolated building	Square	130	IVb	Kainar	15 - 19	396814.832	4732245.013	905	
	2			Domestic remain	Enclosure?	Elliptical	89	IVb	Kainar	-	396824.124	4732231.286	905	
S014	1	-	6712	Domestic remain	Enclosure	Circular	250	IVb	Kainar	-	397050.179	4731737.985	924	
	2			Domestic remain	Enclosure	Circular	256	IVb	Kainar	-	397071.936	4731729.109	924	
	3			Funerary remain	Grave	Circular	165	IVb	Kainar	-	397081.715	4731775.39	924	
	4			Domestic remain	Enclosure	Elliptical	186	IVb	Kainar	-	397053.288	4731763.485	924	
	5			Domestic remain	Enclosure	Circular	213	IVb	Kainar	-	397079.001	4731846.071	924	
	6			Domestic remain	Enclosure	Circular	325	IVb	Kainar	-	397115.546	4731754.339	924	
S015	1	-	1044	Domestic remain	Enclosure?	Circular	100	IVb	Kainar	-	397098.94	4731529.929	931	
	2			Domestic remain	Enclosure?	Circular	100	IVb	Kainar	-	397099.342	4731529.441	931	
S016	1	-	1334	Domestic remain	Isolated building	Square	284	IVb	Kainar	15 - 19	396722.076	4731517.038	930	
	2			Domestic remain	Isolated building	Square	402	IVb	Kainar	15 - 19	396848.675	4731473.422	930	

Site No.	Name	Entire Size (m^2)	Category	Type	Plan	Size (m^2)	Zone	Water system	Estimated Century	43T UTM E(X)	43T UTM N(Y)	ASL (m)	References
S017	-	422	Domestic remain	Enclosure	Elliptical	422	IVb	Kainar	-	397420.964	4730507.041	972	
S018	-	54	Domestic remain	Isolated building	Rectilinear	54	IVb	Kainar	15 - 19	396509.461	4730124.772	982	
S019	-	670	Domestic remain	Isolated building	Rectilinear	670	IVb	Kainar	15 - 19	397712.729	4729845.966	979	
S020	-	199	Domestic remain	Enclosure	Elliptical	199	IVb	Kainar	-	396388.974	4729686.851	1004	
S021	-	213	Domestic remain	Enclosure?	Rectilinear	213	IVb	Kainar	-	397525.816	4728623.641	1061	
S022	-	188	Domestic remain	Enclosure?	Elliptical	188	IVb	Kainar	-	397501.048	4728538.818	1067	
S023	-	201	Domestic remain	Isolated building	Rectilinear	201	IVb	Kainar	-	397012.326	4728380.138	1072	
S024	-	483	Domestic remain	Enclosure?	Rectilinear	483	IVb	Kainar	-	396742.636	4728347.061	1079	
S025	-	109	Domestic remain	Isolated building	Rectilinear	109	IVb	Kainar	15 - 19	397408.319	4728240.75	1081	
S026	Tash Mazar	63778	Settlement	Large town	Irregular	63778	IVb	Kainar	12 - 14?	397358.639	4728199.836	1090	
S027	-	9500	Funerary remain	Cemetery	Circular	9500	IVb	Kainar	2 BC - 5 AD	396762.732	4728184.044	1086	
S028	-	340	Domestic remain	Isolated building	Rectilinear	340	IVb	Kainar	-	396760.041	4728031.142	1092	
S029 1	-	1652	Domestic remain	Enclosure	Circular	625	IVb	Kainar	-	396110.151	4727869.711	1108	
S029 2			Funerary remain?	Grave?	Rectilinear	189	IVb	Kainar	-	396096.559	4727913.899	1104	
S030	Tash Mazar South	4200	Funerary remain	Cemetery	Circular	4200	IVb	Kainar	12 - 14?	397177.754	4727759.022	1114	
S031	-	255	Domestic remain	Enclosure	Elliptical	255	IVb	Kainar	-	396174.192	4727660.383	1124	
S032	-	20926	Funerary remain	Cemetery	Circular	20926	IVb	Kainar	2 BC - 5 AD?	396277.745	4727572.418	1132	
S033	-	39 m in length	Miscellaneous feature	Stone alignment	-	39 (m)	IVb	Kainar	-	396624.605	4727465.488	1110	
S034	-	212	Domestic remain	Isolated building?	Rectilinear	212	IVb	Kainar	-	397097.797	4727147.776	1144	
S035 1	-	126	Funerary remain	Grave	Square	28	IVb	Kainar	2 BC - 5 AD?	397087.359	4727062.964	1140	
S035 2			Funerary remain	Grave	Circular	16	IVb	Kainar	2 BC - 5 AD?	397087.359	4727062.964	1140	
S036	-	5617	Funerary remain	Cemetery	Circular	5617	IVa	Kainar	2 BC - 5 AD 15 - 18?	398653.577	4726687.101	1134	
S037 1	-	2030	Domestic remain	Enclosure	Elliptical	348	IVb	Kainar	-	396540.102	4726613.85	1192	
S037 2			Domestic remain	Enclosure	Elliptical	453	IVb	Kainar	-	396587.806	4726570.82	1192	
S038 1	-	2534	Funerary remain	Grave	Circular	167	IVb	Kainar	-	396853.063	4726587.633	1176	
S038 2			Funerary remain	Grave?	Elliptical	314	IVb	Kainar	-	396827.245	4726532.261	1182	
S038 3			Domestic remain	Encamp-ment?	Rectilinear	326	IVb	Kainar	-	396815.902	4726557.42	1178	
S039 1	-	750	Domestic remain	Enclosure	Irregular	375	IVb	Kainar	-	396590.904	4726443.6	1205	
S039 2			Funerary remain	Grave	Circular	133	IVb	Kainar	-	396627.691	4726426.723	1205	
S040	-	4285	Funerary remain	Cemetery	Circular	4285	IVb	Kainar	2 BC - 5 AD?	396891.65	4726201.982	1211	
S041	-	103	Domestic remain	Enclosure (stone-built)	Circular	103	IVa	Kainar	-	397513.263	4726176.869	1184	
S042	-	2276	Funerary remain	Cemetery	Circular	2276	IVa	Kainar	2 BC - 5 AD?	397726.285	4726135.178	1198	
S043	-	90	Funerary remain	Grave	Circular	90	IVa	Kainar	2 BC - 5 AD?	397524.338	4726089.072	1206	
S044 1	-	810	Domestic remain	Enclosure	Semicircular	211	IVb	Kainar	-	396812.826	4726037.663	1212	
S044 2			Domestic remain	Enclosure	Circular	113	IVb	Kainar	-	396775.308	4726038.667	1209	
S045 1	-	2050	Domestic remain	Enclosure	Rectilinear	504	IVb	Kainar	-	396679.256	4725994.339	1233	
S045 2			Domestic remain	Enclosure	Semicircular	360	IVb	Kainar	-	396665.872	4725959.663	1243	
S045 3			Domestic remain	Enclosure	Circular	131	IVb	Kainar	-	396642.608	4725976.782	1247	
S046	-	156	Domestic remain	Enclosure	Rectilinear	156	IVb	Kainar	-	396886.306	4725991.697	1220	
S047	Orto-Kairma 2	307 m in length	Funerary remain	Kurgans	Circular	19-32 m in diam.	IVa	Old Sar-Bulak	8 - 3 BC	403069.976	4725896.258	1113	
S048	-	4355	Funerary remain	Cemetery	Circular	4355	IVa	Kainar	2 BC - 5 AD?	397276.321	4725743.992	1234	
S049	Orto-Kairma 1	639 m in length	Funerary remain	Kurgans	Circular	16-26 m in diam.	IVa	Old Sar-Bulak	8 - 3 BC	403172.155	4725731.45	1118	
S050 1	-	1249	Domestic remain	Isolated building	Square	118	IVa	Sai-Djeken	-	408385.632	4723533.725	1181	
S050 2			Funerary remain	Grave?	Circular	32	IVa	Kara-Balta	-	408393.063	4723552.212	1181	
S051	-	3924	Settlement	Fort	Square	3924	IVa	Kara-Balta	10 - 12?	408243.342	4723415.29	1194	

引用参照文献一覧

【中国歴史書】（編纂年順）

玄奘『大唐西域記』

玄奘『大慈恩寺三蔵法師伝』

杜佑『通典』

杜環『経行記』（『通典』193 巻辺防 9 石国条本注所引）

劉昫他『旧唐書』

欧陽修他『新唐書』

賈耽『皇華四達記』（『新唐書』地理志七下所引）

【日本語文献】

岩村　忍　2007『文明の十字路＝中央アジアの歴史』講談社学術文庫。

梅村　坦　1999「中央アジアのトルコ化」間野英二（編）『アジアの歴史と文化 8　中央アジア史』70–93 頁　同朋舎・角川書店。

柿沼陽平　2019「唐代砕葉鎮史新探」『帝京大学文化財研究所研究報告』第 18 集　43–59 頁。

櫛原功一　2020「アク・ベシム遺跡の土器編年試案」『帝京大学文化財研究所研究報告』第 19 集　1–16 頁。

小松久男（編）　2000『新版世界各国史 4　中央ユーラシア』山川出版社。

ケンジェアフメト，N.　2009「スヤブ考古―唐代東西文化交流―」窪田順平・承志・井上充幸（編）『イリ河歴史地理論集―ユーラシア深奥部からの眺め―』松香堂　217–301 頁。

香山陽坪　1956「サカ諸種族の考古学的研究―ア・エヌ・ベルンシュタムの天山地方の調査から―」『史學雑誌』65 編 2 号　66–78 頁。

玄奘（水谷真成訳注）　1999『大唐西域記 1』東洋文庫 653　平凡社。

コルチェンコ , V.　2016「3. チュー川流域の中世の都城址」山内和也・アマンバエヴァ , B.（編）『キルギス共和国チュー川流域の文化遺産の保護と研究　アク・ベシム遺跡、ケン・ブルン遺跡　―2011 ～ 2014 年度―』15–25 頁　独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所文化遺産国際協力センター・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所。

齊藤茂雄　2016「補遺 1. 砕葉とアク・ベシム―7 世紀から 8 世紀前半における天山西部の歴史的展開」山内和也・アマンバエヴァ , B.（編）『キルギス共和国チュー川流域の文化遺産の保護と研究　アク・ベシム遺跡、ケン・ブルン遺跡　―2011 ～ 2014 年度―』81–92 頁　独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所文化遺産国際協力センター・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所。

齊藤茂雄　2023「文献史料から見た砕葉城」『帝京大学文化財研究所研究報告』第 21 集　25–37 頁。

城倉正祥・山藤正敏・ナワビ矢麻・伝田郁夫・山内和也・アマンバエヴァ , B.　2017「キルギス共和国アク・ベシム遺跡の発掘（2015 年秋期）調査出土遺物の研究―土器・塼・杜懐宝碑編―」『Waseda Rilas Journal』5 号　145–175 頁。

城倉正祥・山藤正敏・ナワビ矢麻・伝田郁夫・山内和也・アマンバエヴァ , B.　2018「キルギス共和国アク・ベシム遺跡の発掘（2015 年秋期）調査出土遺物の研究―土器・瓦編―」『Waseda Rilas Journal』6 号　205–257 頁。

城倉正祥・山藤正敏・ナワビ矢麻・山内和也・アマンバエヴァ , B.　2016「キルギス共和国アク・ベシム遺跡の発掘（2015 年秋期）調査」『Waseda Rilas Journal』4 号　43–71 頁。

相馬秀廣・山内和也・山藤正敏・安倍雅史・サンコバ , B.・コルチェンコ , V.・窪田順平・渡邊三津子　2016「衛星考古地理学からみたキルギス共和国チュー川流域都城址アク・ベシム遺跡および周辺遺跡の特徴」山内和也・アマンバエヴァ , B.（編）『キルギス共和国チュー川流域の文化遺産の保護と研究　アク・ベシム遺跡、ケン・ブルン遺跡　―2011 ～ 2014 年度―』4–8 頁　独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所文化遺産国際協力センター・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所。

角田文衛　1952「ケンコール古墳群の調査」『人文研究』第 3 巻第 10 号（再録：同氏 1971『増補　古代北方文化の研究』東京　新時代社　257–277 頁）。

角田文衛　1971『増補　古代北方文化の研究』 東京　新時代社。

帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所（編）　2019『アク・ベシム（スイヤブ）2017』帝京大学文化財研究所。

帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所（編）　2020『アク・ベシム（スイヤブ）2019』帝京大学文化財研究所。

帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史

文化遺産研究所（編）　2021『アク・ベシム（スイヤブ）2018』帝京大学文化財研究所。

内藤みどり　1988『西突厥史の研究』早稲田大学出版部。

内藤みどり　1997「アクベシム発見の杜懐宝碑について」（加藤久祚「第 6 章　セミレチエの仏教遺跡」内所収）『シルクロード学研究』4　中央アジア北部の仏教遺跡の研究　151–158 頁。

林　俊雄　1991「モンゴル高原における古代テュルクの遺跡」『東方學』81 輯　166–179 頁。

林　俊雄　1996「モンゴリアの石人」『国立民族学博物館研究報告』21 巻 1 号　177–283 頁。

林　俊雄　2000「草原世界の展開」小松久男（編）『新版世界各国史 4　中央ユーラシア』山川出版社　15–88 頁。

林　俊雄　2005『ユーラシアの石人』ユーラシア考古学選書　雄山閣。

バルトリド , V. V.（小松久男監訳）　2011a『トルキスタン文化史 1』東洋文庫 805　平凡社。（原著出版は 1927 年）

バルトリド , V. V.（小松久男監訳）　2011b『トルキスタン文化史 2』東洋文庫 806　平凡社。（原著出版は 1927 年）

藤川繁彦（編）　1999『中央ユーラシアの考古学』世界の考古学⑥　東京　同成社。

ヘロドトス（松平千秋訳）　1971『歴史』岩波文庫　岩波書店。

松田壽男　1963「天山北路の歴史的あり方」『オリエント』6 巻 1 号　1–22 頁。

森安孝夫　2016『シルクロードと唐帝国』興亡の世界史　講談社学術文庫。

山内和也・アマンバエヴァ , B.（編）　2016『キルギス共和国チュー川流域の文化遺産の保護と研究　アク・ベシム遺跡、ケン・ブルン遺跡　―2011 ～ 2014 年度―』独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所文化遺産国際協力センター・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所。

山藤正敏　2023「アク・ベシム遺跡第 2 シャフリスタン地区出土土器の年代学的検討」『帝京大学文化財研究所研究報告』第 21 集　1–23 頁。

山藤正敏・アマンバエヴァ , B.　2020「シルクロード天山北路の形成過程―キルギス共和国、チュー渓谷西部の考古学踏査（2018・2019 年）―」日本西アジア考古学会（編）『第 27 回西アジア発掘調査報告会報告集　令和元年度　考古学が語る古代オリエント』　67–70 頁。

山藤正敏・アマンバエヴァ , B.　2021a「シルクロード天山北路の形成と展開―キルギス共和国、チュー渓谷西部の考古学踏査（2018･2019 年）―」日本西アジア考古学会（編）『第 28 回西アジア発掘調査報告会報告集　令和 2 年度　考古学が語る古代オリエント』　72–75 頁。

山藤正敏・アマンバエヴァ , B.　2021b「シルクロード都市の新発見―キルギス共和国チュー渓谷西部における考古学踏査―」『奈良文化財研究所紀要 2021』30–31 頁。

山藤正敏・アマンバエヴァ , B.　2023「シルクロード天山北路の形成過程―キルギス共和国、チュー渓谷西部の考古学踏査（2022 年）―」日本西アジア考古学会（編）『第 30 回西アジア発掘調査報告会報告集　令和 4 年度　考古学が語る古代オリエント』　90–93 頁。

【英語文献】

Baumer, C. 2012 *The History of Central Asia, Vol. 1: The Age of the Steppe Warriors*. London and New York: I. B. Tauris.

Baumer, C. 2014 *The History of Central Asia, Vol. 2: The Age of the Silk Roads*. London and New York: I. B. Tauris.

Beckwith, C. I. 2009 *Empires of the Silk Road: A History of Central Eurasia from the Bronze Age to the Present*. Princeton and Oxford: Princeton University Press.

Beer, R. and Tinner, W. 2008 Four Thousand Years of Vegetation and Fire History in the Spruce Forests of Northern Kyrgyzstan (Kungey Alatau, Central Asia). *Vegetation History and Archaeobotany* 17: 629–638.

Chang, C., Benecke, N., Grigoriev, F. P., Rosen, A. M. and Tourtellotte, P. A. 2003 Iron Age Society and Chronology in South-East Kazakhstan. *Antiquity* 77(296): 298–312.

Chang, C., Ivanov, S. S. and Tourtellotte, P. A. 2022 Landscape and Settlement over 4 Millennia on the South Side of Lake Issyk Kul, Kyrgyzstan: Preliminary Results of Survey Research in 2019–2021. *Land* 2022, 11, 456.

Clauson, G. 1961 Ak Beshim – Suyab. *Journal of the Royal Asiatic Society* 1961(1/2): 1–13.

Collins, B. A. 1994 *The Best Divisions for Knowledge of the Regions: A translation of Ahsan al-taqasim fi ma'rifat al-aqalim / Al-Muqaddasī*. Reading: Garnet Publishing.

Cribb, R. 1991 *Nomads in Archaeology*. Cambridge: Cambridge University Press.

Duturaeva, D. 2022 *Qarakhanid Roads to China: A History of Sino-Turkic Relations*. Handbook of Oriental Studies, Section 8, Uralic and Central Asian Studies, Vol. 28. Leiden and Boston: Brill.

Emeljanenko, T. 1994 Nomadic Year Cycles and Cultural Life of Central Asian Livestock-Breeders before the 20th Century. Pp. 37–68. In van Leeuwen, C., Emeljanenko, T. and Popova, L., *Nomads in Central Asia: Animal*

Husbandry and Culture in Transition (19th – 20th Century). Amsterdam: Royal Tropical Institute.

Giralt, S., Julià, R., Klerkx, J., Riera, S., Leroy, S., Buchaca, T., Catalan, J., De Batist, M., Beck, C., Bobrov, V., Gavshin, V., Kalugin, I., Sukhorukov, F., Brennwald, M., Kipfer, R., Peeters, F., Lombardi, S., Matychenkov, V., Romanovsky, V., Podsetchine, V. and Voltattorni, N. 2004 1,000 Year Environmental History of Lake Issyk-Kul. In Nihoul, J., Zavialov, P., and Micklin, P. (eds.), *Dying and Dead Seas, Climatic Versus Anthropic Causes*. Pp. 253–285. NATO ASI Series, vol. 36. Dordrecht, Netherlands: Kluwer Academic publisher.

Golden, P. B. 1990 The Karakhanids and Early Islam. In Sinor, D. (ed.), *The Cambridge History of Early Inner Asia*. Pp. 343–370. Cambridge and New York: Cambridge University Press.

Grigoriev, S. 2021 Andronovo Problem: Studies of Cultural Genesis in the Eurasian Bronze Age. *Open Archaeology* 7: 3–36.

Khazanov, A. M. 1984 *Nomads and the Outside World*. 2nd edition. Wisconsin: The University of Wisconsin Press.

Kolchenko, V. A. and Rott, P. 2019 The Ancient Site of Novopokrovskoe 2, Excavation s: Preliminary Results. In Baumer, C. and Novák, M. (eds.), *Urban Cultures of Central Asia from the Bronze Age to the Karakhanids: Learnings and Conclusions from New Archaeological Investigations and Discoveries (Proceedings of the First International Congress on Central Asian Archaeology held at the University of Bern, 4–6 February 2016)*. Pp. 365–385. Schriften zur Vorderasiatischen Archäologie, Band 12. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

Kyzlasov, L. R. 2010 *The Urban Civilization of Northern and Innermost Asia: Historical and Archaeological Research*. Bucharest: Romanian Academy, Institute of Archaeology of Iaşi.

Leroy, S. A. G. and Giralt, S 2020 Humid and Cold Periods in the Last 5600 Years in Arid Central Asia revealed by Palynology from Issyk-Kul. *The Holocene* 31(3): 380–391.

Melyukova, A. I. 1990 The Scythians and Sarmatians. In Sinor, D. (ed.), *The Cambridge History of Early Inner Asia*. Pp. 97–117. Cambridge and New York: Cambridge University Press.

Osmonov, O. and Turdalieva, C. 2016 *A History of Kyrgyzstan (From Stone Age to the Present): School and University Textbook*. Bishkek.

Tishkin, A. A. and Seregin, N. N. 2022 Turkic Enclosures of the Mongolian Altai: New Data on the Traditions of the Ritual Practices of Nomads in the Early Middle Ages. *MÖK Kiadványok* 4(1): 39–54.

Torgoev, A. I., Kulish, A. V., Kiy, E. A. and Kolchenko, V. A. 2019 The Buddhist Monastery of Krasnaya Rechka Settlement: The Main Findings 2010–2015. In Baumer, C. and Novák, M. (eds.), *Urban Cultures of Central Asia from the Bronze Age to the Karakhanids: Learnings and Conclusions from New Archaeological Investigations and Discoveries (Proceedings of the First International Congress on Central Asian Archaeology held at the University of Bern, 4–6 February 2016)*. Pp. 349–363. Schriften zur Vorderasiatischen Archäologie, Band 12. Wiesbaden: Harrassowitz Verlag.

Vaissière, É. de la 2005 *Sogdian Traders: A History*. Handbook of Oriental Studies, Section 8, Uralic and Central Asian Studies, Vol. 10. Leiden and Boston: Brill.

Yablonsky, L. T. 1995a Written Sources and the History of Archaeological Studies of the Saka in Central Asia. In Davis-Kimball, J., Bashilov, V. A., and Yablonsky, L. T. (eds.), *Nomads of the Eurasian Steppes in the Early Iron Age*. Pp. 193–199. Berkeley, CA: Zinat Press.

Yablonsky, L. T. 1995b The Material Culture of the Saka and Historical Reconstruction. In Davis-Kimball, J., Bashilov, V. A., and Yablonsky, L. T. (eds.), *Nomads of the Eurasian Steppes in the Early Iron Age*. Pp. 201–239. Berkeley, CA: Zinat Press.

Yamafuji, M. and Amanbaeva, B. 2019 *Chuy Valley Archaeological Project (CVAP), Archaeological Survey of the Western Chuy Valley, the Pilot Season (Autumn 2018): A Preliminary Report*. 16 pp. (Submitted to the National Academy of Sciences, the Kyrgyz Republic, on January 31, 2019).

Yamafuji, M. and Amanbaeva, B. 2020 *Chuy Valley Archaeological Project (CVAP), Archaeological Survey of the Western Chuy Valley, the Second Season (Autumn 2019): A Preliminary Report*. 18 pp. (Submitted to the National Academy of Sciences, the Kyrgyz Republic, on January 31, 2020).

Yamafuji, M. and Amanbaeva, B. 2023 *Chuy Valley Archaeological Project (CVAP), Archaeological Survey of the Western*

Chuy Valley, the Third Season (Autumn 2022): A Preliminary Report. 20 pp. (Submitted to the National Academy of Sciences, the Kyrgyz Republic, on January 31, 2023).

【ロシア語文献】

Бартольд, В. В. 1897 *Отчетъ о Поъздкъ в Среднюю Азию с Научною Цълъю, 1893 – 1894 гг*. С.-Петербургъ.

Бернштам, А. Н. 1950 *Труды Семиреченской Археологической Экспедиции Чуйская Долина*. Материалы и Исследования по Археологии СССР No.14. Москва и Ленинград: Издателъство Академии Наук СССР.

Войтов, В. Е. 1986 Археологические исследования Б.Я. Владимирцова и новые открытия в Монголии. *Mongolica: Памяти академика Бориса Яковлевича Владимирцова (1884-1931)*: 118–136.

Горячева, В. Д. 2010 *Городская Культура Тюркских Каганатов на Тянь-Шане (Середина VI -Нацало XIII в.)*. Бишкек: Кыргызско-Российского Славянского Университета.

Джуманалиев, Т. 2016 *История Кыргызстана с Древних Времён до Середины XVIII Века*. 2-е Издание. Бишкек: Алтын Принт.

Киргизский Филиал Академии Наук СССР, Институт Языка, Литературы и Истории 1952 *Очерки по Истории Киргизской ССР, Часть 1-я: С Древних Времен до Великой Октябрьской Социалистической Революции*. Фрунзе: Киргизгосиздат.

Кожемяко, П. Н. 1959 *Раннсредневековые Города и Поселения Чуйской Долины*. Фрунзе: Академия Наук Киргизской ССР.

Кожомбердиев, И. К. 2012 Могильник Кум-Арык.//В Национальная Академия Наук Кыргызской Республики, Институт Истории и Культурного Наследия (ред.), *Архивные Материапы по Археопогии Кыргызстана*. С. 64–81. Бишкек: Издательство Илим.

Кубарев, Г. В. и Нускабай, А. 2023 Раннесредневековые Поминальные Оградки Семиречья: Новые Данные. *Поволжская Археология* 2(44): 72–86.

Маршак, Б. И. 2012 *Керамика Согда V–VII Веков: Как Историко-Культурный Памятник*. Санкт-Петербрг: здателъство Государственного Эрмитажа. (Marshak, B. I. 2012 *Sogdian Pottery of the 5th – 7th Centuries as Historical and Cultural Phenomenon (On the Methods of the Study of Pottery Complexes)*. St. Peterburg: The State Hermitage Publishers. (Russian with English Summary).

Мокрынин, В. П. 2012 Исследования Городища Беловодская Крепость в 1978 году.//В Национальная Академия Наук Кыргызской Республики, Институт Истории и Культурного Наследия (ред.), *Архивные Материапы по Археопогии Кыргызстана*. С. 97–127. Бишкек: Издательство Илим.

Мошкова, М. Г. 1992 *Степная Полоса Азиатской Части СССР в Скифо-Сарматское Время*. Археология СССР 12. Москва: Издательство, «Наука».

Тереножкин, А. И. 1935 Археологические Разведки по Реке Чу в 1929 году. *Проблемы истории докапиталистических обществ* 1935, No. 5–6: 138–150.

Тереножкин, А. И. 2012а Дневник Археологических Разведок 1929 г. В Долине Р. Чу. //В Национальная Академия Наук Кыргызской Республики, Институт Истории и Культурного Наследия (ред.), *Архивные Материапы по Археопогии Кыргызстана*. С. 28–37. Бишкек: Издательство Илим.

Тереножкин, А. И. 2012б Картотека Археологических Разведок 1929 г. В Долине Р. Чу. //В Национальная Академия Наук Кыргызской Республики, Институт Истории и Культурного Наследия (ред.), *Архивные Материапы по Археопогии Кыргызстана*. С. 38–63. Бишкек: Издательство Илим.

索　引

アイダルベック　40
アク・スウ川　8, 49, 51, 61, 99
アク＝トベ・ステプニンスコエ　98
アク＝トベ・スレテンスコエ　12, 49, 61, 96, 97, 99, 110
アク＝トベ・チューレクスコエ　15, 61, 97, 99
アク・ベシム　7, 8, 10, 12, 14, 15, 16, 96
アスパラ　16　アスパラ川　8
アラクル文化　15
アラムイシク古墳群　9
アラメディン　10, 95　アラメディン川　9
アラル海　10
アル＝ウマリ　16
アル＝ジュルジャニ　16
アルタイ　105, 108
アル＝タバリ　16
アル＝フワーリズミー　16
アル＝ムカッダスィー　16
安西都護府　10
アンドロノヴォ文化複合　9, 15
イェニセイ川　9
イシク（古墳群）　9
イシク・クル湖　7–9, 10, 14–16, 107
イシク・アタ川　8
イチケ・スウ川　37, 40, 46
イブン・アラブシャー　16
イブン・アル＝サマアニ　16
イブン・フラダードビフ　16
イラン系　9, 15　イラン系騎馬遊牧民　9
イリ渓谷　1
岩絵　10
イワノフカ　95
ヴォイトフ, V. E.　105, 106, 108
烏孫　10, 14, 15, 95
ウラル山脈　9
ウルケン・カクパク　108
エフィロノス　65, 66
円形単独墓　102–104, 107, 110
円墳　10, 18, 37, 38, 40, 52, 53, 55, 56, 59, 60, 79, 81–84, 87, 92, 95, 102, 104, 106　円墳群　23, 79, 88, 95, 110
オアシス世界　106　オアシス地帯　11, 107
オルト・カイルマ　91, 93
カイナル川　2, 69, 84, 85, 87–89
カインディ　95
夏営地　95
可汗　10, 11, 105, 107, 108　十姓可汗　15　肆葉護可汗　10
囲い込み遺構　17, 18, 22, 23, 36, 43–49, 52, 53, 56, 70–73, 75, 76, 80, 82, 84, 87, 89, 91, 101–108, 110, 111
カザフ高原　1
河西回廊　1
家畜囲い　85, 89, 104, 107, 108
羯丹山　15, 108
牙庭　108
上ジュウク渓谷　107
カメンカ　8
カラ・キタイ　11, 14, 15
カラキスタク　108
カラコル湖　9
カラ・スウ川　20, 46, 47, 49, 52, 53, 55, 57, 59, 60
カラスク文化　9, 40, 95, 109
カラタウ山脈　7, 108
カラ・バルタ　2, 10, 12, 14, 25, 28　, 30, 33, 65, 95, 104, 110　カラ・バルタ川　2, 8, 20, 65
カラハン朝　11, 14, 26, 27, 30, 35, 51, 68, 104, 107, 110　東カラハン朝　11　西カラハン朝　11
ガリャチェワ, B. D.　16, 51
カルルク　11, 14, 108
亀茲（クチャ）　10
季節移動　104, 109, 110　季節移動経路　1, 106, 110　季節移動パターン　105, 107
キチ・ケミン川（小ケミン川）　14
亀趺　105
騎馬遊牧民　15
匈奴　10, 15
キョル・テギン廟　105
キルギス　5, 104, 107　キルギス共和国　1, 5, 8, 12　キルギス共和国国立科学アカデミー（キルギス科学アカデミー）2, 5, 14, 16, 33　キルギス考古学・民族学総合調査隊　14　キルギス・ソヴィエト社会主義共和国　12　キル

ギスタン共和国　12　キルギス山脈　2, 7, 8, 15, 21, 95, 109
キールミーラウ　10
近世・近代　11, 23, 37, 38, 40, 56, 69, 70, 73, 74, 76, 95, 99, 101, 102, 107, 110,
クズ・オルド　11
クズラソフ, L. R.　14, 15
クズル・スウ川　8
クダーマ　16
クラスナヤ・レーチカ　8, 10, 14, 16, 96, 108
クム・アルィク　10, 14, 95
クルガン　1, 2, 5, 9, 12, 14, 18, 21–23, 25, 42, 43, 57, 63–68, 91, 92, 93, 95, 97, 106, 107, 109, 110
クロウソン, G.　15
グロズネン　16
クロップ・マーク　57, 63
クンゲイ・アラタウ山脈　8
ケゲティ川　8, 15
月氏　10
ケンコル　10　ケンコル文化　10, 14, 15, 60, 95
玄奘　10, 106, 108, 110
ケン・ブルン　14, 15, 108
交河公主　16, 108
後期青銅器時代　9, 12, 106, 109　後期青銅器時代末　23, 95
コーカンド・ハン国　11, 12, 16
国際交易　107　東西国際交易　107, 110
コジェミャコ, P. N.　5, 14, 18, 25–35, 42, 49, 51, 61, 62, 99, 107
コシュ・コルゴン　14, 16, 68
古代ギリシア・ローマ　9, 15
コチュコル川　7
コトゥル・スウ川　42
コミンテルン　42
サイ・ジェケン川　20, 35, 39, 43, 45, 46, 60, 62, 107
碎葉　108　碎葉川　15, 16　碎葉城　11, 15, 16, 108　碎葉鎮　11
ザイリスキー・アラタウ山脈　7
サカ　9　サカ・烏孫時代　14　サカ時代　15
サトゥク・ブグラ・ハン　11
サーマーン朝　11
サルィグ　14, 16
サルガリ文化　9
サルト人　12, 16
山麓部　95, 97, 98, 100–107, 110
ジェベ　11
シス・トベ　10, 12, 30, 62, 97–99, 107
シタデル　17, 26, 28, 29, 31–35, 51, 61
ジャイル　5, 95
シャフリスタン　11, 14, 17, 25, 28–35, 49, 51, 57, 61, 62, 100　第1シャフリスタン　15　第2シャフリスタン　15, 16　南東シャフリスタン　31, 32　北西シャフリスタン　31–33
シャムシー　10　シャムシー川　8, 9
ジュル　10
ジュンガル　11
植民　15, 107, 110　植民活動　96　植民地化　12　植民都市　1, 97, 109
ジョン・アリク川　20, 41, 43, 56　ジョン・アリク村　43
シルクロード　1　シルクロード交易　109, 111
清朝　11
スイアブ　10, 11, 15, 16
スキタイ　9, 15
ステップ　1, 110　ステップ植生　9　ステップ世界　106　ステップ地帯　8–10, 15, 107, 109　寒冷地ステップ気候帯　8
スレテンカ　49
西域　11　大唐西域記　10, 15, 110
石人　12, 105, 106, 108
赤谷城　10
石列（バルバル）　12, 97, 105, 106, 108
セミレチエ　7, 8, 9, 10, 11, 12, 15, 105, 108　物質文化史研究所セミレチエ考古調査隊　14
西安　1
ソグディアナ　1, 11, 15, 96
ソグド　ソグド系　10, 39, 97, 105　ソグド語　15　ソグド人　1, 10, 15, 22, 96, 106, 107, 109, 110　ソグド時代　79　ソグド・トルコ時代　14
ソークルーク　10, 12, 96　ソークルーク川　8, 61
蘇祿　108
大チュー運河　8, 12, 14, 33, 34, 95, 110
タシュケント　12　チャーチュ／タシュケント　16
タシュ・マザール　77, 81, 99, 107, 110　タシュ・マザール南　80
タラス　16　タラス川　1　タラス渓谷　10　タラス河畔の戦い　16
タリム盆地　10, 11, 15
チェルカスクル文化　15
地下式横穴墓　10, 15
チャガタイ・ハン国　11
中央ユーラシア　1, 7, 111
中継貿易　107

中世　1, 10, 15, 23, 109　中世前期　10, 23, 96, 97, 98, 106, 110　中世後期　23, 98, 107, 109, 110　中世遺跡　1, 14　中世居住址　5　中世植民都市　109　中世定住集落　1　中世都市　9, 11, 14, 15, 16, 108, 109
チュー渓谷　1, 7–12, 14–17, 96, 106–110　チュー渓谷考古学プロジェクト　1　チュー渓谷西部　1, 2, 5, 12, 14–16, 25, 105, 106, 108–111　チュー渓谷東部　10, 11, 14, 95
チューレク　61
チョルポン・アタ　10
チョング川　8
チョン・ケミン川（大ケミン川）　7, 14
追悼遺構　18, 22, 23, 39, 46, 49, 55, 62, 97, 105–108, 110
角田文衛　15
定住　98　定住化　12, 107　定住社会　15, 106　定住集落　11, 98, 103, 107, 110　定住小村落　110　定住農村　99　定住地　96　定住民　107, 108, 111　定住農耕民　1, 12, 99, 107
定住・遊牧社会　1, 107, 111　定住 - 遊牧社会関係　109, 110　定住・遊牧両社会　1, 107　定住・遊牧両集団　107
ティムール時代　16　モンゴル・ティムール時代　14
鉄器時代　1, 9, 15, 23, 106, 107　鉄器時代前期　9, 18, 23, 95, 97, 106, 109, 110　鉄器時代後期　10, 18, 23, 79, 84, 87, 88, 93, 95, 104, 106, 110
テレノジュキン , A. I.　12, 18, 63, 65
天山山脈　1, 7–9, 105, 108, 109　天山山脈西部　9　天山山脈北麓　2, 106, 109　天山山脈南方　11
テンザントウヒ　8, 9
天山北路　1, 10, 107, 109, 111
唐　10, 11, 16, 108　旧唐書　11, 15　新唐書　15
冬営地　95
東西交易　96, 109, 110　東西交易路　1, 25, 97, 107, 109　東西交易路網　1, 2　東西国際交易　107
逗留地　1, 17, 18, 85, 95, 109
杜懐寶　15
杜環　16
トク・タシュ川　20, 36–40, 57
トクマク　7, 8, 10, 12
都市　1, 7, 10, 11, 15–17, 20, 22, 25, 30, 33, 49, 51, 61, 96, 97, 99, 103, 104, 106, 107, 108　都市遺跡　5, 8, 12, 30　都市化　2, 106, 107, 109　都市構造　17　都市システム　22　都市民　108　都市定住社会　1, 2, 10, 109, 110　都市定住文化　107　都市定住民　107, 109, 110　拠点都市　2, 97–99, 106, 109　拠点交易都市　7, 97　交易都市　99　商業都市　12, 106, 107　植民都市　1, 97, 109
突騎施（テュルギシュ）　11, 108
突厥　10, 16, 18, 39, 97, 105, 107, 110　西突厥　10, 11, 15, 97, 106–108　第二突厥時代　105
吐蕃　11
土塁・周溝遺構　105, 108
トルコ系　トルコ系イスラーム王朝　11　トルコ系部族　11　トルコ系遊牧王朝　107　トルコ系遊牧民　107, 110　トルコ系騎馬遊牧民　11
トルファン盆地　1
内藤みどり　108
ナヴィカト　10, 15, 16, 108
ナルィン　9
ヌジケト　10, 30
ノヴァ・ニコラエフカ　12, 25, 26, 107
ノヴァポクロフカ　10, 14, 15
ノヴォロシースク　14
バイパコフ , K.　16
パホモヴォ文化　15
バラサグン　11, 14–16
パルタフカ　27, 28, 68
バルトリド , V. V.　12, 15–17
バルハシ湖　7
ハーン　107
半定住化　107　半定住策　110
ヒヴァ・ハン国　12
東カラ・グル川　41, 42
ビシュケク　7–10, 12, 16, 25, 28, 33, 65
ビストゥン碑文　9
フェルガナ　11, 12
ブハラ・ハン国　12
フョドロフカ文化　15
ブラナ　8, 10–12, 14, 108
平野部　2, 8, 9, 95, 97–102, 104, 106, 107, 110
ベスシャトゥル　9
ベトパク・ダラ沙漠　8
ペトロパヴロフカ　14, 16, 26, 68
ペトロフカ　28, 63, 65, 107
ペルシア　1　ペルシア人　15　アケメネス朝ペルシア　9
ベルンシュタム , A. N.　14–16
ベロヴォドスコエ・クレポスト　9, 11, 12, 14, 28, 33, 49, 96–98, 100, 110
ヘロドトス　9
方形石囲い　105, 106, 108
ホショー＝ツァイダム I（ビルゲ可汗廟）　105

ホショー＝ツァイダムII（キョル・テギン廟）　105
ホション＝タル　108
ホラーサーン　11
マフムード・アル＝カシュガリ　16
マルタバル　40
マー・ワラー・アン＝ナフル　11
南シベリア　9, 18
ミーリャンファン　16
メルケ　14, 16, 108　メルケ川　8
モグール　11　モグーリスターン・ハン国　11
モゴイン＝シネ＝ウス　108
モシュコワ, M. G.　15
モノルドール　94
モユンクム沙漠　7
モンゴル　11, 16　モンゴル高原　11, 18, 97, 105, 108　モンゴル帝国　11, 107, 110　モンゴル・ティムール時代　14　トルコ・モンゴル系遊牧民　11
耶律大石　11
遊牧　17, 21, 106　遊牧活動　103　遊牧社会　1, 10, 106, 109　遊牧集団　110　遊牧民　1, 2, 12, 18, 21, 95, 97, 101, 104, 105, 107, 108, 109, 110, 111
ラシード＝アッディーン　16
ラバト　17, 35, 62
リフシッツ, B. A.　15
ロシア　5　ロシア語　15　ロシア人　12, 16　ロシア帝国　11, 12, 107　帝政ロシア時代　7

天山山脈北麓における定住 - 遊牧社会関係史の再構築
―キルギス共和国北部、チュー渓谷西部における考古学踏査―

編集・発行	山藤 正敏
	独立行政法人国立文化財機構　奈良文化財研究所
	〒630-8577　奈良県奈良市二条町 2-9-1
	TEL：0742-30-6753（代表）
発行日	2024 年 3 月 31 日
印　刷	能登印刷株式会社
ISBN	978-4-911002-40-7
表紙デザイン	Tomoko T.

ISBN 978-4-911002-40-7